一般国道20号（鹿屋バイパス）改築工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1988

鹿屋市教育委員会

一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1988

塩尻市教育委員会

調査区東方遠望（中央手前から中狭・向陽台・北原・高山城、
右隅尾根に樋口・ヨケの各遺跡。左上は中央道長野線塩尻インター工事現場）

調査区南方遠望（手前から左へ中挾・向陽台・北原、
左側中央道長野線に添って高山城・樋口・ヨケの各遺跡）

調査区西方塩尻市街地遠望（手前中央に中挟遺跡、
右手畑地に和手遺跡）

中挾遺跡Ⅰ地区全景(南側から)

向陽台遺跡全景（西側から）

北原遺跡全景（南側から）

和手遺跡調査区全景（東側から）

中挟遺跡調査区全景（西側から）

向陽台遺跡縄文時代早期住居址群(北東側から)

向陽台遺跡第3号住居址(南側から)

向陽台遺跡第１～４号集石炉(西側から)

向陽台遺跡第１～４号集石炉掘り込み(西側から)

向陽台遺跡第２号住居址出土沢式土器

向陽台遺跡第３号住居址出土沢式土器

向陽台遺跡第３号住居址出土砥石

向陽台遺跡第３号住居址出土不定形石器

序

塩尻市東部の東山山麓際に発達する丘陵地帯は市内はもとより松本平でも有数の遺跡の宝庫として知られており、以前より学術上貴重な資料を数多く提供してまいりました。この丘陵の一部に、中央道長野線塩尻インターへの連絡と国道20号線仲町地区の渋滞解消に備えて、国道20号線塩尻バイパスの建設計画が立案されました。長野県教育委員会と塩尻市中央道バイパス対策室及び市教育委員会は再三にわたる協議を重ね、昭和59年に現地協議に基づく７遺跡の発掘調査計画書を作成し、昭和60～62年度の３ケ年を費やす本調査、整理作業となったのであります。

調査の結果、当初の予想を遙かに越える大変貴重な成果をあげることができ、とりわけ桟敷の向陽台遺跡においては縄文時代早期前半では国内最大規模の住居址が発見されるとともに、従来の常識を覆す集落址を確認し、今後の同時代の研究に大きな波紋を投げかけたといえましょう。また同地域の歴史の解明にも飛躍的な前進をもたらしたと思います。

さて、本報告は、国道20号線塩尻バイパス建設に伴うこれまでの発掘調査の成果を詳細にまとめ上げた、貴重な記録保存のための報告書であります。本書が大いに活用され、考古学研究に寄与するとともに、文化財保護の啓発精神向上に役立つことを念じてやみません。

終わりに、これまでの発掘調査、整理作業に関わっていただいた多くの方々をはじめ、御助言、御指導をいただきました学識者の方々に対し、深心なる感謝と御礼を申し上げる次第であります。

昭和63年１月

塩尻市教育委員会
教育長　小松　優一

例　言

1、本書は塩尻市教育委員会が建設省関東地方建設局長野国道工事事務所より委託を受けた国道20号線（塩尻バイパス）改築工事に伴う7遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2、調査は各遺跡発掘調査団（団長　中島章二）に委託し、発掘調査は昭和60年4月24日から昭和62年10月2日までの3年間にわたって行い、整理は昭和60年6月から昭和63年2月にかけて実施した。

3、調査経費は、建設省関東地方建設局長野国道工事事務所からの委託金による。

4、本書の執筆分担は次のとおりである。

会田　進

III章3節5 1)(1)・(2)・(5)土器、6 1)(1)

市川二三夫

III章2節2、3節5 2)(2)、4節5 1) 6・7住

出河裕典

III章1節5土器、6 1)

伊東直登

I章、II章2節、III章1節1、2、3、5 1)12～24住、3節1、2、3、4、5 1)(2)・(4)、5節1、2、3、4、7 2)、6節1、2、3、4、7節1、2、3、4、5 1)

小澤由香利

III章3節6 1)(2)

河原喜重子

III章3節6 1)(2)

腰原典明

III章1節6 2)、2節5土器、6 2)、5節6遺物

小林康男

III章1節5 1)25～35住、2)、3)、4)、5)、6)、5石器、7、2節5 1)21～51住、5石器、7、3節5 1)(3)、(3)土器、5石器、6 1)(3)、2)(2)、4)、7、4節6、5節8、6節5遺物、6、7節5遺物、6

島田哲男

III章3節6 2)(1)

龍堅　守

III章2節5 2)、3)、4)、5)、6)

寺内隆夫

III章3節5 1)(1)、4節5遺物

鳥羽嘉彦

II章1節、III章1節4、2節1、3、4、5 1) 1～20住、6 1)、4節1、2、3、4、5 1) 1住、2)、3)、5節5、6 1)、2)、7 1)、6節5 1)、2)

中島章二

III章1節6 3)、IV章

前田清彦

III章3節5 2)(1)、6 3)

三村　洋

III章4節5 1) 2～5住

5、整理作業の分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース：鳥羽。

土器…復元：市川、小林、伊東。

実測：小林、鳥羽、寺内、前田、出河、腰原。

拓本：小林、寺内、前田、腰原、龍堅、会田、古厩、中村、山本、太田。

トレース：鳥羽、小林、寺内、前田、出河、腰原。

石器…実測、トレース：小林、寺内、前田、腰原、龍堅、会田、河原、小澤。

写真…伊東、鳥羽。

6、本書の編集は本文編を鳥羽が、写真図版編を伊東が行い、小林が総括指導した。

7、調査にあたり次の方々の御指導・御協力を得た。記して感謝申し上げたい。(敬称略)

樋口昇一、丸山敞一郎、戸沢充則、岡本東三、永峯光一、宮下健司、桐原　健、青沼博之、宮沢恒之、小松　望、原　明芳、小平和夫、唐木孝雄、市川隆之、大竹憲昭、小松克己、小沢芳市、直井雅尚、山田瑞穂。(順不同)

8、本調査の出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

凡　例

1、遺構図版の中でHは住居址、Sは小竪穴、Pはピット、Lはローム マウンドを表わし、遺構内の数字については深さを示す。

2、遺構の縮尺は住居址1/60(一部1/80)、小竪穴・ロームマウンド・建物址1/60、カマド・集石1/30。

3、遺物は土器実測図1/4、拓本1/3、石器1/3、1/2、2/3、鉄器1/3、装飾品1/2、古銭1/1を基準とした。

4、住居址一覧表

・規模・壁高の単位はcm。

・規模の（　）は推定規模を表わす。

・壁高は東・西・南・北の順で示した。

・切り合い関係は、矢印の向く側の住居が新しい時期であることを示す。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表 目 次
図版目次
第Ⅰ章　調査状況……1
第1節　調査に至る経過……1
第2節　調査体制……7
第3節　調査日誌……12
第4節　遺跡の状況と面積……25
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境……29
第1節　自然環境……29
第2節　周辺遺跡……33
第Ⅲ章　調査遺跡……39
第1節　和手遺跡……39
1　位置と地形……39
2　調査概要……39
3　調査区の設定……42
4　土　層……42
5　遺構・遺物……42
1)　住居址……42
2)　建物址……95
3)　方形周溝墓……101
4)　小竪穴……101
5)　溝……106
6)　遺構外遺物……114
6　成果と課題……115
1)　土器について……115
2)　集落の変遷……121
3)　古道と和手遺跡……124

目　次

第2節　中挾遺跡 ……127
1　位置と地形 ……127
2　過去の調査経過 ……128
3　調査概要 ……131
4　発掘区の設定 ……131
5　土　層 ……134
6　遺構・遺物 ……135
1)　住居址 ……135
(1)縄文時代 ……135
(2)弥生時代 ……141
(3)古墳時代 ……147
(4)平安時代 ……168
(5)中　　世 ……218
2)　建物址 ……237
3)　方形周溝墓 ……237
4)　小竪穴 ……244
5)　特殊遺構 ……257
6)　ロームマウンド ……258
7)　遺構外遺物 ……262
6　成果と課題 ……267
1)　方形周溝墓 ……267
2)　集落の変遷 ……272
7　まとめ ……277
第3節　向陽台遺跡 ……279
1　位置と地形 ……279
2　調査概要 ……280
3　発掘区の設定 ……282
4　土　層 ……283
5　遺構・遺物 ……283
1)　縄文時代 ……283
(1)縄文時代早期住居址 ……283
(2)縄文時代早期集石炉 ……333
(3)縄文時代前期住居址 ……342
(4)縄文時代小竪穴 ……370
(5)遺構外遺物 ……383

2)　弥生時代 ……387
(1)住居址 ……387
(2)方形周溝墓 ……411
6　成果と課題 ……413
1)　縄文時代早期 ……413
(1)向陽台3号住居址出土の縄文時代早期土器 ……413
(2)石　器 ……430
(3)押型文期の竪穴住居 ……466
2)　縄文時代前期 ……476
(1)向陽台遺跡出土の中越式土器について ……476
(2)松本平における縄文前期住居 ……480
3)　弥生時代の遺構と遺物 ……485
4)　遺跡の変遷 ……487
7　まとめ ……494
第4節　北原遺跡 ……495
1　位置と地形 ……495
2　調査概要 ……496
3　発掘区の設定 ……496
4　土　層 ……498
5　遺構・遺物 ……498
1)　住居址 ……498
(1)縄文時代前期住居址 ……498
(2)縄文時代中期住居址 ……512
2)　小竪穴 ……523
3)　竪穴状遺構 ……523
4)　遺構外遺物 ……530
6　まとめ ……535
第5節　高山城跡 ……537
1　位置と地形 ……537
2　過去の調査経過 ……538
3　調査概要 ……540
4　発掘区の設定 ……540
5　土　層 ……543
6　遺構・遺物 ……544
1)　住居址 ……544

2)　小竪穴 ……549
3)　遺構外遺物 ……552
7　成果と課題 ……552
1)　平安時代の住居址について ……552
2)　高山城跡について ……555
8　まとめ ……558
第6節　樋口遺跡 ……559
1　位置と地形 ……559
2　過去の調査経過 ……560
3　調査概要 ……560
4　発掘区の設定 ……562
5　遺構・遺物 ……562
1)　住居址 ……562
2)　小竪穴 ……564
3)　遺構外遺物 ……566
6　まとめ ……571
第7節　ヨケ遺跡 ……573
1　位置と地形 ……573
2　過去の調査経過 ……574
3　調査概要 ……574
4　発掘区の設定 ……574
5　遺構・遺物 ……576
1)　小竪穴 ……576
2)　遺構外遺物 ……579
6　まとめ ……581
第Ⅳ章　結　語 ……583

挿 図 目 次

第１図　20号バイパスおよび中央道長野線関連遺跡分布図……28
第２図　遺跡位置図……29
第３図　調査遺跡地形断面図……30
第４図　長畝付近における片丘礫層と赤城山礫層の関係……32
第５図　周辺遺跡位置図……34
第６図　和手遺跡調査地区図……40
第７図　和手遺跡全体図……41
第８図　第12号住居址……43
第９図　第12号住居址出土土器……44
第10図　第13号住居址……45
第11図　第14号住居址……46
第12図　第14号住居址出土土器……47
第13図　第15号住居址……48
第14図　第15号住居址出土土器……48
第15図　第16・17号住居址……50
第16図　第16号住居址出土土器……51
第17図　第17号住居址出土土器……51
第18図　第18号住居址……52
第19図　第18号住居址出土土器……53
第20図　第19・20号住居址……54
第21図　第20号住居址編物用石錘出土状態……55
第22図　第19号住居址出土土器……56
第23図　第20号住居址土器出土状態……57
第24図　第20号住居址出土遺物……58
第25図　第20号住居址出土編物用石錘(1)……60
第26図　第20号住居址出土編物用石錘(2)……61
第27図　第21号住居址……62
第28図　第21号住居址出土土器……63
第29図　第22号住居址……64
第30図　第22号住居址土器出土状態……65
第31図　第22号住居址出土土器(1)……66
第32図　第22号住居址出土土器(2)……67

挿 図 目 次

第33図　第23号住居址……69
第34図　第23号住居址土器出土状態……70
第35図　第23号住居址出土土器……71
第36図　第23号住居址編物用石錘……73
第37図　第24・32号住居址……75
第38図　第24号住居址出土土器……76
第39図　第25・26号住居址……77
第40図　第26号住居址出土土器……78
第41図　第27号住居址……78
第42図　第27号住居址出土土器……79
第43図　第28号住居址……80
第44図　第28号住居址出土土器……81
第45図　第29号住居址……82
第46図　第29号住居址出土土器……83
第47図　第30号住居址……84
第48図　第30号住居址出土土器……85
第49図　第31号住居址……86
第50図　第31号住居址出土土器……87
第51図　第32号住居址出土土器……88
第52図　第33号住居址……89
第53図　第33号住居址土器出土状態……90
第54図　第33号住居址出土土器……91
第55図　第34・35号住居址……93
第56図　第34号住居址出土土器……94
第57図　第1号建物址……97
第58図　第2号建物址……98
第59図　第3号建物址……99
第60図　第3号方形周溝墓……101
第61図　小竪穴群(1)……102
第62図　小竪穴群(2)……103
第63図　溝1（北半分）……107
第64図　溝1（南半分）……108
第65図　溝1土器出土状態……109
第66図　溝1出土土器(1)……110
第67図　溝1出土土器(2)……111

第68図　溝 2 ……113
第69図　先土器時代出土石器 ……114
第70図　縄文時代出土石器 ……115
第71図　和手遺跡土器変遷図 ……117
第72図　和手遺跡の集落変遷 ……123
第73図　中挾遺跡調査地区図 ……127
第74図　塩尻市桟敷出土勾玉と弥生式土器 ……128
第75図　中挾遺跡全体図（Ⅰ地区西区） ……132
第76図　中挾遺跡全体図（Ⅰ地区東区） ……133
第77図　中挾遺跡全体図（Ⅱ地区） ……134
第78図　第46号住居址 ……135
第79図　第46号住居址出土土器(1) ……136
第80図　第46号住居址出土土器(2) ……136
第81図　第48号住居址 ……137
第82図　第48号住居址出土土器 ……138
第83図　第50号住居址出土土器(1) ……139
第84図　第50号住居址出土土器(2) ……140
第85図　第 8 号住居址 ……142
第86図　第 8 号住居址出土遺物 ……143
第87図　第26号住居址 ……144
第88図　第26号住居址出土土器 ……145
第89図　第28号住居址 ……146
第90図　第28号住居址出土土器 ……147
第91図　第16号住居址 ……148
第92図　第16号住居址出土土器 ……149
第93図　第18号住居址 ……151
第94図　第18号住居址エレベーション ……152
第95図　第18号住居址土器出土状態 ……153
第96図　第18号住居址出土土器(1) ……154
第97図　第18号住居址出土土器(2) ……155
第98図　第18号住居址出土石製品 ……156
第99図　第30号住居址 ……157
第100図　第30号住居址出土土器 ……158
第101図　第34号住居址 ……159
第102図　第34号住居址土器出土状態 ……160

挿 図 目 次

第103図　第34号住居址出土土器 ……161
第104図　第44・50号住居址 ……163
第105図　第44号住居址出土土器 ……164
第106図　第44号住居址出土鉄製品 ……164
第107図　第47号住居址 ……166
第108図　第47号住居址出土土器 ……167
第109図　第51号住居址出土土器 ……167
第110図　第１号住居址 ……168
第111図　第１号住居址出土土器 ……169
第112図　第２号住居址 ……170
第113図　第２号住居址出土土器 ……170
第114図　第３号住居址 ……171
第115図　第４号住居址出土土器 ……172
第116図　第４号住居址 ……173
第117図　第５・10号住居址 ……174
第118図　第５号住居址出土土器 ……175
第119図　第６号住居址 ……176
第120図　第６号住居址出土土器 ……176
第121図　第７号住居址 ……177
第122図　第７号住居址出土土器 ……178
第123図　第９号住居址 ……180
第124図　第９号住居址出土土器 ……181
第125図　第11号住居址 ……182
第126図　第12号住居址 ……183
第127図　第12号住居址出土土器 ……184
第128図　第13号住居址 ……185
第129図　第13号住居址出土土器 ……185
第130図　第14号住居址 ……186
第131図　第14号住居址出土土器 ……186
第132図　第15号住居址、第１号小竪穴 ……187
第133図　第15号住居址出土土器 ……187
第134図　第17号住居址 ……189
第135図　第17号住居址出土土器 ……190
第136図　第19号住居址 ……191
第137図　第20号住居址 ……191

第138図　第20号住居址出土土器 ……192
第139図　第21号住居址 ……192
第140図　第22号住居址 ……194
第141図　第23号住居址 ……195
第142図　第23号住居址出土土器(1) ……196
第143図　第23号住居址出土土器(2) ……197
第144図　第24号住居址 ……198
第145図　第25号住居址、第23、24、25号小竪穴 ……199
第146図　第25号住居址出土土器 ……200
第147図　第27号住居址 ……201
第148図　第27号住居址出土土器 ……202
第149図　第29号住居址 ……203
第150図　第29号住居址出土土器 ……204
第151図　第31号住居址 ……205
第152図　第31号住居址出土土器 ……206
第153図　第32号住居址 ……207
第154図　第32号住居址出土土器 ……208
第155図　第33号住居址 ……209
第156図　第33号住居址エレベーション ……210
第157図　第33号住居址出土土器(1) ……211
第158図　第33号住居址出土土器(2) ……212
第159図　第33号住居址出土石製品 ……212
第160図　第35号住居址 ……213
第161図　第35号住居址出土土器 ……214
第162図　第36、37号住居址 ……216
第163図　第36号住居址出土土器 ……217
第164図　第37号住居址出土土器 ……217
第165図　第38号住居址 ……218
第166図　第38号住居址出土土器 ……219
第167図　第39号住居址 ……220
第168図　第39号住居址出土土器 ……221
第169図　第40号住居址 ……223
第170図　第40号住居址出土土器 ……224
第171図　第41号住居址 ……225
第172図　第41号住居址出土土器 ……225

挿図目次

第173図　第42号住居址 ……227
第174図　第42号住居址出土土器 ……228
第175図　第43号住居址 ……229
第176図　第43号住居址出土土器 ……230
第177図　第45号住居址 ……231
第178図　第45号住居址出土土器 ……232
第179図　第49号住居址 ……233
第180図　中挟遺跡出土鉄製品 ……236
第181図　建物址 ……238
第182図　第１号方形周溝墓 ……240
第183図　第１号方形周溝墓出土土器 ……241
第184図　第２号方形周溝墓 ……242
第185図　第３号方形周溝墓 ……243
第186図　第４号方形周溝墓 ……244
第187図　小竪穴群(1) ……245
第188図　小竪穴群(2) ……246
第189図　小竪穴群(3) ……247
第190図　小竪穴群(4) ……248
第191図　小竪穴群(5) ……249
第192図　小竪穴群(6) ……250
第193図　小竪穴群(7) ……251
第194図　小竪穴群(8) ……252
第195図　小竪穴群(9) ……253
第196図　第１号小竪穴出土土器 ……254
第197図　特殊遺構 ……257
第198図　特殊遺構出土土器 ……257
第199図　第１号ロームマウンド ……259
第200図　第２、３号ロームマウンド ……259
第201図　第１号ロームマウンド ……260
第202図　第２、３号ロームマウンド ……260
第203図　第１号ロームマウンド ……261
第204図　出土石器(1) ……263
第205図　出土石器(2) ……264
第206図　出土石器(3) ……265
第207図　遺構外出土弥生土器 ……266

第208図　遺構外出土須恵器 ……266
第209図　中挟遺跡弥生時代集落概念図 ……270
第210図　向陽台遺跡弥生時代集落概念図 ……270
第211図　中挟遺跡集落変遷図(1) ……273
第212図　中挟遺跡集落変遷図(2) ……274
第213図　向陽台遺跡調査地区図 ……279
第214図　向陽台遺跡全体図 ……281
第215図　第１号住居址 ……284
第216図　第１号住居址出土土器(1) ……286
第217図　第１号住居址出土土器(2) ……287
第218図　第２号住居址 ……288
第219図　第２号住居址出土土器(1) ……290
第220図　第２号住居址出土土器(2) ……291
第221図　第３号住居址礫出土状態 ……292
第222図　第３号住居址 ……293
第223図　第３号住居址土器出土状態 ……296
第224図　第３号住居址出土土器(1) ……297
第225図　第３号住居址出土土器(2) ……300
第226図　第３号住居址出土土器(3) ……301
第227図　第３号住居址出土土器(4) ……302
第228図　第３号住居址出土土器(5) ……303
第229図　第３号住居址出土土器(6) ……304
第230図　第３号住居址出土土器(7) ……305
第231図　第３号住居址出土土器(8) ……306
第232図　第３号住居址出土土器(9) ……307
第233図　第３号住居址出土土器(10) ……308
第234図　第３号住居址出土土器(11) ……309
第235図　第３号住居址出土土器(12) ……310
第236図　第３号住居址出土土器(13) ……311
第237図　第３号住居址出土石器(1) ……313
第238図　第３号住居址出土石器(2) ……314
第239図　第３号住居址出土石器(3) ……315
第240図　第３号住居址出土石器(4) ……316
第241図　第３号住居址出土石器(5) ……317
第242図　第３号住居址出土石器(6) ……318

第243図　第３号住居址出土石器(7) ……319
第244図　第３号住居址出土石器(8) ……320
第245図　第３号住居址出土石器(9) ……321
第246図　第３号住居址出土石器(10) ……322
第247図　第３号住居址出土石器(11) ……323
第248図　第３号住居址出土石器(12) ……324
第249図　第３号住居址出土石器(13) ……325
第250図　第３号住居址出土石器(14) ……326
第251図　第３号住居址出土石器(15) ……327
第252図　第３号住居址出土石器(16) ……328
第253図　第３号住居址出土石器(17) ……329
第254図　第３号住居址出土石器(18) ……330
第255図　第10号住居址 ……331
第256図　第10号住居址出土土器 ……332
第257図　Ｃトレンチ南壁東西セクション ……334
第258図　Ｃトレンチ遺物出土状態 ……335
第259図　集石炉検出面直上の礫群 ……337
第260図　集石炉掘り方 ……337
第261図　第１号集石炉 ……338
第262図　第２号集石炉 ……339
第263図　第３、４号集石炉 ……341
第264図　第11号住居址 ……343
第265図　第11号住居址土器出土状態 ……344
第266図　第11号住居址出土土器(1) ……345
第267図　第11号住居址出土土器(2) ……346
第268図　第11号住居址出土土器(3) ……346
第269図　第11号住居址出土石器(1) ……347
第270図　第11号住居址出土石器(2) ……348
第271図　第11号住居址出土石器(3) ……349
第272図　第11号住居址出土石器(4) ……350
第273図　第11号住居址出土石器(5) ……351
第274図　第12号住居址 ……353
第275図　第12号住居址出土土器 ……354
第276図　第12号住居址出土石器(1) ……355
第277図　第12号住居址出土石器(2) ……356

第278図　第12号住居址出土石器(3) ……357
第279図　第13号住居址 ……358
第280図　第13号住居址出土土器 ……359
第281図　第13号住居址出土石器 ……360
第282図　第14号住居址 ……362
第283図　第14号住居址出土土器出土状態 ……363
第284図　第14号住居址出土土器(1) ……364
第285図　第14号住居址出土土器(2) ……365
第286図　第14号住居址出土石器(1) ……366
第287図　第14号住居址出土石器(2) ……367
第288図　第14号住居址出土石器(3) ……368
第289図　第14号住居址出土石器(4) ……369
第290図　小竪穴群(1) ……372
第291図　小竪穴群(2) ……373
第292図　小竪穴群(3) ……374
第293図　小竪穴群(4) ……375
第294図　小竪穴出土遺物 ……381
第295図　第７号小竪穴出土土器 ……382
第296図　遺構外出土遺物 ……382
第297図　先土器時代出土石器 ……383
第298図　遺構外出土縄文早期土器(1) ……384
第299図　遺構外出土縄文早期土器(2) ……385
第300図　遺構外出土縄文早期土器(3) ……386
第301図　第４号住居址 ……388
第302図　第４号住居址炉 ……389
第303図　第４号住居址出土遺物 ……390
第304図　第５号住居址 ……392
第305図　第５号住居址エレベーション ……393
第306図　第５号住居址埋甕炉 ……393
第307図　第５号住居址出土遺物 ……394
第308図　第６号住居址 ……396
第309図　第６号住居址埋甕炉 ……397
第310図　第６号住居址出土遺物 ……398
第311図　第７号住居址 ……399
第312図　第７号住居址埋甕炉 ……400

挿 図 目 次

第313図　第７号住居址土器及び炭化材・焼土出土状態 ……400
第314図　第７号住居址出土遺物 ……401
第315図　第８号住居址 ……403
第316図　第８号住居址エレベーション及び埋甕炉 ……404
第317図　第８号住居址出土遺物(1) ……405
第318図　第８号住居址出土遺物(1) ……406
第319図　第９号住居址 ……408
第320図　第９号住居址埋甕炉 ……409
第321図　第９号住居址出土遺物 ……410
第322図　方形周溝墓 ……412
第323図　押型文原体の端部処理 ……415
第324図　樋沢遺跡の文様構成Ａ種～Ｋ種 ……416
第325図　向陽台遺跡の文様構成Ｃ種(1)～(5) ……416
第326図　土器成形技術資料(1) ……418
第327図　土器成形技術資料(2) ……419
第328図　土器成形技術資料(3) ……420
第329図　土器成形技術資料(4) ……421
第320図　土器成形技術資料(5) ……422
第331図　口唇部調整と口唇部形態 ……423
第332図　粘土帯の積み上げ手法 ……424
第333図　駒ケ根市目南遺跡出土の押型文土器 ……429
第334図　原石〔長幅分布〕 ……431
第335図　石核Ｉ類〔長幅分布〕 ……433
第336図　石核II類〔長幅分布〕 ……433
第337図　両極剥離を有する石器の類式模式図 ……434
第338図　両極剥離を有する石器の破片の類式模式図 ……434
第339図　両極剥離を有する石器Ａ〔長厚分布〕 ……436
第340図　両極剥離を有する石器Ｂ〔長厚分布〕 ……436
第341図　両極剥離を有する石器Ｃ〔長厚分布〕 ……436
第342図　両極石核〔長幅分布〕 ……439
第343図　石鏃の計測点と形状基準 ……440
第344図　石鏃の長幅比・基部長比分布 ……440
第345図　石錐の計測点と形状基準 ……442
第346図　各器種の大きさ分布比較 ……445
第347図　押型文期住居規模 ……468

第348図　押型文期住居分布図 ……469
第349図　押型文期住居集成図(1) ……470
第350図　押型文期住居集成図(2) ……471
第351図　押型文期集落図 ……472
第352図　向陽台遺跡集落図 ……473
第353図　大町市長平遺跡出土中越式及び伴出土器 ……477
第354図　松本平の縄文前期住居址集成図(1) ……482
第355図　松本平の縄文前期住居址集成図(2) ……483
第356図　遺構垂直分布図 ……488
第357図　変遷図（先土器、縄文早期） ……489
第358図　変遷図（縄文前期） ……490
第359図　変遷図（縄文中～後期） ……491
第360図　変遷図（弥生後期） ……492
第361図　北原遺跡調査地区図 ……495
第362図　北原遺跡全体図 ……497
第363図　第３号住居址 ……499
第364図　第３号住居址出土土器 ……500
第365図　第３号住居址出土石器 ……501
第366図　第４号住居址 ……502
第367図　第４号住居址出土遺物 ……503
第368図　第５号住居址 ……504
第369図　第５号住居址出土土器・土製品 ……505
第370図　第５号住居址出土石器(1) ……506
第371図　第５号住居址出土石器(2) ……507
第372図　第７号住居址 ……510
第373図　第７号住居址出土土器 ……511
第374図　第７号住居址出土石器 ……511
第375図　第１号住居址 ……513
第376図　第１号住居址出土土器(1) ……514
第377図　第１号住居址出土土器(1) ……515
第378図　第１号住居址出土土器(1) ……516
第379図　第１号住居址出土石器 ……517
第380図　第２号住居址 ……518
第381図　第２号住居址出土土器 ……518
第382図　第２号住居址出土石器 ……519

挿 図 目 次

第383図　第６号住居址 ……521
第384図　第６号住居址出土土器 ……522
第385図　第６号住居址出土石器 ……522
第386図　小竪穴群(1) ……524
第387図　小竪穴群(2) ……525
第388図　小竪穴群(3) ……526
第389図　小竪穴群(4) ……527
第390図　小竪穴群(5) ……528
第391図　小竪穴群(6) ……529
第392図　竪穴状遺構、小竪穴、遺構外出土土器 ……531
第393図　竪穴状遺構、小竪穴出土石器 ……533
第394図　遺構外出土石器 ……534
第395図　高山城跡調査地区図 ……537
第396図　高山城跡全体図 ……539
第397図　高山城跡トレンチ内土層断面図 ……541
第398図　第１号住居址 ……544
第399図　第１号住居址出土土器 ……545
第400図　第１号住居址出土土器 ……546
第401図　第１号住居址出土鉄鏃・砥石 ……547
第402図　第２号住居址 ……548
第403図　第２号住居址出土土器 ……550
第404図　小竪穴群(1) ……551
第405図　小竪穴群(2) ……551
第406図　遺構外遺物 ……554
第407図　平安時代の住居址 ……559
第408図　樋口遺跡調査地区図 ……561
第409図　樋口遺跡全体図 ……563
第410図　第１号住居址出土遺物 ……564
第411図　小竪穴群 ……565
第412図　遺物出土状態 ……567
第413図　縄文時代遺構外出土土器 ……568
第414図　遺構外出土石器(1) ……569
第415図　遺構外出土石器(2) ……570
第416図　平安時代遺構外遺物 ……571
第417図　ヨケ遺跡調査地区図 ……573

第418図　ヨケ遺跡全体図 ……575
第419図　小竪穴 ……577
第420図　遺物出土状態 ……578
第421図　縄文時代出土土器 ……579
第422図　出土石器 ……580
第423図　平安時代出土遺物 ……581

挿表目次

第1表　発掘調査契約額年度別一覧表……7
第2表　調査経過一覧表……25
第3表　発掘調査成果一覧表……26
第4表　発掘の状況と面積……27
第5表　和手遺跡住居址一覧表……96
第6表　和手建物址ピット一覧表……100
第7表　和手遺跡小竪穴一覧表……105
第8表　塩尻市桟敷出土玉計測……128
第9表　中挾遺跡住居址一覧表……234
第10表　中挾遺跡建物址ピット一覧表……237
第11表　中挾遺跡小竪穴一覧表……255
第12表　中挾遺跡ロームマウンド一覧表……262
第13表　松本平の方形周溝墓……267
第14表　第1号住居址内ピット一覧表……285
第15表　第2号住居址内ピット一覧表……289
第16表　第3号住居址内ピット一覧表……295
第17表　第10号住居址内ピット一覧表……332
第18表　縄文時代早期石器一覧表……333
第19表　向陽台遺跡小竪穴一覧表……380
第20表　向陽台遺跡住居址一覧表……411
第21表　石核類型別組成表……432
第22表　素材と類型別組成表……432
第23表　両極剥離を有する石器組成表……435
第24表　ピエス・エスキーユ組成表……438
第25表　両極石核組成表……439
第26表　不定形石器組成表……443
第27表　第3号住居址出土黒曜石剥片の長さと幅……446
第28表　縄文時代早期石器属性表……454
第29表　押型文期竪穴住居址一覧表……466
第30表　併行・共伴関係……480
第31表　松本平における縄文前期住居址一覧表……481
第32表　北原遺跡住居址一覧表……520

第33表　北原遺跡小竪穴一覧表 ……529
第34表　高山城跡住居址一覧表 ……549
第35表　高山城跡小竪穴一覧表 ……549
第36表　樋口遺跡第１号住居址 ……563
第37表　樋口遺跡小竪穴一覧表 ……566
第38表　ヨケ遺跡小竪穴一覧表 ……576

図 版 目 次

調査遺跡位置……1
和手遺跡……3
中挾遺跡……38
向陽台遺跡……98
北原遺跡……174
高山城跡……196
樋口遺跡……207
ヨケ遺跡……214

第Ⅰ章　調査状況

第１節　調査に至る経過

東京を起点として塩尻に至る一般国道20号線は、東京は言うにおよばず、山梨、諏訪方面と松本平を結ぶ主要幹線道路である。にもかかわらず、塩尻市内にあっては、幅員の狭い２車線道路となっているため、塩尻町地区を中心とした定常的な交通渋滞が発生し、さらにまた、中央道長野線塩尻インターチェンジ関連等による交通問題が深刻化していた。こうした中で、交通需要、地域開発等に対処するため、市内柿沢地籍から市内広丘高出地籍に至る延長4.2kmのバイパス建設が計画された。これが、昭和48年９月のルート発表以来、十数ケ年の歳月をかけて進められた一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事である。

埋蔵文化財発掘調査については、昭和59年６月27日、長野県教育委員会からの「一般国道20号塩尻バイパス道路計画に伴う遺跡について（照会）」により具体化した。同年７月５日、塩尻市中央道バイパス対策室、塩尻市教育委員会の現地協議が行なわれ、これに基づく７月７日付「一般国道20号塩尻バイパス道路計画に伴う遺跡について（回答）」により、和手遺跡、中挟遺跡、向陽台遺跡、北原遺跡、高山城跡、樋口遺跡、ヨケ遺跡の計７ケ所の発掘調査が必要な旨、市教育委員会から示された。以下、３ケ年にわたるバイパス関連発掘調査の経緯は次のとおりである。なお、市教育委員会では、建設省関東地方建設局から委託される各遺跡発掘調査について、塩尻市文化財調査委員会委員長の中島章二氏を団長とする発掘調査団に調査を再委託することとし、各遺跡発掘調査の都度契約を締結した。

昭和59年10月29日、「塩尻市、和手遺跡他６遺跡の保護について」により、長野県教育委員会から遺跡保護の通知。

12月24日、「国道20号塩尻バイパス建設事業に伴う発掘調査について」により、７遺跡の発掘調査計画を長野国道工事事務所へ通知。

昭和60年２月１日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査について」、建設省関東地方建設局から塩尻市教育委員会経由で、文化庁あて通知。

４月１日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」により、長野国道工事事務所長から、高山城跡、北原遺跡、向陽台遺跡、中挟遺跡、和手遺跡の発掘調査依頼。

４月15日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託契約について」により、市教委から、向陽台遺跡、北原遺跡の発掘契約協議を建設省関東地方建設局長あて行なう。

４月16日、「埋蔵文化財包蔵地向陽台遺跡の発掘について」および「埋蔵文化財包蔵地北原遺跡の発掘について」により、文化庁へ発掘通知。

4月24日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の昭和60年度契約について」により、向陽台遺跡、北原遺跡の発掘調査委託契約締結回答。

4月24日、「向陽台遺跡発掘調査委託契約について」および、「北原遺跡発掘調査委託契約について」により、各遺跡発掘調査団と委託契約締結。

6月10日、「埋蔵文化財の収得届けについて」により、向陽台遺跡および北原遺跡出土品の拾得届けを塩尻警察署へ届け出。

6月24日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う向陽台、北原遺跡発掘調査完了届について」を建設省関東地方建設局長へ届け出。

6月28日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託契約について」により、建設省関東地方建設局と向陽遺跡および北原遺跡の60年度整理作業分委託契約について協議。

7月1日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の契約について」より委託契約締結。

7月1日、「向陽台遺跡発掘調査委託契約について」および「北原遺跡発掘調査委託契約について」により、各遺跡発掘調査団と整理作業の調査委託契約締結。

昭和61年2月7日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」により、長野国道工事事務所長から、ヨケ遺跡、樋口遺跡、高山城跡、向陽台遺跡、中挟遺跡、和手遺跡の昭和61年度発掘調査協議。

3月13日、「昭和61年度一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」により、2月7日付協議に回答。

3月18日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う向陽台遺跡、北原遺跡発掘調査（整理分）の精算について」建設省関東地方建設局長へ送付。

4月9日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託契約について」により、中挟遺跡、向陽台遺跡、高山城跡の発掘調査について、市教育委員会から建設省関東地方建設局長へ協議。

4月22日、「埋蔵文化財包蔵地中挟遺跡の発掘調査について」および「埋蔵文化財包蔵地向陽台遺跡の発掘調査について」文化庁あて通知。

4月23日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の昭和61年度契約について」により、4月9日付協議について契約締結回答。

4月23日、「中挟遺跡発掘調査委託契約について」および「向陽台遺跡発掘調査委託契約について」により、各遺跡発掘調査団と契約締結。

6月10日、「高山城跡発掘調査委託契約について」により、高山城跡発掘調査団と契約締結。

6月16日、「埋蔵文化財高山城跡の発掘調査について」文化庁あて通知。

7月16日、「埋蔵文化財の拾得届けについて」、中挟遺跡、向陽台遺跡出土遺物について、塩尻警察署長あて届け出。

９月３日、「埋蔵文化財の拾得届けについて」、高山城跡出土遺物について、塩尻警察署長あて届け出。

昭和62年１月28日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」により、ヨケ遺跡、樋口遺跡、和手遺跡の昭和62年度発掘調査および、高山城跡、向陽台遺跡、北原遺跡、中挟遺跡を含めた７遺跡整理作業について、長野国道工事事務所長から協議。

３月３日、「昭和62年度一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」により、１月28日付協議に対し回答。

３月13日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う向陽台遺跡、中挟遺跡、高山城跡発掘調査の精算について」、建設省関東地方建設局長あて届け出。

３月25日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託契約について」により、和手遺跡、ヨケ遺跡、樋口遺跡の発掘調査および、中挟遺跡整理作業について建設省関東地方建設局長あて協議。

４月７日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託契約について」により、３月25日付協議に対し委託契約締結回答。

４月９日、「和手遺跡発掘調査委託契約について」により、和手遺跡発掘調査団と委託契約締結。

４月10日、「埋蔵文化財包蔵地和手遺跡の発掘調査について」文化庁あて通知。

４月18日、「中挟遺跡発掘調査委託契約について」により、中挟遺跡発掘調査団と委託契約締結。

６月９日、「埋蔵文化財の拾得届について」により、和手遺跡出土遺物について、塩尻警察署長あて届け出。

６月９日、「和手遺跡発掘調査の終了について」長野県教育委員会あて通知。

８月17日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の一部変更契約について」により、向陽台遺跡、北原遺跡、高山城跡の整理調査追加について、建設省関東地方建設局長あて協議。

８月21日、「ヨケ遺跡発掘調査委託契約について」および「樋口遺跡発掘調査委託契約について」により、各遺跡発掘調査団と委託契約締結。

８月21日、「埋蔵文化財包蔵地ヨケ遺跡発掘調査の通知について」および、「埋蔵文化財包蔵地樋口遺跡発掘調査の通知について」文化庁あて通知。

８月27日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の昭和62年度契約変更について」により、８月17日付協議に対し変更契約締結。

９月５日、「一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概算払請求について」により、昭和62年度第２四半期の概算払を建設省関東地方建設局長あて請求。

９月16日、「向陽遺跡発掘調査（整理作業）委託契約について」、「北原遺跡発掘調査（整理作業）委託契約について」、「高山城跡発掘調査（整理作業）委託契約について」により、各遺跡発掘調査と委託契約締結。

11月２日、「ヨケ遺跡発掘調査終了届について」および「樋口遺跡発掘調査終了届について」、

長野県教育委員会あて通知。

11月5日、「ヨケ遺跡出土品の拾得届について」および「樋口遺跡出土品の拾得届について」、塩尻警察署長あて届け出。

建設省関東地方建設局と塩尻市教育委員会の間で交された契約書の書式は以下のとおりである。

発 掘 調 査 受 委 託 契 約 書

1　業務の名称　　一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
2　調査箇所
3　調査期間　　昭和　年　月　日から
　　昭和　年　月　日まで
4　契約金額　　円

上記業務について、委託者支出負担行為担当官関東地方建設局長杉山好信を甲とし、受託者塩尻市教育委員会教育長小松優一を乙として、次の条項により受委託契約を締結する。

第1条　甲は、頭初の発掘調査を頭書の金額の範囲内及び期間をもって、乙に委託するものとする。

第2条　甲又は乙の都合により、発掘調査の計画を変更又は中心するときは、事前に協議して定めるものとする。

第3条　乙は、資金使用計画書に基づき、発掘調査の実施に必要な費用の概算払を支出官関東地方建設局総務部長に請求することができるものとする。

2　甲は、前項の請求のあったときは、発掘調査の進ちょく状況を勘案して、請求書を受理した日から30日以内に所要の額を乙に支払うものとする。

第4条　甲は、必要と認めるときは、発掘調査の処理状況について調査し、又は報告書及び作業日誌の提出を求めることができるものとする。

2　乙は、発掘調査が完了したときは、速やかに発掘調査の実施結果に基づく発掘記録及び費用精算調査を作成し、甲に提出しなければならないものとする。

第5条　乙がこの受受託契約に基づき、甲の費用をもって取得した購入物件等のうち残存価値のあるものは、甲に帰属するものとする。

第6条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物等に関する諸手続きについては、乙が代行するものとする。

2　甲は、発掘され、又は発見された埋蔵文化財に関する権利を放棄するものとする。

第7条　この契約に係る会計法令上の処理については、乙の諸規程に基づき取り行うものとする。

第8条　この契約に定めのない事項又はこの契約に関し疑義が生じたときは、甲、乙協議して定める

ものとする。

この契約の証として、本書２通を作成し、甲、乙記名押印のうえ、各自１通を保有する。

昭和　年　月　日

甲　委託者
支出負担行為担当官
関東地方建設局長　杉　山　好　信

乙　受託者
塩尻市教育委員会
教育長　小　松　優　一

塩尻市教育委員会と各遺跡発掘調査団の間で交された契約書の書式は以下のとおりである。

委　託　契　約　書

昭和　年　月　日

甲　　塩尻市教育委員会　教育長　小松優一
乙　　○○遺跡発掘調査団　団長　中島章二

塩尻市教育委員会教育長小松優一を委託者（以下「甲」という。）とし、○○遺跡発掘調査団団長中島章二を受託者（以下「乙」という。）として次のとおり委託契約を締結する。

（委託業務）
第１条　委託する業務は、次のとおりとする。
(1)　委託内容
(2)　委託期間　　昭和　年　月　日から昭和　年　月　日まで
（処理方法）
第２条　乙は、別添の発掘調査計画書（以下「計画書」という。）により委託業務を処理しなければならない。
２　乙は、前項の計画書に定めのない細部の事項については、甲の指示を受けるものとする。
（委託料）
第３条　委託料は、金　　円とする。
（契約保証金）
第４条　契約保証金は、免除する。
（調査等）

第5条　甲は、この委託業務の処理状況について、随時に調査し、必要な報告を求めることができるとともに、業務の実施について必要な指示をすることができる。

（成果の報告）

第6条　乙は、第1条の委託期間内に委託業務の成果に関する報告書等を甲に提出しなければならない。

（確認等）

第7条　甲は、乙から成果に関する報告書等の提出を受けたときは、確認をしたうえ当該報告書等の引渡しを受けるものとする。

（委託料の支払）

第8条　乙は、報告書を甲に引き渡したときは、甲に対して委託料を請求するものとする。

2　甲は、前項の適法な支払の請求があったときは、その日から　日以内に委託料を乙に支払うものとする。

（前金払）

第9条　甲は、前条の規定にかかわらず、乙から当該委託料に係る前金払の請求があり、その必要を認めるときは、前金払をするものとする。

（業務の変更等）

第10条　甲は、この契約締結跡の事情により、委託業務の内容の全部又は一部を変更することができる。この場合において、委託料又は委託期間を変更する必要があるときは、甲乙協議して変更契約書を作成するものとする。

（契約の解除等）

第11条　契約の解除その他この契約に定めのない事項については、長野県財務規則に定めるところによるものとする。

2　この契約を履行しなかったときは、乙は、委託料の100分の10に相当する額の違約金を甲に支払わなければならない。

（秘密の保持）

第12条　乙は、委託業務の処理上知り得た秘密を他人に漏らしてはならない。

（疑義の解決方法）

第13条　この契約について甲乙間に疑義のあるときは、甲乙協議のうえ解決するものとする。

（管籍裁判所）

第14条　この契約について訴訟の生じたときは、甲の事務所の所在地を管籍する裁判所を第一番の裁判所とする。

この契約の成立を証するため契約書2通を作成し、甲乙両者記名押印のうえ、各自その1通を保有するものとする。

第1表　発掘調査契約額年度別一覧表

遺跡名	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	合　　計
和　手			7,500,000	7,500,000
中　挾		11,500,000	1,900,000	13,400,000
向陽台	5,700,000	2,000,000	1,000,000	8,700,000
北　原	2,750,000		600,000	3,350,000
高山城		2,750,000	600,000	3,350,000
樋　口			3,600,000	3,600,000
ヨ　ケ			2,700,000	2,700,000
合　計	8,450,000	16,250,000	17,900,000	42,600,000

第2節　調査体制

昭和60年度

向陽台遺跡

団　　長　　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　　小林　康男（日本考古学協会員、市教委）
調 査 員　　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
　　伊東　直登（　〃　、　〃　）
　　市川二三夫（　〃　）
　　込山　秀一（　〃　）
　　島田　哲男（　〃　）
　　寺内　隆夫（　〃　）
調査補助員　　奥原俊幸、腰原典明、中野達也、藤田英博、前田清彦
参 加 者　　五十嵐しづえ、右城たか子、岡本　純、小口達志、小澤秀子、金田和子、北原好文、木下喜久枝、小松鈴子、小松登見子、小松幸美、小松義丸、小松静子、坂井七重、桜井洋子、清水年男、中柴一茂、中島房美、中野久美子、中村ふき子、西窪フジエ、林　功、牧野内嘉津子、三澤茂子、森山知恵子、山本敬子、由上はるみ、米久保勇、米窪きくみ、米窪千加代、米窪納子、朝倉粂作、芦沢元子、伊沢みきゑ、伊東きのゑ　小口わか子、小沢博光、上條宮雄、倉島貞子、小林清祐、佐藤千春、島崎一喜、田中理則、塚原克己、中島寿子、中野久行、中村　啓、中村ちか子、中村芳晴、樋口　彰、樋口みすゑ、福山茂喜、藤村きみ、藤村福造、山田ヨシミ、吉江愛子、米山米三郎、太田孝美、柳沢千寿子

北原遺跡

団　　長　　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、市教委）
調 査 員　　小林　康男（日本考古学協会員、　〃　）
　　伊東　直登（長野県考古学会員、　〃　）
　　市川二三夫（　　〃　　）
　　寺内　隆夫（　　〃　　）
調査補助員　　三村　洋
参 加 者　　小松静子、小松鈴子、小松利子、小松幸美、小松義丸、牧野内嘉津子、三澤清子、三澤茂子、米久保勇、浅見竹次、伊藤みつる、倉沢博二、小林　力、都竹あい子、都竹　寛、東條末雄、東條すみゑ、中垣内秋人、中林重男、中林喜美江、長崎良一、降旗重義、三村科雄、吉野宗治、米窪さだゑ、池田しのぶ、伊東ゆきゑ、御子柴敦子

昭和61年度

向陽台遺跡

団　　長　　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　　伊東　直登（長野県考古学会員、市教委）
調 査 員　　小林　康男（日本考古学協会員、　〃　）
　　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
調査補助員　　龍堅　守、西川卓志
参 加 者　　小松静子、小松幸美、小松義丸、桜井洋子、清水年男、中島房美、中野やすみ、太田辰男、尾崎　稔、上條宮雄、熊谷玄四郎、御所窪重夫、清水国弘、志水安秋、中垣内秋人、福山茂喜、吉江貫逸、吉江さかえ、吉江茂美、吉江正男、米窪さだゑ、

中挾遺跡

団　　長　　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、市教委）
調 査 員　　小林　康男（日本考古学協会員、　〃　）
　　伊東　直登（長野県考古学会員、　〃　）
　　市川二三夫（　　〃　　）
調査補助員　　奥原俊幸、腰原典明、龍堅　守、柳沢正寿
参 加 者　　赤津道子、市川きぬえ、伊藤みつる、伊東ゆきゑ、池田貴江子、臼井宏之、太田和、太田正子、小沢甲子郎、北沢喜子雄、黒沢広光、小松重久、小松静子、小松

淳子、小松鈴子、小松三枝子、小松幸美、小松義丸、桜井洋子、清水年男、白木正富、高橋タケ子、高橋鳥億、高橋阿や子、武井厚子、中野やすみ、中島房美、中島美智子、長瀬静雄、古厩馨子、保高愛子、牧野内嘉津子、松下おもと、三澤茂子、村山　明、本林今朝美、森山知恵子、柳沢千寿子、山下　広、米窪納子、米山米三郎、芦沢元子、伊沢みきゑ、伊藤きのゑ、碓氷市郎、中島寿子、中村芳晴、樋口　彰、藤村きみ、藤村福造、星野　昭、柳沢　一、山口仲司、米窪とみゑ、金田和子、島田美也子、中村ふき子、山本敬子

高山城跡

団　　長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　小林　康男（日本考古学協会員、市教委）
調 査 員　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
　　伊東　直登（　　〃　　、　〃　）
調査補助員　出河裕典、龍堅　守、柳沢正寿
参 加 者　臼井宏之、大和百合子、小松幸美、小松義丸、清水年男、中野やすみ、上條宮雄、菊地薫三、御所窪重夫、小林　力、斉藤晴敬、佐倉元一郎、清水国弘、志水安秋、東條末雄、東條すみゑ、中垣内秋人、中込　孝、中村　啓、中村ちか子、吉江さかえ、吉江茂美、吉野宗治、米窪さだゑ

昭和62年度

和手遺跡

団　　長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　伊東　直登（長野県考古学会員、市教委）
調 査 員　小林　康男（日本考古学協会員、　〃　）
　　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
　　市川二三夫（　　〃　　）
　　出河　裕典（　　〃　　）
調査補助員　腰原典明、龍堅　守
参 加 者　青木雅俊、赤須陽子、赤津道子、池田貴江子、伊藤みつる、太田　和、小沢甲子郎、北沢喜子雄、小松重久、小松静子、小松淳子、小松鈴子、小松三枝子、小松三津子、小松幸美、小松義丸、小松礼子、桜井洋子、清水年男、白木正富、高橋タケ子、高橋阿や子、高橋鳥億、手塚きくへ、寺沢俊子、中野やすみ、藤松謙一、保高愛子、松下おもと、山口仲司、山下　広、吉江みより、熊谷玄四郎、中村芳晴、樋口　彰、松島まつ子、柳沢　一、山口宇一、市川きぬえ、佐々木由紀子、

中村ふき子、古厩郁子、古厩馨子、山本敬子

樋口遺跡

団　　長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　小林　康男（日本考古学協会員、市教委）
調 査 員　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
　　伊東　直登（　　〃　　、　〃　）
調査補助員　腰原典明
参 加 者　青木雅俊、赤須陽子、小沢甲子郎、小松重久、小松鈴子、小松美津子、小松幸美、小松義丸、小松静子、小松礼子、桜井洋子、清水年男、白木正富、高橋鳥億、高橋阿や子、手塚きくへ、中野やすみ、藤松謙一、保高愛子、松下おもと、山口仲司、吉江みより、青木ます子、赤城圭一、赤羽喜己男、稲葉敏夫、上条スミ江、熊谷玄四郎、小林　力、佐倉元一郎、塩原孝枝、塩原与志江、野沢孝雄、藤村きみ、降旗重義、星野　昭、宮下　進、柳沢　一、山下　広、山本政晴、吉野宗治、米窪さだゑ、市川きぬえ、中村ふき子、古厩馨子、山本敬子

ヨケ遺跡

団　　長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　伊東　直登（長野県考古学会員、市教委）
調 査 員　小林　康男（日本考古学協会員、　〃　）
　　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
調査補助員　腰原典明
参 加 者　青木雅俊、小沢甲子郎、小松重久、小松鈴子、小松美津子、小松幸美、小松義丸、小松静子、小松礼子、桜井洋子、清水年男、高橋鳥億、高橋阿や子、手塚きくへ、中野やすみ、藤松謙一、保高愛子、松下おもと、山口仲司、吉江みより、青木ます子、赤城圭一、赤羽喜己男、稲葉敏夫、上条スミ江、熊谷玄四郎、小林　力、佐倉元一郎、塩原孝枝、塩原与志江、野沢孝雄、藤村きみ、降旗重義、星野　昭、宮下　進、柳沢　一、山下　広、山本政晴、吉野宗治、米窪さだゑ、市川きぬえ、中村ふき子、古厩馨子、山本敬子

中挟遺跡

団　　長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担 当 者　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、市教委）
調 査 員　小林　康男（日本考古学協会員、　〃　）
　　伊東　直登（長野県考古学会員、　〃　）

会田　　進（日本考古学協会員）
市川二三夫（長野県考古学会員）
調査補助員　腰原典明
参加者　市川きぬえ、太田正子、中村ふき子、古厩馨子、山本敬子

向陽台遺跡

団長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
担当者　小林　康男（日本考古学協会員、市教委）
調査員　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
伊東　直登（　〃　、　〃　）
会田　　進（日本考古学協会員）
市川二三夫（長野県考古学会員）
小澤由香利（　〃　）
河原喜重子（　〃　）
前田　清彦（豊川市教育委員会）

北原遺跡

団長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
調査員　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、市教委）
担当者　小林　康男（日本考古学協会員、　〃　）
伊東　直登（長野県考古学会員、　〃　）
市川二三夫（　〃　）
寺内　隆夫（　〃　）
参加者　市川きぬえ、中村ふき子、古厩馨子、山本敬子

高山城跡

団長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員長）
調査員　小林　康男（日本考古学協会員、市教委）
担当者　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、　〃　）
伊東　直登（　〃　、　〃　）
市川二三夫（　〃　）
調査補助員　腰原典明
参加者　市川きぬえ、古厩郁子、古厩馨子、山本敬子

事務局　塩尻市教育委員会教育長　小松　優一
市教委総合文化センター所長　二木　三郎（昭和60、61年度）

〃	清水　良次（昭和62年度）
市教委文化教養担当課長	清水　良次（昭和60、61年度）
〃	横山　哲宜（昭和62年度）
市教委文化教養担当次長	原田　　博（昭和60、61年度）
市教委文化教養担当副主幹	三澤　　深（昭和62年度）
市教委平出遺跡考古博物館学芸員	小林　康男
市教委文化教養担当主事	鳥羽　嘉彦
市教委文化教養担当主事	伊東　直登

第3節　調査日誌

1）向陽台遺跡（昭和60年度）

○昭和60年4月24日（水）曇　博物館から発掘器材搬入。
○4月25日（木）快晴　本日から作業員参加による発掘調査を開始する。朝、北原遺跡発掘調査団と合同の結団式を行なう。清水文化教養担当課長、中島調査団長あいさつの後、作業内容等の説明を行ない、作業に入る。午前中、テント設営、器材点検補修等。午後、バックフォー、ブルドーザーによりⅠ地区の表土除去開始。表土除去終了部分から助籬による遺構検出作業に入る。住居址と思われる黒褐色土の落ち込み2ケ所を確認する。
○4月26日（金）曇　Ⅰ地区、重機による表土除去終了。助籬による検出作業により、住居址と思われる落ち込みと方形周溝墓の溝と思われる落ち込みを確認する。Ⅱ地区、重機による表土除去開始。調査区南側において、住居址と思われる黒色土の落ち込み5ケ所をみとめる。
○4月27日（土）雨　雨天につき作業中止。
○4月28日（日）快晴　Ⅰ地区、ぶどうの根切りを中心に、調査区削平作業を終了する。4×4mのグリッドを設定し、杭打ちを行なう。Ⅱ地区、重機による表土除去終了。助籬による検出作業を始める。全体的に多くの遺物が出土し、南西側では山形押型文土器片が多数出土する。グリッド杭打ち開始。
○4月29日（月）快晴　Ⅱ地区、遺構検出作業。北側は耕作の攪乱が激しく、また遺物も南側に比べて少ない。住居址らしい黒色土の落ち込み2ケ所確認。グリッド杭打ち終了。
○4月30日（火）快晴　Ⅱ地区、検出作業続行。住居址と思われる落ち込み9ケ所となる。北東隅の住居址について半分程表土除去が行なわれていないため手作業により拡張する。
○5月1日（水）晴　Ⅱ地区南西側の住居址から1～9号住居址（以下1～9H）とし、2～9Hに十字ベルト設定後掘り下げ開始。2H、山形押型文土器一括出土。4H、弥生土器一括出土。7H、炭化材多数出土。
○5月2日（木）快晴　住居址掘り下げ。2H、黒鉛入り山形押型文土器片多数出土。3H、黒鉛入り山形押型文土器、無文土器およびこれに伴なう石器類が多量に出土。4H、床面まで掘り下げほぼ終了。隅丸方形プラン。5H、6H、弥生土器片出土、7H、床面検出。西側ベルト下から埋甕炉が顔をみせる。炭化材・焼土が全面から検出され、焼失家屋と思われる。9H、床面検出。
○5月3日（金）　休日
○5月4日（土）　1H、掘り下げ開始。押型文土器片多数出土、早期住居址3軒となる。2、3H、遺物取上。4、9H、セクション図化。5H、埋甕炉出土。6H、床面検出。清水文化教養担当課長来訪。
○5月5日（日）曇　5～7H、遺物取上作業。
○5月6日（月）　休日

向陽台遺跡北原遺跡合同結団式

○5月7日（火）曇一時小雨　1H、土器小片多数出土。3H、引き続き遺物多数出土。7H、4隅に大きな炭化材出土。土器完形品と石棒出土。
○5月8日（水）晴、3H、遺物取上。5、7H、セクション図化。6H、ベルトを残して掘り下げほぼ終了。8H、検出面におけるプランが把握できないため、50cm巾の十字トレンチを入れる。床面検出、土器一括出土。
○5月9日（木）快晴、1、3H、床、壁ともにはっきりしない。5、7H、ベルト除去作業。6H、セクション図化。8H、ベルトを残して掘り下げを進める。塩尻日報記者来訪。
○5月10日（金）曇後晴　3H、掘り下げ、遺物取上。4H、ベルト除去、柱穴半截。石庖丁出土。石囲炉の周囲に土器一括出土。5、6H、床面精査。8H、大きく広がって範囲が判然としない。小竪穴5ケ所半截。
○5月11日（土）晴、1H、東壁検出。3、5、6H、遺物取上。5H、ベルト内から弥生の小型完形甕出土。8H、東側へローム面により掘り下げを進める。5Hと6Hの間の黒色土部分にトレンチを入れるものの攪乱と思われる。
○5月12日（日）快晴　1、3、4、7、9H、遺物取上。9H、床面精査、写真撮影。炉石の下から埋甕出土。石囲埋甕炉と判明する。
○5月13日（月）曇　1、3H、床面検出。5、6H、床面精査、柱穴掘り下げ。6H中央部に埋甕炉2基出土、柱穴の重複から建て替えられたものと思われる。北西柱穴内から砥石2個出土。8H、東側へ拡大掘り下げ。1～7S、セクション終了。7S、縄文中期初頭の深鉢出土。
○5月14日（火）雨　雨天につき作業中止。
○5月15日（水）晴　1、3H、掘り下げ。3H、遺物取上。5、6、床面精査、写真撮影。8H、東側および北側で壁検出作業。10H、3H北側の黒色土の落ち込みを10Hとし、掘り下げを始める。山形押型文土器片多数出土。
○5月16日（木）快晴　1H、床面精査。2H、南側拡大掘り下げ。3H、床および壁の検出ほぼ終了。遺物取上。4H、床面精査。床下へ入り込んだピット内から土器出土。貼床の可能性をうかがわせる。5、6、9H、平面実測終了。7H、床面精査。北東隅から甕出土。10H、遺物多数出土。Ⅰ地区、午後から住居址と思われる3ケ所の掘り下げ開始。二木総合文化センター所長、原田文化教養担当次長、石上、平林埋文センター調査員来訪。
○5月17日（金）晴　1H、セクション終了。2H、南側拡大掘り下げ。3H遺物取上。6H、貼床調査のため床に十字トレンチを設定する。10H、遺物多数出土。Ⅰ地区の3住居址を11～13Hとする。遺物多数を出土する。
○5月18日（土）晴　1、3H、床面精査。2H、床面精査。4H、平面図測図。6H、貼床下の床検出作業。8H、セクション終了。11～13H、縄文前期中越期の一括土器出土。方形周溝墓、ローム面での精査により主体部確認。
○5月19日（日）曇　3H、セクション終了。6H、平図面測図。7H、床面精査。10H、遺物取上。ナイフ形石器の出土に一時騒然とする。3～6S、平面図測図。1～3S、写真撮影。11、13S、遺物取上。
○5月20日（月）雨　雨天につき作業中止。
○5月21日（火）晴　1H、床面精査。2H、掘り下げ。3H、ベルト除去。7H、炭化材出土状態実測。8H、床面精査、4、5、7、9、10、11、写真撮影。
○5月22日（水）晴　2H、床面精査。中央部に大きな落ち込み確認。3H、床面精査。ピット数ケ所確認、半截。
○5月23日（木）快晴　2、3H、平面精査、ピット掘り下げ。7H、炭化材除去後平面図測図。8、10H、遺物取上。11～12H、掘り下げ、遺物取上。方形周溝墓、周溝に設けた7ケ所のベルトセクション図化。主体部半截終了、埋葬品みられず。
○5月24日（金）雨　雨天につき作業中止。
○5月25日（土）雨　雨天につき作業中止。
○5月26日（日）曇　2H、遺物取上。6H、写真撮影。10H、床面精査。セクション図化。11～13H、セクション図化。方形周溝墓、遺物取上。
○5月27日（月）快晴　1、2、3、10H、床面精査。5～9H、埋甕炉平面図測図。11～13H、ベルト除去。遺物多数出土。中央道バイパス特別対策委員

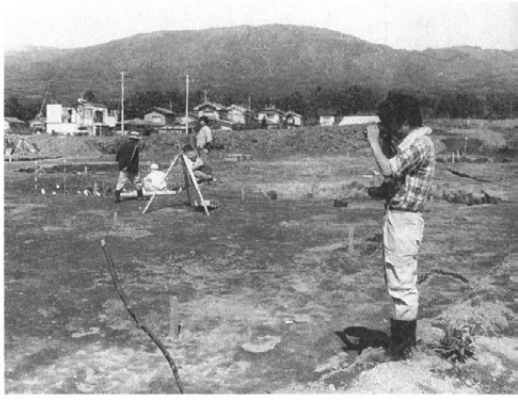
向陽台遺跡表土除去

向陽台遺跡遺構検出作業

向陽台遺跡住居址発掘調査

会、議会事務局、埋蔵センター来訪。
○5月28日（火）曇　1、2H、床面精査。3H、写真撮影、平面図測図。4H、炉址平面図測図。10H、床面精査、平面図測図。11～13H、ベルト除去、遺物取上。方形周溝墓、遺物取上。
○5月29日（水）曇後雨　11H、遺物取上、床面精査。12H、床面精査。午後雨につき作業中止。
○5月30日（木）晴　1H、平面図測図。2H、遺物取上。7H、北東ピット内の土器、実測後取上。8H、焼土、炭化材除去。11H、床面精査。13H、遺物取上、床面精査。方形周溝墓、周溝精査。周溝東側に住居址が重なっていると思われるため検出作業を行なう。道路公団、中日新聞、塩尻日報来訪。
○5月31日（金）晴時々曇　1、2、10H、平面図測図。4H、石囲炉を半截したところ、ややはずれた所から埋甕炉の出土をみる。建て替えと思われるため、南北にトレンチをいれるが床では確認できず。5、6H、埋甕炉半截。7H、床面精査、写真撮影。埋甕炉半截。8H、遺物取上。平面図測図。9H、埋甕炉半截。13H、遺物取上、床面精査。方形周溝墓、写真撮影、平面図測図。中日新聞、朝日新聞記者来訪。
○6月1日（土）晴時々曇　II地区全体図測図。4H、埋甕炉半截。5、6、7、9H、埋甕炉セクション図化、掘り上げ。11、12H、床面精査、平面図測図。13H、遺物取上、床面精査、方形周溝墓東側の落ち込みにトレンチ掘りを実施したところ、縄文前期中越期土器一括出土により14Hとし全掘を開始する。
○6月2日（日）　休日
○6月3日（月）曇時々晴　1、2、8H、写真撮影。4、5、7H、埋甕炉完掘、写真撮影。8H、平面図測図、埋甕炉半截。11、12H、床面精査。13H、一括出土土器実測。14H、中越期深鉢一括出土、遺物取上。
○6月4日（火）晴　11、12H、床面精査、写真撮影。13H、床面精査。平面図測図。14H、遺物取上。方形周溝墓、主体部の土ふるいを行なう。
○6月5日（水）快晴　6、9、8H、埋甕炉完掘後の写真撮影。13H、平面図測図。柱穴の様子から建て替えが行なわれたと思われるため、床面に十字トレンチを入れる。14H、遺物取上。黒曜石の石鏃と剝片が目立って多い。
○6月6日（木）快晴　13H、床面精査。14H、セクション図化、ベルト除去。遺物取上。東および南の壁確認できず。
○6月7日（金）曇　14H、掘り下げほぼ終了。柱穴および炉址確認。I地区、全体図測図。
○6月8日（土）雨　雨天につき作業中止。
○6月9日（日）曇　14H、床面精査。平面図測図、写真撮影。本日にて、全調査日程を終了する。

向陽台遺跡小竪穴発掘調査


向陽台遺跡写真記録作業

2）北原遺跡（昭和60年度）

○昭和60年4月24日（水）曇　発掘器材搬入、テント設営。午前からバックフォーとブルドーザーによる表土除去開始。調査区北側および中央部において、住居址と思われる円形黒褐色土の落ち込み確認。縄文中期土器片散在。
○4月25日（木）快晴　本日から作業員参加による発掘調査開始。朝、向陽台遺跡発掘調査団とともに結団式を行なう。清水文化教養担当課長、中島調査団長あいさつ後、作業内容等の説明を行ない、調査区北側から助籬による検出作業に入る。重機による表土除去終了。
○4月26日（金）曇　西側から南側にかけて遺構検出作業。住居址と思われる円形の落ち込みを確認する。
○4月27日（土）雨　雨天につき作業中止。
○4月28日（日）快晴　中央部分から南側にかけて遺構検出作業を行なう。中央部にて住居址1軒検出。全体的に遺物は少ない。
○4月29日（月）快晴　5×5mのグリッドを設定し、杭打ちを行なう。住居址を北側から1～6号住居址（以下1～6H）とし、十字ベルト設定後、掘り下げを開始する。
○4月30日（火）快晴、1H、北側半分が農道下のため拡張作業を行なう。3H、床面確認。4H、掘り下げ。5H、北壁が耕作による攪乱の為確認できず。

北原遺跡遺構検出作業

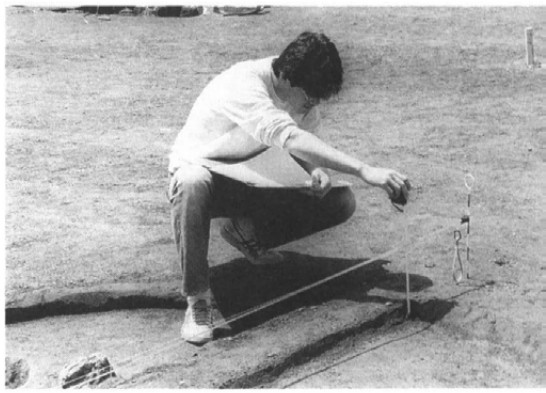
6H、南側の土手部拡張。根株の抜根に苦労する。1～31S、半截掘り下げ。1～4S、セクション図化。
○5月1日（水）晴　1H、床面確認。半完形土器出土。3H、床面、壁検出。隅丸方形プランを確認。ベルトセクション図化。4H、床面確認。セクション図化。5H、床面確認。北側に長径40cm大の平石出土。6H、十字ベルト設定掘り下げ。5～19、31S、セクション図化。1～7S、完掘。
○5月2日（木）快晴　1、5、6H、セクション図化。2H、ベルトを残して掘り下げ。黒曜石フレーク多数出土。4H、床面精査。20～30S、セクション図化。
○5月3日（金）　休日
○5月4日（土）　晴　1、3、4、5H、遺物取上。2H、掘り下げ続行。
○5月5日（日）　休日
○5月6日（月）　休日
○5月7日（火）曇一時小雨　3、4H、床面精査。5H、地床炉および四柱穴確認。朝の雨のため、作業員の集まりが悪かった。
○5月8日（水）晴　5、6H、床面精査。写真撮影終了。1～17S、写真撮影終了。調査区隣接の畑地へ調査区拡張、3m巾でA～Eトレンチ設定。
○5月9日（木）快晴　1～4H、床面精査。1、4H、写真撮影。6H、埋甕実測後、取上げ、18～31S、写真撮影。A～Eトレンチ掘り下げ。
○5月10日（金）曇後晴　2、3H、写真撮影。5H、中央部の焼土セクション図化後掘り下げ。小竪穴の平面実測を行なう。トレンチ掘り下げ。Dトレンチ南端において住居址と思われる落ち込みを検出する。
○5月11日（土）晴　A～C、Eトレンチ、検出作業。Dトレンチ、35～41S掘り下げ。南端の円形落ち込みを掘り下げたところ床面を確認したため第7号住居址とする。全掘のため、南側へ拡張する。
○5月12日（日）　休日
○5月13日（月）曇　Aトレンチ、溝状遺構調査のため、西側へ拡張する。Dトレンチ、7H西側の拡張とともに住居址の掘り下げを行なう。壁高は数cmであるが床面はしっかりしている。遺物少量。Eトレンチ、42～44S掘り下げ。風の強い日だった。
○5月14日（火）雨　雨天につき作業中止。
○5月15日（水）晴　Aトレンチ、溝状遺構掘り下げ。7H、床面精査。主柱穴2基および中央部に地床炉を確認する。台地縁辺部に3m巾でF、Gトレンチを設定し、掘り下げを始める。
○5月16日（木）晴　7H、床面精査。4本の主柱穴を確認する。炉セクション図化。F、Gトレンチ、ローム面までの検出作業を終了する。遺構なし。溝状遺構を竪穴状遺構とする。全体写真撮影。二木総合文化センター所長、原田文化教養担当次長、石上、平林埋文センター調査員来訪。
○5月17日（金）晴　7H、炉完掘、写真撮影。1、2H、小竪穴、平面実測図作成。
○5月18日（土）晴　3～5H、小竪穴、実測図作成。
○5月19日（日）　休日
○5月20日（月）雨　雨天につき作業中止。
○5月21日（火）晴　7H、小竪穴実測図作成。
○5月22日（水）晴　32～44S、竪穴状遺構、写真撮影。調査区全体図作成。本日にて全調査日程終了。

3）向陽台遺跡（昭和61年度）

○昭和61年4月24日（木）晴　バックフォー・ブルドーザーによる表土除去作業を行なう。ローム面上10cm程の漸位層を残して削平。土器片、黒曜石フレーク出土。発掘器材搬入。
○4月25日（金）晴　本日から作業員による発掘調査開始。朝、結団式を行なう。中島章二発掘調査団長のあいさつ、担当者から日程等の説明を行なった後、テント設営。器材の整備点検終了後、助籠による遺構検出作業を開始する。多量の縄文中期土器片とともに、押型文土器片、石鏃等出土。

北原遺跡トレンチ掘削作業

北原遺跡住居址発掘調査


北原遺跡セクション図化作業

○４月26日（土）晴　遺構検出作業続行。調査区全体で遺物の出土がみられるが、東側でより密である。グリッド別に遺物取上。２号住居址（以下２Ｈ）南側を若干拡張する。打斧、押型文土器片等出土。
○４月27日（日）　休日
○４月29日（月）雨　雨天につき作業中止。
○４月30日（火）　休日
○４月31日（水）晴　検出作業を続ける。全体的にきれいなローム面に達しない。小竪穴らしい円形の落ち込み数ケ所確認。１Ｈ北側にて、黒鉛入山形押型文土器片を含む比較的多くの遺物を出土する箇所があるものの、遺構の存在はまだ確認できない。
○５月１日（木）晴　検出作業。１Ｈに伴うと思われる砥石出土。調査区南にて、焼土を伴う直径１ｍ程の落ち込み検出。
○５月２日（金）曇時々雨　グリッド別に遺物の取上げを行なう。押型文土器片、縄文中期土器片、凹石、黒曜石フレーク等。１Ｈ、今年度調査部分の掘り下げ開始。午後、雨天につき作業中止。
○５月３日（土）～５日（月）　休日
○５月６日（火）曇後雨　検出作業続行。北西側は耕作による攪乱が大きい。１Ｈ、押型文土器片、黒曜石フレーク多数出土。昼からの雨により作業中止。
○５月７日（水）晴　１Ｈ、遺物取上。押型文土器尖底部、磨石出土。全体写真撮影のため、昨年調査の３、10Ｈの床面精査。16～19号小竪穴（以下16～19Ｓ）、半截掘り下げ。
○５月８日(木)晴　１Ｈ、床面と思われる部分までほぼ掘り下げ終了。16～19Ｓ、セクション図化、完掘。20～28Ｓ、半截掘り下げ。空撮のため、弥生集落域清掃。
○５月９日（金）晴　１Ｈ、遺物取上、掘り下げ。20～29Ｓ、セクション図化、掘り下げ。グリッド別遺物取上げ。
○５月10日（土）晴　１Ｈ、遺物取上、床面精査。２Ｈ、床面精査。18Ｓおよび23Ｓの掘り下げにより，さらに深い小竪穴が確認され、30Ｓとする。16Ｓ～30Ｓ、平面図測図。全体図作成。昨年度調査のＩ地区の清掃に入る。
○５月11日（日）　休日
○５月12日（月）晴　１Ｈ、床面精査、遺物取上げ。昨年同様、固い床面の確認は不可能と思われる。２Ｈ、写真撮影。16～30Ｓ、写真撮影。明日の空撮に備え、全面清掃を行なう。調査区西の斜面から下段の畑に分けて十字トレンチを設定、重機により押し出された土の除去を始める。
○５月13日（火）晴　全面清掃後、１Ｈおよび、今年度調査区全体写真撮影。ヘリコプターによる空撮終了。トレンチの掘り下げに入る。
○５月14日（水）曇後雨　Ａ、Ｂトレンチ掘り下げ。Ａトレンチ西側でロームの落ち込みが確認されたものの、遺物は黒曜石１点だけであった。Ｂトレンチは南に傾斜し、１ｍ以上の深さになったがローム面は検出されない。昨年度、10Ｈ覆土内からナイフ形石器が出土しているため、２×２ｍのグリッドを数ケ所、早期住居域に設定しプレ調査の掘り下げに入る。
○５月15日（木）晴　１Ｈ、平面図終了。プレ調査、計４グリッドで掘り下げを進める。Ｂトレンチ南側にて楕円押型文土器片数点出土。早期住居址覆土の黒色土内からであったが、上段では一片も出土しなかった楕円文のため、現場がやや緊張する。同時に礫も出土し始める。
○５月16日（金）晴一時雨　プレ調査、調査グリッド２ケ所追加、計６ケ所とする。Ｂトレンチ南に、直交させて巾２ｍのＣトレンチ設定、掘り下げ。Ａトレンチ、セクション一部図化。
○５月17日（土）　休日
○５月18日（日）　休日
○５月19日（月）曇後雨　プレ調査続行。出土遺物なし。Ａ、Ｂ、Ｃトレンチ掘り下げ。Ｃトレンチにて、楕円押型文土器片数片出土、熱を受けたと思われる多数の礫の出土とともに、なんらかの遺構の存在をうかがわせる。
○５月20日（火）雨　雨天につき作業中止。
○５月21日（水）曇　Ａトレンチ、遺物取上。引き続き掘り下げを行ない、ほ

向陽台遺跡結団式

向陽台遺跡遺構検出作業

向陽台遺跡Ａ、Ｂトレンチ掘削作業

ぼ地山ローム面に達する。Bトレンチ、遺物取上。沢式の山形押型文土器片が初めて出土。集石炉を思わせる礫群が姿をみせはじめる。Cトレンチ、遺構の可能性があるため、北へ2m巾拡張し掘り下げる。プレ調査続行。

○5月22日（木）晴　Aトレンチ、黒曜石フレーク、打斧出土。Bトレンチ、礫の出土が多く、集石箇所が2ケ所あるとも思われる。Cトレンチ、西側ではBトレンチの礫、遺物包含層まで掘り下げ終了。東側で出土量はより多い。

○5月23日（金）快晴　Aトレンチ、粘土質ローム面が全面で検出され、掘り下げを終了する。Cトレンチ、山形および楕円の押型文土器出土。全面で径5cm前後の礫が多量に出土し、礫出土状態を図化、礫取り上げを行ないつつ掘り下げを進める。プレ調査グリッドの深さが50cmに達したため、新たに4ケ所のグリッドを設定し、掘り下げに入る。

○5月24日（土）晴　Cトレンチ、遺物取上。礫図を取りつつ掘り下げを行なう。集石炉と思われる集石箇所は4ケ所に絞られてきた。これに伴ない、焼土、炭化材も出土量が多くなって来る。周囲の礫もほとんどが赤く焼けた状態を観察できる。Bトレンチに交わる集石炉を1号とし、精査を終了する。

○5月25日（日）　休日

○5月26日（月）　A、Bトレンチ、セクション終了。2、3、4号集石炉確認。1～4号集石炉平面図の実測と写真撮影を行ない、半截を始める。集石炉内の礫を取り上げ始めるとともに、多量の炭化材、焼土出土。

○5月27日（火）　休日

○5月28日（水）晴　1～4号集石炉、半截セクション図化。全掘後、掘り込みの平面図実測、写真撮影、Cトレンチ、セクション図化。プレ調査、出土遺物なく終了。本日にて、全調査日程を終了する。

向陽台遺跡Cトレンチ掘削作業

4）中挟遺跡（昭和61年度）

○昭和61年4月25日（金）晴　西地区から、バックフォーおよびブルドーザーにより表土除去を開始する。住居址と思われる黒褐色土の落ち込み確認。博物館から発掘器材搬入。

○4月26日（土）晴　重機による表土除去。全面にわたり遺構と思われる落ち込みが確認される。

○4月27日（日）　休日

○4月28日（月）雨　雨天につき発掘調査延期。

○4月29日（火）　休日

○4月30日（水）晴　本日から作業員による発掘調査開始。朝、結団式を行なう。清水文化教養担当課長、中島調査団長のあいさつ、担当者から調査日程、遺跡等の説明。器材点検、テント設営後、西区にて助籬による遺構検出作業に入る。2～3軒の弥生住居址と約20軒の平安住居址確認。東区にて、重機による表土除去を行なう。

○5月1日（木）晴　西区にて、遺構検出作業を続行する。砂礫層があり、作業が難行する。5×5mグリッド設定、杭打ちを行なう。東区表土除去。

○5月2日（金）曇時々雨　遺構検出作業。西区ほぼ全域で遺構と思われる落ち込み確認。東区、重機による表土除去。午後、雨により作業中止。

○5月3日（土）～5日（月）　休日

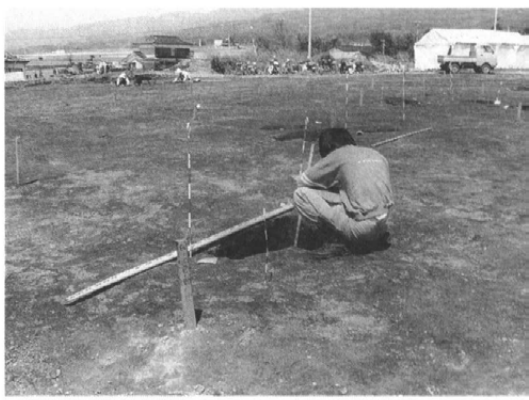
○5月6日（火）曇後雨　東区の遺構検出作業に入る。溝状の遺構が多く検出され、周溝墓の可能性をみる。東区、重機による表土除去続行。昼に雨天となったため、午後の作業を中止する。

○5月7日（水）晴　東区にて検出作業続行。西側で方形周溝墓と思われる落ち込み3ケ所確認。東側にて建物址検出。重機による表土除去、午前中で終了。埋文センター樋口調査部長来訪。

○5月8日（木）晴　東区、検出作業。中央部に弥生時代の遺物が多い。東端北側にて打斧、縄文土器片出土。調査区東の窪地に面した斜面に縄文時代の遺構が存在する。可能性を伺わせる。

○5月9日（金）晴　東区での検出作業続行。検出遺構輪部に石灰を入れる。共通のため、土埃のひどい日だった。

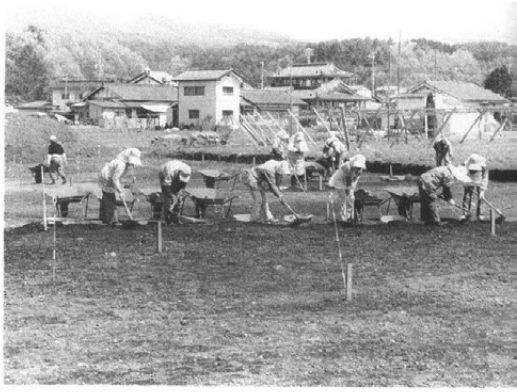
○5月10日（土）晴　午前中で東区の検出作業を終了する。午後、西区の住居



向陽台遺跡セクション図化作業

中挟遺跡表土除去

址と思われる落ち込みに十字ベルトを設定し掘り下げを開始する。
○5月11日（日）　休日
○5月12日（月）晴　西区の住居址掘り下げ。1～8号住居址（以下1～8H）確認。2～5Hは壁高3～5cmと極めて浅い。
○5月13日（火）晴　1～7H、セクション図化。5H、遺物出土状態写真撮影、終了後取上げ。新たに9～13H確認。強風で土埃りがひどかった。
○5月14日（水）曇後雨　西区住居址掘り下げ。1H、遺物出土状態写真撮影。6、9H遺物取上げ。12H、セクション図化。午後、雨のため作業中止。
○5月15日（木）晴　1、8H、集石土壙、遺物出土状態写真撮影。6H、完掘写真撮影。
○5月16日（金）晴一時雨　3、7H集石実測。15Hから古墳時代の小型甕出土。西側中央部の大きな落ち込み2ケ所に，大型住居址の可能性が出てくる。東区にて、住居址2軒の掘り下げに入る。
○5月17日（土）　休日
○5月18日（日）　休日
○5月19日（月）曇後雨　20Hまで確認。16、18Hは古墳時代の大型住居。1、2H、平面図測図。15H、遺物取上げ。18H、滑石製品の出土をみるものの、用途不明。午後、雨につき作業中止。
○5月20日（火）雨　雨天につき作業中止。
○5月21日（水）曇　8、16、18H、遺物取上げ。14H炉、12H土壙、セクション図化。1～5、14、15H、完掘写真撮影。1号小竪穴から小型壺出土。
○5月22日（木）晴　16H、床面精査、柱穴掘り下げ。17H、床面精査。18H、セクション図化、柱穴、周溝掘り下げ。19H、ベルト除去、床面精査。東区、住居址掘り下げ。
○5月23日（金）晴　16、17H、セクション図化、柱穴掘り下げ。18H、床面精査。特殊遺構、礫群平面図測図。西区にて21H、東区にて22～25H確認。
○5月24日（土）晴　16H、遺物取上げ、床面精査。17、18H、完掘写真撮影。23、24H、セクション図化。東区、中央北寄り住居から鉄鎌出土。
○5月25日（日）　休日
○5月26日（月）晴　16H、床面精査、写真撮影。18H、カマド掘り下げ、遺物取上げ。23H、遺物出土状態写真撮影、遺物取上げ。25、26H、セクション図化後、ベルト除去。
○5月27日（火）晴　西区、小竪穴のセクション図化。カマド半截。東区、23H、遺物取上げ。28、29H、セクション図化。方形周溝墓と思われる溝跡にベルトを設定し、掘り下げを開始する。
○5月28日（水）晴　8、19、20、21、22H、写真撮影。18H、カマド半截。東区、27、31H、小竪穴、セクション図化。
○5月29日（木）曇後雨　31H、遺物取上げ。焼土、礫が東壁と南壁にあり、カマドを付け替えた可能性がある。調査区東隣りの台地において土器が表面採集されたため、発掘区を拡張することとし、3m巾トレンチを設定する。以降、この地区をII地区とし、従来の地区をI地区とする。午後、雨のため作業を中止する。中日新聞記者来訪。
○5月30日（金）雨　雨天につき作業中止。
○5月31日（土）晴　8、16、22、23、24、26H、平面図測図。23、24、26H、完掘写真撮影。30H、セクション図化。28H、弥生の埋甕炉出土。
○6月1日（日）　休日
○6月2日（月）晴　9H、遺物取上げ。25、26H、平面図測図。東区小竪穴、セクション図化。方形周溝墓、弥生の櫛描文土器口縁出土。
○6月3日（火）曇　28H、平面図測図。30H、遺物出土状態写真撮影。遺物取上げ。方形周溝墓、溝部分掘り下げ。
○6月4日（水）晴　9H、カマド実測、完掘写真撮影。31H、写真撮影。32H、セクション図化。1、3号方形周溝墓、セクション図化。2号方形周溝墓、北側への拡張作業を始める。II地区、助廉により、トレンチの表土削平作業に入る。
○6月5日（木）晴　1～3号ロームマウンド、検出面実測、半截後セクショ


中挟遺跡I地区遺構検出作業

中挟遺跡I地区遺構発掘調査

中挟遺跡II地区トレンチ掘削作業

ン化。14、29、40号小竪穴、集石実測。25、29H、写真撮影。1、3号方形周溝墓、主体部半截。2号方形周溝墓、周溝全周掘り下げ。II地区、トレンチ掘り下げ。

○6月6日（金）曇　33H、ベルトを残し掘り下げ開始。1、2号ロームマウンド、セクション写真撮影後全掘。14、29、40号小竪穴、集石写真撮影後掘り下げ。II地区、土師、須恵器出土。

○6月7日（土）　休日

○6月8日（日）　休日

○6月9日（月）晴　32H、遺物取上げ、床面精査。33H、セクション図化、遺物取上げ。9、10

34、46、47号小竪穴、集石実測。II地区、住居址、小竪穴と思われる落ち込み数ケ所確認。

○6月10日（火）晴　27、28、30H、写真撮影、平面図測図。33H、石製紡錘車出土。II地区、須恵、土師ともに縄文土器片、黒曜石フレーク出土。トレンチ2本を追加設定。

○6月11日（水）晴　9、22、32H、平面図測図。II地区、掘り下げ。

○6月12日（木）快晴　25H、カマド完掘。33H、床面精査。小竪穴、平面図測図。II地区、住居址1軒確認。

○6月13日（金）快晴　33H、方形周溝墓、平面図測図。II地区、新たに3軒の平安住居址を確認する。

○6月14日（土）曇　I地区、小竪穴平面図測図。II地区、検出作業により5軒目の住居址を確認する。

○6月15日（日）　休日

○6月16日（月）曇時々雨　II地区の検出作業を進める。6軒目の住居址を確認する。

○6月17日（火）雨　雨天につき作業中止。

○6月18日（水）晴　28、30、32、33H、1～3号方形周溝墓、1号ロームマウンドの写真撮影を行なう。II地区、検出作業。台地上トレンチ東側にて2軒の住居址が新たに検出されたため、東へトレンチを拡張する。

○6月19日（木）晴　II地区、本日までで検出住居址10軒を数える。34Hは、一辺8mの平安時代大型住居址となる。

○6月20日（金）晴　I地区、5、6、7号ロームマウンド半截。6号ロームマウンド、刀子出土、セクション図化。II地区、34～40Hまで命名。台地南東側にかなり住居址が続いている様子。

○6月21日（土）曇後雨　7号ロームマウンド掘り下げ。26H埋甕炉実測。II地区、41～44Hまで確認。昼からの雨のため、午後作業中止。

○6月22日（日）　休日

○6月23日（月）雨　雨天につき作業中止。

○6月24日（火）曇時々小雨　明日空撮予定のため、発掘区の除草、清掃、II地区の遺構石灰引きを行なう。雨が激しくなってきたため午後の作業中止。

○6月25日（水）曇　天候すぐれず、空撮は明日に延期。5、7号ロームマウンド掘り下げ。II地区、草刈りおよび遺構検出作業。さらに2軒の住居址確認。

○6月26日（木）晴　5、6、7号ロームマウンド掘り下げ。II地区、南東側の検出作業続行。昨日延期となった空撮を行なう。

○6月27日(金)晴後曇　5、6、7号ロームマウンド掘り下げ。II地区、34～46Hの掘り下げを始める。掘り込みは比較的浅く、遺物も少ない。

○6月28日（土）晴　5、7号ロームマウンド掘り下げ。II地区、住居址掘り下げ。36、鉄鏃出土。38H、内耳土器底部出土。

○6月29日（日）　休日

○6月30日（月）雨　雨天につき作業中止。

○6月31日（火）曇　II地区、住居址掘り下げ、遺物取上げ。35、36、40、47H、セクション図化。34H、高杯出土。

○7月2日（水）曇　II地区、住居址掘り下げ、遺物取上げ。46H、平出3A出土。40、42～45H、セクション図化。

○7月3日（木）曇　I地区、全体写真撮影。II地区、34、39、42～46H、セ

中挟遺跡II地区遺構発掘調査

中挟遺跡遺物取上作業

中挟遺跡現場説明会

クション図化。48H、埋甕炉出土。
○7月4日（金）晴　42、45、48H、平面図測図。34、36、37、38、45、48H、写真撮影。40H西側の遺物集中区に十字トレンチを入れたところ、住居址ではないと判明する。
○8月5日（土）曇後雨　35、47H、写真撮影。40H、平面図測図。43H、42Hの貼床部を剝し、床面精査を行なう。44H、45Hの貼床部を剝し、床面精査中、埋甕炉が出土する。49H、床面、周溝検出。埋甕炉セクション図化。
○7月6日（日）　休日
○7月7日（月）曇　36～39、43H、平面図測図。39、40、45H、カマド半截、セクション図化。40、43H、写真撮影。
○7月8日（火）晴　Ⅰ地区、ロームマウンド、小竪穴、平面図測図。Ⅱ地区、44、46H、平面図測図、写真撮影。39、43、44H、カマドセクション図化。
○7月9日（水）曇　テントの解体、発掘器材撤収。Ⅱ地区の空撮実施。本日をもって、全発掘日程終了。

中挟遺跡発掘器材撤収作業

5）高山城跡（昭和61年度）

○昭和61年6月18日（水）晴　朝、結団式終了後、テント設営、器材整備。調査区全体の伐採木、下草の片付けを行ない、南向き斜面中段のテラスを中心に縦3本（東からA、B、C）、横2本（北からD、E）の2m巾トレンチを設定する。昨日の梅雨入り宣言にもかかわらず、晴れ上った暑い一日だった。
○6月19日（木）晴　伐採木の片付け。トレンチに4m間隔のグリッド杭打ちを行ない、トレンチの掘り下げに入る。Bトレンチで無文の土器片、Cトレンチで黒曜石フレーク出土。
○6月20日（金）晴　トレンチ掘り下げ。A、Eトレンチで土器片出土。テラス上段の始まり部分に設定したDトレンチは、数cmの深で地山ロームとなる。
○6月21日（土）曇後雨　Aトレンチ最下段にて、土師を中心とする数片の土器片出土。Bトレンチでも土器片出土。午後、雨につき作業中止。
○6月22日（日）　休日
○6月23日（月）雨　雨天につき作業中止。
○6月24日（火）曇後雨　A、B、D、Eトレンチ掘り下げ。朝からの小雨で作業の集まりも悪かったが、昼から激しい降りとなり作業を中止する。
○6月25日（水）曇　トレンチ掘り下げ。Aトレンチ下部で、引き続き土師器片等の遺物が出土。テラス部分は、地山検出までにかなり深くなりそうである。調査区西側斜面に認められる4段のテラスを上から下へ切る形でFトレンチ、4段のうち、比較的大きな下の2段の先端部にG、Hトレンチを設定する。
○6月26日（木）晴　A、Eトレンチの交点での深さが1.5mを越える。ロームを含む層が中に入っており、人為的なものに思われる。A、B、C、Eトレンチにて土器片出土。
○6月27日（金）晴後曇　Aトレンチ上部は、地山ローム面まで掘り下げ終了。直径1m前後の黒褐色土の円形落ち込み2ケ所検出。6グリッド区、深さ1.5m程の所で大きな炭化材と焼土出土。性格不明。Cトレンチ、遺物取上げ。
○6月28日（土）晴　A、B、C、Eトレンチ掘り下げ。Aトレンチ、遺物取上げ。8グリッド付近に引き続き遺物の出土がみられ、鉄鏃等出土。トレンチ途中から暗褐色土の落ち込みとなっているため、拡張を開始する。Bトレンチ下方にて土師器片出土。
○6月29日（日）　休日
○6月30日（月）雨　雨天につき作業中止。
○7月1日（火）曇一時小雨　Aトレンチ下部の拡張とともに、暗褐色土の落ち込み範囲も拡大し、遺物も出土したため1号住居址（以下1H）とする。また、この上方で炭化材とともに隅丸の落ち込みが検出され、住居址と思われるため拡張を開始する。Aトレンチ、セクション図化終了。
○7月2日（水）曇　Aトレンチ、1Hおよび2Hの拡張作業を続ける。Bトレンチ上部の掘り下げ終了。Cトレンチ上部の掘り下げ終了。
○7月3日（木）曇　1H、周囲拡張とともに遺物出土。2H、地上よりかなり高い部分で遺物出土。B、Cトレンチともに下部テラス部分が深く作業が難

高山城跡トレンチ掘削作業

高山城跡トレンチ掘削作業

行する。Cトレンチ、10、11グリッドで土師、灰釉出土、取上げ。
○7月4日（金）晴　1H、東側で礫群が出土する。カマドかとも思われる。2H、検出作業続行。B、C、D、Eトレンチ、遺物取上げ。
○7月5日（土）　休日
○7月6日（日）　休日
○7月7日（月）曇　1H、検出作業ほぼ終了。東側の礫列に熱の影響が認められ、カマドと思われる。B、C、Eトレンチ掘り下げ。Bトレンチは最深部で1.7mを測って、掘り下げほぼ終了。
○7月8日（火）曇　1H、十字ベルト設定後、掘り下げ開始、全面から焼土、炭化材が出土し、焼失家屋と思われる。坏完形品等出土。2H、掘り下げを続行する。西区に設定したFトレンチの掘り下げを開始する。縄文土器出土。
○7月9日（水）雨　雨天につき作業中止。
○7月10日（木）曇　Fトレンチ掘り下げ。中間部で地山ローム面検出。朝の小雨のため作業員の集まりが悪かった。
○7月11日（金）曇一時小雨　1H、遺物取上げ後、掘り下げ続行。土師の坏完形品出土。比較的浅い掘り込みと思われる。Fトレンチ、上段から中段にかけては、ほぼ地山ローム面に達する。G、Hトレンチの掘り下げ開始。
○7月12日（土）雨　雨天につき作業中止。
○7月13日（日）　休日
○7月14日（月）曇　1H、炭化材、焼土を残しながら掘り下げる。遺物取上げ。2H、掘り下げ、炭化材、焼土が広範囲に出土する。F、G、Hトレンチの掘り下げを進める。
○7月15日（火）、16日（水）雨　雨天につき作業中止。
○7月17日（木）曇　1H、炭化材、焼土図化。掘り下げを再開したところ、焼土内からも坏等の遺物出土。2H、北側で固い床面検出。西へ続くと思われるため拡張を再開する。Cトレンチ、セクション図化。Fトレンチ下部にて、縄文中期土器片と石鏃出土。
○7月18日（金）曇　1H、遺物取上げ。2H、拡張掘り下げ。小竪穴、半截セクション図化、掘り下げ。F、G、Hトレンチ掘り下げ。
○7月19日（土）晴　1H、床面精査。柱穴、ピット掘り下げ。南半分は流され、確認できない。2H、北半分の床検出、南側は1Hと同じく流されている模様。遺物は少ない。B、C、D、E、Gトレンチ、写真撮影。
○7月20日（日）　休日
○7月21日（月）曇　1H、平面図測図、写真撮影。2H、セクション図化、遺物取上げ。Fトレンチ、セクション図化。最深部では2m以上を測る。最下部で急に落ち込んでいるため、トレンチを2m延長し掘り下げを始める。
○7月22日（火）、23日（水）雨　雨天につき作業中止。
○7月24日（木）晴　1H、カマドの掘り込み調査。2H、遺物取上げ、ピット掘り下げ。北側にて石組カマド確認。Fトレンチ下部掘り下げ。小竪穴らしい落ち込みとなる。1、2、3号小竪穴、平面図測図。
○7月25日（金）晴　1H、カマド掘り込み図化。2H、カマド調査。平面図測図終了。Fトレンチ、セクション終了。小竪穴、平面図測図、写真撮影終了。本日にて、発掘調査全日程を終了する。

6）和手遺跡（昭和62年度）

○昭和62年4月14日（火）快晴　午後から、バックフォーおよびブルドーザーにより表土除去を開始。15～20cmでローム層となる。
○4月15日（水）快晴　朝、市道和手遺跡発掘調査およびバイパス関連和手遺跡発掘調査の結団式を行なう。中島調査団長、横山文化教養担当課長のあいさつ後、市道部分の発掘調査開始。重機による表土除去開始。
○4月16日（木）快晴　重機による表土除去。住居址と思われる落ち込みが多く確認できる。
○4月17日（金）晴　重機による表土除去終了。
○4月25日（土）晴　調査区東側から助簾による遺構検出作業を開始する。複数の遺構の重複が認められ、検出に困難をきたす。

高山城跡住居址発掘調査

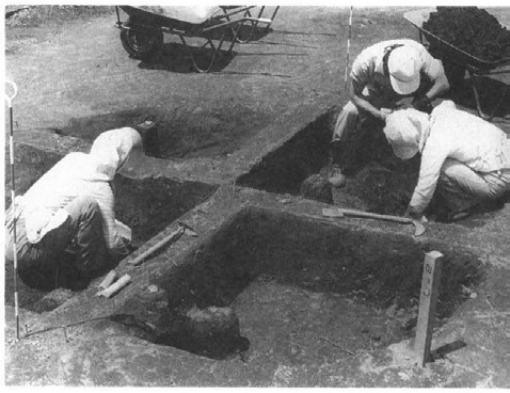
高山城跡地形測量

和手遺跡結団式

○4月26日（日）　休日
○4月27日（月）晴　検出作業。調査区東側で住居址の重複が著しい。西側では数軒の住居址と建物址の柱穴群検出。5×5mのグリッドを設定し、杭打ちを行なう。
○4月28日（火）晴　住居址と思われる落ち込みに十字ベルトを設定し、東側から掘り下げに入る。市道での発掘調査の続きで12、13号住居址（以下12、13H）を命名。12Hは、古墳時代の小型住居址となる。
○4月29日（水）　休日
○4月30日（木）晴　14H、平面図測図。焼失家屋で焼土、炭化材が多い。18H、遺物取上。20Hまで確認。東側に検出された集石遺構実測。
○5月1日（金）曇　15、16、17、19、20H、セクション図化。19Hと20Hは遺物も多く、床面もしっかりしているが、床が同一レベルで切り合っているため、新旧関係の判別が難しい。21H、遺物取上げ。
○5月2日（土）晴後曇　19H、完掘。20H上で検出された1～4号集石半截。23H、カマド周辺で土師器甕が複数出土。25、26H、一部重複し、25Hの上に26Hの貼床が確認される。
○5月3日（日）～5日（火）　休日
○5月6日(水)晴　15、16、17、21H、平面図測図。21、25、26H、セクション図化。20H、住居上の集石を半截したところ、現代の茶碗のかけらが出土す。ごく最近のものと思われ、遺構から除外する。調査区中央を南北に走る落ち込みを掘り下げたところ、多量の土師、須恵が出土、溝状遺構とする。
○5月7日（木）晴　22H、溝状遺構、セクション図化。14、17、19、20、25、26H、遺物取上。19、20、25、26H、平面図測図。24H、カマド脇から土師大型甕出土、写真撮影。
○5月8日（金）晴　22、23、27、30、遺物取上げ。27、28H、セクション図化。20H、編物用石錘実測。溝状遺構、遺物出土状態写真撮影。
○5月9日（土）晴　29H、セクション図化。23、24H、平面図測図。13、28H、遺物取上げ。長らく雨が降らないため、現場のほこりがすごい。
○5月10日（日）　休日
○5月11日（月）晴後曇　30H、セクション図化。29H、遺物取上げ、平面図測図。28H、遺物出土状態写真撮影。溝1、遺物取上げ。溝2、セクション図化。柱穴列、掘り下げに入る。
○5月12日（火）曇　13～27、29H、写真撮影。30H、集石実測、写真撮影、遺物取上げ。溝、建物址掘り下げ。
○5月13日（水）曇　22H、カマド周辺出土の土器取上げ。30H、完掘。建物址掘り下げ。小竪穴に半截線を設定し、掘り下げを開始する。
○5月14日（木）雨　雨天につき作業中止。
○5月15日（金）曇　26、27、29H、カマド半截。30H、カマド実測。9号小竪穴までセクション図化。昨日の雨により検出作業が可能になったため、建物址のピットを中心に再度検出作業を行なう。
○5月16日（土）晴　26、27、29H、カマドセクション図化。30H、カマド半截、セクション図化。小竪穴セクション図化。建物址、掘り下げ。
○5月17日（日）　休日
○5月18日（月）曇　小竪穴掘り下げ。28、30H、写真撮影。30H、平面図測図。溝2、平面図測図。
○5月19日（火）曇後晴　溝1、建物址1、2、平面図測図。
○5月20日（水）晴後曇　小竪穴、平面図測図。調査区全体図測図。全面清掃の後、全体写真、溝、建物址写真撮影。器材の整備を行ない、前半の調査を終了する。
○5月25日（月）晴　第2期調査区の表土除去を重機により始める。
○5月26日（火）曇　午前中で重機による表土除去を終了する。
○5月29日（金）曇　助簾による遺構検出作業を開始する。前回調査を行なった23、24、28Hの残り部分の外に4軒ほどの住居址を確認。溝1も引き続き北へ延びていることが判明する。
○5月30日（土）晴　住居址プランの確認できたものから十字ベルトを設定し

和手遺跡遺構検出作業

和手遺跡住居址発掘調査


和手遺跡住居址発掘調査

掘り下げに入る。31～33Hまで確認。調査区西端で確認された33Hは大型住居址で、重機により表土除去した部分より北へ入り込んでいるため、助籬により拡張作業を始める。

○5月31日（日）　休日

○6月1日（月）晴後曇　住居址掘り下げ作業。31Hは小型ながら比較的深く、堅い床が検出された。セクション図化。33Hの拡張作業を終了する。溝の掘り下げを開始する。

○6月2日（火）曇　31H、平面図測図、写真撮影。24Hにて多くの遺物が出土し、写真撮影を行なう。24H、編物用石錘一括出土、写真撮影、実測。33Hに十字ベルトを設定し、掘り下げを始める。

○6月3日（水）曇後雨　24、32H、写真撮影。調査区北側に検出されていた巾1m程の溝状の落ち込みを掘り下げた結果、方形周溝墓の周溝と判断されるため、市道発掘の続きで第3号方形周溝墓とする。第3号建物址柱穴、半截後セクション図化、写真撮影。昼休み中からの激しい雨により午後の作業中止。

○6月4日（木）晴　28H、平面図測図、写真撮影。32H、平面図測図。33H、セクション図化、遺物取上げ。3号建物址柱穴、小竪穴、掘り下げ。

○6月5日（金）晴　23H、遺物取上げ、平面図測図、写真撮影。33H、床面精査により貼床になっていることが確認される。写真撮影後トレンチ調査に入る。攪乱により確認に手間取ったが34、35Hを掘り下げる。調査区横を通る工事用道路からのほこりがひどく、散水してもらう。

○6月6日（土）晴　33H、貼床下の住居址の平面図測図、写真撮影。34、35H、遺物取上げ、写真撮影、平面図測図。建物址、溝、写真撮影、平面図測図。全体図測図。全体写真撮影。

○6月7日（日）　休日

○6月8日（月）晴時々曇　器材整備、後片付け。本日にて、全調査日程終了。

和手遺跡溝発掘調査

7）樋口遺跡（昭和62年度）

○昭和62年8月27日（木）晴　朝、結団式を行なう。器材整備、プレハブ周辺整理の後、助籬による削平作業に入る。調査区は、過去に削平された経過があり、所々ロームが露呈している。残暑のきびしい一日だった。

○8月28日（金）晴時々曇　検出作業。北側テラス部分は、ボーリングの結果表土が厚いため2m巾トレンチを入れる。調査区東側にて、石棒、打斧、縄文土器片出土。

○8月29日（土）快晴　5×5mのグリッドを設定し、杭打ちを行なう。少量ながら縄文土器片出土。

○8月30日（日）　休日

○8月31日（月）曇後雨　検出作業。台風の影響により風が強く、昼頃から雨まじりとなったため午後の作業を中止する。

○9月1日（火）快晴　検出作業を続ける。中央部は、ほぼ地山ロームの検出をみたが、周辺部ではまだ時間を要する見込み。打斧、縄文土器片出土。台風一過の暑い一日だった。

○9月2日（水）晴　調査区東側で比較的多くの土器片が得られ、遺構の可能性を伺わせている。

○9月3日（木）曇　検出作業およびトレンチ掘り下げを進める。調査区南東部にて焼土を伴なう落ち込み確認。落ち込みの黒褐色土中から灰釉陶器出土。付近は、縄文土器片、打斧の出土が多い。

○9月4日（金）曇後雨　北側トレンチ内のローム直上で土器片数片出土。雨が降り始めたため午後の作業を中止する。

○9月5日（土）晴　北トレンチにて、打斧、磨斧、縄文土器出土。トレンチ下方の深さ60cm程にもなり、ローム面の傾斜はかなり急となる。調査区西側では、連日の検出作業にもかかわらず、遺構、遺物とも皆無である。

○9月6日（日）　休日

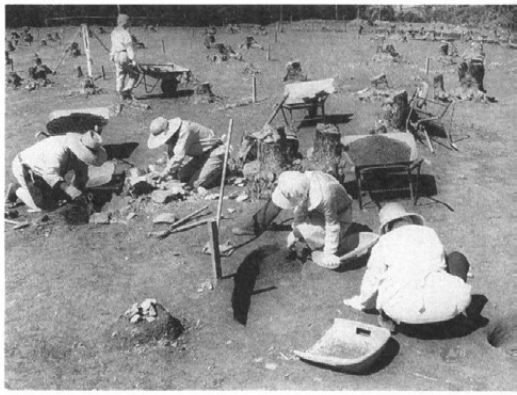
○9月7日（月）晴　東南の落ち込みが東側で表土除去区外のため、公団の買い上げ地ぎりぎりまで調査区を拡張し、掘り下げを開始する。

○9月8日（火）晴　東側拡張区掘り下げ。僅かに縄文土器、須恵、灰釉陶器

樋口遺跡下草掃除作業

樋口遺跡遺構検出作業

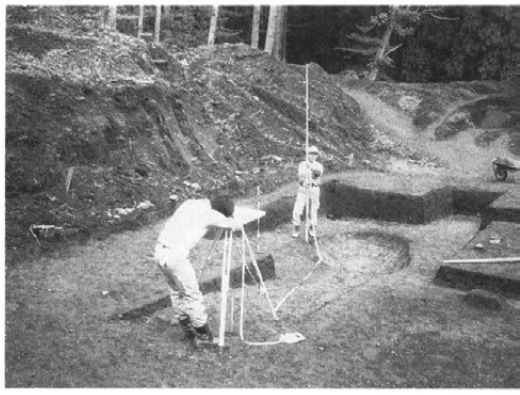
片出土。西側斜面下方にて縄文土器片数片出土。
○９月９日（水）晴　東側拡張区の掘り下げを終了する。縄文土器片、黒曜石フレーク出土。住居と思われる落ち込みプランがほぼ判明したので、１号住居址とし、十字ベルト設定の後掘り下げを開始する。灰釉、土師器片出土。北側および西側での掘り下げに伴い土器片少量出土。
○９月10日（木）曇　１号住居址（以下１Ｈとする）掘り下げ。北東隅に石組みカマドを確認する。遺物は少なく、掘り込みもあまり深くない。調査区南側で検出された小竪穴を１号小竪穴（以下１Ｓ）とし、半截する。四角の底部を持ち、かなり深いものとなる。西側斜面の地山が判然としないためトレンチを入れる。
○９月11日（金）雨　雨天につき作業中止。
○９月12日（土）曇　１Ｈ、遺物取上、セクション図化、ベルト除去。１Ｓ、セクション図化後掘り下げ。調査区東側で検出された小竪穴と思われる落ち込みの半截を開始する。
○９月13日（日）　休日
○９月14日（月）快晴　１Ｈ、床面精査。１Ｓ、完掘。東西に２ｍ近い長方形の小竪穴となった。２～７Ｓ、セクション図化後掘り下げ。集石に入り込んでいる根の除去を行なう。
○９月15日（火）　休日
○９月16日（水）雨　雨天につき作業中止。
○９月17日（木）曇　１Ｈ、写真撮影。１～６Ｓ、写真撮影。７Ｓ、掘り下げを進める。堅い床を持つ、深い小竪穴となる。集石遺構を８Ｓとし半截し、セクション図化後掘り下げ。底部に礫が敷かれた様になっているのが確認される。
○９月18日（金）晴　１Ｈ、１～６Ｓ、平面図測図。７、８Ｓ、写真撮影。調査区全体図作成。
○９月19日（土）晴　７、８Ｓ、平面図測図。調査区全体で出土した遺物を、グリッド別に取上げる。全面清掃後、全体写真撮影。本日にて、全調査日程を終了する。


樋口遺跡遺構発掘調査

８）ヨケ遺跡（昭和62年度）

○昭和62年８月24日（月）～９月１日（火）　バックフォーおよびブルドーザーにより調査区の表土除去作業。谷部のため、最深部では暗褐色土が１ｍ以上堆積していた。
○８月27日（木）快晴　樋口、ヨケ両遺跡の結団式を行なう。ヨケ遺跡の表土除去が終了しないため、樋口遺跡の発掘調査から開始する。
○９月14日（月）快晴　調査区西側から、助簾による遺構検出作業を開始する。土師器片数片出土。
○９月15日（火）　休日
○９月16日（水）雨　雨天につき作業中止。
○９月17日（木）曇　検出作業。粘性の強い土が重機によって固められてしまい、なかなか捗らない。北側において、土師器片、打斧が出土。
○９月18日（金）晴　遺構検出作業。５×５ｍのグリッドを設定し、杭打ちを行なう。
○９月19日（土）晴　調査区全体の削平を一通り終了したので、数ケ所の２ｍ巾トレンチを設定し、遺構検出作業を進めることとする。縄文土器片、灰釉、打斧等出土。
○９月20日（日）～９月23日（水）　休日
○９月24日（木）曇　トレンチ掘り下げを進める。東側黒褐色土内から土師の坏出土。Ｂ－4.5グリッドにて検出された楕円形の黒色土の落ち込みを半截に入る。
○９月25日（金）雨　雨天につき作業中止。
○９月26日（土）曇後雨　検出作業を進める。Ｂ－4.5グリッドの落ち込みを１号小竪穴（以下１Ｓ）とし、半截を進める。検出プランに比してあまり深くない落ち込みとなる。１Ｓ東側にて円形の落ち込み確認。昼頃から雨が激しくなったため、午後の作業を中止する。

ヨケ遺跡遺構検出作業


ヨケ遺跡遺構実測作業

○９月27日（日）　休日
○９月28日（月）曇　遺構検出作業。１Ｓ、半截終了後セクション図化。１Ｓ東側の落ち込みを２Ｓとし、半截後セクション図化する。寒い一日だった。
○９月29日(火)快晴　検出作業続行。１、２Ｓ、全掘。３Ｓ、半截後セクション図化。全掘。調査区全体図測図。
○９月30日(水)曇　検出作業。Ｈ－11グリッドにて検出された４Ｓのセクション図化後全掘。小竪穴の平面図測図。調査区全体の遺物取上を行なう。
○10月１日（木）曇　北側に設定したトレンチを中心に遺構検出作業を行なうが、わずかな遺物の出土をみるにとどまる。明日の全体写真のための清掃作業を行なう。
○10月２日（金）快晴　全体写真撮影。グリッドの杭抜き、発掘器材の撤収、整備を行なう。本日にて、３ケ年にわたり、一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事に伴ない実施された発掘調査の全日程を終了する。

ヨケ遺跡発掘器材撤収作業

整理作業は、各年度、現場における発掘調査終了後、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の実測、図版の作成、原稿執筆を行なう。

第４節　遺跡の状況と面積

第２表　調査経過一覧表

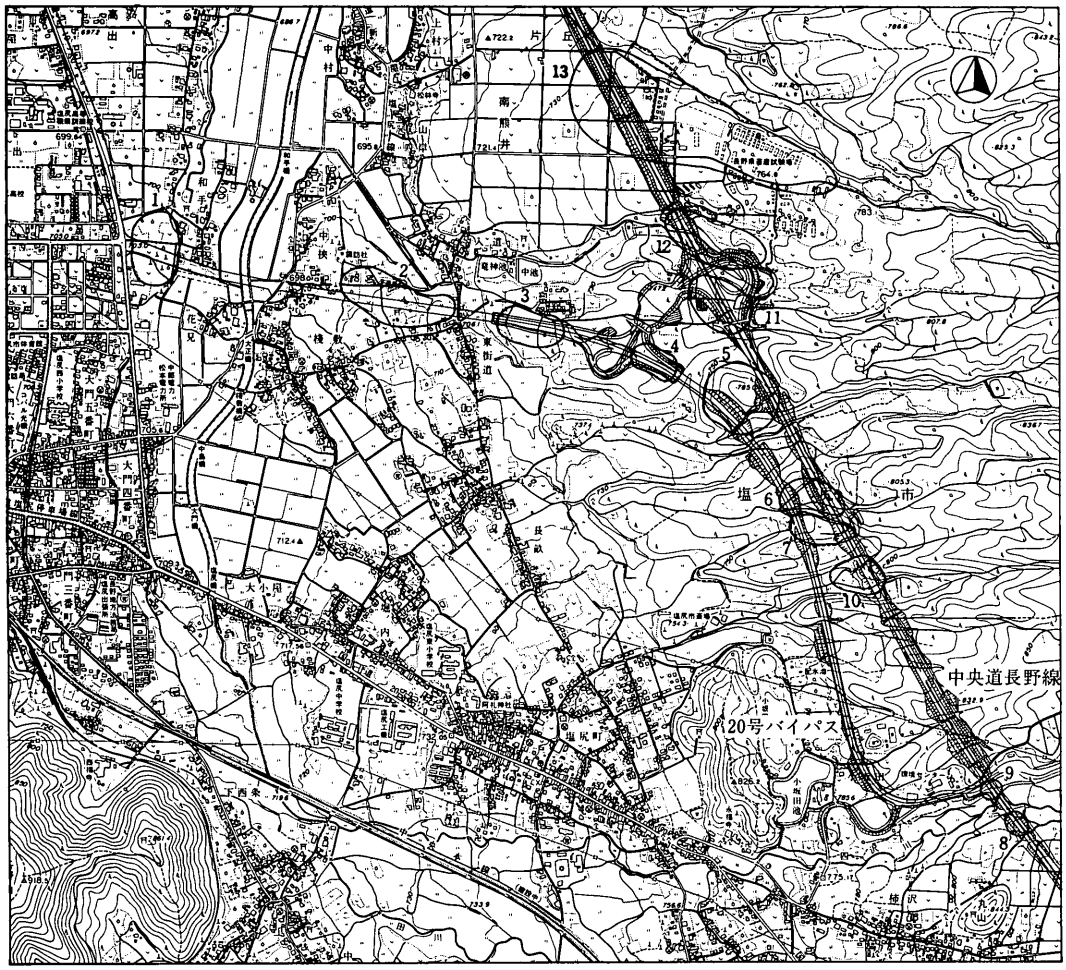
遺跡名	昭和60年度												昭和61年度												昭和62年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
和　手																										発掘	遺物整理 図面作成 原稿執筆									
中　挟														発掘	遺物整理 図面作成										遺物整理 図面作成 原稿執筆											
向陽台		発掘		遺物整理 図面作成									発掘	遺物整理 図面作成																遺物整理 図面作成 原稿執筆					
北　原		発掘		遺物整理 図面作成																										遺物整理 図面作成 原稿執筆					
高山城															発掘	遺物整理 図面作成														遺物整理 図面作成 原稿執筆					
樋　口																													発掘	遺物整理 図面作成 原稿執筆					
ヨ　ケ																													発掘	遺物整理 図面作成 原稿執筆					

第3表　発掘調査成果一覧表

遺跡名	主な遺構		主な遺物
和手	古墳時代末～奈良時代初頭住居址 7	建物址 3	先土器時代尖頭器
	奈良時代前葉～中葉住居址 6	方形周溝墓 1	古墳時代土器
	奈良時代末～平安時代初頭住居址 8	溝址 2	奈良時代土器
	平安時代中期住居址 2	小竪穴 11	平安時代土器、石器
	時期不明住居址 1		
中挟	縄文時代中期住居址 3	建物址 1	縄文時代中期土器、石器
	弥生時代後期住居址 3	方形周溝墓 4	弥生時代後期土器、石器
	古墳時代住居址 6	小竪穴 62	古墳時代土器
	平安時代住居址 38	特殊遺構 1	平安時代土器、石器
	中世住居址 1	ローム マウンド 7	
向陽台	縄文時代早期住居址 4	小竪穴 30	先土器時代ナイフ形石器
	弥生時代後期集石炉 4		縄文時代早期土器、石器
	縄文時代前期住居址 4		縄文時代前期土器、石器
	弥生時代後期住居址 6		縄文時代中期土器、石器
	方形周溝墓 1		弥生時代後期土器、石器
北原	縄文時代前期住居址 4	小竪穴 44	縄文時代前期土器、石器
	縄文時代中期住居址 3	竪穴状遺構 1	縄文時代中期土器、石器
高山城	平安時代住居址 2		縄文時代前期土器、石器
	小竪穴 8		平安時代土器
樋口	平安時代住居址 1		縄文時代中期土器、石器
	小竪穴 8		平安時代土器
ヨケ	小竪穴 4		縄文時代中期土器、石器 平安時代土器

第4表　発掘の状況と面積

遺跡名	場　　所	現況	種　類	全体面積（㎡）	事業対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	発掘経費（円）
和　手	塩尻市大字広丘高出	畑	包蔵地	36,000	3,000	2,600	7,500,000
中　挾	〃　桟　敷	畑	包蔵地	47,000	5,600	5,350	13,400,000
向陽台	〃　桟　敷	畑	包蔵地	22,000	4,800	4,500	8,700,000
北　原	〃　堀ノ内	畑	包蔵地	12,000	2,800	2,250	3,350,000
高山城	〃　長　畝	山林	城館跡	45,000	12,000	520	3,350,000
樋　口	〃　長　畝	山林	包蔵地	19,000	2,300	2,200	3,600,000
ヨ　ケ	〃　長　畝	畑	包蔵地	17,000	2,000	1,800	2,700,000



1 和手　2 中挾　3 向陽台　4 北原　5 高山城跡　6 樋口　7 ヨケ
8 北山　9 御堂垣外　10 栗木沢　11 竜神　12 竜神平　13 山ノ神

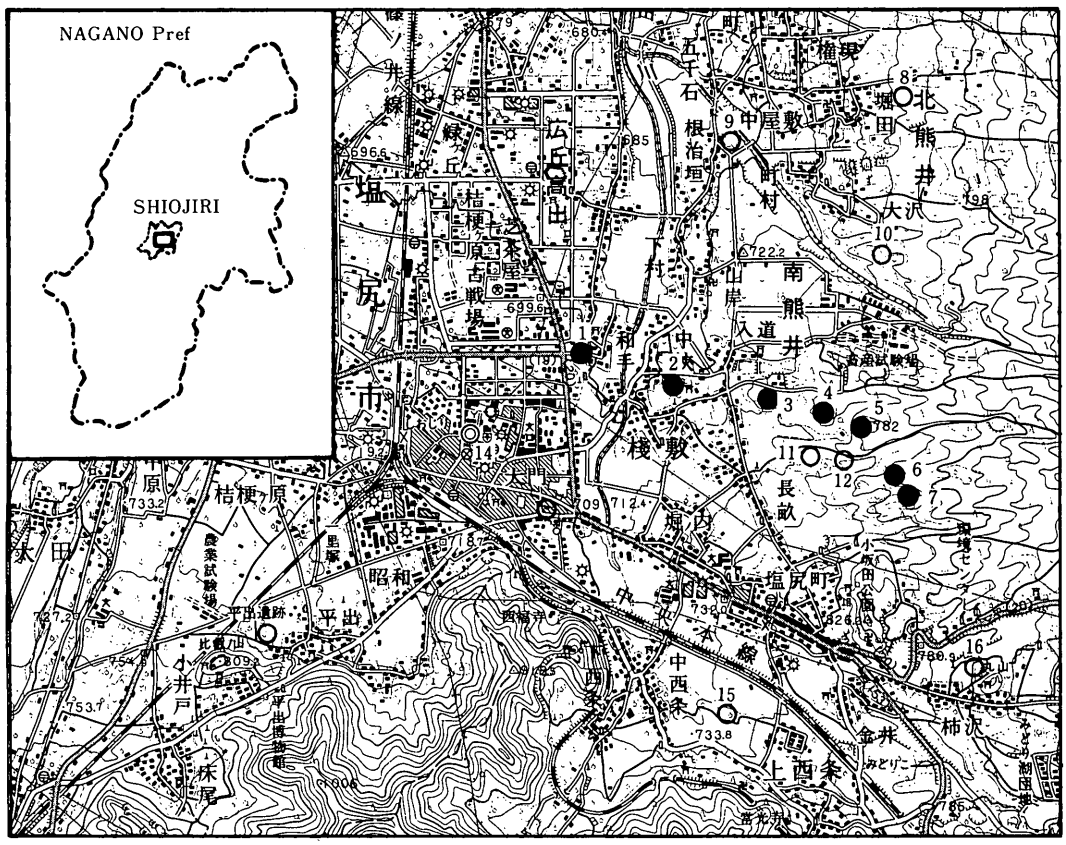
0　500　1000m

第1図　20号バイパスおよび中央道長野線関連遺跡分布図

第II章　遺跡周辺の環境

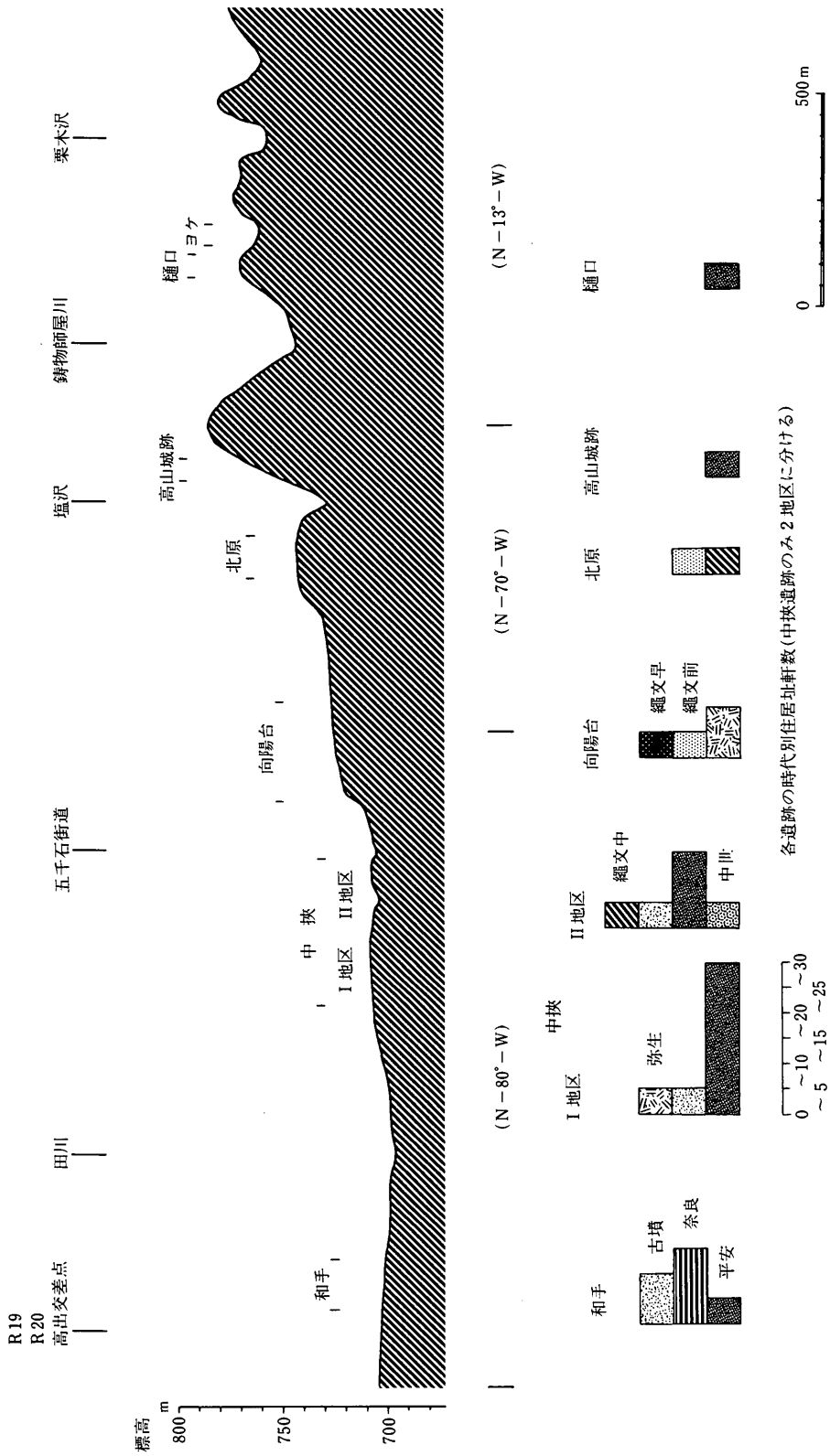
第1節　自然環境

長野県のほぼ中央部に位置する塩尻市は糸魚川―静岡構造線により形成された地構盆地をなす松本平の南端を占地し、北を除く三方を山地によって囲まれている。即ち、西側には飛騨山脈から分岐する山々が重なり、鉢盛山（2446.4m）を最高峰としている。東側には美ケ原を最高峰とする筑摩山地の一角をなす鉢伏山（1928.5m）、高ボッチ山（1664.9m）、東山（1429.5m）などが連なり、また南側には木曽山脈の北端を占める山々が連なり霧訪山（1305m）を最高峰としている。鈍頂地形を形成しているこれらの山稜は、また太平洋と日本海の分水嶺を構成しており、支流を集め遠く天竜川や木曽川あるいは信濃川の末流となって海へ運ばれている。



1 和手　2 中挟　3 向陽台　4 北原　5 高山城　6 樋口　7 ヨケ　8 舅屋敷
9 上木戸　10 組原　11 福沢　12 堂の前　13 平出　14 柴宮　15 田川端　16 柿沢東

第2図　遺跡位置図



第3図　調査遺跡地形断面図（H：V＝1：5）

盆地地域には洪積世後期に木曽谷から流出する奈良井川によって形成され、その後の地盤隆起により高地化した桔梗ケ原台地(ＪＲ塩尻駅付近で720m)と、それを挟む形で北流する奈良井川、田川の両河川によって形成された2段ないしは3段の河岸段丘が発達している。

筑摩山地の南端を占める東山から勝弦峠にかけての山塊は塩嶺山地ともよばれ、松本盆地と諏訪盆地を隔てているが、そのほぼ中央に塩尻峠がある。この峠に立つと西には松本平が一望に臨まれ、前方には穂高岳の雪嶺を中心とした飛騨山脈の勇姿が立ち並び、また東には眼下に諏訪湖を中心とする諏訪盆地が、そして正面はるか遠くに秀嶺な富士山の姿を臨むことができる。かつて中山道を江戸へ上京する旅人が初めて富士山を眺め得ることができたのは、この峠に立った時である。また「塩尻」の地名の由来も、この地から眺めた雪嶺の富士山が、たまたま塩田に設けられた「塩尻」に似ていることから付けられたとされている。このように塩尻峠は古来より交通の要所であり、また歴史的にも数々の運命の鍵を握ってきた。

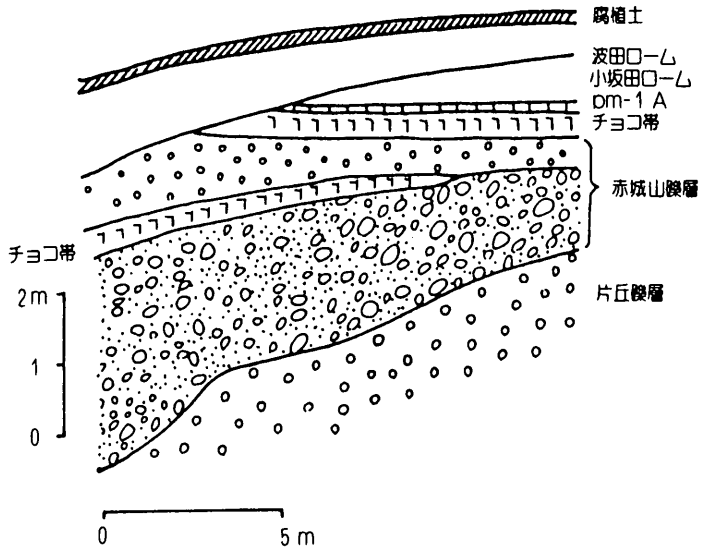
塩尻峠から国道20号線を降りていくと、伊那路へ連絡する国道153号線と交差するが、ここから塩尻市の大門市街地方面に向かって古い町並を通過する。中山道69宿のうち江戸から30番目の塩尻宿である。たび重なる火災と、国道が宿場内を通過していることから残念ながら往時のおもかげはほとんど残っていない。

この塩尻峠から塩尻市街地まで広がる西向斜面を概観すると、高ボッチ山塊に展開する広大な山麓斜面と田川によって形成された扇状地形、およびその中を開析する田川、四沢川、権現沢など数本の小河川によって代表される。扇状地は長さ約4.5km、幅約2kmの広大な規模を持ち、その扇端は下西条西福寺の付近から桟敷，入道部落に至る狭長な低窪地を挟んで奈良井川扇状地（桔梗ケ原台地）に連なっている。標高は扇頂で900m、扇端で710m、平均斜度3°である。田川およびその支流である四沢川、権現沢によって開析された所謂、開析扇状地であるが、これは河川の勾配が浸食を助けているのに加え、この付近が著しい地盤隆起地帯であることに起因している。隆起量は中央部の柿沢付近で1.6mm/年であるが、峠に近づく程その数値は高くなる傾向にある。

田川は東山山麓に源を発しており、塩尻峠の山間渓谷を西へ下り、四沢川、権現沢などの諸河川を集めながら下西条で流れの向きを北にかえ、松本市の西部で奈良井川に合流している。塩尻東地区では大扇状地形を形成しており、現在広く水田畑地に利用されているほか旧塩尻宿もこの上に乗せている。みどり湖より上流では極めて浅い谷を形成しているだけの截頭扇状地であるが、湖より下流では地盤隆起に伴ない浸食量が大きく、一種の開析扇状地を形成している。田川沿いに発達するこれらの台地の縁辺部には縄文～弥生時代を代表する数多くの遺跡が分布している。

一方、高ボッチ山塊西麓斜面沿いには片丘丘陵が南北に発達しており、ちょうど本バイパスが国道20号線より分岐する小坂田付近から松本市の寿付近まで2km前後の幅を維持しながら約10kmにわたって延びている。ここは断層運動によって生じた崖錐性堆積物を基盤としているため、平均勾配6°とかなり急な斜面を西へ向けている。丘陵上には山麓から流下する群小の河川によって形成された複合扇状地がよく発達しており、その扇端は盆地縁辺の河岸段丘面に接している。

今回、20号バイパスが通過する丘陵部（向陽台～ヨケ遺跡付近）は、ちょうどこの田川扇状地



第４図　長畝付近における片丘礫層と赤城山礫層の関係（松本盆地団研、1977）

と片丘丘陵の縫合線上にあり、丘陵を開析流下する栗木沢や鋳物師屋川に水資源を供給されている。

次に地質学的にみると、この付近はちょうど領家変成帯とフォッサ・マグナ西縁（糸魚川―静岡構造線）とが接する地域にあたり、複雑な様相を呈している。

東北日本と西南日本を両分する糸静線は、諏訪盆地から勝弦峠を経て、塩尻東地区の地下を通過し、松本平に沿って北上する活断層であるが、洪積世中期（約70万年前）に現在の松本盆地を形成する断層運動が生じ、現在に至っては2000mにも及ぶ比較差を生じている。このため断層西側の西条付近では硬砂岩・珪質粘板岩・石灰岩に代表される古生層が露出しているが、これに対し断層東側の東山山麓では古生層を覆って新第三系の貫入岩体である閃緑岩類や塩嶺類層が広く分布する。

本バイパスが通過する地域は、この断層破砕帯の一部にかかっており、発掘された遺跡において出土した石器や礫は両者の岩相を繁栄して実に多種に富む。また発掘後、施工された高山城跡付近の工事現場からは石灰岩の岩体が採掘されている。これも破砕帯の産物といえよう。

塩嶺累層は比較的高所に分布する鮮新世末～洪積世前期の安山岩質溶岩で、地形的により低所の山麓部にはその凝灰角礫岩を主とする火山砕屑岩類および崖錐性堆積物の分布がみられる。第４図は長畝の地表付近における模式断面図であるが、片丘礫層あるいは赤城山礫層と称せられるものがそれにあたる。特に片丘礫層は長畝を模式地としており、古生層や塩嶺累層を不整合に覆って約30mの層厚を有する。礫は古生層起源の砂岩、粘板岩、珪化作用を受けた第三紀の石英閃緑岩、塩嶺累層の安山岩などの亜角礫が多い。

小坂田ローム、波田ロームはそれぞれ御岳、乗鞍岳を噴出起源とする火山灰で、一般に信州ロームと呼ばれており、層厚は2～3mを測る。各遺跡で縄文時代の遺構が構築されるのはこの波田ローム層最上面であり、褐色で緻密な土層を呈する。

第2節　周 辺 遺 跡

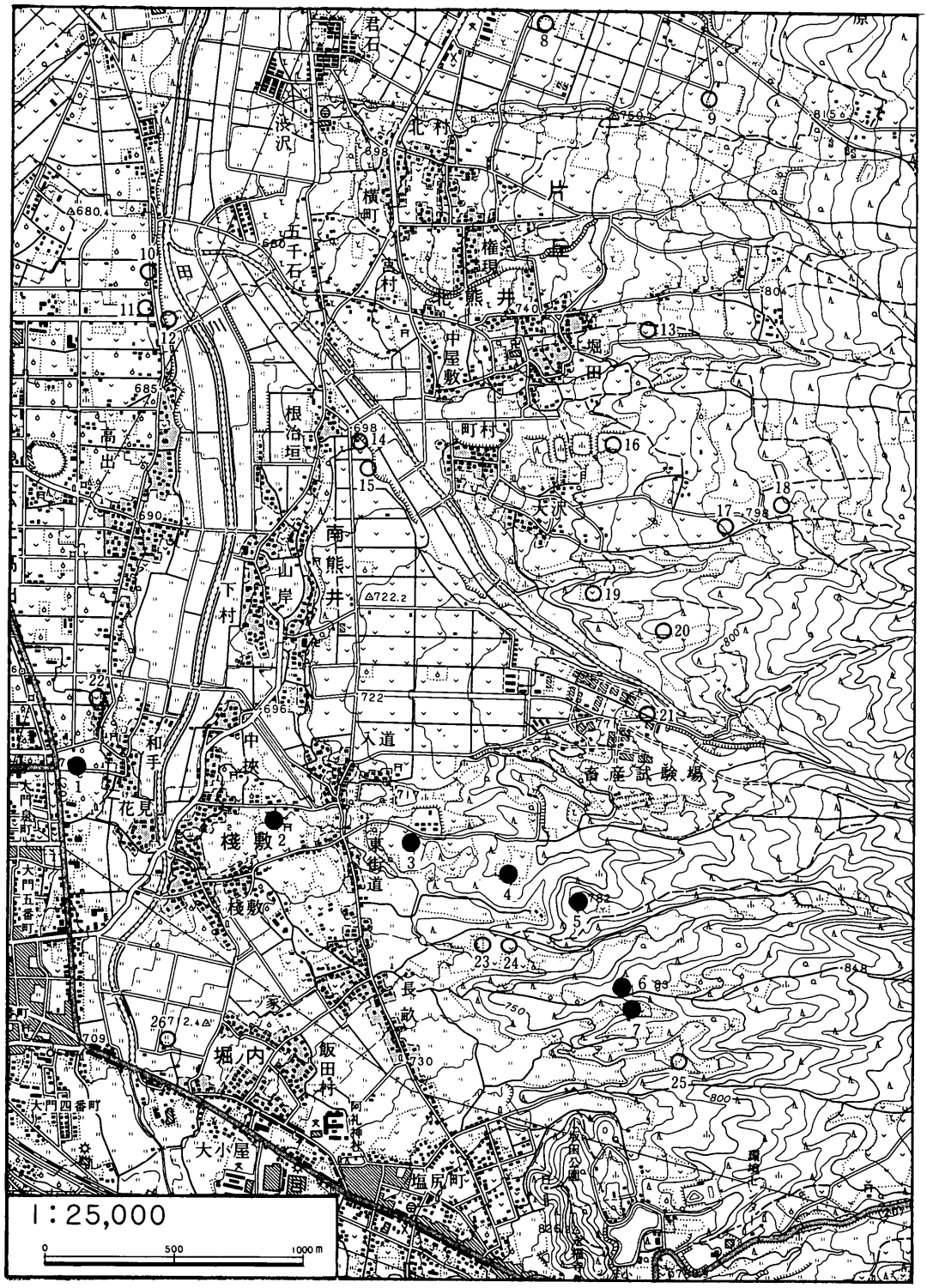
塩尻市の東に位置する筑摩山地。この山麓を西へ向って流れ出る幾筋もの沢により形成された尾根と谷。その沢の水を集めて、南から北へこの山麓の裾を切るかのように流れる田川。塩尻市東山地籍に始まり、田川の向かう松本市東南部にかけて展開するこの東山山麓と田川流域に広がる遺跡の密度は、県下でも屈指のものとなっている。また、時間的広がりにおいても、先土器時代に始まり、古代、中世に至る遺跡の移り変わる様は、一つの時空間における生活域の様相を様々な形で今日に伝えている。

今回行なわれたバイパス関連の発掘調査は、バイパスの路線が、東山山麓西麓に発達した幾筋かの尾根と谷を南北に切断しながら進んだ後、1つの尾根を西下し、田川を東西に横断する形で計画されたため、図らずもこの遺跡稠密地帯の1箇所を東西に切断してみせることとなった。このため、発掘調査による成果も、先土器時代、縄文時代早期、前期、中期、弥生時代、そして古墳、奈良、平安時代と、まさに各時代の一断面を垣間見せることとなったのも、けっして偶然とは言い難いものがある。近年、幾多の発掘により、貴重な成果が数多く積み重ねられているとは言うものの、この遺跡稠密地帯にあっては、それはまだほんの一部のものでしかない。このことを踏まえつつ、この地域に展開する遺跡を、市内を中心に概観してみたい。

先土器時代、今回調査され、尖頭器が出土した和手遺跡を南端とする高出遺跡群の黒崖、一夜窪、北ノ原、丘中学校において、尖頭器、ナイフ形石器、掻器、石刃、彫器、礫器などが多量に出土し、この田川左岸段丘上が、該期の遺物を濃密に出土する地域の1つとなっている。また、東山山麓においては、片丘南内田の小丸山の尖頭器、今回調査が行なわれた向陽台のナイフ形石器を北端として、青木沢でナイフ形石器、尖頭器が出土し、この一体に幅広く該期の遺跡が確認されている。従来松本平にあっては希薄であるとされて来た該期であったが、近年徐々に資料が蓄積されて来ており、今後の本格的な調査による解明を待ちたい。

縄文時代草創期　この時期の遺跡は、まだあまり確認されていない。高出遺跡群の北ノ原で有舌尖頭器が出土しているほかは塩尻峠中腹に集中してみられ、青木沢で神子柴型石斧、石刃、禰ノ神で神子柴型尖頭器、柿沢で神子柴型尖頭器、石刃が出土している。塩尻峠を中心とした地域への遺跡の集中化は、今後の研究課題として重視されよう。

縄文時代早期　今回の調査で4軒の住居址と4基の集石炉が発見された向陽台、その南方650mで5軒の住居址が発見された堂の前、これに隣接し、集石遺構と多量の押型文土器が出土した福沢、押型文期の住居址2軒を検出した八窪、さらに、禰ノ神、青木沢、栗木沢、剣ノ宮などが向陽台以南の山麓地帯で知られている。また北側の片丘地区では、向陽台に隣接した竜神平で住居



1 和手　2 中挾　3 向陽台　4 北原　5 高山城　6 樋口　7 ヨケ　8 内田原　9 小丸山
10 黒崖　11 一夜窪　12 北ノ原　13 舅屋敷　14 上木戸　15 犬原　16 竹ノ花　17 中原　18 女夫山ノ神
19 狙原　20 菖蒲沢　21 竜神平　22 上村　23 福沢　24 堂の前　25 栗木沢　26 中島

第5図　周辺遺跡位置図

址1軒が検出されたほか、竜神、犬原、狙原、舅屋敷などで遺物が得られている。この東山山麓周辺部をみると、田川左岸の黒崖、一夜窪までの間、該期の遺物はほとんど得ることができなくなり、この山麓一体が早期の一生活域をなしていたことを伺わせている。また、遺構、遺物も松本平では他に見られないほどまとまった資料となっており、様々な活用が期待される。

縄文時代前期　今回の調査では、向陽台と北原でそれぞれ中越期の住居址4軒が発見された。前期の遺跡は、ここから北の山麓に広がる片丘地籍に多く、舅屋敷、中原、竹ノ花、女夫山ノ神、境沢、富士塚、狙原、立石、大林、小丸山などがある。舅屋敷では6軒の住居址と42基の小竪穴、女夫山ノ神では4軒、中原、竹ノ花ではそれぞれ1軒の住居址が確認されている。片丘地籍から南へ続く山麓地帯においては、該期の遺跡は稀となり、やや離れて、5軒の住居址が発見された田川端のほか、宗張、大久保、三嶽神社西など田川流域上流の一角にもう1つの集中箇所を見い出すことができる。近年豊富になった平地での資料は、居住域を拡大させた該期文化様相研究の上で貴重なものとなろう。

縄文時代中期　この時期に入ると、東山山麓を中心に遺跡の数は急増する。今回の調査では、中挾で住居址3軒、北原で住居址3軒、向陽台で小竪穴群、高山城跡、樋口、ヨケで遺物を得ることができた。ここから北の片丘地籍の該期遺跡を羅列してみると、南内田では、大宮林、久保在家、鍛冶屋敷、古屋敷、別当原、無量庵、上手村、二本木、山ノ神、松座屋敷、下境沢、中部南、小丸山があり、小丸山では調査により26軒の住居址が発見されている。北熊井では、境沢、舅屋敷、富士塚、源十窪、一本杉、中原、竹ノ花、長者清水、鳶沢、渋沢、狙原、立石、大沢、女夫山ノ神、菖蒲沢、牛売沢、城と極めて濃密な分布が知られている。女夫山ノ神では初頭の住居址1軒、中原では後葉の住居址4軒が確認されているほか、狙原では該期初頭から最終末に至る147軒の住居址からなる大環状集落址が調査されている。向陽台、北原と隣接する南熊井地籍では、上木戸、犬原、中原、山ノ神、竜神、竜神平などが知られ、上木戸で中葉から後葉にかけての住居址31軒や硬玉製垂飾を出土した土壙などが確認されているほか、山ノ神で4軒、竜神平で1軒の住居址が調査されている。さらに、今回の調査区から南へ続く山麓地帯に目を転じてみると、今回の向陽台のほかに、15軒の住居址が発見された中島と花見日向畑、長畝地籍では、北原、高山城跡、ヨケ、樋口のほか、堂の前、栗木沢が知られ、堂の前では3軒の住居址が確認されている。このように、東山山麓に広がる縄文中期遺跡群の展開する様は壮観なものであり、一つの絶頂期を迎えていたことを如実に示している。この山麓下を流れる田川流域の平野部を概観してみても、広丘高出地籍、広丘野村地籍で、一夜窪以外ほとんど遺物の採取すらなされていないことをみてみると、この時期の特性が一層方向付けられるかと思われる。

縄文時代後期　この時期に入ると遺跡の数は激減する。今回の調査でも、向陽台、中挾、ヨケで土器少量が得られたのみであったが、周辺部をみても、片丘の小丸山、渋沢、君石、舅屋敷、中原、上木戸、竜神、山ノ神、広丘高出の北ノ原が知られる程度であり、いずれも若干の土器片が採集されているにすぎない。

縄文時代晩期　この時期も後期と同様で、片丘の君石、別方、新田で確認されている程度であ

る。これらの遺跡をはじめ、田川流域西条地区の館、ちんじゅなどにみられるように、山麓末端部から田川流域へ生活域の移動がみられ、次期弥生時代への発展を予感させている。

弥生時代中期　今回の調査で、この時期に関するものは発見されなかったが、周辺部についても従来あまり多くの遺跡は確認されていなかった。しかしながら近時、この地域で徐々にではあるが資料が蓄積されつつあり、片丘の中原、別方、君石、広丘高出の黒崖、北ノ原、長畝の福沢などで遺物が得られている。中原だけは例外的に高所に位置し、その特異性が注目されるものの、一般的には、田川流域の低地域に生活域を確保していることが伺われる。

弥生時代後期　この時期になると、田川流域を中心に遺跡数も増え、またその規模も大きくなり、集落としての様相が把えられるようになる。今回の調査遺跡では、田川右岸に位置する中挾で3軒の住居址と4基の方形周溝墓が、またその東に隣接する向陽台の台地上で6軒の住居址と1基の方形周溝墓が発見され、別事業による発掘調査であったが、中挾対岸の和手において3軒の住居址と3基の方形周溝墓が確認された。周辺部について、田川を中心に概観してみると、右岸では広丘野村の花見、片丘の狐塚、渋沢、中原、横町、下境沢、上木戸、犬原、桟敷の中島などがあり、上木戸では16軒の住居址、犬原では2軒の住居址と2基の方形周溝墓、中島で5軒の住居址が調査されている。田川左岸では、広丘野村の丘中学校、広丘高出の黒崖、北ノ原、一夜窪、北海渡、上村、裏の原、社宮寺などが知られ、丘中学校でガラス小玉などの装飾品と鉄釧を副葬した方形周溝墓1基が発見されているほか、北ノ原で4軒の住居址、上村で3軒の住居址が確認されている。さらに上流では、大門柴宮で銅鐸が出土しているほか、下西条地籍の西福寺前、砂田、銭宮、平村、中西条地籍の三嶽神社西などが知られ、田川を軸として広範囲に展開する該期の様相を伝えている。近年、発掘調査により集落のある程度の範囲を一括資料として得ることが多くなり、またここ数年間に市内で10余基の発見をみた方形周溝墓などにより、当時の集落の在り方、文化様相等を知るための貴重な資料が増えつつある。

古墳時代　市内で確認されている古墳の数は比較的少なく、田川上流域の柿沢、西条地区を中心に10基程と田川からは離れた位置にある宗賀平出において数基が確認されているだけである。このうち平出においては、該期の大集落址が調査確認されているものの、田川流域における調査では、上流の下西条の栃久保で1軒の住居址が確認されたほか、今回の中挾で6軒の住居址、片丘南熊井の竜神平で祭祀遺物を出土した2軒の住居址以外、ほとんど痕跡を残していない。小規模ながら古墳の存在から、ある程度の小勢力が田川上流域を中心に定着していたことは伺えるものの、古墳を象徴とする時代背景の中にあっては、松本市中山丘陵に存在していた大古墳群までも含めた範囲の中で、今後の調査、検証が必要となろう。

奈良時代　市内ではいままで、この時代に比定される遺構、遺物は平出以外ではほとんど確認されていなかった。それが今回の和手の調査により、8世紀を中心とする21軒もの住居址と、これに伴う遺物が多量に出土したことにより、今まで空白部分となっていたこの地域における該期の研究を進めるうえで貴重な資料を提供することとなった。また、この調査と同じ昭和62年、片丘北熊井の菖蒲沢では、松本平南半で初めて該期の登り窯1基と、これに関連する住居址1軒が

発見され、またその住居址内からほぼ全形を伺い知ることができる瓦塔が出土した。この発見は、この地域の奈良時代集落の土器研究を前進させ、また土器の生産地と消費地との流通関係解明に活用されるべき資料となろう。またとりわけ瓦塔の発見により、当時仏教が浸透して来た様を伺い知ることができ注目される。

平安時代　この時代になると、市内の遺跡数は急増する。その在り方としては、田川流域を中心に大集落（里棲み集落）が営まれるとともに、山間地への開発が徐々に進み、近年様々な角度で研究が重ねられている該期山棲み集落の発展が特徴付けられる。今回の調査遺跡でも、前者として和手で10軒、中挟で38軒の住居址が確認され、後者として、高山城跡で2軒、樋口で2軒（1軒は中央道関連）の住居址が確認され、ヨケでも遺物が出土している。田川流域で調査された代表的な遺跡としては、広丘吉田で271軒の住居址が発見されている吉田川西、94軒の住居址が発見されている吉田向井、広丘野村で26軒の住居址が発見されている丘中学校があげられる。このほか、広丘野村の野村、花見、高田、広丘高出の黒崖、北ノ原、一夜窪、北海渡、古屋敷、分教場西、上村、裏の原、社宮寺、五郎治郎、片丘の君石、渋沢などがあり、高田、上村でそれぞれ3軒、君石で1軒の住居址が確認されている。これに対峙して東山山麓部に存在する遺跡として、片丘南内田の矢口、久保在家、鍛冶屋敷、別当原、無量庵、二本木、松座屋敷、下境沢、中部南、欠ノ湯、南原、桜林、内田原、小丸山、北熊井の狐塚、境沢、舅屋敷、中原、今泉、五千石、横町、俎原、宮村、女夫山ノ神、別方、菖蒲沢、牛売沢、南熊井の上木戸、山ノ神、竜神平、桟敷では中島、原、花見日向畑が知られている。遺構も多く検出されており、住居址だけでも、小丸山で1軒、内田原で18軒、舅屋敷で7軒、俎原で19軒、女夫山ノ神で1軒、上木戸で1軒、竜神平で1軒、中島で1軒がそれぞれ調査されている。この地理的範囲は、東山山麓が東に急傾斜をもって立ち上がるぎりぎりまで広がり、場所によっては縄文時代中期にこの地域で広範に展開した集落域より高所に位置する場合すらある。このような大集落の形成、山間地への進出の背景には、政治的な規制、生業活動の変化、発展が考えられ、一段と複雑化した村落構成が生み出されたといえる。本書で後述するような調査成果は、以上述べてきたような多くの問題を解決するための大きな手がかりとなるものであろう。

第Ⅲ章　調査遺跡

第1節　和手遺跡

1　位置と地形

和手遺跡は、塩尻市大字広丘高出地籍に所在する。諏訪盆地から塩尻市内に入った国道20号線は、塩尻峠を下った後、塩尻東地区、大門地区を通過して北進し、木曽、名古屋方面と松本、長野方面をつなぐ国道20号線に接続して終点となる。この、北、西、南の三方面に分岐する高出交差点の東側で、塩尻バイパスが国道に接続する最終地点に和手遺跡は位置している。

遺跡の標高は700mで、200m東側を南北に流れる田川までの比高差は5mを計り、遺跡東端部から田川まで緩く東へ傾斜している。東方500mの田川対岸には中挾遺跡があり、さらに東へ向陽台遺跡、北原遺跡の立地する尾根が臨まれる。西には、松本盆地南端部に位置する桔梗ケ原の平地が、約3km先の奈良井川により形成された河岸段丘へと続いている。この桔梗ケ原の平野部は水の流れがほとんどなく、水田経営が不可能な地域となっており、「桔梗ケ原のぶどう」に代表されるとおり一面の畑地帯となっている。和手遺跡は、この桔梗ケ原の東端部に位置し、北へ向かって緩く傾斜する田川左岸の河岸段丘上に立地している。田川の河岸段丘は、この付近ではまだあまり発達してはいないが、北へ向かうに従って徐々に崖状となり、約3km先の丘中学校付近では比高差6mを計っている。この段丘上には、先土器時代以来の遺跡が数多く知られ、長期にわたって人々の生活に恵みをもたらす好条件がそろっていたことを伺わせている。ここから遠く西方には北アルプスの峻嶺が立ち並び、東には東山山麓が四季の移ろいを間近かに見せている。

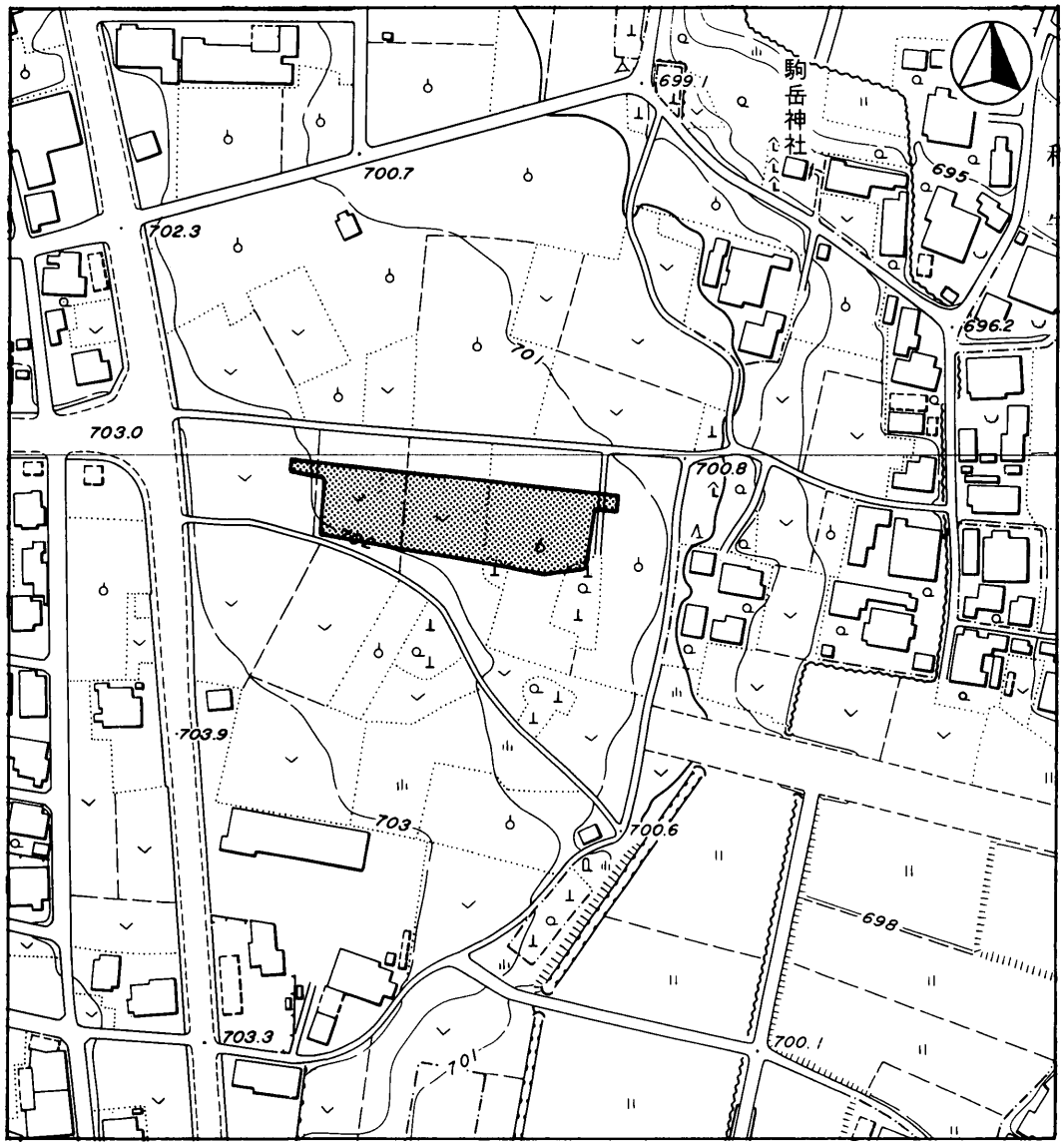
2　調査概要

今回の調査で遺構は、住居址24軒、建物址3軒、方形周溝墓1基、溝址2本、小竪穴11基が検出された。これらの遺構は、いずれもローム層に掘り込まれ、耕作等による攪乱の影響もほとんどない良好な遺存状態を示していた。

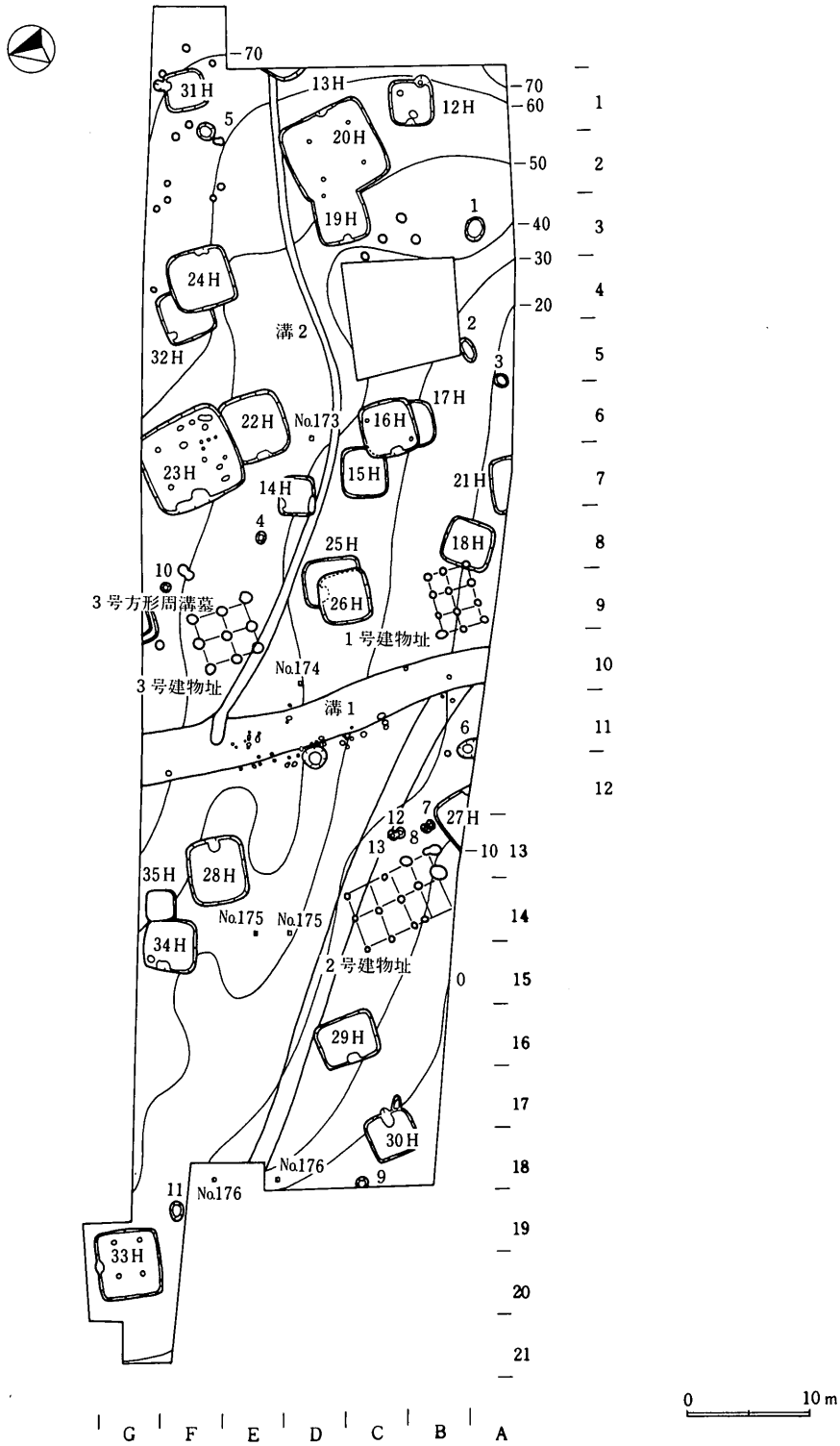
住居址は、時期不明の1軒を除いて、古墳時代末から平安時代中期に至る間のものと確認され、Ⅰ～Ⅳ期に区分された。Ⅰ期は、古墳時代末から奈良時代初頭に比定され、7軒の住居址が調査された。古墳時代的様相を残す段階で、遺物は、土師器の坏類、長胴甕、球胴甕、須恵器の蓋坏、壺、平瓶などが出土している。Ⅱ期は、奈良時代前葉から中葉にかけてのもので、6軒が該当する。供膳形態における須恵器の優位、充実が伺われ，ロクロ手法、糸切り技法が出現する時期にあたる。該期の大型住居址2軒から、編物用石錘が一括出土している。Ⅲ期は、奈良時代末から平安時代初頭に比定され、8軒の住居址が確認された。須恵器が少なくなり、土師器の坏、長胴甕、小型甕などが出土した。黒色土器の出現期にあたる。Ⅳ期は、平安時代中期で、2軒の住居址が検出された。灰釉陶器の流入が始まる時期で、そのほかに土師器の皿、椀などが出土してい

る。

3軒の建物址は、調査区中央部から西半にかけて、それぞれ15m前後の間隔をもって検出されたが、時期は不明である。方形周溝墓は、調査区中央部北側において、大半を調査区外に残して周溝部分が確認された。遺物の出土はない。溝址は、調査区中央部を南北に横切るものと、東側から中央部にかけて東西に細長く延びる2本が検出された。このうち、南北に走る溝中より、八世紀前半から中葉に比定される須恵器を中心に、7世紀末から9世紀前半に至る間の土器片が多量に出土して注目された。11基の小竪穴は、調査区全体に散在して確認された。出土遺物はなく、



第6図　和手遺跡調査地区図


31H
13H
12H
20H
19H
24H
32H
溝2
22H
No.173
16H
17H
23H
15H
14H
21H
25H
18H
26H
3号方形周溝墓
1号建物址
3号建物址
No.174
溝1
27H
35H
28H
No.175
No.175
34H
2号建物址
29H
30H
No.176
No.176
33H
0
10m
G
F
E
D
C
B
A

第7図　和手遺跡全体図

時期、性格は不明である。

このほか、遺構外出土遺物として、ローム層検出面から先土器時代の尖頭器が出土した。

3　発掘区の設定

和手遺跡は、国道20号線と19号線が接続する高出交差点東側の平地に展開する遺跡である。交差点から東に300mの所を南北に田川が流れるが、田川寄り200mは比高差５mほどの緩やかな傾斜となっている。遺跡は、この傾斜上平坦部に存在する。平坦部東側のバイパス用地には墓地があるため、調査はこの墓地と国道の間100mにおいて実施された。また、調査区内にも墓地があり、調査の対象外とした。

調査を開始するにあたり、調査区内北側には塩尻バイパス建設に伴う工事用架設道路が設置され、国道から進入して来る工事用車両により利用されていた。このため、長野国道工事事務所との協議により、工事用道路以外の部分をＩ期調査区とし、調査終了後、道路を調査済用地内へ移動設置し、残地についてII期調査を行うこととした。

発掘調査に先だつ試掘調査によれば、調査区全体で40～50cmの暗褐色土の堆積下に褐色のローム面を確認することができた。調査は、バックフォー、ブルドーザーによる表土除去を行った後、５×５mグリッドを設定した。グリッドは、Ｉ期、II期調査共通のものとし、南から北へ向かってＡ～Ｇ、東から西へ向かって１～21で、発掘調査総面積は2,600m²である。また、調査区内は若干東へ向かって傾斜がみられ、比高差70cmを計った。

4　土層

調査地区一帯の表土はかなり安定した自然堆積をしており、水の影響もほとんど受けていない。層厚はローム面まで約40～50cmを計り、基本的に６層に識別される。上位から暗褐色土、黒色土、明黒褐色土、黒褐色土、黄褐色土、褐色ロームであり、このうち第III層明黒褐色土の下半部と第IV層黒褐色土が遺物包含層にあたる。調査区では古墳～平安時代にかけての集落跡が検出されたが、残念ながら時間的な差異を層位から追うことはできなかった。

第II層黒色土の層厚は極めて薄く、局所的に介在するのみであるが、遺物包含層の上限を識別する重要な鍵層となりうる性格を有しているといえよう。

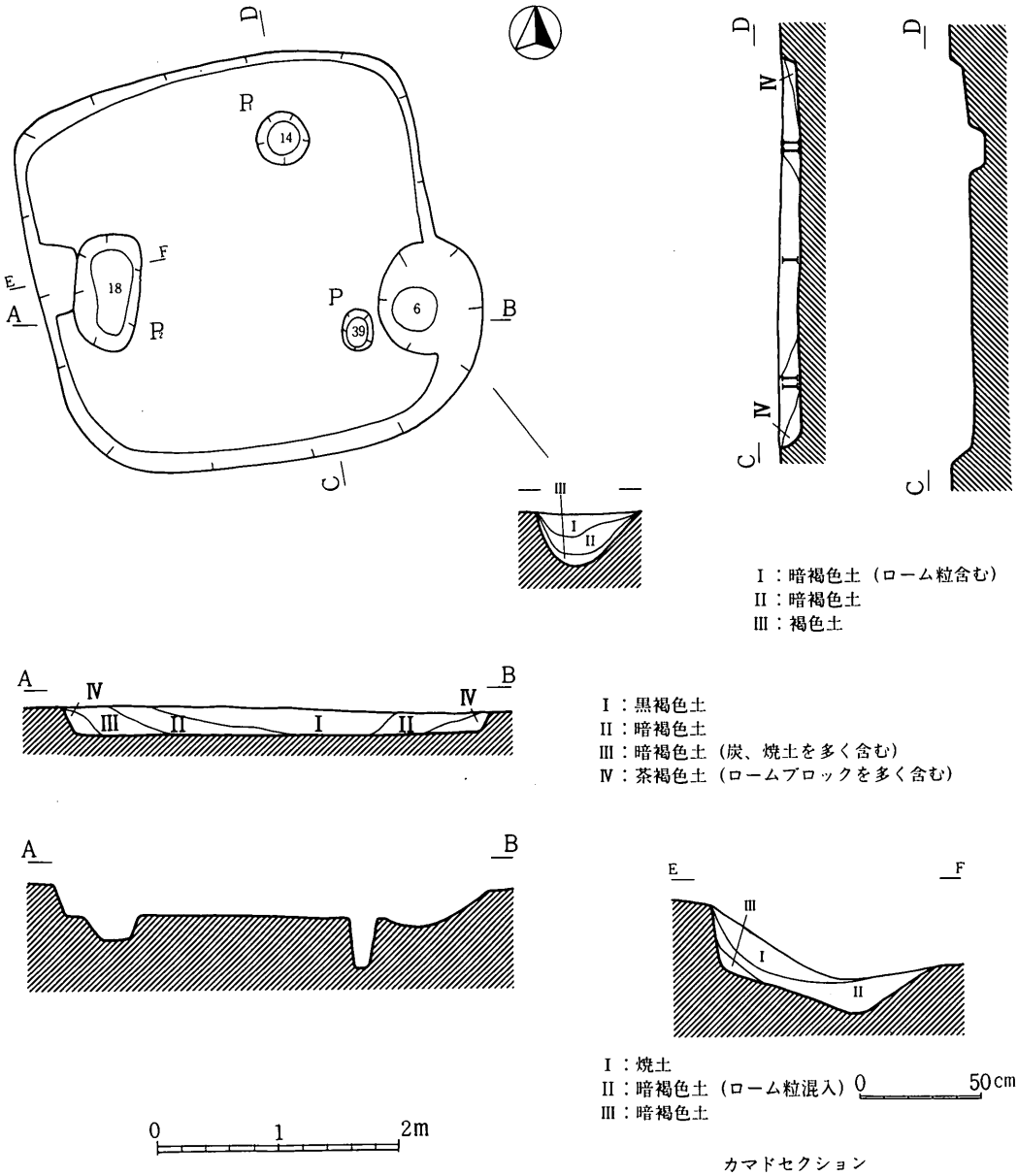
5　遺構・遺物

１）住居址

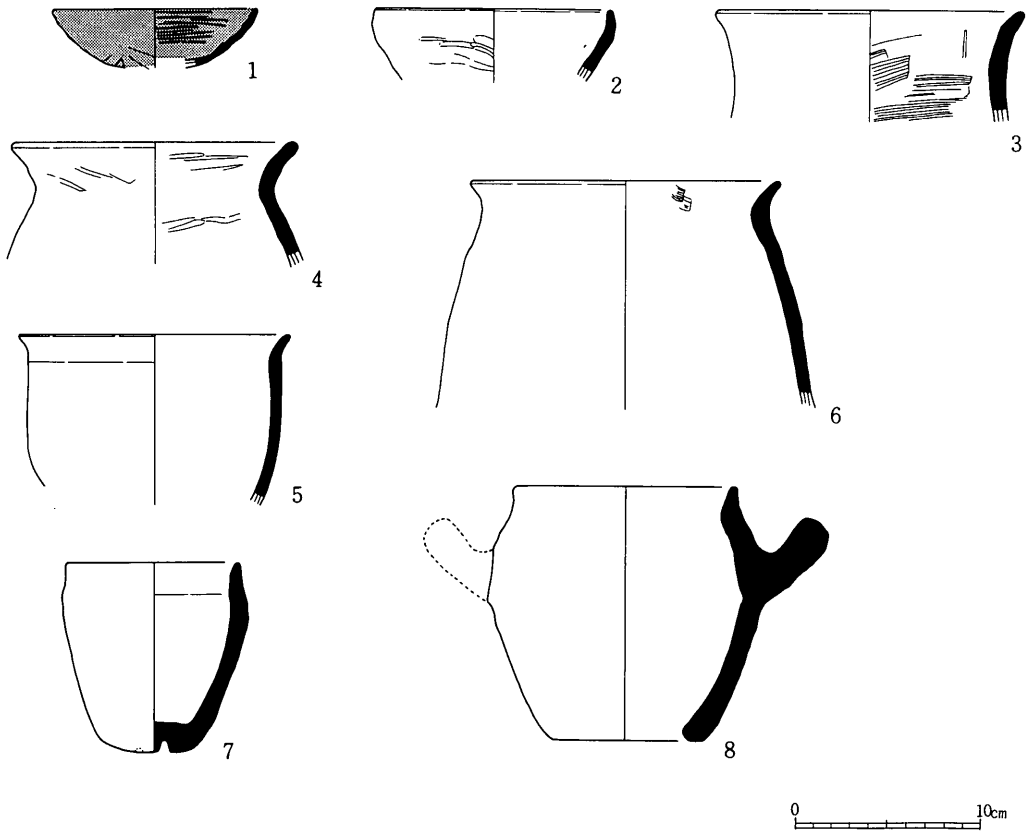
第12号住居址

遺構　Ｂ、Ｃ―１区にあり、調査区内発見の住居址では最東南端に位置し、20号住居址に隣接する。

本址は攪乱もなく、遺存状態の良好な住居址である。覆土は、上層から順に黒褐色土、暗褐色土、ローム粒を多く含む茶褐色土がレンズ状に堆積している。プランは、東西335cm、南北330cm


D
P
14
F
18
E
A
P
P
39
6
B
C
III
I
II
D
IV
II
I
II
IV
C
D
C
I：暗褐色土（ローム粒含む）
II：暗褐色土
III：褐色土
A
B
IV
IV
III
II
I
II
I：黒褐色土
II：暗褐色土
III：暗褐色土（炭、焼土を多く含む）
IV：茶褐色土（ロームブロックを多く含む）
A
B
E
F
III
I
II
I：焼土
II：暗褐色土（ローム粒混入）
III：暗褐色土
0
50cm
0
1
2m
カマドセクション

第8図　第12号住居址



第９図　第12号住居址出土土器

土　器　観　察　表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	坏	10.7			黒褐色	黒褐色	内外面ミガキ・底部手持ちケズリ	
2	〃	〃	12.5			茶褐色	茶褐色	外面ミガキ	内面磨耗
3	〃	甕	16.0				〃	口縁部ヨコナデ・内面ハケ	
4	〃	〃	15.0			〃	黒褐色	内面ミガキ	
5	〃	〃	14.2			〃	茶褐色	口縁部ヨコナデ・内外面ミガキ	
6	〃	〃	16.2			橙	橙	口縁部ヨコナデ	
7	〃	〃	9.2		10.0	暗茶	暗茶	口縁部ヨコナデ・内面ミガキ	底部に２箇に口
8	〃	瓶	11.6	8.4	13.4	黒茶	黒茶	口縁部ヨコナデ	

の隅丸方形を呈する。壁高は、東壁12cm、西壁30cm、南壁18cm、北壁20cmで、全体的に保存状態も良く掘り込みもはっきりしている。西壁北寄りに、西に張り出した形で直径約80cmの掘り込みがみられるが、住居に伴うか否かは判然としない。床面は少々凹凸を呈しているが、全体的に堅緻。カマドは、西壁中央に設けられ、粘土カマドとなっている。カマド前面には、東西53cm、南北95cm、深さ18cmの楕円形の掘り込みがなされ、この上部から西壁にかけて厚く焼土が堆積している。ピットは２基確認され、東北寄りのピットが径55cm、深さ14cm、東南寄りのピットが径34×25cm、深さ39cmを計る。柱穴の可能性をもつ。周溝は検出されなかった。

遺物　本住居址から検出された遺物は、土師器のみで、坏、甕、甑がある。

1の土師器坏は底部を手持ちヘラケズリされ、内外面とも丁寧に黒色研磨されている。2の坏は外面にヘラミガキが施されるが、内面は磨耗が著しく判然としない。3の土師器甕は内面に横方向のハケ目状調整がみられ、4の甕は内面ヘラミガキされている。5の甕は、内外面ともに丁寧なヘラミガキがなされ、器形も全体に整った感じを与える。6の甕は口縁部のヨコナデ以外に細かい調整等は観察されない。7の小型甕は8の甑の内部に正位の状態で検出されたものである。内面はヘラミガキされ、底面中央付近に二つの凹部がみられる。8は甑でほぼ完存している。

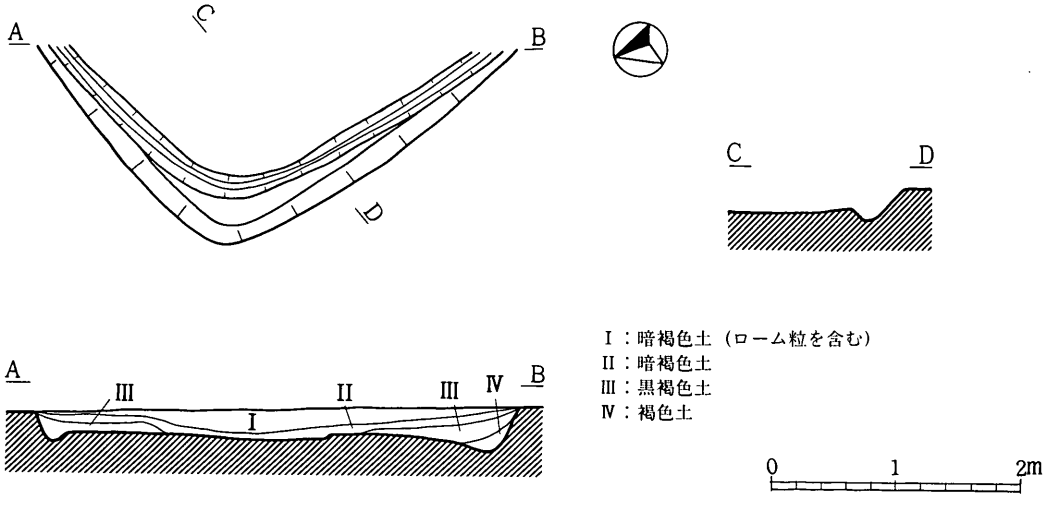
本住居址は、出土した遺物からみて、古墳時代末～奈良時代初頭、和手Ⅰ期に位置づけられる。

第13号住居址

遺構　D、E—1区にあり、調査区最東端に位置し、西側に20号住居址、北側に31号居住址が隣接している。大部分が調査区外のため未調査である。

検出された部分については攪乱もなく、遺存状態は良好である。覆土は、上層からローム粒を含む暗褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色土がきれいなレンズ状に堆積している。壁は、西壁が290cm、北壁220cm確認されたが全体規模は不明である。プランは隅丸方位を呈すると思われる。壁高は、西壁13cm、北壁16cmとあまり深くなく緩やかな傾斜で掘り込まれている。壁下には周溝がめぐる。幅12～20cm、深さ4～7cmで、コーナー部分はやや内側を走る。床面は平坦で堅緻。カマドは調査区外にあると思われる。柱穴は検出されなかった。

遺物　叩き目を有する須恵器の破片などが出土しているが、復元可能な遺物は全くない。時期は判然としないが、出土した少量の土器から本住居址は古墳時代末～奈良時代初頭、和手Ⅰ期に



第10図　第13号住居址

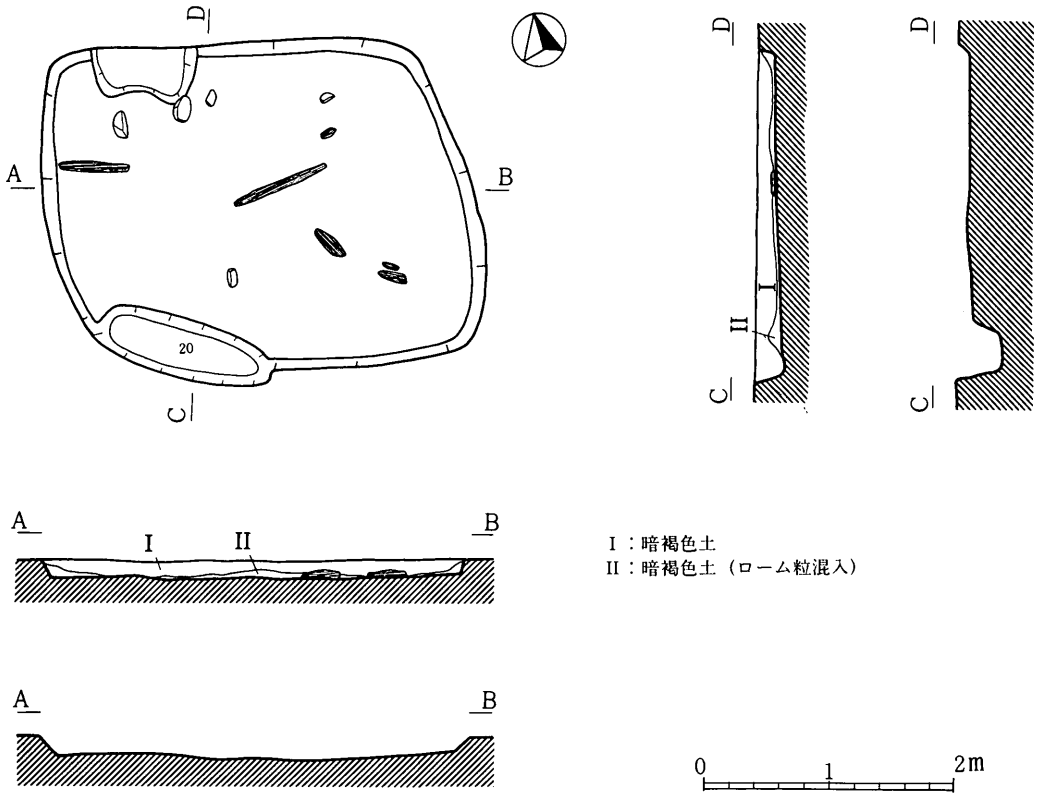
位置づけられようか。

第14号住居址

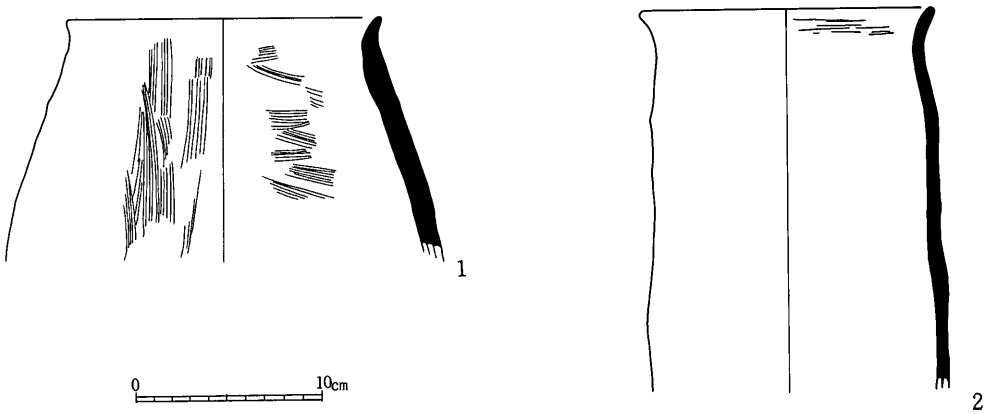
遺構　D、E―7区にあり、調査区東半に位置する。南側に15号住居址、西側に25号住居址、東側に22号住居址、北側に23号住居址が隣接し、本址南西隅に溝址2が切り合っている。

本址は、攪乱による影響はあまりみられず、覆土は土層に暗褐色土、下層にローム粒を混入した暗褐色土が堆積している。プランは、東西345cm、南北260cmのやや東西に細長い隅丸方形を呈する。壁高は、東壁5cm、西壁10cm、南壁11cm、北壁12cmで、ローム層への掘り込みはあまり深くなく、遺存状態もあまりよくない。南壁西半には、住居外へ若干張り出す形で南北47cm、東西145cm、床面からの深さ20cmのピットがあるが、本址に伴うものか否かは不明。床面は、南側でやや凹凸があるほかは平坦で、東側と西側は特に堅く踏み固められている。カマドは、北壁西寄りに設けられている。残存状態は良くないが両ソデ部に長さ20cm程の礫があり、石組み粘土カマドと思われる。柱穴、周溝は検出されなかった。住居内各所に床直上で大きな炭化材と焼土が散在してみられ、焼失家屋と思われる。

遺物　本住居址から検出された遺物は極めて少なく、復元可能なものは1、2の土師器甕のみ



第11図　第14号住居址



第12図　第14号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	甕	16.8			暗茶	暗茶	口縁部ヨコナデ・内外面ハケ	
2	〃	〃	15.6			〃	〃	口縁部ヨコナデ	

である。1は内外面あらいハケ目状調整が施され、口縁部はほとんど外開しない。2は長胴甕でハケ目等の整形はみられない。

検出された遺物が少ないため判然としないが、本住居址は、古墳時代末～奈良時代初頭、和手Ⅰ期に位置づけられよう。

第15号住居址

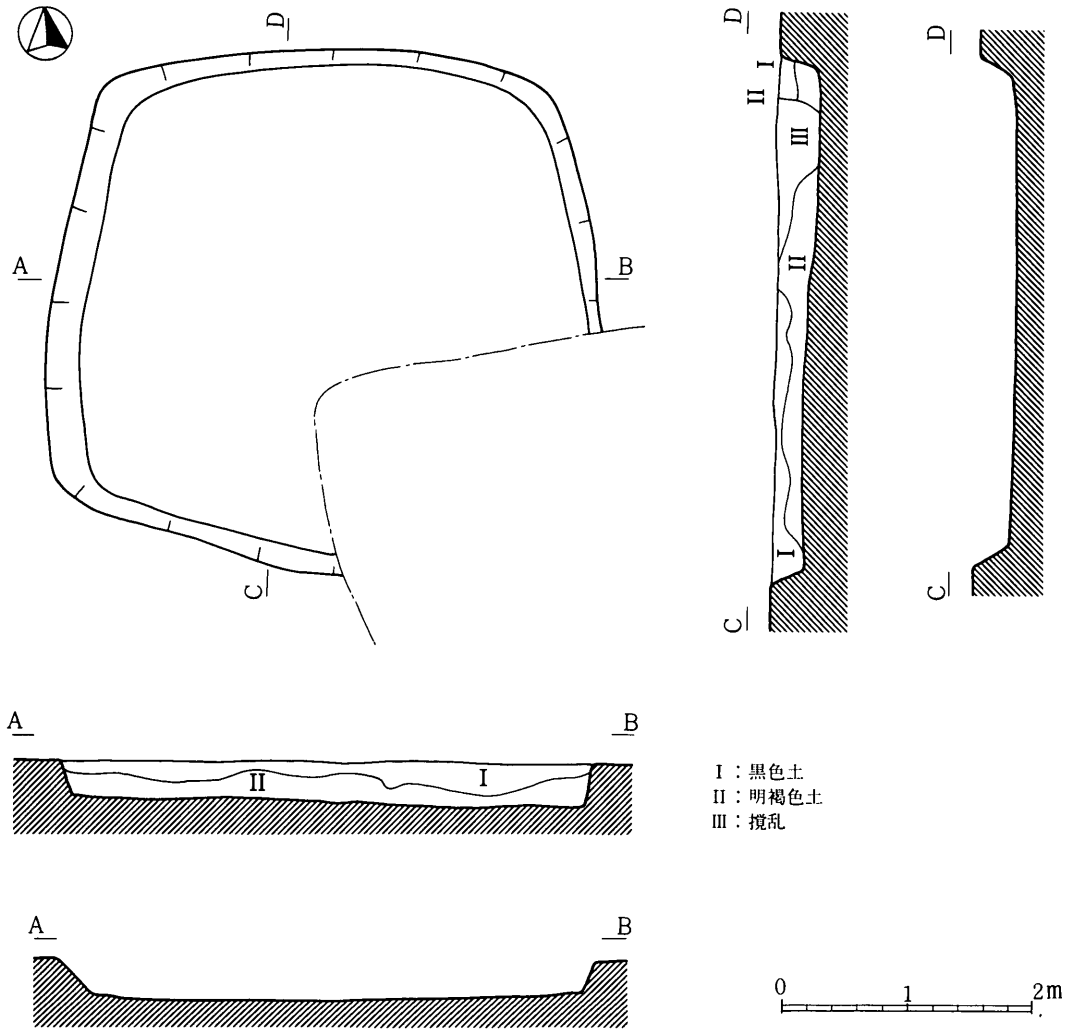
遺構　C、D―7区から検出された住居で、調査区の東半中央部に位置する。南東部分を16号住居址と重複し、北側に溝2を挟んで14号住居址がある。

本址の北側覆土中に一部攪乱がみられたものの、他の遺存状態は良好である。覆土は、上層に黒色土、下層に明褐色土がきれいに堆積している。プランは、東西435cm、南北405cmの隅丸方形を呈する。壁高は、東壁28cm、西壁21cm、南壁25cm、北壁29cmを計る。東壁と北壁は、ローム層をほぼ垂直に鋭く掘り込み、南壁と西壁はやや緩く傾斜している。床面は、北へ向かってやや傾斜しているが、全体的に平滑で堅く踏み固められている。柱穴、周溝、カマドは検出されなかった。

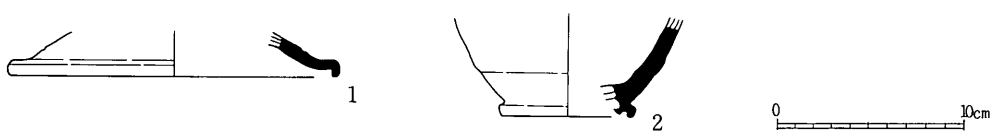
遺物　本住居址からは須恵器の蓋、長頸壺が検出されている。

1は須恵器蓋の端部で、2は台付長頸壺の底部である。

本住居址の属する時期については、検出された遺物が少なく判然としないが、奈良時代末～平安時代初頭、和手Ⅲ期に位置づけられようか。



第13図　第15号住居址



第14図　第15号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	整形・調整の特徴	備考
1	須恵	蓋	19.4			灰白	灰白	ロクロヨコナデ	
2	〃	長頸壺		7.0		青灰	青灰	〃	内面自然釉

第16号住居址

遺構　C—5、7区にあり、北西部分を15号住居址と、南部分を17号住居址と重複している。調査区内では、東半中央部のやや南寄りに位置する。

本址は、重複する3軒の中で最も良い遺存状態を保っていた。覆土は、床面上に黒褐色土があり、その上の炭化材を多量に混入する暗褐色土層を挟んで順次暗褐色土、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が堆積している。プランは、南北515cm、東西458cmで南北にやや長い隅丸方形を呈する。壁高は、東壁20cm、西壁10cm、北壁27cmで、南側は17号住居址を掘り込んでいるため不明であるが、いずれもローム層に比較的緩やかな傾斜で掘り込んでいる。周溝は、南壁下から西壁南半にかけてあり、幅11～18cm、深さ3～7cmで西側ほど浅い。床面は、中央部にやや起伏がみられるものの全体的に平坦で堅緻な状態を示している。カマドは、西壁中央部に設けられている。住居外へ張り出した掘り込みはなく、西壁から1mの規模で石組みと粘土によって造られ、両側ソデ部を中心に厚い焼土の堆積が観察された。ピットは北東隅と南西隅で2基が検出された。どちらも平面形は楕円形を呈し、P_1直径32×25cm、深さ21cm、P_2直径33×20cm、深さ16cmで柱穴となる可能性をもつ。

住居内の床上全面で焼土、炭化材が多量に観察され焼失家屋と考えられる。

遺物　本住居址から検出された遺物は、土師器では坏、甕、須恵器の蓋、高坏がある。

1の土師器坏は体部下半を手持ちヘラケズリされ、内面は放射状の暗文が施され、内外面丁寧にヘラミガキされている。いわゆる「甲斐型」の坏である。2は土師器坏の底部で、回転糸切りで底部を切り離した後、周辺部を手持ちヘラケズリしているものである。内面は黒色研磨される。3は土師器甕で、体部の一部に弱いハケ目状調整がみられるが、この時期以降一般化するハケ目状調整を駆使した長胴甕とは、整形がやや異なる。4は須恵器蓋で天井部回転ヘラケズリされる。5は須恵器の高坏の脚部である。

本住居址は、3の土師器甕や5の須恵器高坏など、II期に近いやや古い様相を示す遺物もあるが、奈良時代末～平安時代初頭、和手III期の前半に位置づけられよう。

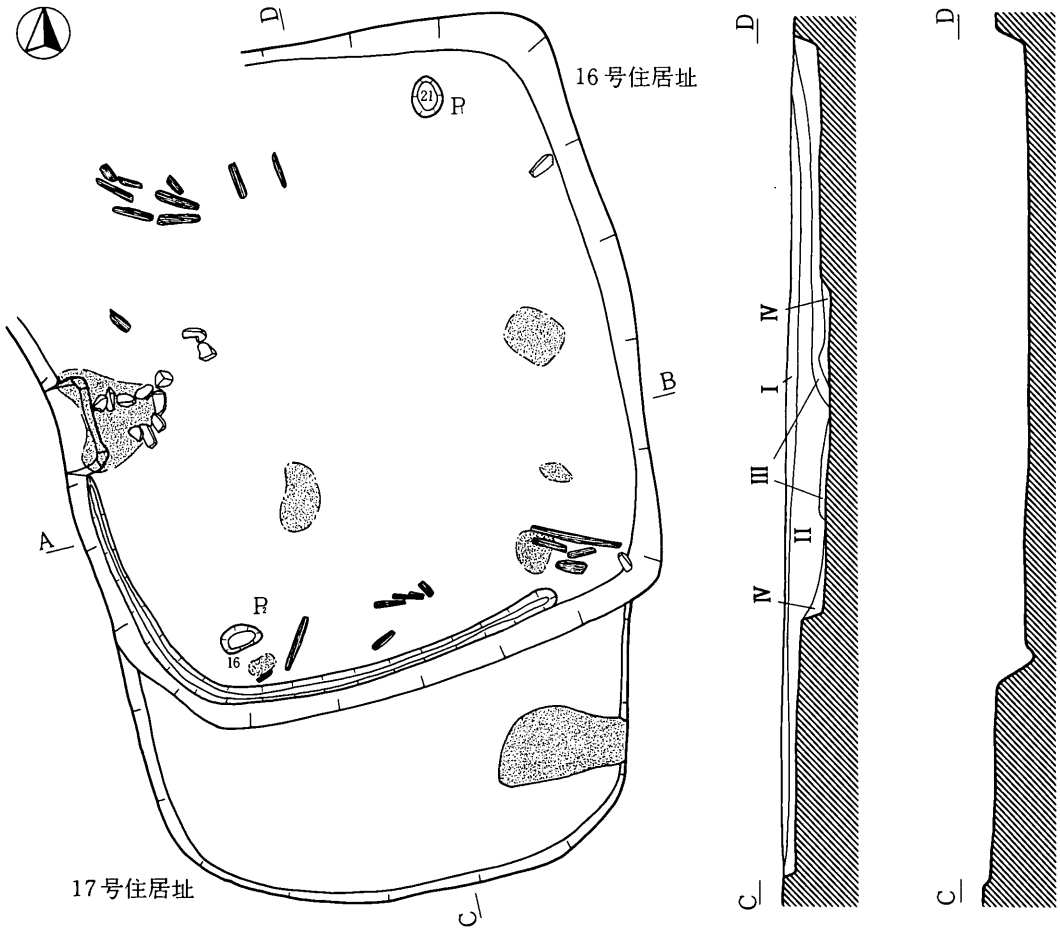
第17号住居址

遺構　C—6区で検出された。調査区東半の中央部南寄りに位置し、北側で16号住居址と重複している。

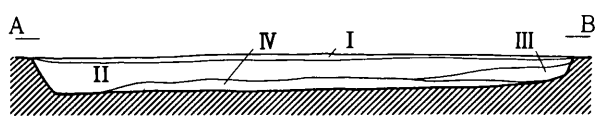
覆土は、下層に暗褐色土、上層にロームブロックを多量に混入する暗褐色土が堆積している。東西385m、南北は16号住居址との重複により不明であるがほぼ同規模の隅丸方形プランを呈すると思われる。壁高は、東壁2cm、西壁7cm、南壁5cmで、ローム層への掘り込みはかなり浅い。床面は堅く踏み固められているが、若干の起伏を持っている。カマドは、東壁南寄りで焼土が厚く堆積して検出された。柱穴、周溝は検出されなかった。

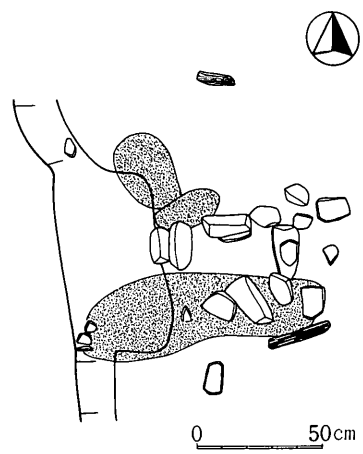
遺物　本住居址からは土師器坏が検出されている。

1、2ともに体部下半が手持ちヘラケズリされ、内面に放射状の暗文が施されるいわゆる「甲



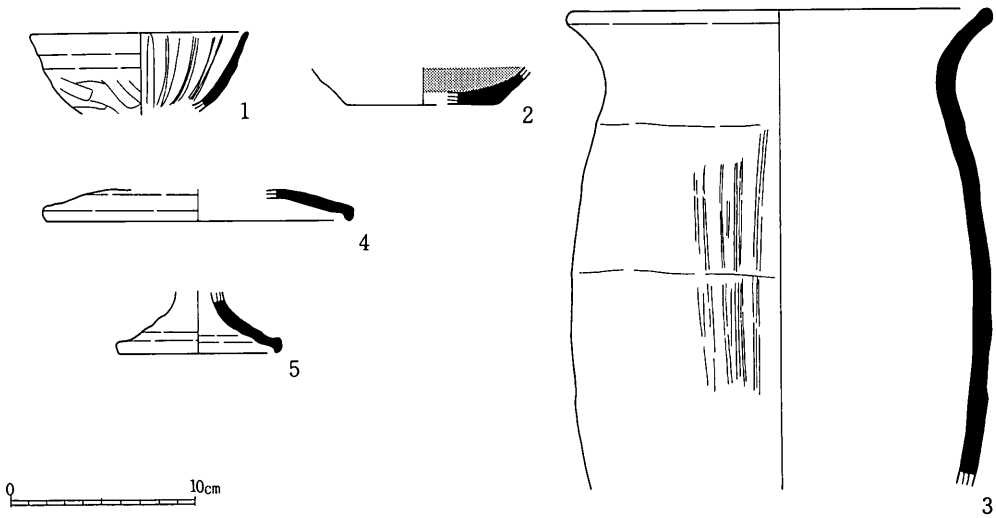
I：暗褐色土（ロームブロックを多く含む）
II：暗褐色土
III：暗褐色土（炭化材を多く含む）
IV：黒褐色土





第16号住居址カマド

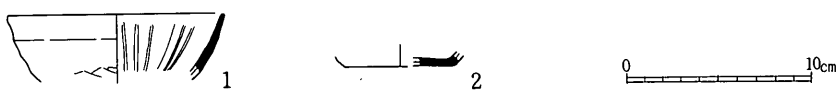
第15図　第16・17号住居址



第16図　第16号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	整形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	11.6			茶褐色	茶褐色	内外面ミガキ・底外面手持ちヘラケズリ・内面放射状の暗文	
2	〃	〃		8.0		〃	黒	底部回転糸切り後，周辺部手持ちヘラケズリ・内面ミガキ	
3	〃	甕	22.0			〃	茶褐色	外面縦方向のハケメ（弱い）	
4	須恵	蓋	26.0			灰　白	灰　白	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ	
5	〃	高坏		8.2		〃		ロクロナデ	



第17図　第17号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	整形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	11.4			茶褐色	茶褐色	内外面ミガキ・底外面手持ちヘラケズリ・内面放射状の暗文	
2	〃	〃		6.0		〃	〃	内外面ミガキ・底外面回転糸切り後，手持ちヘラケズリ・内面放射状の暗文	

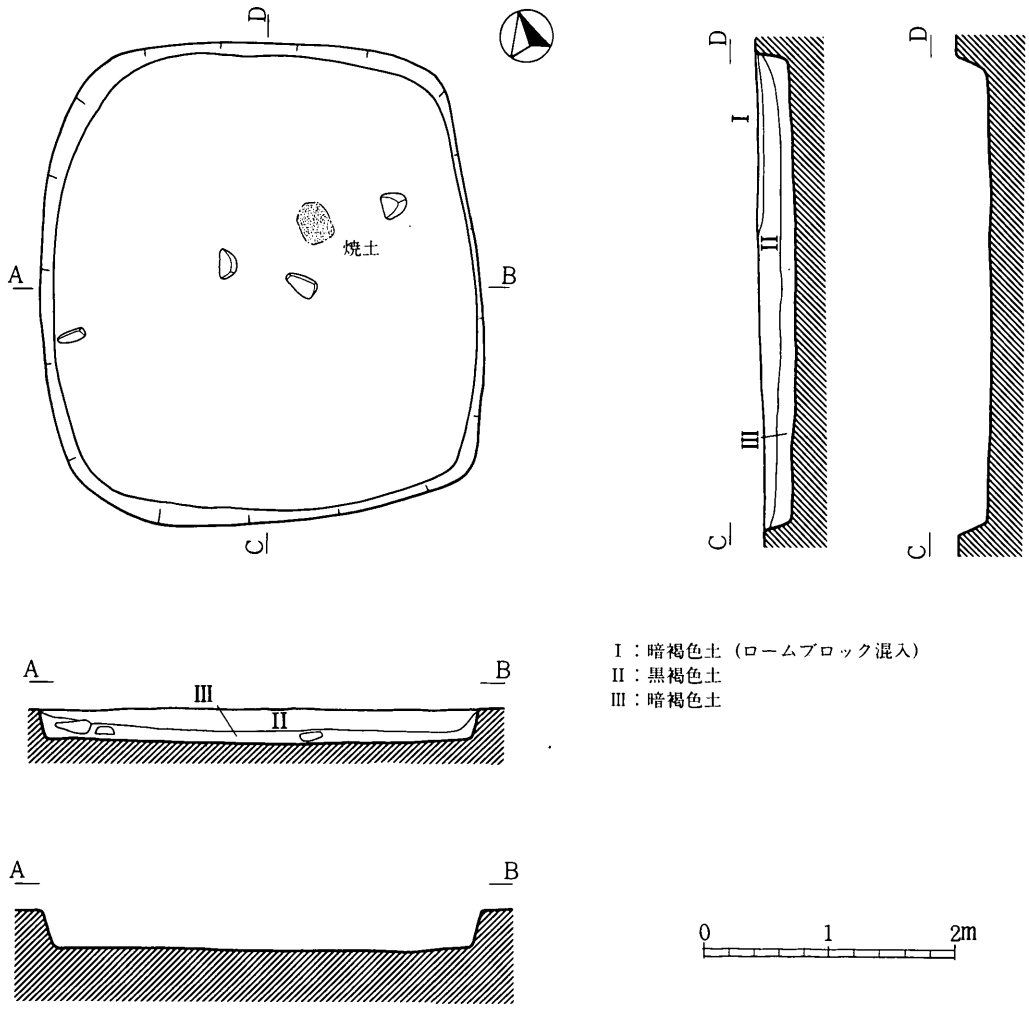
斐型」の坏である。いずれも内外面丁寧に磨かれている。2は底面中央に回転糸切り痕を残し、周辺部を手持ちヘラケズリしている。

本住居址は検出された遺物から、奈良時代末～平安時代初頭、和手III期の前半に位置づけられる。

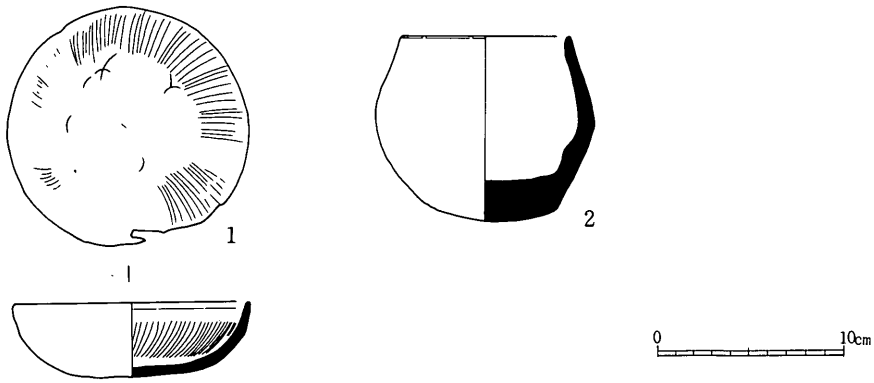
第18号住居址

遺構　A、B—8区にあり、調査区内では中央部南東寄りに位置する。西側で1号建物址と重複し、南東側に21号住居址が隣接している。

本址は、攪乱による影響がほとんどなく、良好な遺存状態を示していた。覆土は、下層から順次、暗褐色土、黒褐色土、ロームブロックを混入した暗褐色土が堆積している。プランは、南北388cm、東西350cmの隅丸方形を呈する。壁高は、東壁26cm、西壁28cm、南壁22cm、北壁23cmで、いずれもローム層をほぼ垂直に掘り込んでおり、特に東壁と北壁では鋭くなっている。床面は若干東への傾斜がみられるものの、平滑で堅く踏み固められている。床面上からは20cm大の礫が散存してみられた。また、床面中央やや北東寄りでは、焼土、炭化物が固まって観察された。カマド、柱穴、周溝は検出されなかった。



第18図　第18号住居址



第19図　第18号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器形	寸法			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	坏	12.4		3.9	橙	橙	内面体部放射状暗文 内部底部 ラセン状暗文 内外面ミガキ	
2	〃	甕	8.8		9.8	茶褐	黒褐	底部手持ちヘラケズリ	

遺物　本住居址からは、土師器の坏と小型甕が検出されている。

1の土師器坏は、内面体部に放射状の暗文、同じく内面の底部にはラセン状の暗文がそれぞれ施されており、いわゆる「畿内系」暗文土器と呼ばれるものである。ラセン状の暗文については、磨耗をうけたためか、一部にわずかに観察されうる。なお、口縁部内面に、途切れ途ぎれであるが沈線状の凹線が巡る。2の土師器甕は底部手持ちヘラケズリされ、内面は黒色処理をうけている。形態はやや不安定な感じを与える。

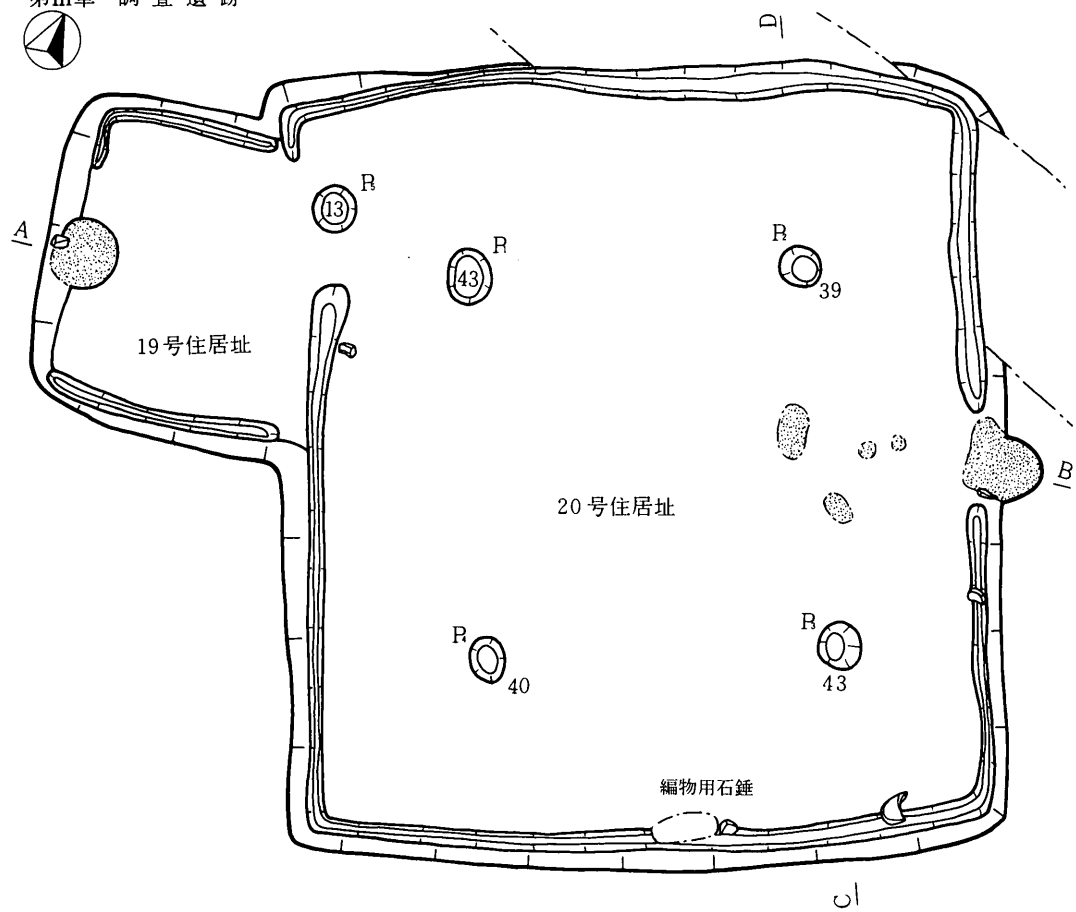
本住居址は検出された遺物から、奈良時代前葉～中葉、和手II期に位置づけられよう。

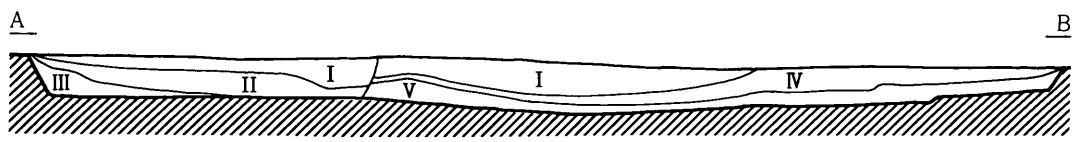
第19号住居址

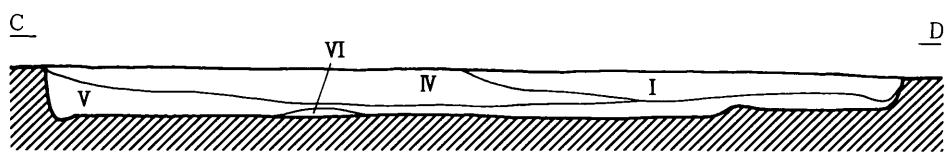
遺構　C、D—3区で検出された住居址で、東部分が20号住居址と重複している。調査区内の東半部東寄りに位置する。

本址は、検出面において東側の住居址と重複して捉えることができたため、両址を結ぶセクションベルトを設定した。掘り下げを行ったところ、床面が同一レベルで検出され、両者の前後関係が問題となったが、セクションに表われた土層の切り合いにより、20号住居址より本址が新しい時期のものであることが判明した。遺存状態は良好で遺物も多く出土した。

住居址覆土は、上層からロームブロックを混入する暗褐色土とロームブロックを含まない暗褐色土が、東へ流れるような形に堆積し、西壁際にはこれらより明るい褐色土が入り込んでいる。プランは方形を呈し、南北350cmを計り、東西も同規模と思われる。壁高は、西壁34cm、南壁46cm、北壁42cmと深い掘り込みになっており、南壁と北壁では垂直に近い掘り込みがなされている。周溝は、南壁下および北壁下と西壁北寄りの一部で検出された。幅14～20cm、深さ5cm前後を計





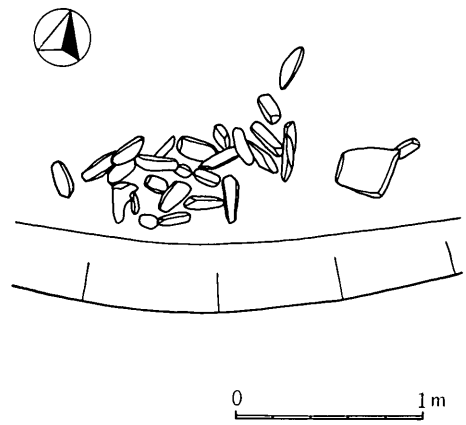


Ⅰ：暗褐色土（ロームブロック混入
Ⅱ：暗褐色土
Ⅲ：褐色土
Ⅳ：褐色土（ロームブロックを多く
Ⅴ：暗褐色土（やや焼土を含む）
Ⅵ：黒褐色土

0　2m

第20図　第19・20号住居址

る。床面は、平坦で、堅く踏み固められた状態が顕著に伺える。カマドは、西壁中央に設けられている。壁から張り出したソデ部分を含めて内側には焼土が充満し、礫が1個遺存している。あるいは石組み粘土カマドであったのかもしれない。柱穴は検出されなかった。



第21図　第20号住居址編物用石錘

遺物　本住居址からは多数の遺物が検出された。土師器では坏、甕、鉢形土器があり、須恵器では、坏、壺がある。

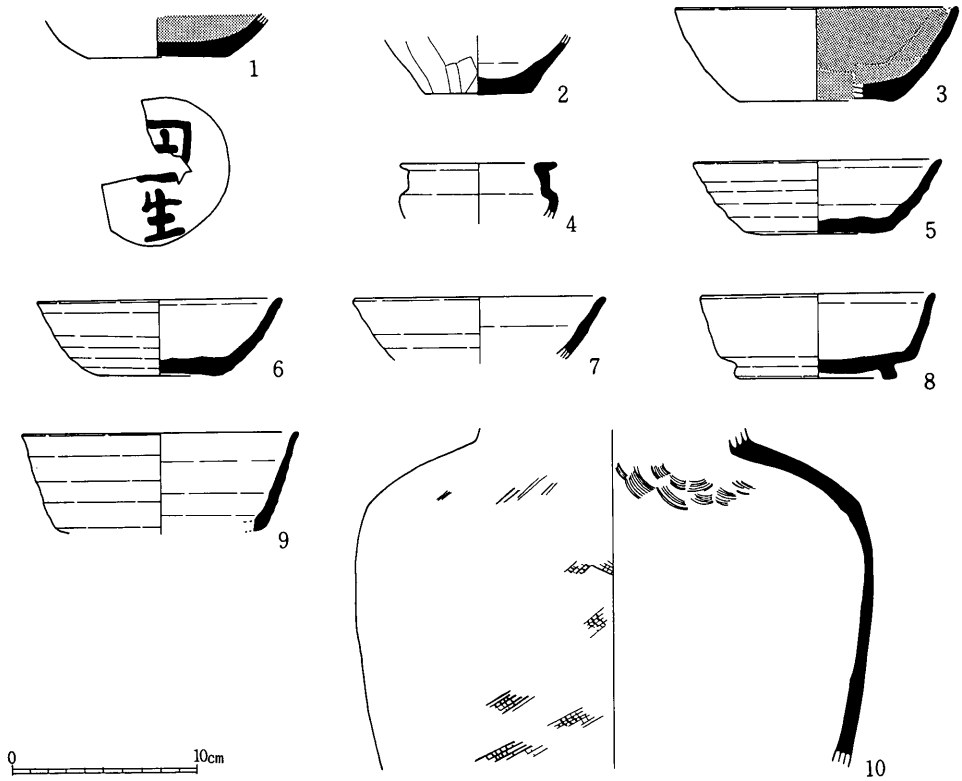
1は土師器坏の底部である。底面は手持ちヘラケズリされ、墨書による二文字が記される。一つは「生」の字であるがもう一方は不明である。3も土師器坏で口縁部は内湾気味に立ちあがる。底部調整ははっきりしない。1、3ともに内面黒色研磨される。2は土師器甕の底部である。体部～底面にかけて外面全体がヘラケズリ調整をうけ、内面はヨコナデ状の整形痕が残る。いわゆる「武蔵型」の甕であろう。4は小型の鉢形を呈する土師器であろうか。5～7は須恵器の無台坏で、いずれも口径12.5～13.0の間で法量はほぼ一定である。7は底部調整不明であるが5、6ともに回転糸切り痕を残す。8、9は須恵器の有台坏で8は底部回転糸切り後周辺部を回転ヘラケズリされている。9は8に比べ身が深く、口径もやや大きい。底部調整は不明である。10は須恵器壺の体部である。外面は一見格子目のような叩き目である。内面は肩部に叩き調整の際のあて具の痕跡があり、非常に細かいのが特徴である。なお内面は全体をヨコナデされる。

本住居址は検出された遺物から、奈良時代末～平安時代初頭、和手III期に位置づけられる。

第20号住居址

遺構　C、D—1、2区にあり、調査区内では、東端部中央に位置する。西壁の約半分を19号住居址によって切られ、隣接する住居址としては、南東側に12号住居址、東側に13号住居址がある。また、住居址北東部分を溝址の2によって切られている。

本址は、19号住居址と溝2によって部分的に切られている以外は、比較的遺存状態も良好である。覆土は、最上層にロームブロックを混入する暗褐色土が、北西寄りにレンズ状となってあり、この下に順次、ロームブロックを多く混入する褐色土、若干の焼土を混入する暗褐色土が堆積している。また、床直上では、一部で黒褐色土の堆積が認められる。南北846cm、東西764cmの大型住居で、方形プランを呈する。壁高は、東壁37cm、西壁48cm、南壁41cm、北壁38cmを計り、いずれもほぼ垂直に鋭く掘り込まれている。周溝は、西壁北寄りの一部を除く全壁下をめぐっている。幅14～26cm、深さ10cmのしっかりした掘り込みである。床面は、カマド周辺部と北壁に沿って帯状に2mの部分が数cm差をもって一段高くなっているが、両床とも平坦で堅緻な状態を示してい



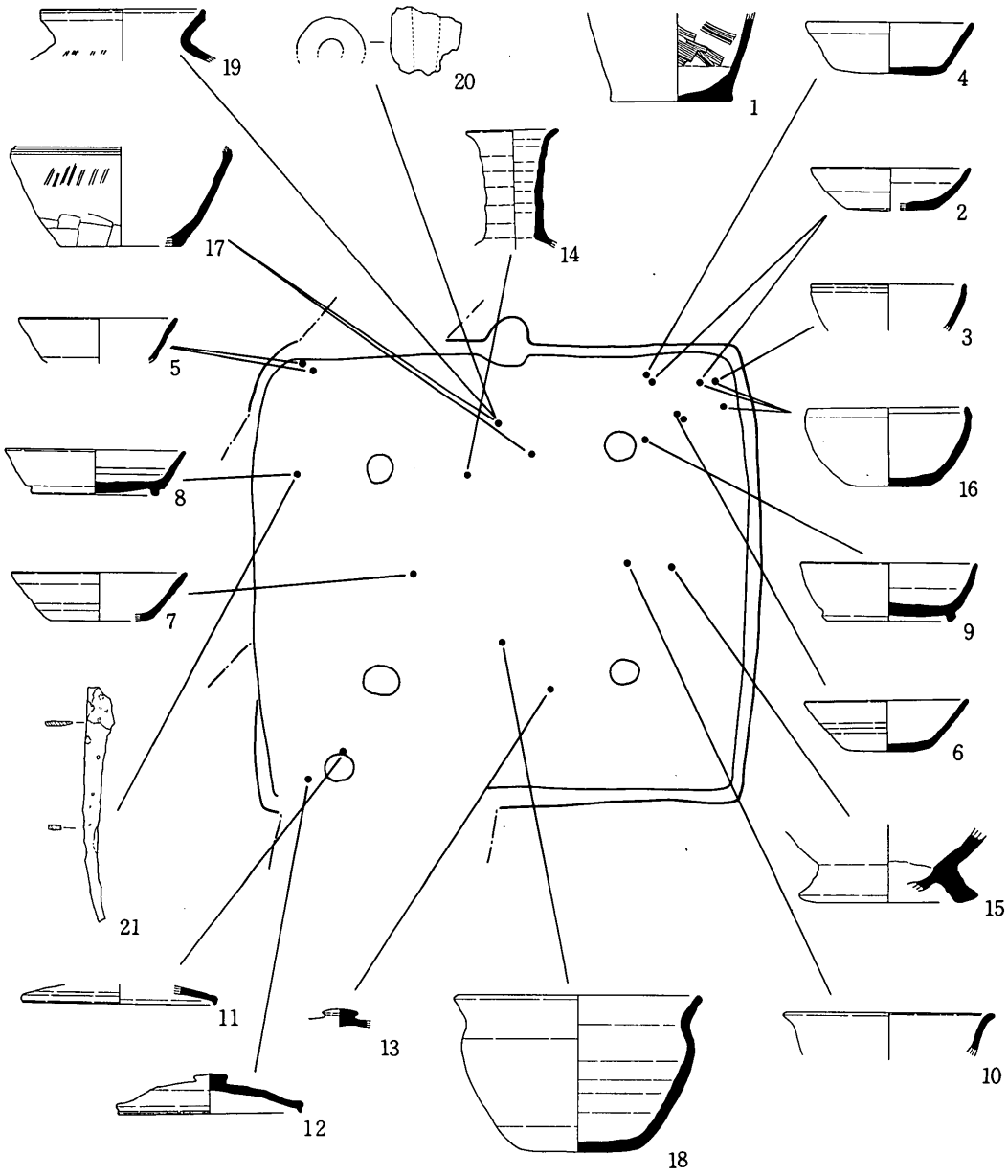
第22図　第19号住居址出土土器

土 器 観 察 表

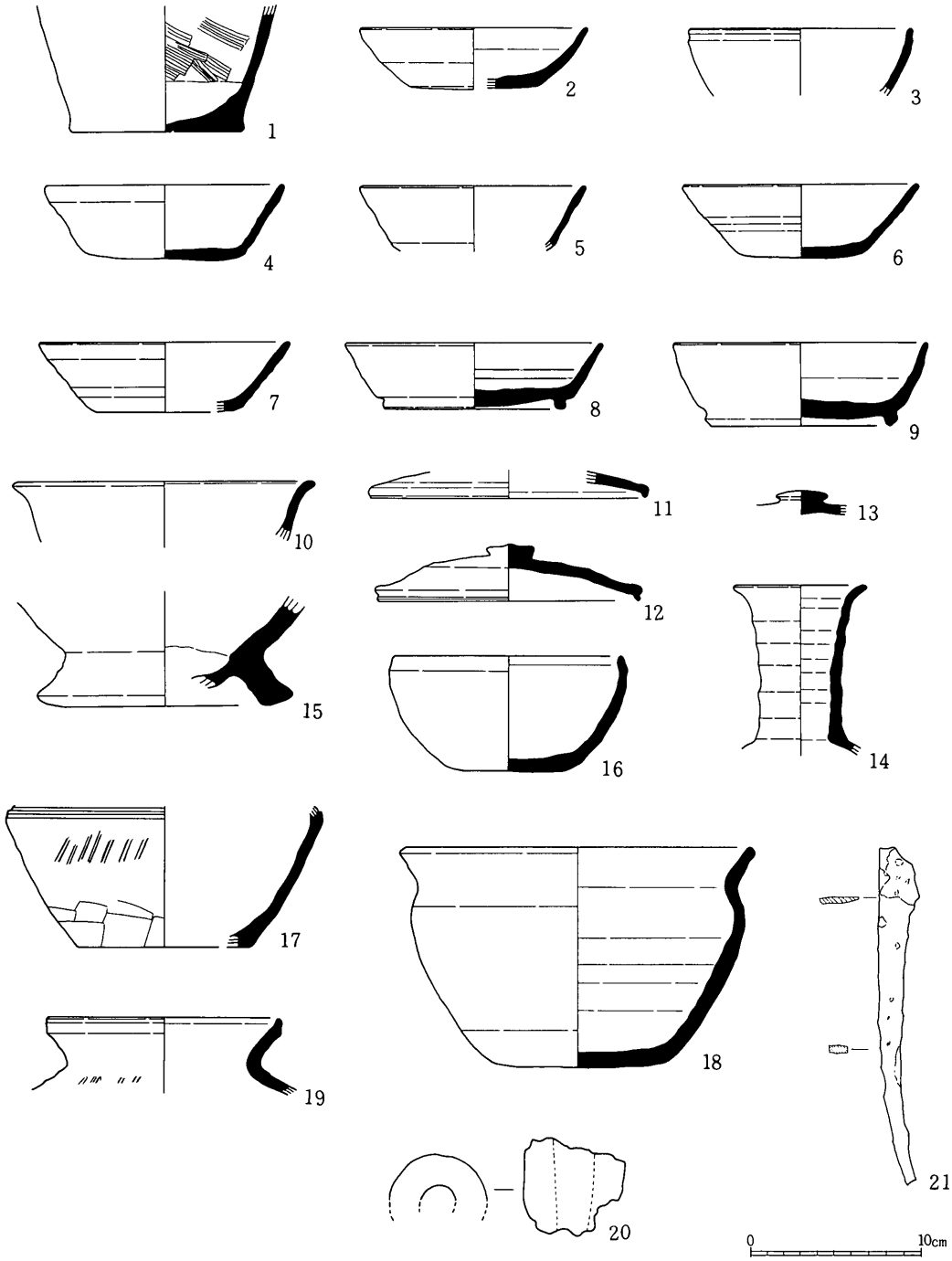
番号	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	整形・調整の特徴	備考
1	土師	坏		7.6		赤～茶褐	黒	底部手持ちヘラケズリ・内ミガキ・黒色処理	墨書
2	〃	甕		5.6		暗茶	橙	底部～体部ヘラケズリ・内面ヨコナデ	
3	〃	坏	15.0	8.2	4.9	茶褐	黒	ロクロナデ・底部手持ちヘラケズリ(？)黒色処理	
4	〃	鉢	8.2			淡茶	淡茶	ロクロナデ	
5	須恵	坏	13.0	8.0	3.9	青灰	青灰	ロクロナデ・底部回転糸切り	
6	〃	〃	12.8	6.6	3.9	黄灰	黄灰	〃	火ダスキ
7	〃	〃	12.6			灰白	灰白	ロクロナデ	
8	〃	〃	12.4	8.4	4.4	青灰	青灰	ロクロナデ・底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ	
9	〃	〃	14.8			暗赤灰	灰白	ロクロナデ	
10	〃	壺				暗青灰	青灰	格子目(？)タタキ後ヨコナデ(ロクロ)	自然釉

る。柱穴は4本あり、P_1(60×46、—43)、P_2(46×41、—39)、P_3(50×46、—43)、P_4(49×38、—40)で、壁からほぼ等間隔に穿たれている。カマドは、東壁中央部に設けられている。東壁から住居外へ40cm張り出し、住居内へ向かって粘土により造られた両ソデ部分が緩やかに傾斜する。この周囲にかけて焼土が厚く堆積し、土器片および礫の混入がみられる。20cm大の礫も認められることから、石組みがなされていた可能性を示している。覆土の堆積にもみられたように、焼土は住居址の全面で観察され、また炭化材も多いことから焼失家屋と思われる。

遺物　本住居址からは多数の土器、土製品、鉄製品などが検出された。土器では土師器に甕があり、須恵器に坏、蓋、長頸壺、鉢、壺がある。



第23図　第20号住居址土器出土状態



第24図　第20号住居址出土遺物

遺物観察表

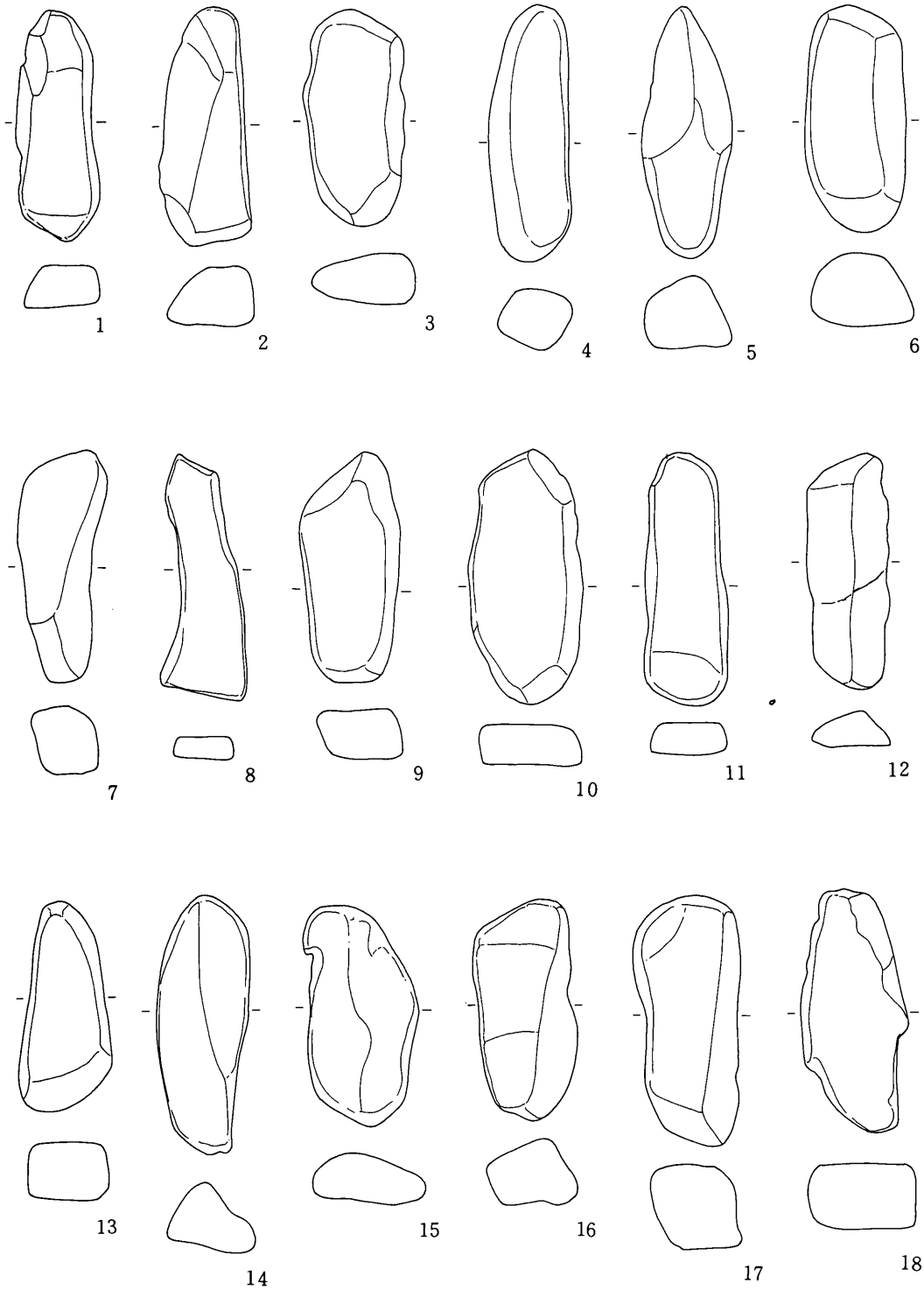
番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	甕		9.0		淡茶	淡茶	底部木葉痕・内面ハケメ	
2	須恵	坏	13.4	7.4	3.5	灰白	灰白	ロクロナデ・底部ヘラ切り	
3	〃	〃	12.8			青灰	青灰	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
4	〃	〃	13.8	9.0	4.2	赤～茶褐	赤～茶褐	ロクロナデ・底部内面ナデ	酸化焔焼成
5	〃	〃	13.2			〃	〃	ロクロナデ	〃
6	〃	〃	13.6	7.4	4.0	〃	〃	ロクロナデ・底部ヘラ切り(？)	〃
7	〃	〃	14.6	8.0	4.0	淡茶	淡茶	ロクロナデ	〃
8	〃	〃	15.0	10.6	4.0	灰白	灰白	ロクロナデ・内面中央ナデ・底部回転ヘラケズリ	
9	〃	〃	14.8	10.4	4.8	青～黒灰	青～黒灰	〃	
10	〃	〃	17.6			灰白	灰白	ロクロナデ	
11	〃	蓋	16.0			〃	〃	ロクロナデ	
12	〃	〃	15.0		3.3	青灰	青灰	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ	
13	〃	〃				黄灰	青灰	ロクロナデ	外面自然釉
14	〃	長頸壺	7.6			灰白	灰白	ロクロナデ	
15	〃	台付長頸壺		12.0		〃	〃	(ロクロ) ヨコナデ	
16	〃	鉢	13.2	7.2	6.5	〃	〃	ロクロナデ・内面中央ナデ・底部回転ヘラ切り	
17	〃	〃		10.0		青～黒灰	青～黒灰	体部下部手持ちヘラケズリ・平行タタキ	
18	〃	〃	20.0	10.0	12.8	緑灰	緑灰	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ・内面中央ナデ	
19	〃	横瓶風	13.4			青灰	青灰	ロクロナデ(？)	
20	土製品	羽口	5.7			灰	茶褐		
21	鉄製品	鎌(？)	全長	19.6		黒紫	黒紫		

1は土師器甕である。底部に木葉痕を明瞭に残し、、内面はハケ目状調整をうける。2は須恵器坏で底部は回転ヘラ切りである。胎土は精選されたもので灰白色を呈する。3は須恵器で椀型の坏である。体部下半は回転ヘラケズリされる。口縁下に一条の沈線が巡ることなどから、金属器(佐波理鋺)模倣の須恵器と考えられる。4～7はいずれも赤褐色～茶褐色を呈し、焼成、色調などからみると一見土師器ともとれるが、内面黒色処理はみられず、器形等から判断して、酸化焔焼成の須恵器としておきたい。底部調整はいずれも磨耗のため判然としない。8、9は須恵器有台坏である。いずれも底部は回転ヘラケズリされ、内面中央部をナデによって調整される。8は灰白色を呈し、胎土は精選されている。10は大形の有台坏の口縁で、環状のつまみ部を有する蓋とセットになり、金属器を模倣したものと考えられる。胎土は精選され灰白色を呈する。11～13は須恵器蓋である。11は精選された胎土であるが、12はやや粗く、青灰色を呈する。13はつまみ部のみである。14は長頸壺の頸部でロクロナデ痕を顕著に残す。口縁部は段を形成せずまっすぐ外開する。15は大形の台付長頸壺の台部である。16は須恵器鉢で底部はヘラ切りによる切り離しである。胎土は非常に精選されている。17、18も須恵器鉢で、17は体部下部を手持ちヘラケズリ、18は回転ヘラケズリされる。なお17の体部に平行叩きの跡もみられる。19は須恵器壺の口縁部とみられ、平行叩きされる。20は土製品で羽口である。21は鉄製品で、鎌であろうか。

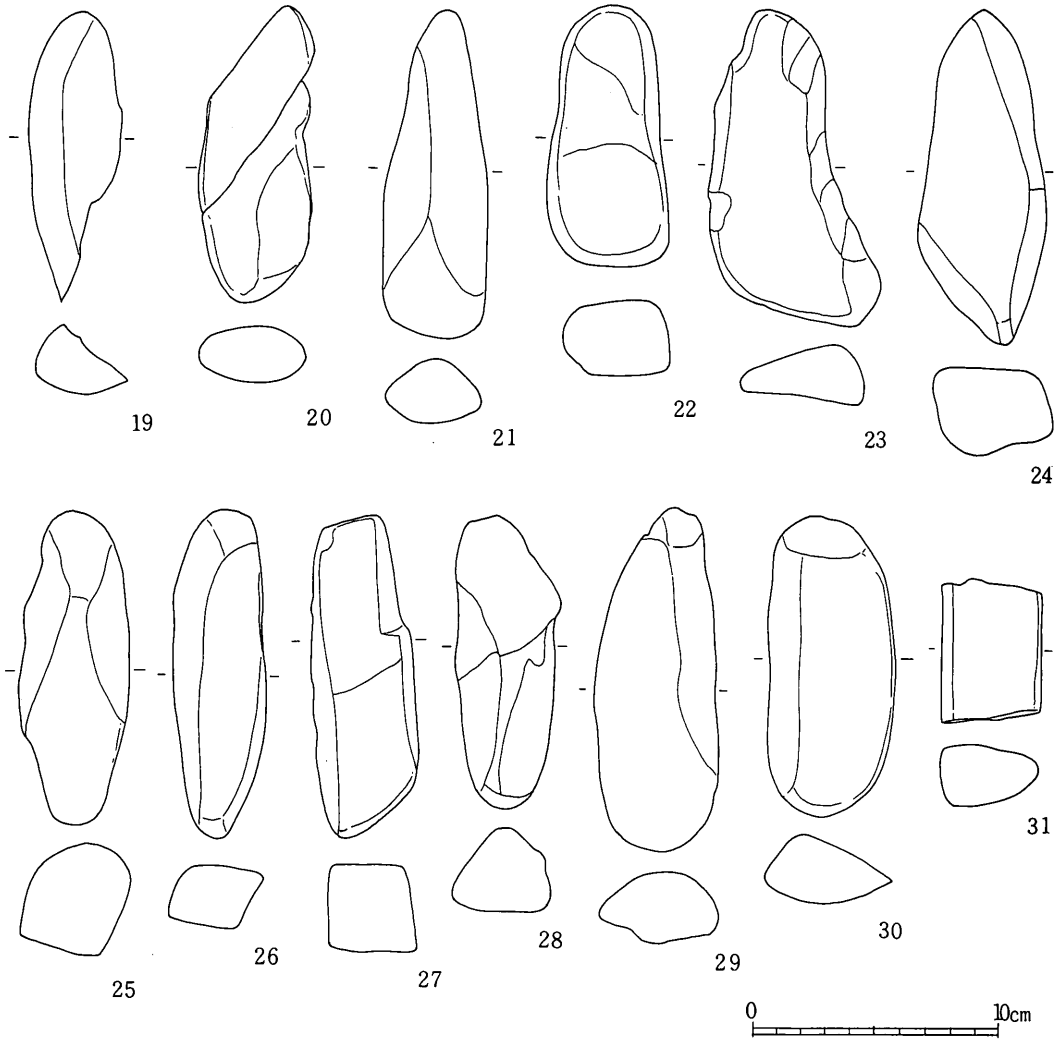
本住居址は検出された遺物から、奈良時代前葉～中葉、和手II期に位置づけられる。

第21号住居址

遺構　A―7、8区において検出された住居址で、調査区中央からやや東寄りの南端に位置している。調査区境での検出となり、半分以上が調査区外にあると思われる。北西側に18号住居址が隣接し、北東側にやや離れて17号住居址が存在する。



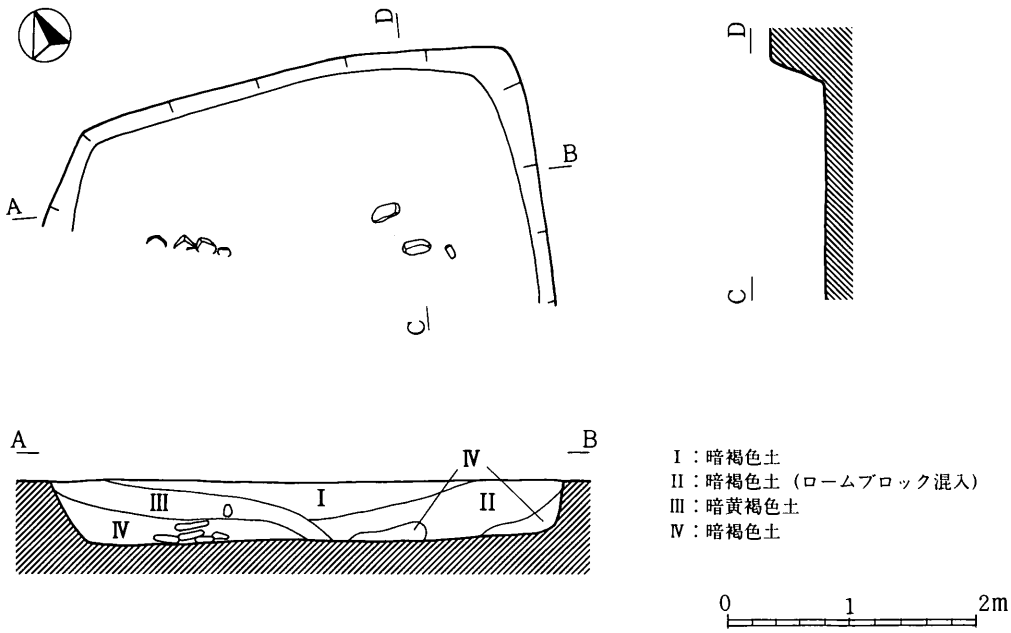
第25図　第20号住居址出土編物用石錘(1)　0　10cm



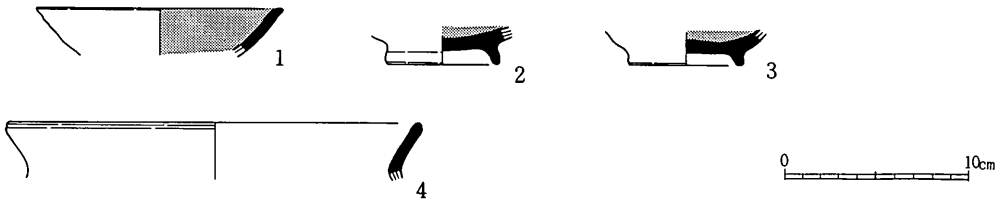
第26図　第20号住居址出土編物用石錘(2)

石 器 観 察 表

番号	遺構	種別	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
1	20H	編物用石錘	チャート	105	37	19	88	
2	〃	〃	安山岩	108	40	27	110	
3	〃	〃	〃	98	46	23	152	
4	〃	〃	ホルンフェルス	106	36	27	159	
5	〃	〃	安山岩	113	41	32	149	
6	〃	〃	〃	102	45	33	195	
7	〃	〃	〃	105	35	21	113	
8	〃	〃	粘板岩	107	40	10	68	
9	〃	〃	安山岩	104	46	23	142	
10	〃	〃	〃	116	52	19	215	
11	〃	〃	〃	114	37	15	115	
12	〃	〃	〃	105	37	17	74	
13	〃	〃	〃	95	42	27	118	
14	〃	〃	〃	118	43	34	131	
15	〃	〃	〃	100	50	21	135	
16	〃	〃	〃	100	45	30	205	
17	〃	〃	〃	113	49	39	259	
18	〃	〃	チャート	110	48	30	212	
19	〃	〃	粘板岩	115	36	27	998	
20	〃	〃	硬砂岩	120	45	22	50 62	
21	〃	〃	安山岩	130	41	25	118	
22	〃	〃	〃	105	48	30	171	
23	〃	〃	〃	125	64	22	190	
24	〃	〃	〃	133	51	35	239	
25	〃	〃	チャート	125	43	45	243	
26	〃	〃	細粒砂岩	132	57	25	150	
27	〃	〃	安山岩	127	40	35	270	
28	〃	〃	〃	116	41	33	170	
29	〃	〃	チャート	137	48	28	220	
30	〃	〃	細粒砂岩	120	50	27	190	
31	〃	〃	安山岩	56	39	240	100	



第27図　第21号住居址



第28図　第21号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	坏	13.0			淡茶	黒	内面ミガキ・ロクロナデ（黒色処理）	
2	〃	埦		6.0		暗茶	〃	〃　〃	
3	〃	〃		6.2		淡茶	〃	内面ミガキ・底部回転糸切り・ロクロナデ・黒色処理	
4	〃	甕	22.0			茶褐	茶褐	口縁部ヨコナデ	

本址に攪乱等の影響はなく、遺存状態は良好である。覆土は、最上層に暗褐色土があり、この下層東側でロームブロックを混入する暗褐色土、西側で暗黄褐色土が堆積する。さらに最下層として、壁直下から床直上の大部分に分けて暗褐色土の堆積がみられる。調査が住居址の一部にとどまったため、規模は明確にできないが、東西400cm前後の方形プランを呈すると思われる。壁高は、東壁43cm、西壁48cm、北壁40cmで、垂直に近い掘り込みが深くなされている。床面は、平滑であるが、踏み固められた状態はあまりみられなかった。周溝、柱穴、カマドは未検出である。

遺物　本住居址から検出された遺物には土師器坏,埦、甕がある。

1は土師器坏の口縁であろうか、内面黒色研磨される黒色土器である。2、3は土師器埦の底部である。3は底面中央部に糸切り痕をわずかに残す。いずれも内面黒色研磨される黒色土器である。4は土師器甕の口縁部である。

本住居址は検出された遺物から、平安時代中期、和手IV期に位置づけられよう。

第22号住居址

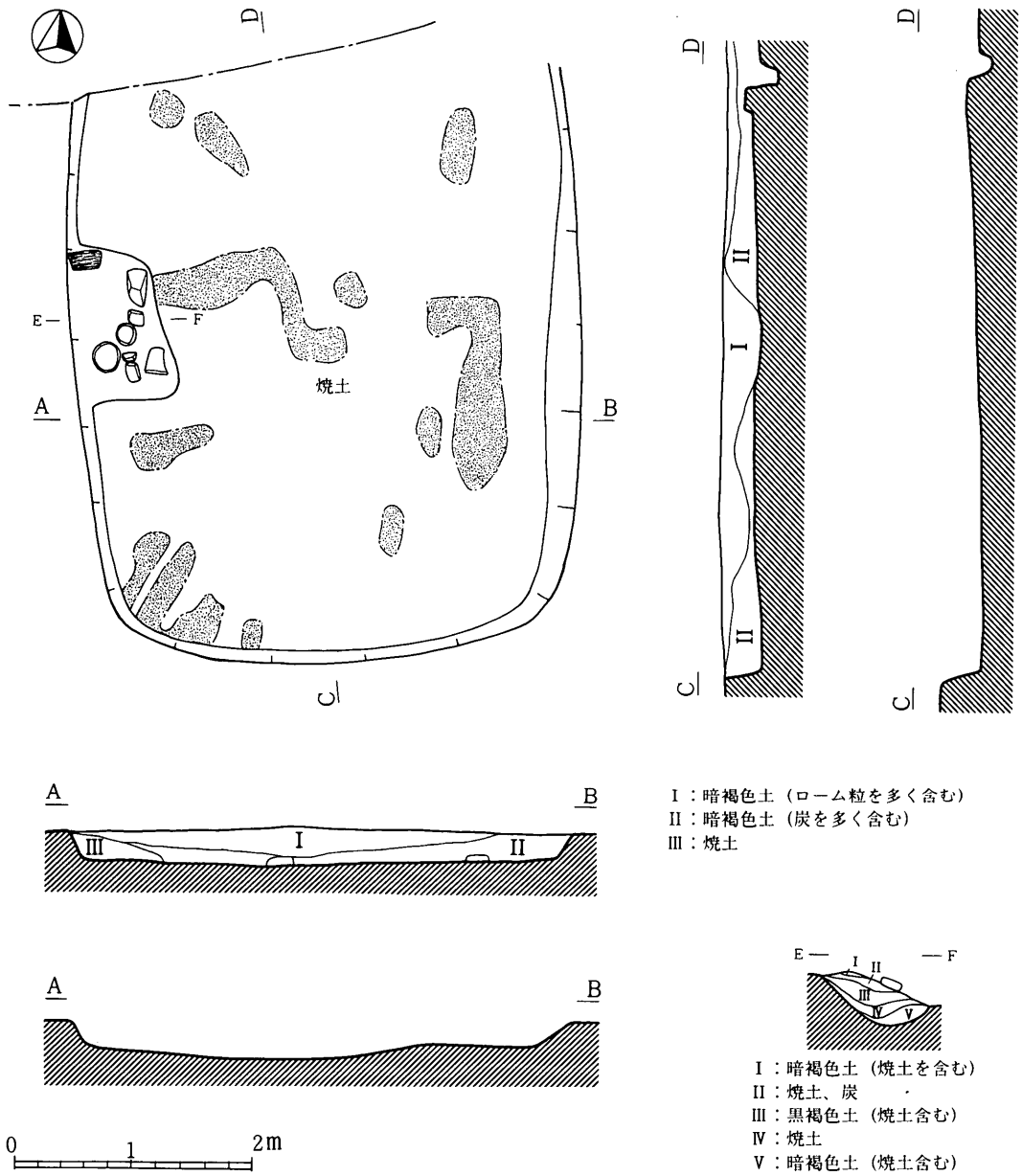
遺構　E―6、7区にあり、調査区東半の北寄りに位置する。北側で23号住居址に切られ、西側に14号住居址が隣接している。

住居址覆土は、上層にローム粒を多く含む暗褐色土、下層に炭化材、焼土を多く含む暗褐色土が堆積している。規模は、北側を23号住居址に切られているため全容を把むことはできないが、東西415cm、南北に500cmを若干上まわる細長い隅丸方形を呈すると思われる。壁高は、東壁19cm、西壁21cm、南壁32cmで、東壁は緩やかに傾斜し、南壁および西壁はこれよりやや傾斜を強くする。床面は起伏があり、あまり踏み固められていない。カマドは、西壁中央部に設けられている。外への張り出しはなく、奥行き80cm、幅130cmの規模をもち、焚口部分で床面より15cm掘り込んで造られている。カマド内は、全面に充満した焼土が観察された。柱穴、周溝は検出されなかった。

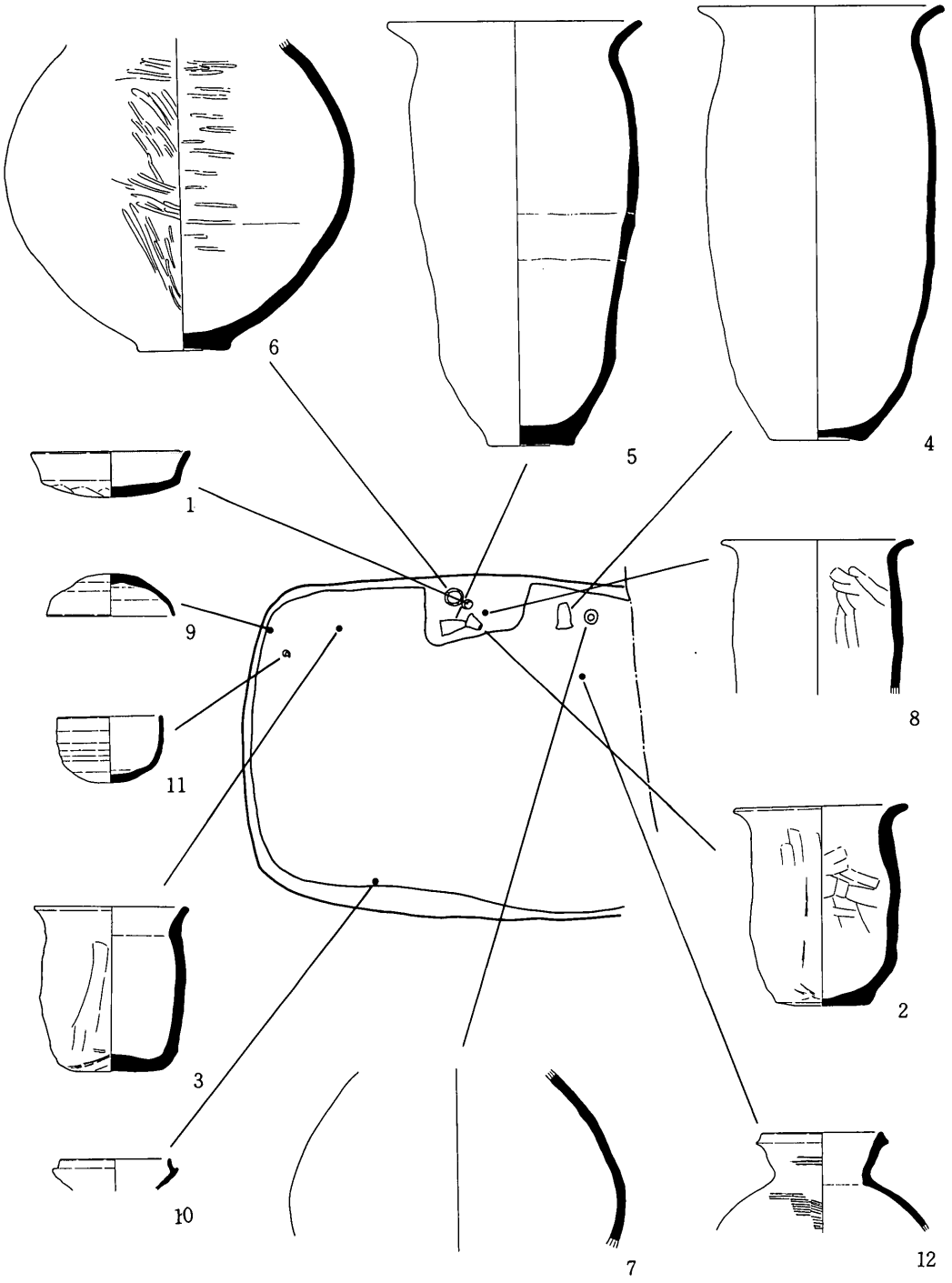
本址では、多少の濃淡はあるものの、床上全面で焼土、炭化材の堆積がみられることから、焼失家屋と考えられる。

遺物　本住居址から検出された遺物には、土師器坏、甕、須恵器蓋、坏、壺がある。

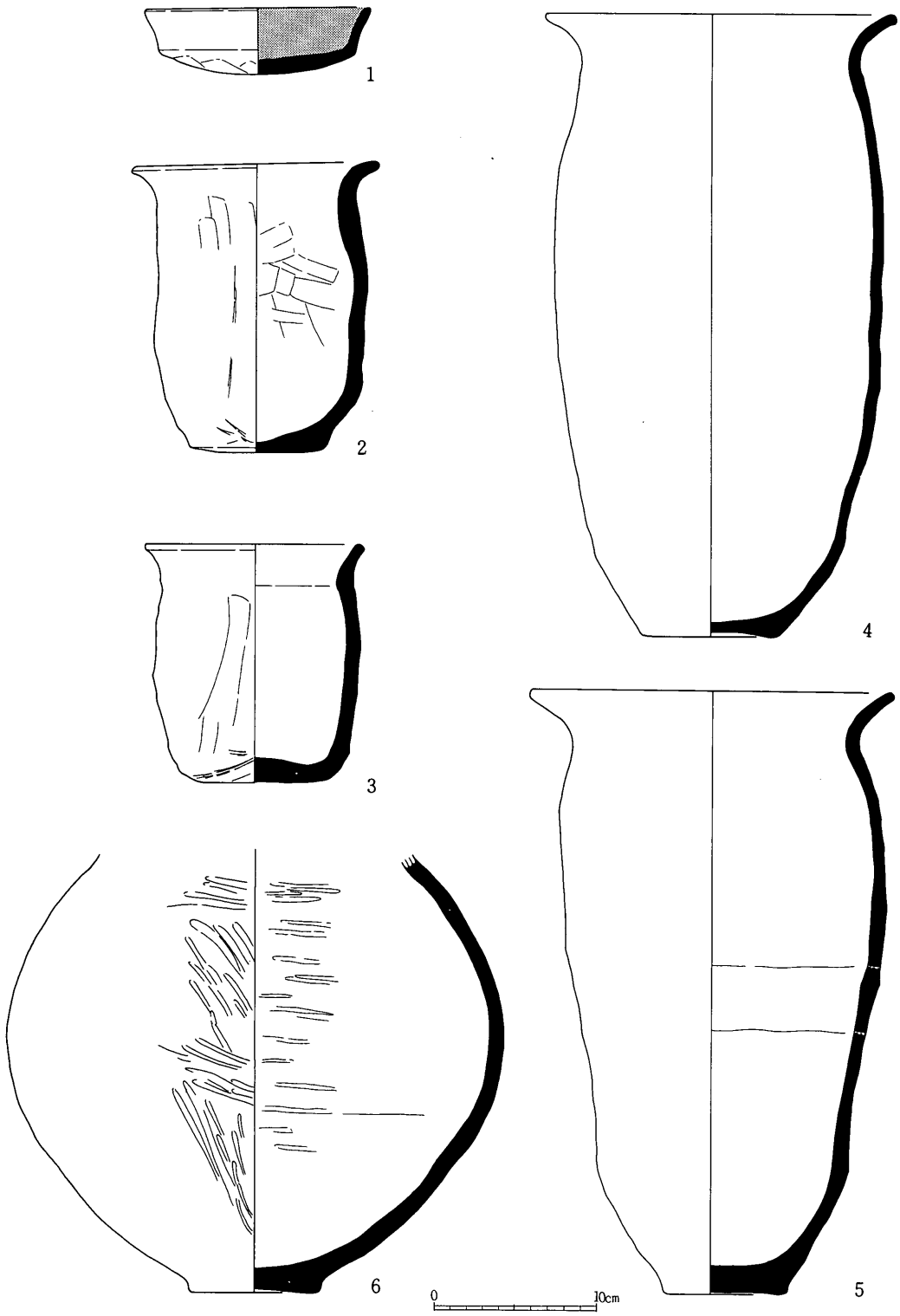
1は土師器坏で体部と底部の境に稜が明瞭に残る。底部は手持ちヘラケズリをうけ、内外面全面ヘラミガキされる。内面は、磨耗、剝離が激しいため判然としないが黒色処理されている。2、3は土師器小型甕で、いずれも器面はやや歪み、整形も軽いナデ条の擦痕が一部に残る程度である。2に比べ3は底面が広くやや安定している。4、5は土師器長胴甕で、口縁部はヨコナデさ



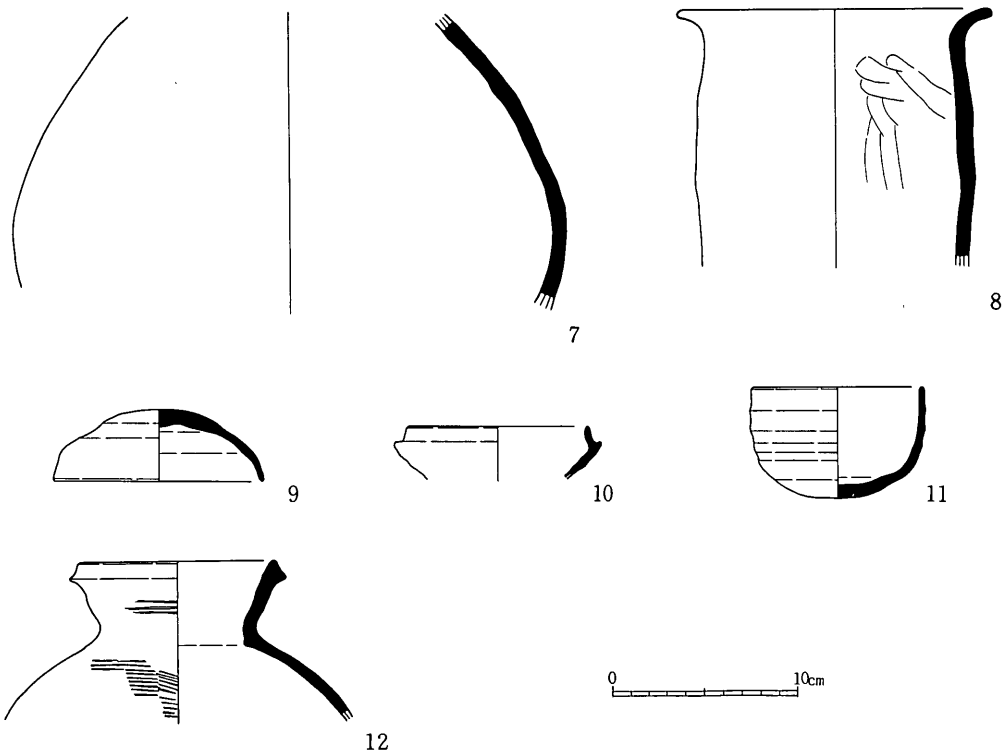
第29図　第22号住居址



第30図　第22号住居址土器出土状態



第31図　第22号住居址出土土器(1)



第32図　第22号住居址出土土器(2)

土器観察表

番号	種別	器形	寸法 口径	寸法 底径	寸法 器高	色調 外面	色調 内面	整形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	14.0	12.0	4.0	茶褐	淡黒	底部手持ちヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内外面ミガキ(黒色処理)	内面磨耗
2	〃	甕	15.0	8.0	17.5	〃	茶褐	内外面 強いナデ	
3	〃	〃	12.8	7.7	14.5	〃	〃	外面　〃	
4	〃	〃	21.4	8.6	38.8	〃	〃	口縁部ヨコナデ	
5	〃	〃	22.0	7.1	37.0	〃	〃	〃　積上げ痕残る	底部木葉痕
6	〃	〃		8.0		〃	〃	底部手持ちヘラケズリ 内外面ミガキ	
7	〃	〃				淡茶	淡茶	内外面ミガキ(？)	
8	〃	〃	16.8			茶褐	茶褐	口縁部ヨコナデ 内面ナデ	
9	須恵	蓋	11.0		3.8	灰白	灰白	ロクロナデ 内面中央部ナデ 天井部回転ヘラ切り	
10	〃	坏	9.6			青灰	青灰	ロクロナデ	
11	〃	〃	9.0		5.8	黒灰	黒灰	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	自然梅
12	〃	壺	10.4			灰白	灰白	口縁部ヨコナデ 内面ナデ 外面平行叩き	

れるが、体部は軽いナデがみられるのみである。5は積み上げ痕が残り、底部には木葉痕がみられる。6、7は、土師器球胴甕の体部である。7は磨耗のため判然としないが6は内外面全面ヘラミガキされる。8は小型甕の口縁部～体部上半部で、内面に指頭によるナデ痕を残す。9、10は須恵器蓋坏である。9は天井部にヘラ切り痕を残す。11は須恵器坏で埦形を呈する。底部は回転ヘラケズリされる。12は須恵器短頸壺の口縁部である。

本住居址は検出された遺物から、古墳時代末～奈良時代初頭、和手Ⅰ期に位置づけられる。

第23号住居址

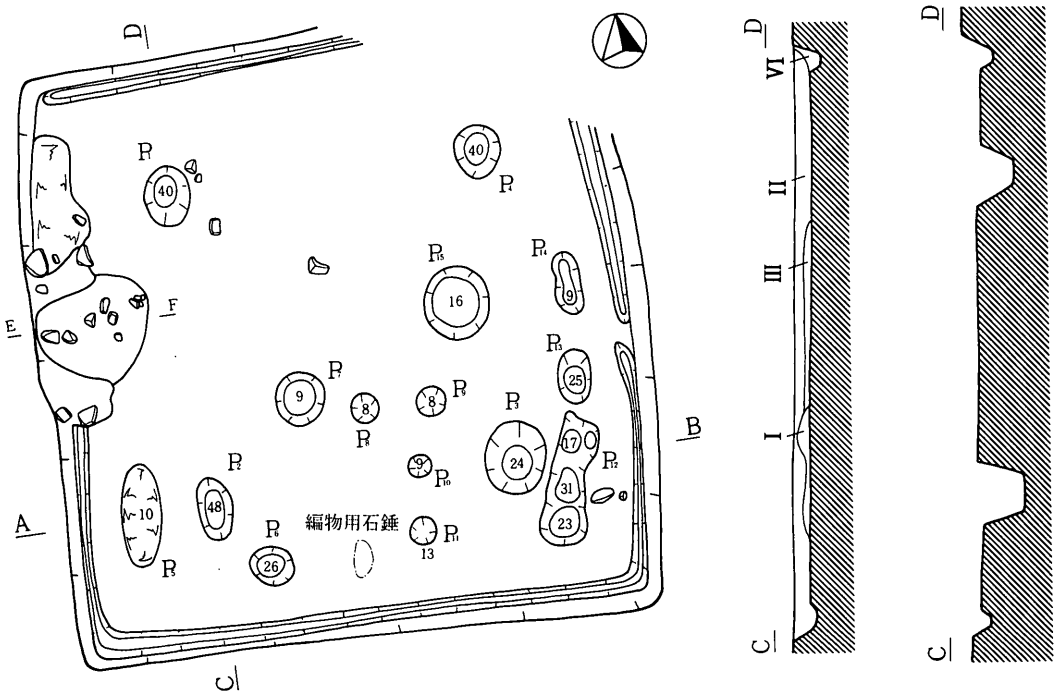
遺構　F、G—6、7区にあり、調査区東半北側に位置する。南側で22号住居址と重複し、南西側に14号住居址が隣接する。

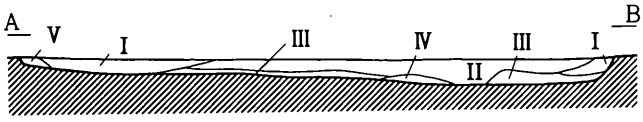
本址は、東壁と北壁の一部が調査区外に延びているため、一部分未調査のままであるが、攪乱もなく、良好な遺存状態を示していた。覆土は、上層にローム粒を含む暗褐色土、下層にローム粒を含まない暗褐色土が堆積し、住居南西部と東壁部に焼土粒を混入する暗褐色土が厚く堆積する。また、床直上の一部で黒褐色土、北側周溝の一部でロームブロックを混入しこ黒褐色土がみられる。焼土粒を混入した堆積が床直上から検出面にまで達して観察されることから、これら覆土は比較的短期間のうちに堆積されたものと思われる。東西734cm、南北721cmのやや大型の住居で、方形プランを呈する。壁高は、東壁26cm、西壁30cm、南壁24cm、北壁22cmを計り、いずれもほぼ垂直に鋭く掘り込まれている。壁下には周溝がめぐる。幅14～34cm、深さ10～17cmの広く、深い掘り込みとなっている。ピットは、P_{15}まで検出された。柱穴はP_1～P_4で、P_1（71×55、—40)、P_2(71×41、—48)、P_3(86×72、—24)、P_4(63×55、—40)である。他のピットP_5～P_{15}は、円形もしくは楕円形で深さ9～31cmを計り、住居東南半に集中している。用途は不明である。床面は、中央部が東西に高く、南壁および北壁に向かって若干の傾斜がみられ、比高差8cm前後を計る。全面的に堅く踏み固められている。カマドは、西壁中央部に設けられている。住居外への張り出しはほとんどなく、壁下に幅70cm、奥行85cm、深さ25cmのピットを掘り込み、両側に「ハ」の字形に開くソデ部を設置している。構造は石組み粘土カマドである。カマド右側には160×65cmの楕円形のピットが設けられ、カマド内部には焼土、灰が充満している。住居内の広範囲にわたって焼土が検出された。

遺物　本住居址から検出された遺物には、土師器坏、甕、甑、須恵器には、蓋、坏がある。

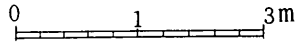
1～6の土師器坏は、器形、整形ともに共通した特徴をもつ。器形はいずれも椀形を呈する。口縁端部は「く」の字状に外開し、3～6は口縁下に沈線が巡る。底部は回転ヘラケズリをうけるもの（1、2、4、5）手持ちヘラケズリされるもの（3、6）にわかれる。1～6すべてが内外面全面にわたり丁寧にヘラミガキされ、内面は黒色処理される。いずれもロクロ手法により整形された土師器であると考えられ、口縁部の特徴などから金属器（佐波理鋺）を模倣した土師器の一群であろう。7は土師器球胴甕の口縁部で外面はヘラミガキされる。8、9はいずれも長胴甕であろうか。いずれも外面に弱いハケ目状の擦痕を残す。10は土師器球胴甕で、内外面全面にわたりヘラミガキされる。11は土師器甕の底部で、積み上げ痕を明瞭に残す。底部に木葉痕がみられる。12は土師器甑の底部である。13、14は須恵器蓋である。14は環状つまみを付す、金属器を模倣した須恵器蓋ではないかと考えられる。15、16は須恵器坏で15は底部回転ヘラ切りである。17は中央部にハケ目状の擦痕を残す円盤状の土製品で、須恵質である。

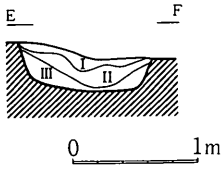
本住居址は検出された遺物から、奈良時代前葉～中葉、和手II期に位置づけられる。





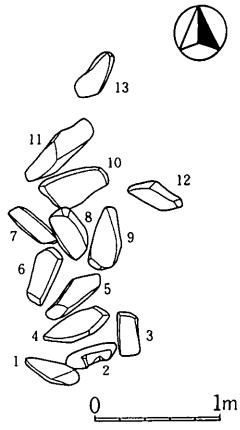
I：暗褐色土（焼土粒を含む）
II：暗褐色土（ローム粒を含む）
III：暗褐色土
IV：黒褐色土
V：焼土
VI：黒褐色土（ロームブロック混入）





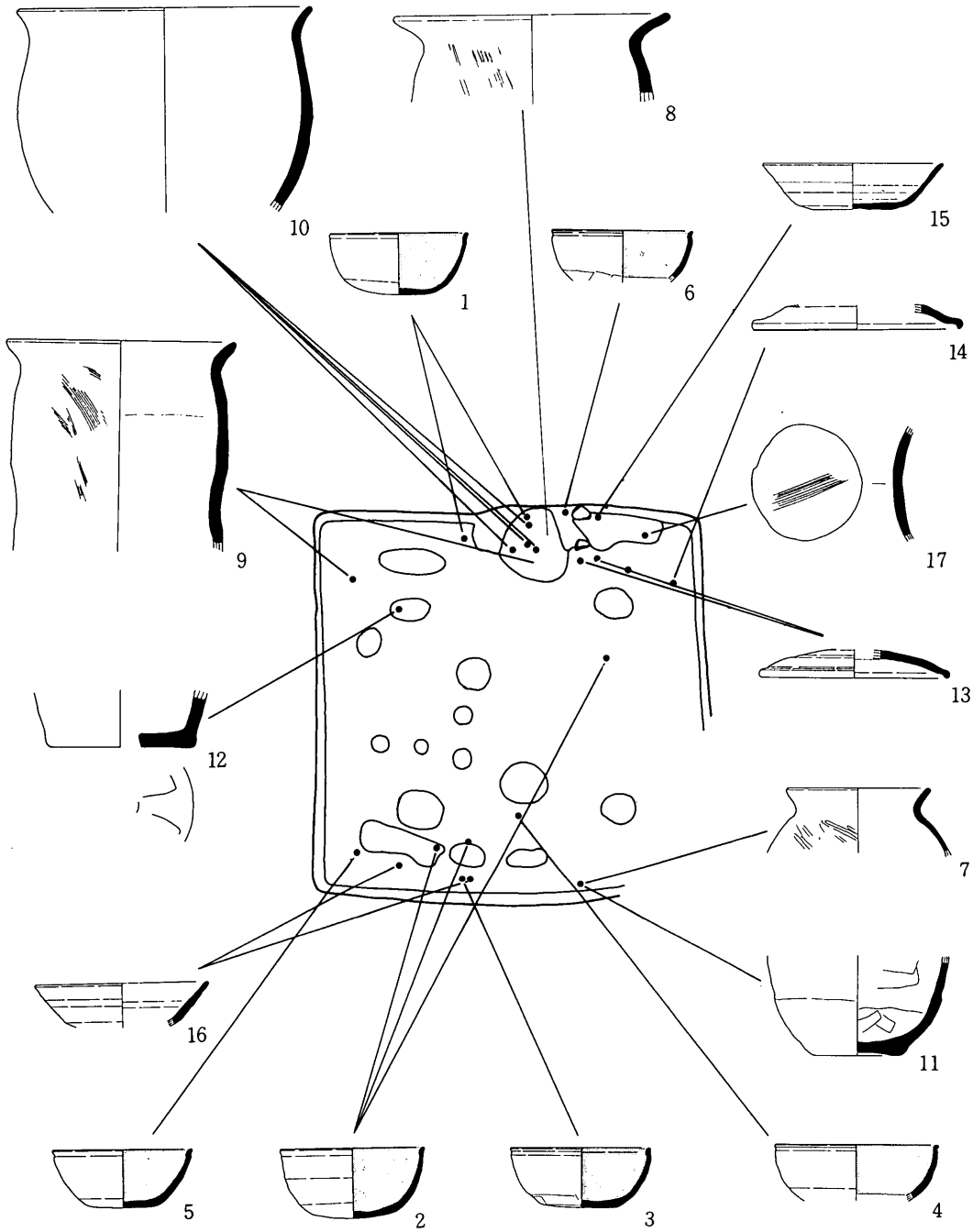
カマドセクション

I：焼土
II：暗褐色土（灰を含む）
III：暗褐色土（焼土を僅かに含む）

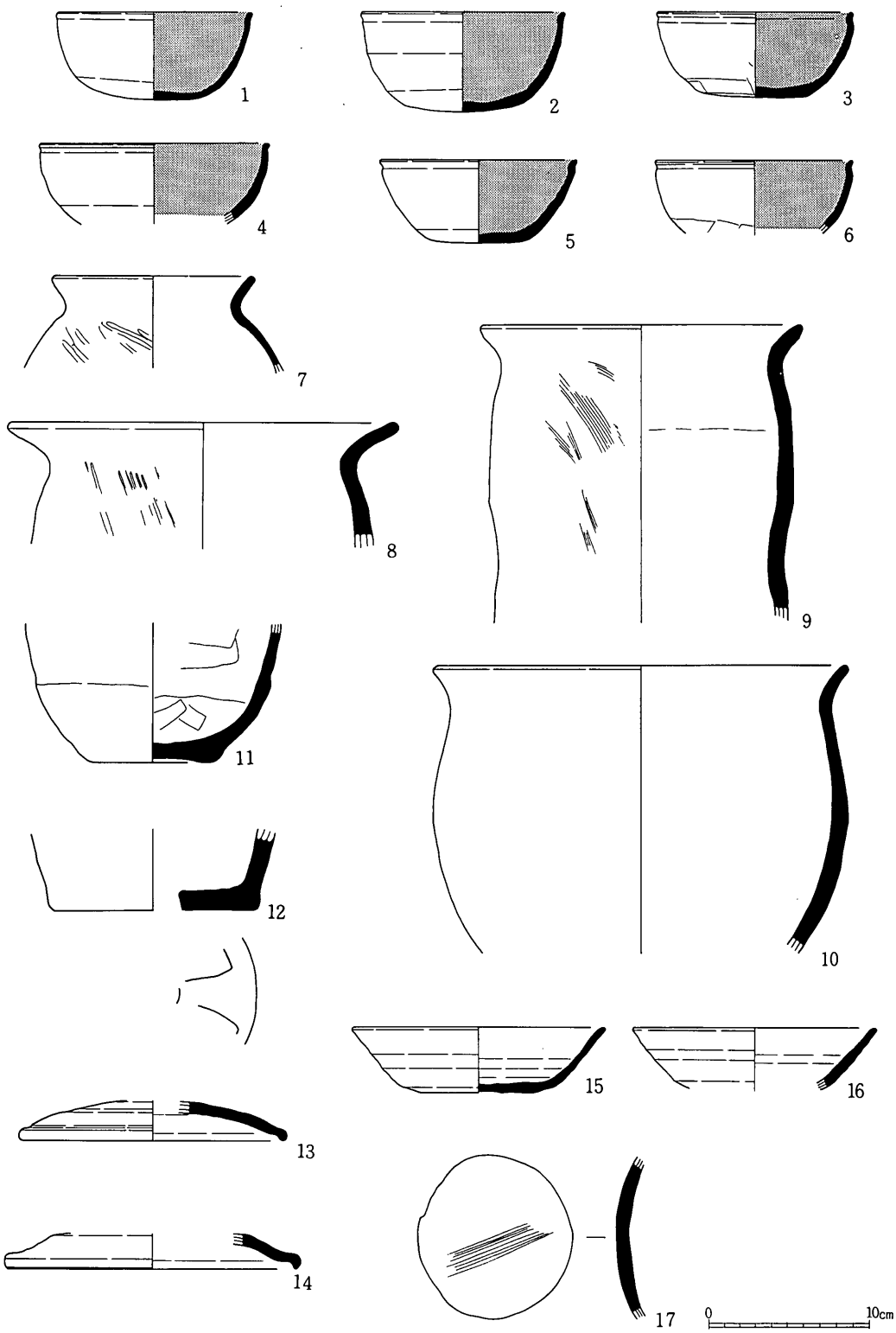


編物用石錘出土状態
番号は図版番号と一致

第33図　第23号住居址



第34図　第23号住居址土器出土状態



第35図　第23号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器形	寸法			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器形	外面	内面		
1	土師	坏	12.0		5.4	淡茶	淡黒	内外面ミガキ底部回転ヘラケズリ(ロスロ)ナデ 黒色処理	
2	〃	〃	12.4		6.1	淡茶(やや赤)	黒	内外面ミガキ、底部回転ヘラケズリ(ロクロ)ナデ 黒色処理	
3	〃	〃	12.0	6.2	5.2	淡茶	黒	内外面ミガキ 底部手持ちヘラケズリ(ロクロ)ナデ 黒色処理	
4	〃	〃	14.0			茶褐	黒	内外面ミガキ、底部回転ヘラケズリ(ロクロ)ナデ 黒色処理	
5	〃	〃	12.0	6.0	5.0	淡茶	黒	〃	
6	〃	〃	12.0			茶褐	淡黒～茶褐	(ロクロ)ナデ 内面　ミガキ 底部手持ちヘラケズリ 黒色処理(不完全)	
7	〃	甕	12.5			黒褐	黒褐	口縁部ヨコナデ 内外面ミガキ	
8	土師	〃	24.0			淡茶	淡茶	外面ハケ（不明瞭）	
9	〃	〃	20.0			〃	〃	〃	
10	〃	〃	25.0			橙	橙	口縁部ヨコナデ 内外面ミガキ	
11	〃	〃		7.0		暗茶	暗茶	輪づみ痕明瞭	木葉底部痕
12	〃	瓶		12.6		淡茶	淡茶	ヨコナデ	
13	須恵	蓋	16.0			灰白	灰白	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	
14	〃	〃	17.8			〃	〃	ロクロナデ	自然釉
15	〃	坏	15.6	7.0	4.0	〃	〃	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	
16	〃	〃	15.0			黄灰	黄灰	ロクロナデ	
17	〃	土製品	10.0	9.5		紫灰	紫灰	外面 ハケ状の擦痕(1ヶ所)	

第24号住居址

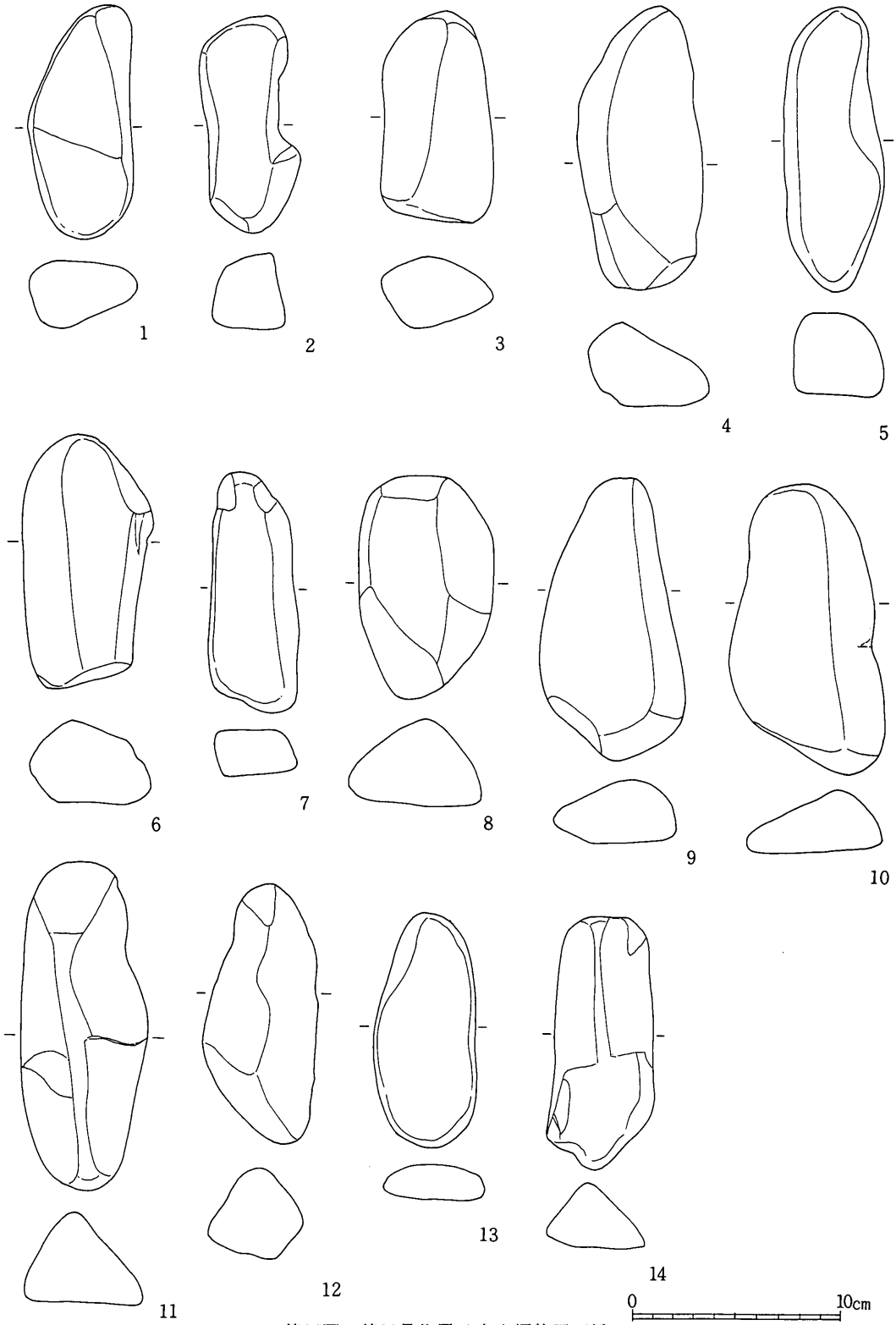
遺構　F—3、4区にあり、調査区内では東半部北側に位置する。住居の北西部分を32号住居址と重複している。

本址は、南半部分の上層部を耕作による攪乱の影響を受けていたが、これ以外の遺存状態は良好であった。覆土は、上層に暗褐色土、下層にローム粒を多量に含む暗褐色土が堆積し、同溝部分を中心に黒褐色土が入り込んでいる。規模は、南北455cm、東西424cmで、方形プランを呈する。壁高は、東壁32cm、西壁14cm、南壁9cm、北壁30cmが確認されたが、南壁および西壁については攪乱による影響が顕著にみられることから、全体的に深い掘り込みであったと思われる。掘り込みは、いずれもほぼ垂直に鋭くなされている。周溝は、東壁下、北壁下と西壁下北半にあり、幅6～16cm、深さ5cmほどの浅いものである。床面は平坦で、堅緻な状態を示している。カマドは、東壁中央よりやや南寄りに粘土カマドが設けられている。住居外への張り出しはなく、壁直下に深さ12cmの掘り込みを設けて造っている。ソデ部分から内部にかけて、灰と焼土の堆積が厚く観察された。柱穴は検出されなかった。

遺物　本住居址から検出された遺物には、土師器甕、須恵器蓋、坏がある。

1、2は「く」の字状に外開する土師器甕の口縁部である。いずれも、外面ハケ目状調整、内面は口縁部のみカキ目状の調整をうける。3は土師器甕の頸部で、外面はヘラケズリされる。口縁部がないため判然としないが、頸部は「コ」の字状を呈するであろうか。いわゆる「武蔵型」の甕であろう。4は土師器小型甕の底部～体部下半である。体部はカキ目状調整され、体部～底面にかけてハケ目状調整される。ロクロ手法により整形されたものであろう。5は須恵器蓋で天井部は回転ヘラケズリされる。6、7は須恵器坏で底部に回転糸切り痕を残す。

本住居址は検出された遺物から、奈良時代末～平安時代初頭、和手III期に位置づけられる。



第36図　第23号住居址出土編物用石錘

石　器　観　察　表

番号	遺構	種別	石　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特　徴
1	23号住	編物用石錘	安山岩	110	50	32	195	
2	〃		ホルンフェルス	102	55	36	212	
3	〃		安山岩	100	53	33	215	
4	〃		〃	132	56	38	369	
5	〃		ホルンフェルス	133	47	39	347	
6	〃		安山岩	121	62	39	378	
7	〃		細粒砂岩	112	42	22	168	
8	〃		硬砂岩	105	63	41	305	
9	〃		頁岩	134	67	30	391	
10	〃		細粒砂岩	138	71	29	367	
11	〃		〃	155	60	43	400	
12	〃		ホルンフェルス	128	54	44	280	
13	〃		〃	110	47	17	125	
14	〃		細粒砂岩	119	48	31	220	

第25号住居址

遺構　C―8、9区から検出された住居で、26号住居址貼床下に構築されている。調査区域内のほぼ中央、溝1・2にはさまれた場所にあたる。

覆土は、ロームブロックを多く含む暗褐色土とその下層の暗褐色土からなり、上層の暗褐色土の落ち込みの識別は容易であった。西、南壁が26号址のために消失しているため性格な規模は不明であるが、南北470cm、東西405cmのやや南北に長い隅丸方形を呈すると推定される。壁高は、東壁20cm、北壁14cmを測り、掘り込みは良い。床面は平滑、柱穴、カマド、周溝は検出されなかった。

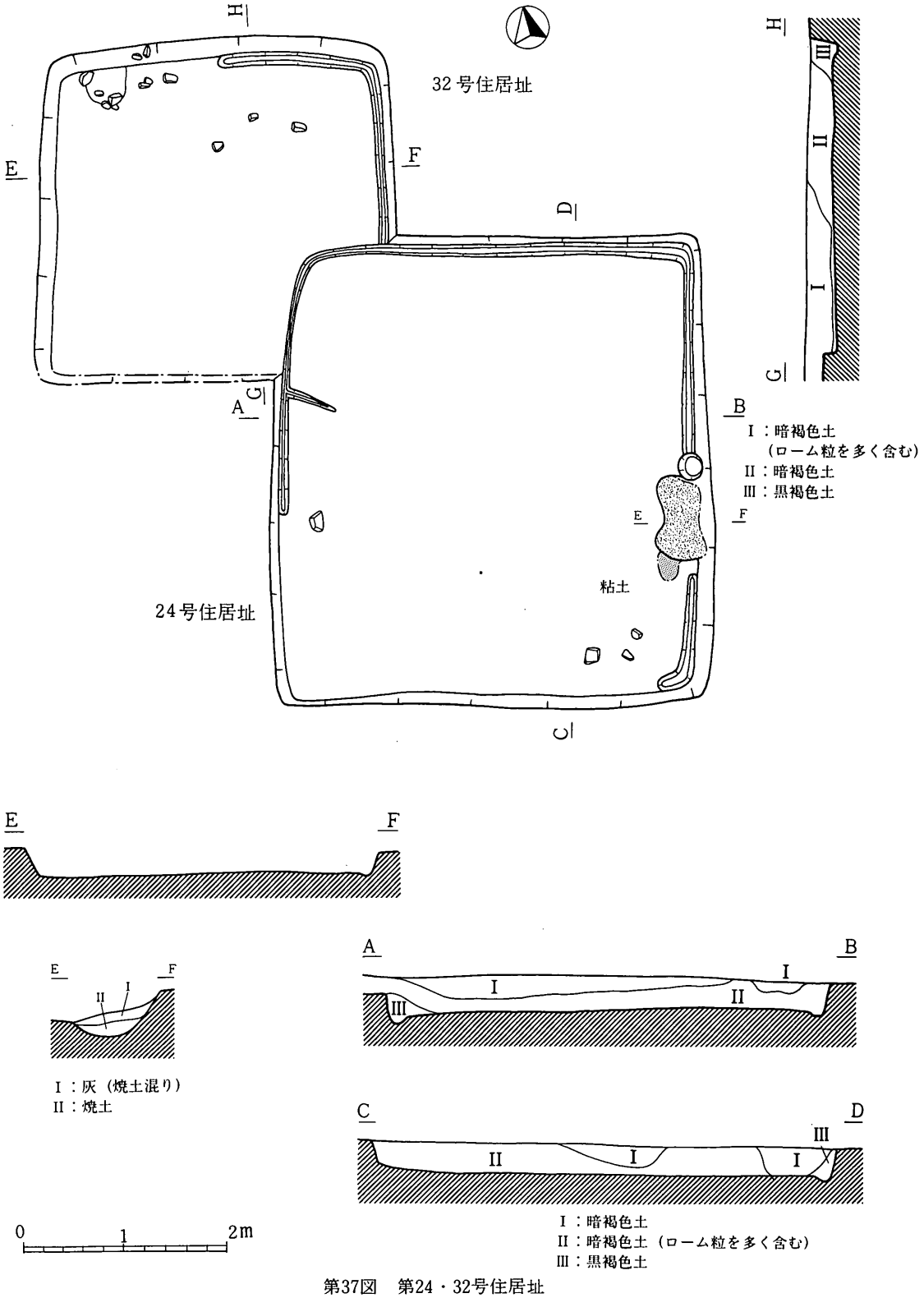
遺物　本住居址からは遺物が検出されず、時期については判然としないが、26号は住居址との切り合い等を考えると、奈良時代前葉～中葉、和手II期に位置づけられる可能性がつよいと思われる。

第26号住居址

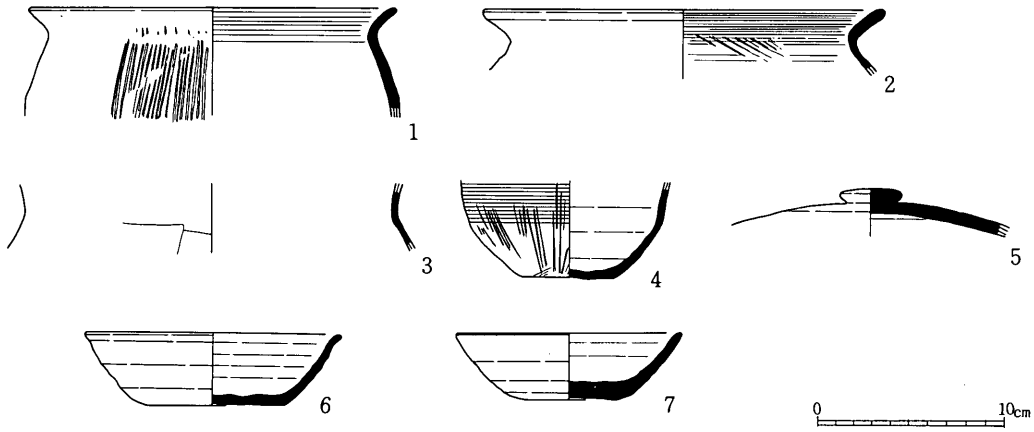
遺構　C、D―9区にあり、北、東側は25号住居址に貼り床して構築している。調査区のほぼ中央で、溝1に最も近い位置にある。南および北側には建物址が隣接している。

遺構検出時、ローム面へのロームブロックを多く含む暗褐色土の落ち込みが明瞭に認められ、検出は比較的容易であった。覆土はこのロームブロックを多く含む暗褐色土を第1層とし、この下に暗褐色土が4～6cmほど堆積し、この層下が床面となっている。

東壁および北壁が25号住居址と重複しているため失われており、性格な規模プランは捉えられないが、壁の残存部分、セクションの観察を参考とすれば、南北460cm、東西450cmのやや不整な方形を呈するものと考えられる。壁高は、南壁18cm、西壁10cmで、きれいな立ち上がりを示している。西壁と北壁とのコーナー部分に、幅20～10cm、深さ6cmの周溝がめぐる。床は、東に向かって緩い傾斜を示し、25号址との重複部分では、その一部に貼り床をした痕跡が認められた。カマドは北壁にあり、中央よりやや東に偏して設けられている。幅85cm、奥行40cmで、粘土カマドと思われる。柱穴は検出されていない。



第37図　第24・32号住居址



第38図　第24号住居址出土土器

土 器 観 察 表

番号	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	整形・調整の特徴	備考
1	土師	甕	19.6			赤～茶褐	赤～茶褐	外面ハケ・口縁部内面カキ目	
2	〃	〃	21.4			茶褐	赤褐	〃	
3	〃	〃				暗茶褐	暗茶褐	外面ヘラケズリ	
4	〃	〃		5.0		茶～赤褐	茶～赤褐	体部カキ目・体部～底部ハケ(ロクロ)ナデ	
5	須恵	蓋				灰白	灰白	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ	
6	〃	坏	13.6	7.3	3.8	青灰	灰白	ロクロナデ・底部回転糸切り	
7	〃	〃	12.0	5.0	3.5	青灰	青灰	〃	

遺物　本住居址から検出された遺物には、須恵器蓋、短頸壺、長頸壺がある。

1は須恵器蓋の端部、2は須恵器短頸蓋である。3は須恵器長頸壺の肩部で接合痕を明瞭に残す。

本住居址は検出された遺物から、奈良時代前葉～中葉、和手Ⅰ期に位置づけられよう。

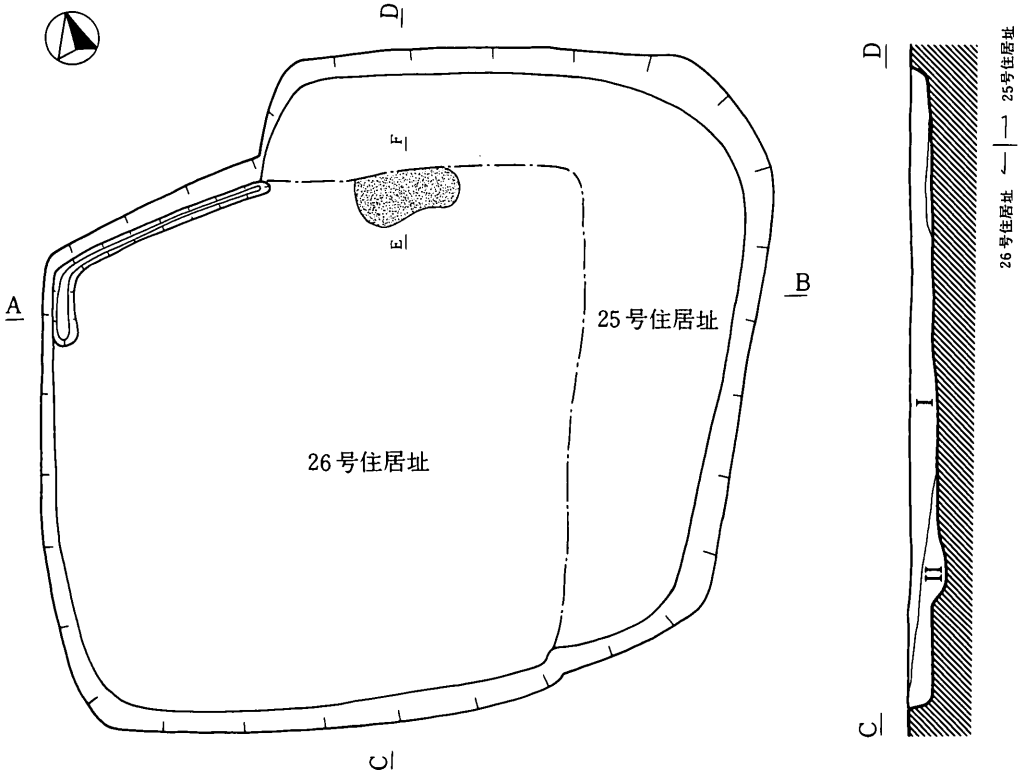
第27号住居址

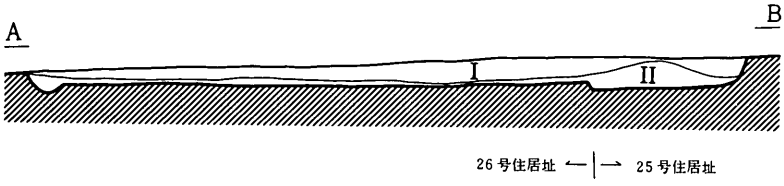
遺構　B—12、13区にあり、調査区中央やや西寄りに位置している。住居址の大半は調査区域外に伸びており、4分の1ほどを調査したのみである。周囲には小竪穴群が分布し、西には2号建物址が接している。

住居址覆土は、暗褐色土、黒色土、暗褐色土の順に堆積し、壁際にはローム粒を含んだ黒褐色土が入り込んでいる。検出は容易で、しっかりした住居址である。

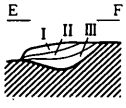
東壁、北壁の一部を調査しえたにすぎないため規模は不明であるが、形態は方形を呈すると思われる。壁高は、東壁22cm、北壁25cmで、掘り込みは垂直にきれいになされている。壁下には、幅8～12cm、深さ3cmの周溝がめぐる。ただし北壁下では80cmの間隔で周溝の切れる部分があり、出入口の可能性が考えられる。床は、ほぼ平坦で、よく踏み固められている。カマドは東壁に設けられている。礫がみえないことから粘土カマドであろう。

遺物　本住居址から検出された遺物はきわめて少なく、復元可能なものは1の土師器甕底部の

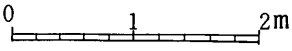




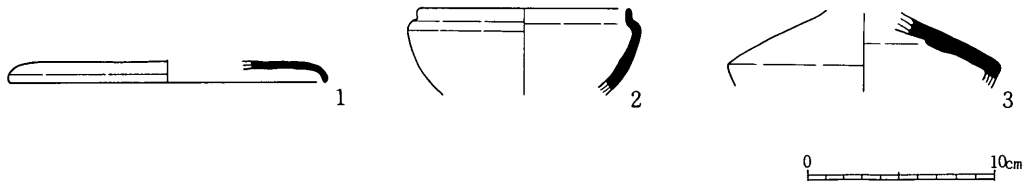
I：暗褐色土（ロームブロックを多く含む）
II：暗褐色土



I：黒褐色土（焼土粒含む）
II：焼土
III：暗褐色土（焼土粒を僅かに含む）



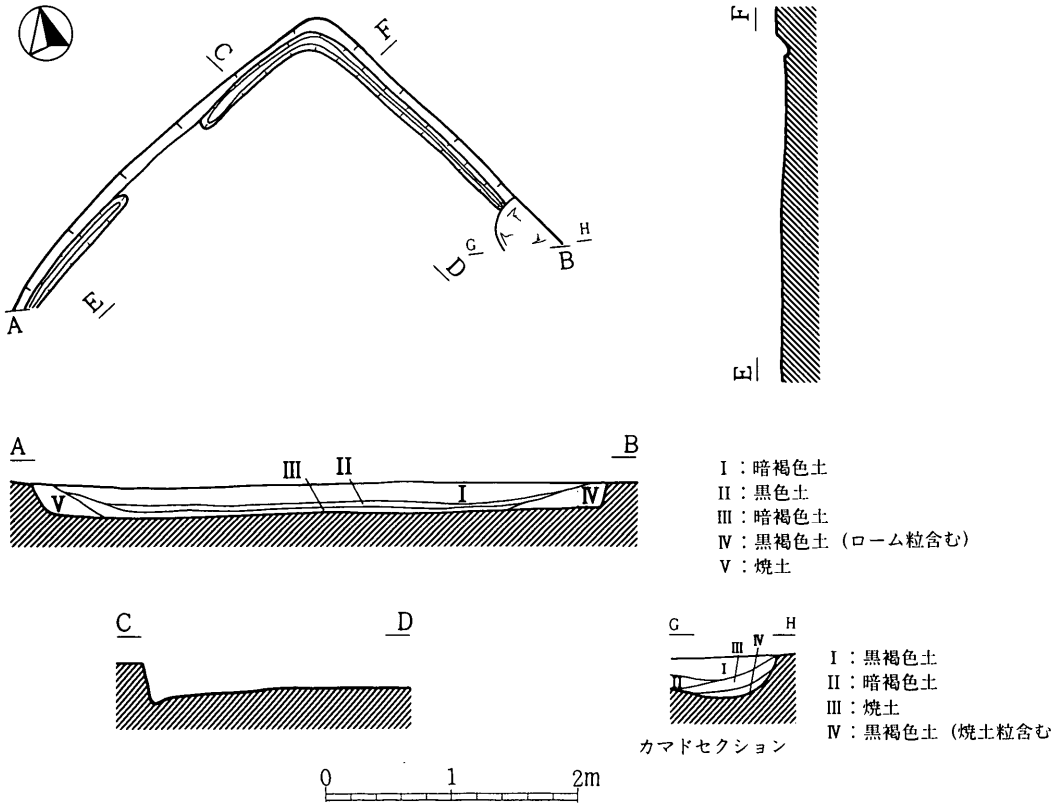
第39図　第25・26号住居址



第40図　第26号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	種別	器形	寸　法（cm）			色　調		整形・調整の特徴	備　考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	須恵	蓋	16.8			灰白	灰白	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ	
2	〃	短頸壺	11.0			青灰	青灰	ロクロナデ	
3	〃	長頸壺				〃	〃	ロクロナデ・頸部上端回転ヘラケズリ	



第41図　第27号住居址

第42図　第27号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	甕		7.4		茶～赤褐	茶～赤褐		木葉痕

みである。1は底部に木葉痕を残すが、体部等の整形ははっきりしない。遺物がほとんどないため、本住居址の時期は判然としないが、須恵器がみられないことから、古墳時代末～奈良時代初頭、和手Ⅰ期に位置づけられようか。

第28号住居址

遺構　E、F―13、14区にあり、調査区域内では西半にあたり、溝1の西、34、35号住居址の東に隣接している。

ローム面への暗褐色土の落ち込みによって住居址の存在が確認される。覆土は、暗褐色土、黒褐色土がレンズ状に堆積し、壁際は褐色土が三角形状に入り込んでいる。他の遺構と重複することもなく単独に発見され、遺存状態は良い。東西345～388cm、南北368～415cmの規模をもつ、やや不整形の隅丸方形を呈する。壁は四周とも良好に残り、深く、垂直に掘り込まれている。壁高は、東西45、西壁40、南壁47、北壁43cmを測る。壁下には、カマド周辺を除き周溝が巡る。幅13～25cm、深さ5cm前後である。床は、平坦で良く踏み固められ堅緻である。カマドは東壁中央に設けられている。幅80、奥行100cmで、礫と粘土とが痕跡的に残っていることから石組み粘土カマドであったと思われ、焚口付近は15cmほどの落ち込みとなっている。焼土が左側縁に残存する。

遺物　本住居址から検出された遺物には、土師器坏、甕、須恵器坏がある。

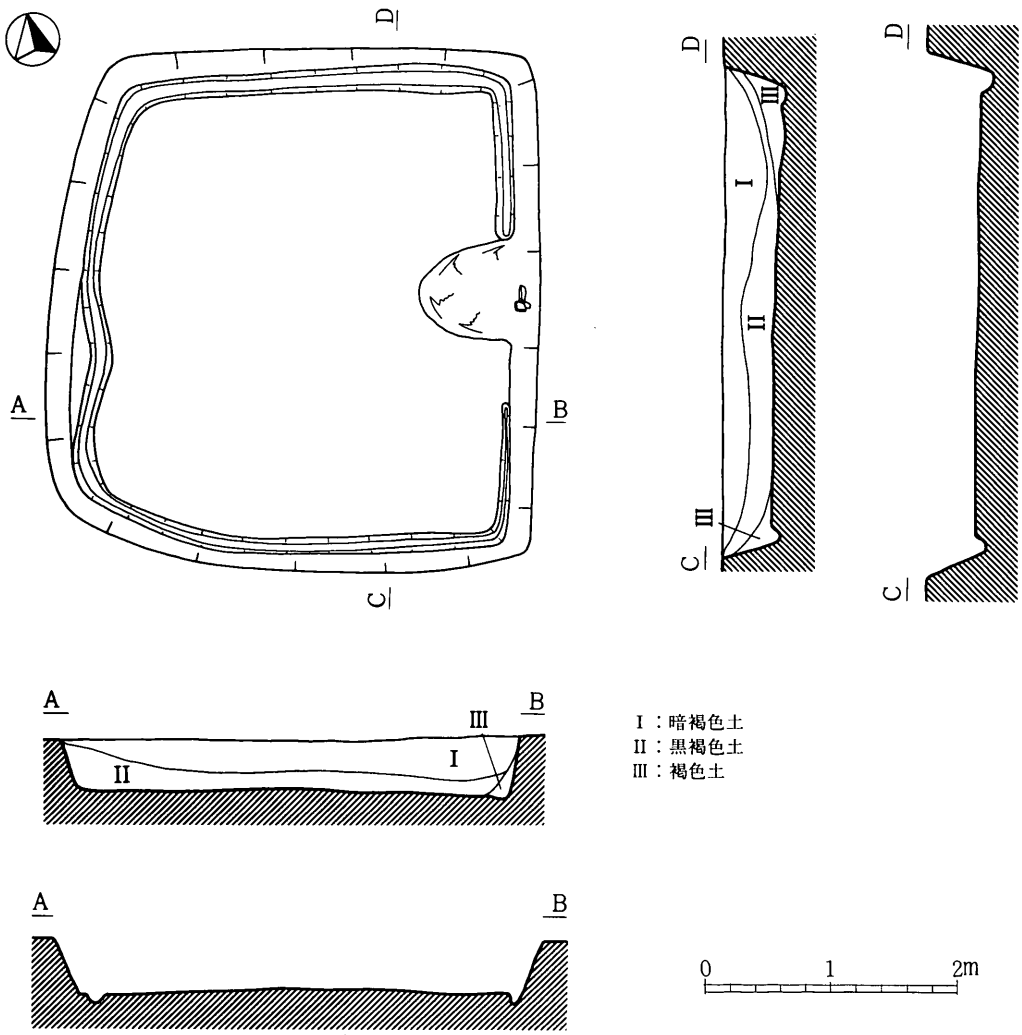
1の土師器坏は内面黒色研磨される黒色土器で、底部に回転糸切り痕を残す。2の土師器小型甕はロクロ手法によって整形され、体部外面はカキ目状の調整がなされる。底部は退転糸切りによって切り離される。3は土師器甕で、体部に、ハケ目状調整、口縁内面にカキ目状調整が施される。口縁部は「コ」の字状に外開する。4、5はいずれも体部をヘラケズリ調整する「武蔵型」の甕の口縁部で、ゆるやかな「コ」の字状を呈する。6は土師器小型甕で、体部内外面は細かいハケ目状調整が部分的にみられる。7は土師器長胴甕で、外面体部はハケ目状調整をうける。8～10は須恵器無台坏である。9は歪みがみられ、焼成もやや不良である。8、9とも底部に回転糸切り痕を残す。11は須恵器有台坏の底部で、回転ヘラケズリ調整をうける。

本住居址は、検出された遺物から、奈良時代末～平安時代初頭、和手Ⅲ期の後半に位置づけられよう。

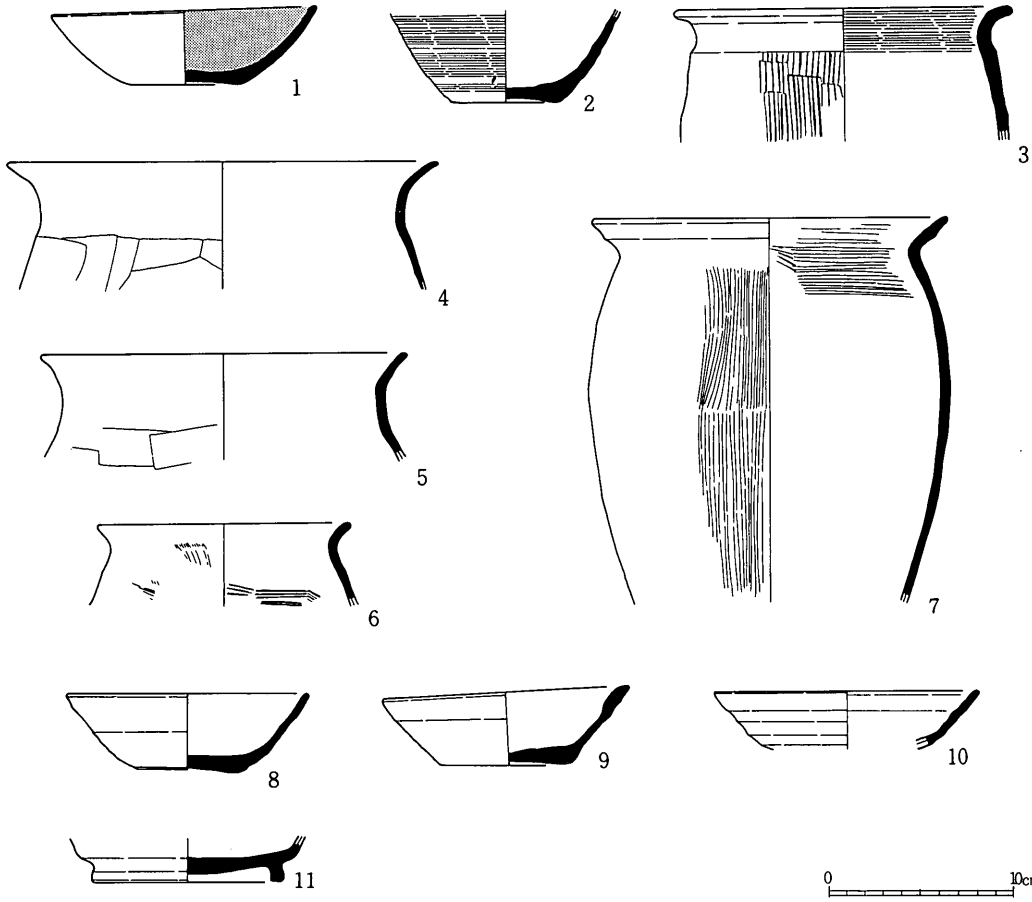
第29号住居址

遺構　C、D—16区にあり、調査区域内では西半に位置し、30号住居址、２号建物址に隣接する。

覆土は、わずかにローム粒を含む暗褐色土、わずかにローム粒を含む黒褐色土の順に堆積し、壁際および周溝内には褐色土がみられる。東西373cm、南北542cmで、南北に細長い隅丸方形プランを呈する。壁は、四周とも良く残り、余り傾斜を示さない鋭い掘り込みとなっている。壁高は、東壁35cm、西壁38cm、南壁32cm、北壁38cmである。周溝は、カマド付近を除き、壁下に巡らされている。幅10cm、深さ５cmと浅い。床面は、南側がやや低く、北に向かい漸次高くなる。カマド西側の床面上には焼土の散布が著しい。カマドは西壁中央に設けられている。幅115cm、奥行90cm



第43図　第28号住居址



第44図　第28号住居址出土土器

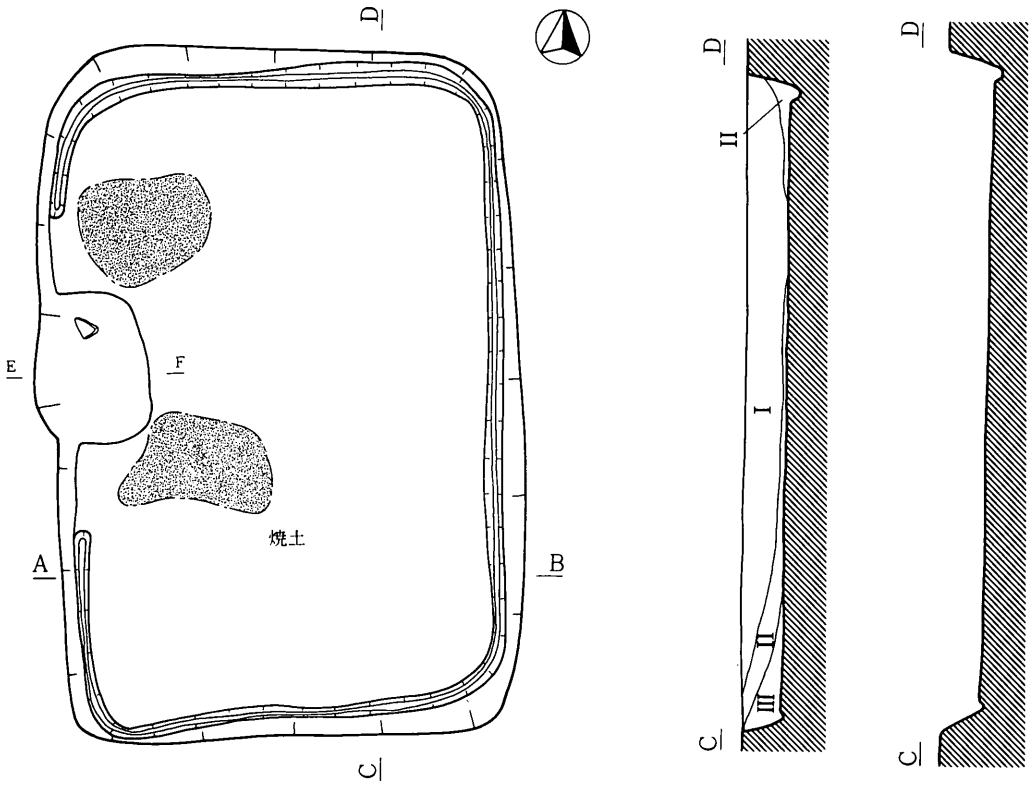
土　器　観　察　表

番号	種別	器形	寸法 口径	寸法 底径	寸法 器高	色調 外面	色調 内面	整形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	14.0	6.0	3.9	茶褐	黒	ロクロナデ 底部回転紅カリ 内面ミガキ 黒色処理	
2	〃	甕		6.0		〃	茶褐	ロクロナデ 体部カキ目 底部回転糸切り	
3	〃	〃	18.0			〃	〃	口縁部ヨコナデ 口縁内面 外面カキメ	
4	〃	〃	22.6			〃	〃	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	
5	〃	〃	19.4			〃	〃	〃	
6	〃	〃	13.2			黒褐	黒褐	内外面細かいハケメ 口縁部ヨコナデ	
7	〃	〃	18.4			茶褐	茶~黒褐	体部外面 口縁内面ハケメ	
8	須恵	坏	12.8	6.0	4.0	背灰	背灰	ロクロナデ 底部回転糸切り	
9	〃	〃	13.0	7.0	4.0	灰白	灰白	〃	
10	〃	〃	14.0			茶~緑灰	背灰	ロクロナデ	自然釉
11	〃	〃		10.0		紫灰	紫灰	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	

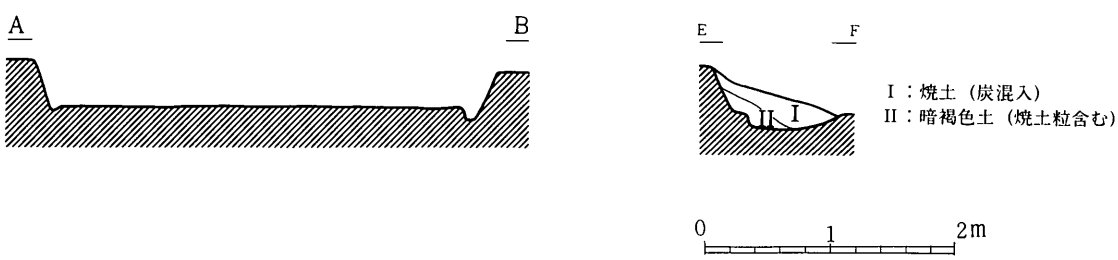
の規模をもつ。全面に焼土が充満し、礫が1個遺存する。石組みカマドであったのかもしれない。柱穴は未検出であった。

遺物　本住居址から検出された遺物には、須恵器蓋、坏がある。

1は内面にカエリを有する須恵器蓋である。カエリは大きく突き出る形態をしており、天井部

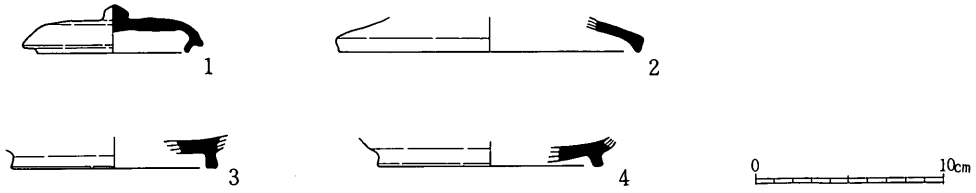


I：暗褐色土（ローム粒を僅かに含む）
II：黒褐色土（ローム粒を僅かに含む）
III：褐色土
IV：焼土



I：焼土（炭混入）
II：暗褐色土（焼土粒含む）

第45図　第29号住居址



第46図　第29号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	須恵	蓋	8.6		2.5	灰白	灰白	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ	自然釉
2	〃	〃	16.0			紫灰	紫灰	ロクロナデ	
3	〃	坏		11.0		背灰	背灰	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
4	〃	〃		12.0		〃	〃	〃	

回転ヘラケズリ調整をうける。2の須恵器蓋は1に比べ径が大きく、カエリはない。端部は断面三角形を呈する。3、4は須恵器有台坏の底部で、いずれも高くふんばる高台である。また、底部は回転ヘラケズリされる。

本住居址は検出された遺物から、古墳時代末～奈良時代初頭、和手Ⅰ期に位置づけられる。

第30号住居址

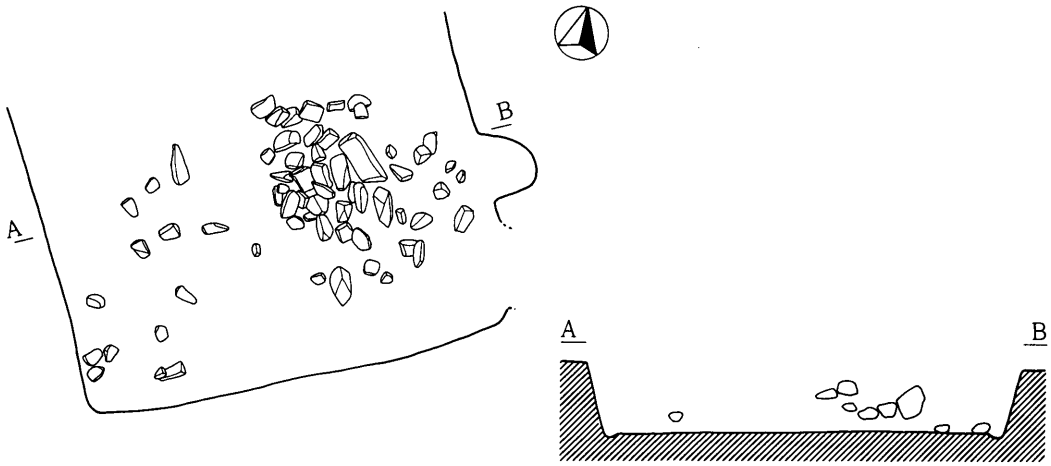
遺構　B、C—17、18区にあり、調査区内発見の住居では最西南端に位置している。

本址は、攪乱もなく遺存状態の良好な住居址である。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土、黒褐色土が堆積している。東西358cm、南北358cmの方形プランを呈し、東南隅には幅60cm、長さ154cm、深さ18cmの張り出し部が設けられている。張り出し部先端には炭化材がみられる。壁は四周ともほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は東壁52cm、西壁54cm、南壁57cm、北壁59cmと深い掘り込みとなっている。壁下には、周溝がめぐる。幅8～12cm、深さ5cmの床面は平坦で、堅緻。床面上の南半部に拳大から50×20cmの大きなものまで大小の多くの礫が散在する。中心は、カマドの前面にあたる部分で、150×160cmの範囲に特に集中している。床面直上から床上40cmの範囲にわたっている。カマドは、東壁中央やや南に偏して設けられている。先端は壁外に出ている。幅90cm、奥行120cmで、両脇に礫が、中央に大きな扁平礫を横にわたしている。右ソデ部には粘土もみられることから石組み粘土カマドであろう。カマド前面の焚口にあたる部分には焼土が厚く堆積し、わずかな掘り込みとなっている。カマド内には土師器片が出土している。カマドの右脇、壁外への張り出し部の前に、径35cm、深さ17cmのピットが穿れている。

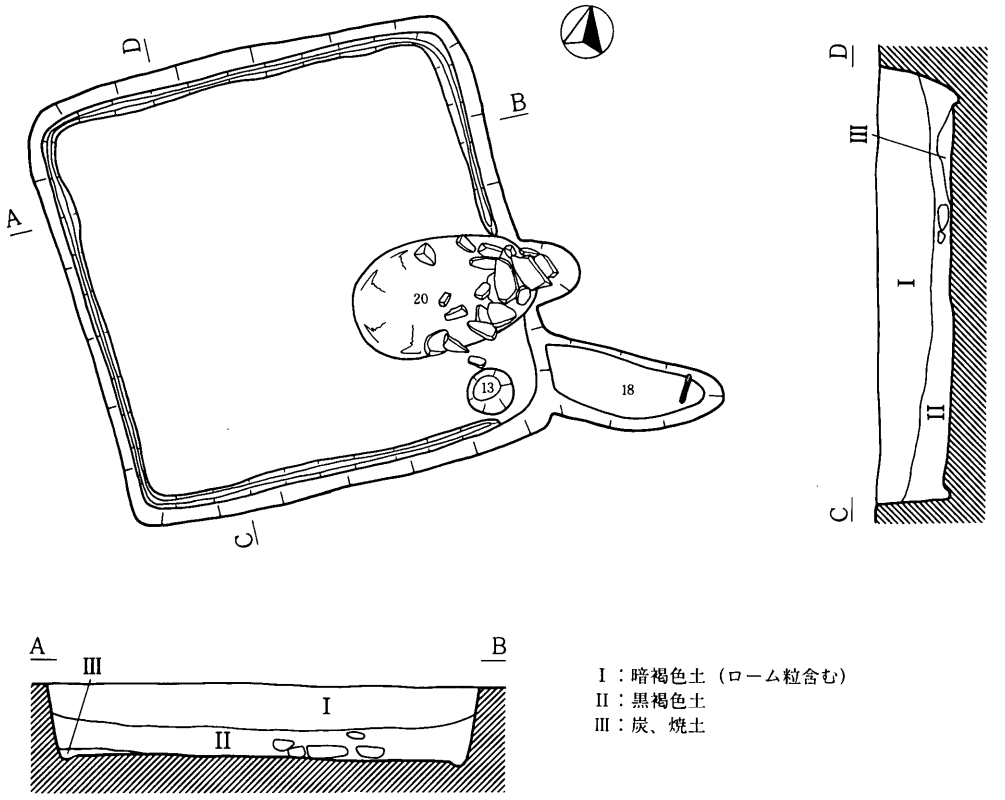
遺構　本住居址から検出された遺物には、土師器甕、須恵器坏がある。

1は土師器長胴甕で、外面は縦、内面は横方向のやや粗いハケ目状の調整をうける。2は土師器甕の底部で、外面はヘラケズリ調整をうける。「武蔵型」甕であろうか。3は須恵器無台坏で、底部に回転糸切り痕を残す。4は須恵器有台坏で、底部は回転ヘラケズリされる。

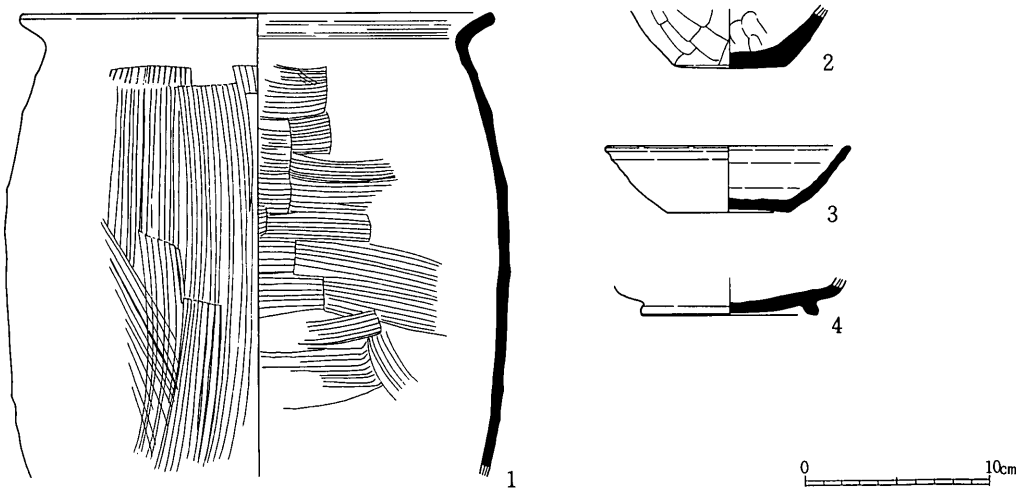
本住居址は検出された遺物から、奈良時代末～平安時代初頭、和手Ⅲ期に位置づけられる。



第30号住居址覆土内集石



第47図　第30号住居址



第48図　第30号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	甕	25.0			暗茶褐	暗茶褐	口縁部ヨコナデ・体部内外面ハケメ	
2	〃	〃		6.0		〃	〃	外面ヘラケズリ・内面指頭痕	
3	須恵	坏	13.0	6.4	3.5	背灰	背灰	ロクロナデ・底部回転糸切り	
4	〃	〃		9.4		背灰~灰白	背灰~灰白	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	

第31号住居址

遺構　E、F—1区にあり、調査区域内では最東端に位置する。

住居址覆土は、ローム粒を含む暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土がレンズ状にきれいに堆積し、壁際にはロームに近い茶褐色土が入り込んでいる。攪乱のない自然堆積の状況をよく示している。

住居は、東西298cm、南北269cmを測る小形の隅丸方形を呈する。壁は四周ともよく残り、遺存状態は良い。西壁のみ垂直に掘り込まれているが、他の3壁は傾斜のある掘り込みとなっている。壁高は、東壁41cm、西壁39cm、南壁43cm、北壁40cm。周溝は検出されていない。床面は平坦であり、東北の部分、カマド前面は特に堅く踏み固められている。カマドは、北壁の中央やや東寄りに設けられている。住居が小形のためか壁外に大きく張り出して構築されている。幅40cm、奥行115cm。焚口付近と内部に焼土の残存が著しい。カマド底面には支脚石が埋設されている。柱穴は発見されていない。

遺物　本住居址から検出された遺物には、土師器甕、須恵器坏がある。

1は土師器甕の口縁部である。器面の磨耗が著しく判然としないが、外面はヘラケズリ調整をうけるか、2は土師器甕の底部で、外面はハケ目状調整される。3は須恵器坏で底部は回転糸切

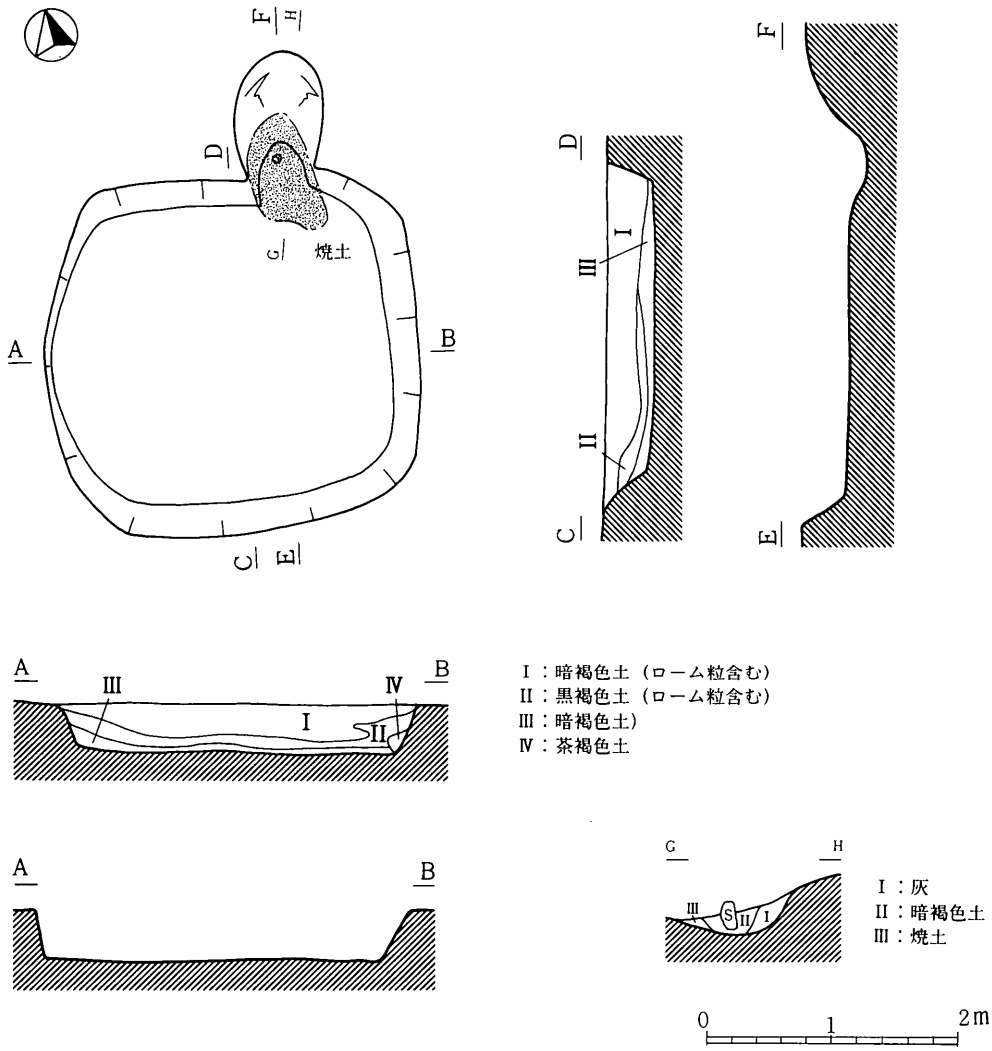
り痕を残す。

本住居址は検出された遺物から、奈良時代末～平安時代初頭、和手III期に位置づけられようか。

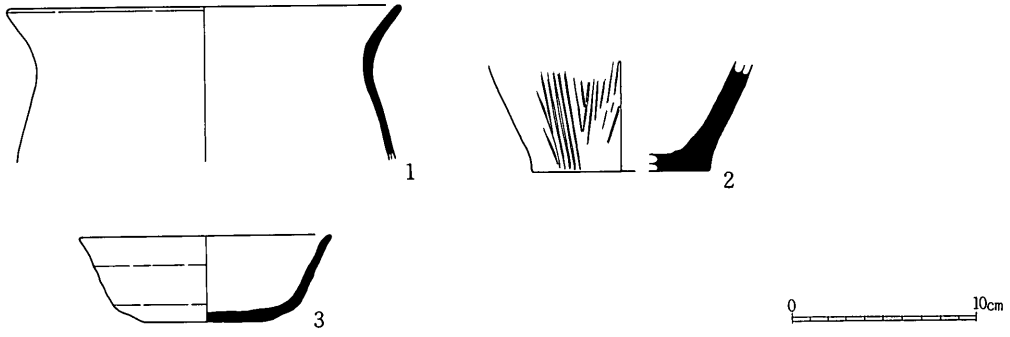
第32号住居址

遺構　F―4、5区にあり、南東部分を24号住居と重複する。調査区域内では東半の北側にあたる。

本址は、南側部分が攪乱のため失われてしまっているが、それ以外の部分の遺存状態は良い。覆土の状態は、住居中央にローム粒を多く含む暗褐色土があり、これを取り囲むように壁周囲に



第49図　第31号住居址



第50図　第31号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	甕	21.0			茶褐	茶褐	口縁部ヨコナデ	外面磨耗
2	〃	〃		9.4		〃	〃	外面ハケメ	
3	須恵	坏	13.4	6.6	4.6	灰白	灰白	ロクロナデ・底部回転糸切り	

暗褐色土があり、さらに壁際には黒褐色土がみられ、ドーナツ状に土層が堆積しており、本遺跡発見の他の住居の覆土とは堆積状況が異なっている。

東西343cm、南北は不明であるが東西と同規模と思われる方形プランがある。壁は、南壁を除き残りは良く、ともに垂直に近い掘り込みとなっている。壁高は、東壁20cm、西壁27cm、北壁22cm、周溝は、北壁下の一部と東壁下にあり、幅8～12cm、深さ5cmと浅い。床は平坦で堅緻なしっかりした状態を示している。壁北沿いの床面上にはカマド石の崩れかと思われる礫が散乱している。カマドは、北壁と西壁とのコーナーに設けられている。礫があることから石組みカマドと思われる。幅43cm、奥行40cmで、内部には焼土が充満している。カマド内および、その周囲には土器が集中して出土している。柱穴の発見はない。

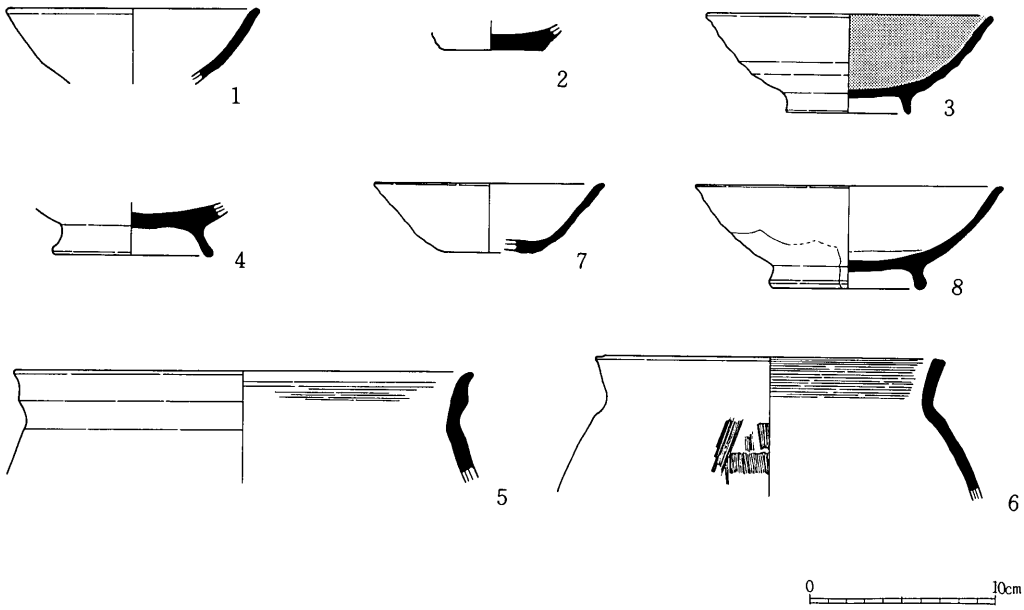
遺物　本住居址から検出された遺物には、土師器坏、埦、甕、須恵器坏、灰釉陶器埦がある。

1は底部が欠損しているため判然としないが、土師器坏であろうか。2は土師器坏の底部で、回転糸切り痕を残す。3は土師器埦である。内面は黒色研磨され、底部に糸切り痕を残す。4も土師器埦と思われる。高く外にふんばる高台を有する。5、6は土師器甕である。5は口縁部にヨコナデ痕が明瞭に残る。6は体部外面に細かいハケ目状調整をうける。口縁端部は断面四角形を呈する。7は須恵器坏で、焼成は不良で生焼け気味である。底部は回転糸切りによって切り離される。8は灰釉陶器埦である。

本住居址は検出された遺物から、平安時代中期、和手IV期に位置づけられる。

第33号住居址

遺構　F、G—19、20区にあり、調査区最西端に位置する。本址と34・35・29・30の各住居址



第51図　第32号住居址出土土器

土 器 観 察 表

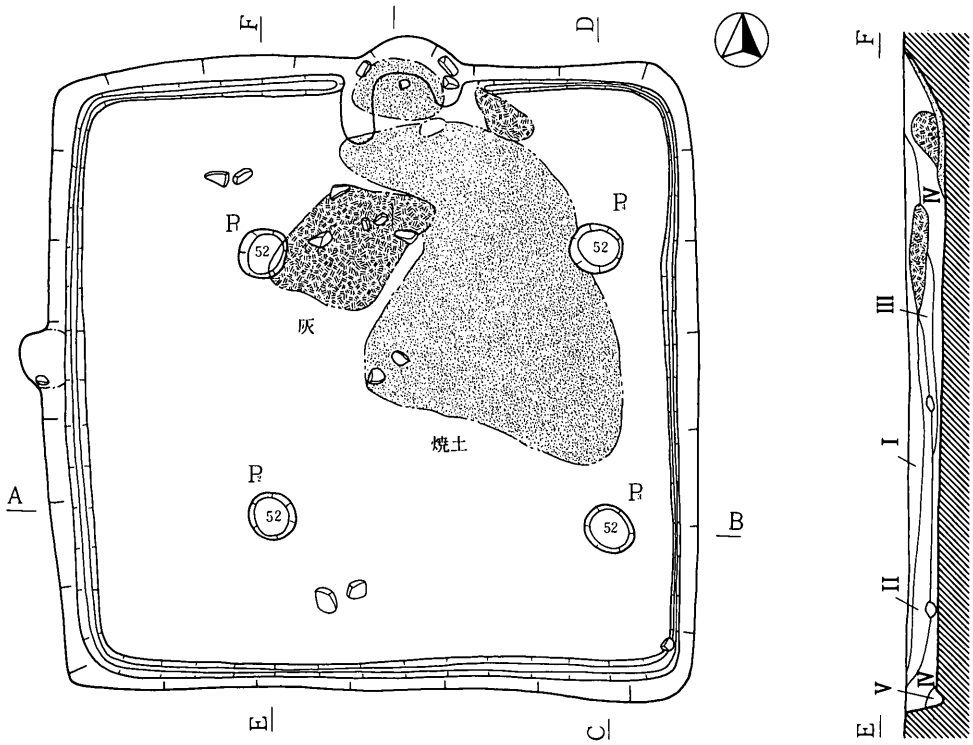
番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	坏	13.0			茶褐	茶褐	ロクロナデ(？)	磨耗
2	〃	〃		5.4		淡茶	淡茶	ロクロナデ・底部回転糸切り	
3	〃	埦	15.0	6.4	5.2	茶褐	黒	ロクロナデ底部回転糸切り・内面ミガキ・黒色処理	
4	〃	〃		8.4		明茶	明茶	ロクロナデ	磨耗
5	〃	甕	24.4			淡茶	茶褐	ロクロナデ・口縁部内面カキメ	
6	〃	〃	18.4			赤褐	〃	口縁部ヨコナデ・口縁内面カキメ・外面細かいハケメ	
7	須恵	坏	12.0	5.0	3.5	灰白	灰白	ロクロナデ・底部回転糸切り	焼成不良
8	灰釉	埦	16.2	8.0	5.3	緑灰	緑灰	ロクロナデ・内面中央ナデ・釉・漬け掛け	

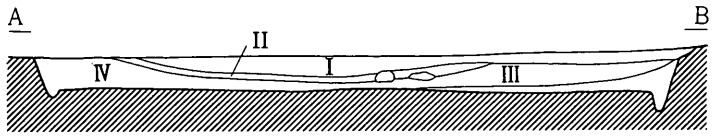
との間には20m前後の区間地域が横たわっていることから、同一集落での異グループに属する住居かもしれない。

検出時、暗褐色土の明瞭な落ち込みによって容易に住居の遺存が知られた住居址で、その遺存状態は極めてよかった。覆土の状態は、上層から順に暗褐色土、黒褐色土、茶褐色土、ローム粒をわずかに含む暗褐色土がレンズ状にきれいに堆積し、壁際および周溝内には黒色土を若干含む暗褐色土が入り込んでいる。自然堆積の状態を示す安定した在り方を示している。

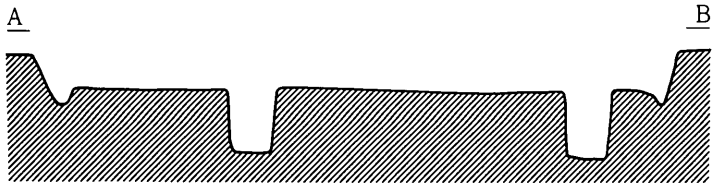
住居は、旧住居に貼床しており、前後2回にわたって使用されている。壁の状態、柱穴の在り方は新旧とも同一であるのじ、カマド、床を造り直したのみであったと思われる。

壁は、四周ともよく残り、掘り込みも鋭い。新の住居の壁高は、東壁38cm、西壁26cm、南壁27cm、北壁29cm。旧の住居は新より10～15cmほどさらに掘り下げられている。柱穴は4本あり、P_1（46×38、—52）、P_2（40×38、—52）、P_3（42×35、—52）、P_4（43×38、—53）で、壁までの間隔は等間隔でなく全体的に東に偏している。床はともに平坦で、極めて堅緻。新の住居の床面

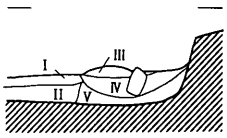




Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：黒褐色土
Ⅲ：茶褐色土（ロームブロック含む）
Ⅵ：暗褐色土（ローム粒含む）
Ⅴ暗褐色土（黒色土を若干含む）



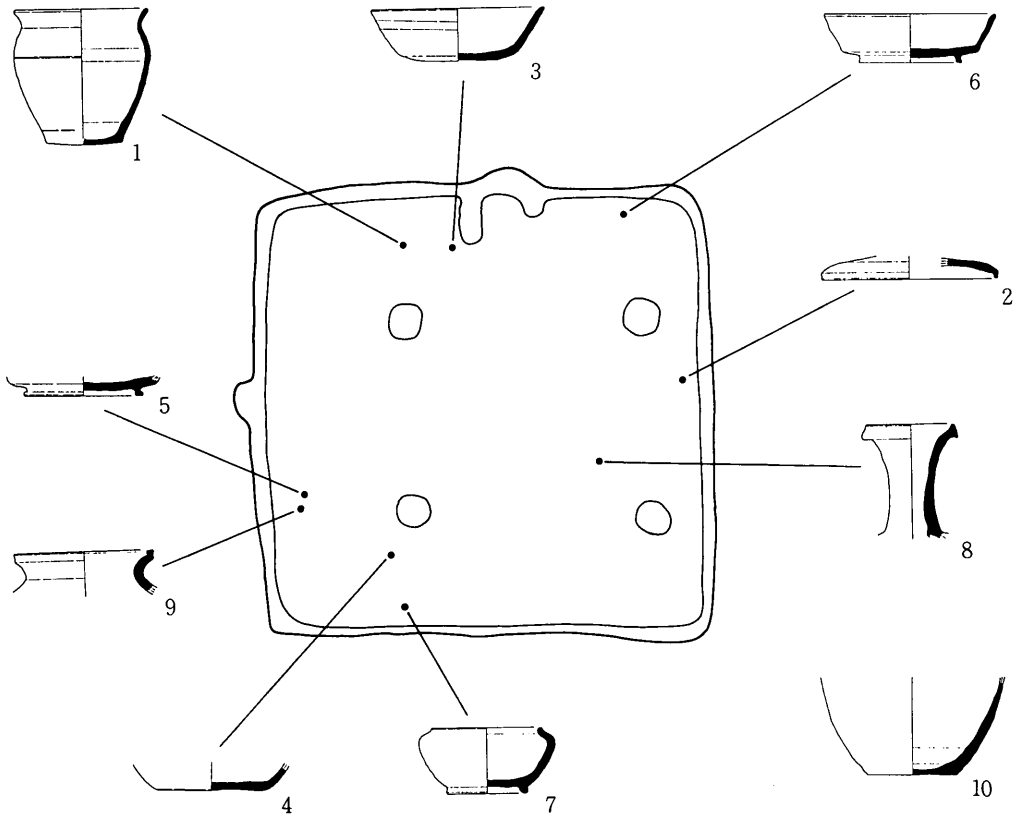
カマドセクション



Ⅰ：貼床
Ⅱ：ローム質褐色土
Ⅲ：黒色土（焼土含む）
Ⅳ：赤褐色土
Ⅴ：焼土

0　1　2m

第52図　第33号住居址



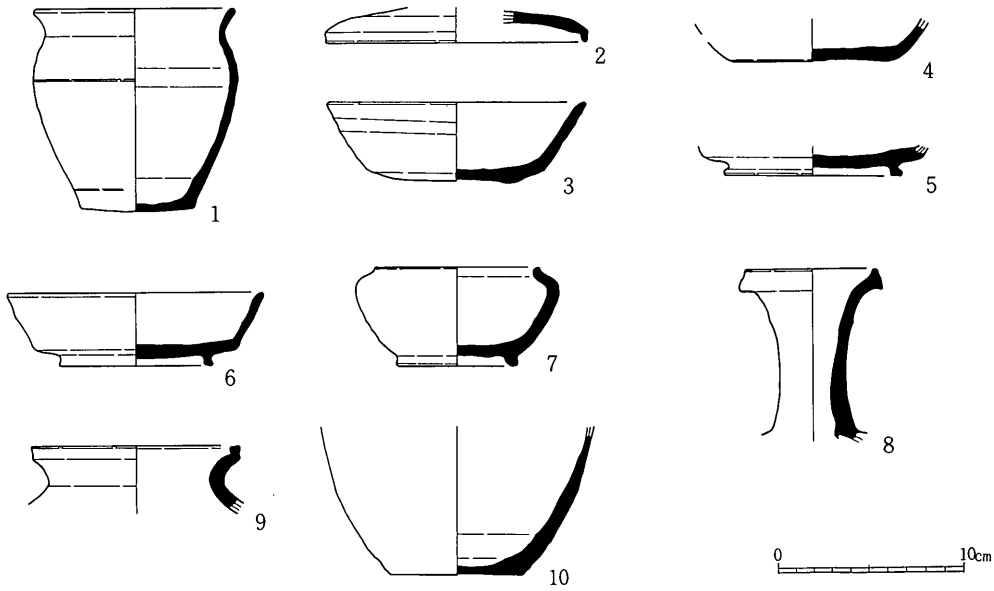
第53図　第33号住居址土器出土状態

上には、北壁際から中央にかけて広い範囲に焼土が散布し、P_1から中央にかけて灰と礫が散在している。周溝は新の住居では全周しているが、旧の住居には認められなかった。幅6～15cm、深さ4～14cm、カマドは、新の住居ものもは北壁中央に、旧の住居は西壁中央にそれぞれ設けられている。新の住居のカマドは、幅92cm、奥行90cmで、カマド上面および前面に礫が散乱していることから石組み粘土カマドと思われる。カマド内部には焼土が充満し、焚口の中央には支脚石が埋設されている。旧の住居のカマドは、壁上に焼土と多少の掘り込みの痕跡が残されているのみである。

新、旧の住居は、柱はそのままに、カマドを90度移し、床を再構築したものと思われる。

遺物　本住居址から検出された遺物には、土師器甕、須恵器蓋、坏、壺類がある。

1は土師器小型甕である。ロクロ手法により整形されたものと思われ、外面体部に沈線が巡る。2は須恵器蓋で、天井部は回転ヘラケズリされる。3、4は須恵器無台坏である。3は底部を静止糸切り技法により切り離され、4は回転ヘラ切り技法により切り離される。ともに切り離し痕を顕著に残す。5、6は須恵器有台坏である。ともに低く外にふんばる高台を有する。5、6い



第54図　第33号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	整形・調整の特徴	備考
1	土師	甕	10.6	6.0	10.5	暗茶	暗茶	ロクロナデ	
2	須恵	蓋	14.0			灰白	灰白	〃　天井部回転ヘラケズリ	
3	〃	坏	13.8	6.5	4.2	青灰	青灰	〃　底部静止糸切り	
4	〃	〃		7.0		灰白～青灰	灰白～青灰	〃　底部回転ヘラ切り	
5	〃	〃		9.6		黄灰	黄灰	〃　底部糸切り後回転ヘラケズリ	
6	〃	〃	13.6	8.2	3.8	青～緑灰	青～緑灰	〃　内面中央部ナデ・底部回転ヘラケズリ	
7	〃	短頸壺	8.6	6.4	5.2	灰白	灰白	〃	
8	〃	長頸壺	6.8			緑灰	緑灰	〃	
9	〃	壺	11.0			青灰	〃	〃	
10	〃	〃		7.0		〃	青灰	底部糸切りか(？)	

ずれも底面回転ヘラケズリ調整をうけるが、5は中央部に糸切り痕を残す。7は須恵器短頸壺である。焼成もよく、胎土も精選されたものである。8は須恵器長頸壺で、全体を自然釉で覆われる。9は須恵器壺の口縁であろう。10は壺の底部であろうか。底面に粗い糸切り痕状の整形痕が残る。

本住居址は検出された遺物から、奈良時代前葉～中葉、和手II期に位置づけられる。

第34号住居址

遺構　F、G—14、25区にあり、東壁が35号住居と重複している。調査区域内の西半にあり、東側から伸びてきた住居址群は、本址を西端として区画される。

北側半分は攪乱が著しく、遺存状態は極めて悪い。東西370cmを測るので、南北もほぼ同規模の方形プランを呈すると思われる。壁は、南壁は完存するが東・西壁はその一部を残す程度で、北

壁は全く失われている。南壁は43cm、東壁37cm、西壁46cmの壁高をもち、掘り込みはほぼ垂直になされている。周溝は、カマド周囲を除き各壁下を全周していたと思われるが、北側は流失してしまっている。幅７～17cm、深さ４cmと狭く、浅い。床面は、平坦で堅い。床面上には、炭化材、焼土の散布が著しい。特に東壁中央付近と床面中央付近に集中して散在し、焼土は中央からカマドにかけての場所に著しい。カマドは西壁中央に設けられ、幅70cm、奥行60cmほどの規模で、粘土のみが遺存しているので粘土カマドであったろう。カマド右手脇には土師器が多数出土している。カマドの北側には、62×46cm、深さ24cm、ほぼ垂直の掘り込みの貯蔵穴と考えられるピットが設けられている。

遺物　本住居址から検出された遺物は少なく、土師器甕、須恵器蓋がある。

１は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に開く、体部外面と口縁部内面はハケ目状調整が施される。２は土師器甕で、肩部の張る特異な形態を呈する。体部外面には細かいハケ目状調整がみられる。３は須恵器蓋で、受部を有する坏とセットになるものと思われる。体部に一状の沈線が巡る。内外面磨耗が著しいため判然としないが、天井部ヘラ切り後一部手持ちヘラケズリがなされるか。

本住居址は検出された遺物から、古墳時代末～奈良時代初頭、和手Ｉ期に位置づけられると考えられる。

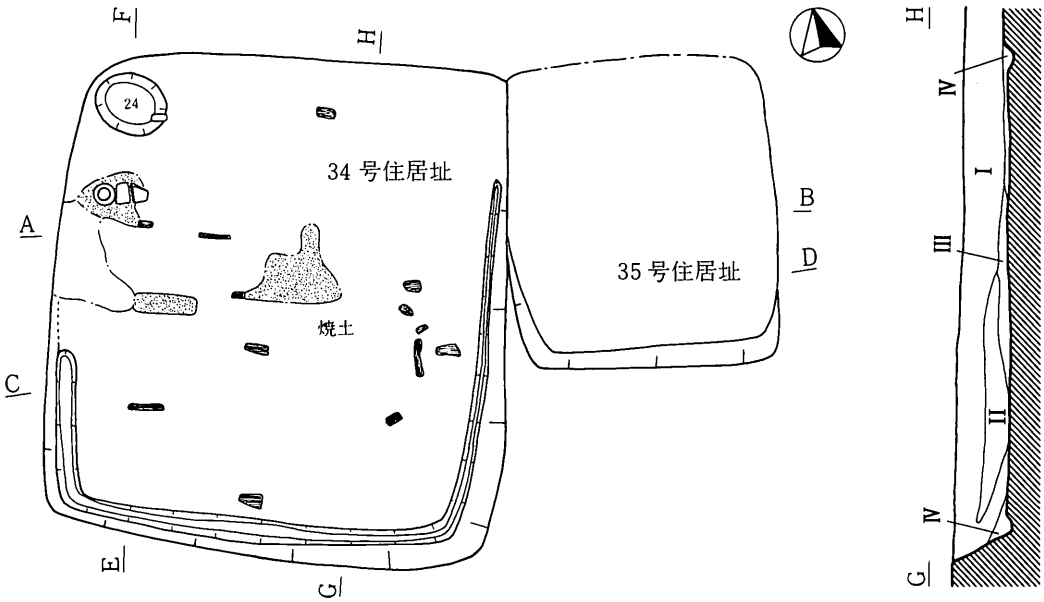
第35号住居址

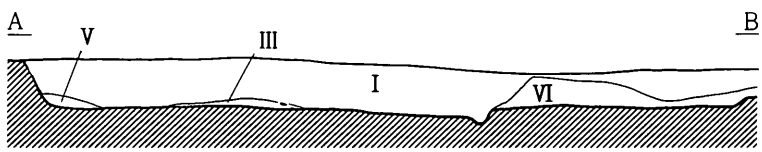
遺構　Ｆ、Ｇ―14区にあり、西側部分が34号住居址と重複している。調査区域内での位置は、西半部にあたり、すぐ南側には28号住居が存在する。

東壁および北壁は攪乱のため失われ、西壁は34号住居址と重複しており、わずかに南壁と東壁と北壁とのコーナー部分が残存しているにすぎない。そのため正確なプラン、規模は知り得ないが、残存部分から推定すれば東西220cm、南北250cmのやや南北に長い方形と呈する小形の住居のようである。南壁は、壁高28cmで、傾斜となる掘り込みである。床は、北西部分がやや起伏に富むが他の部分はおおむね平坦で良く踏み固められている。調査した限りではカマド、周溝、柱穴等の施設は発見されなかった。

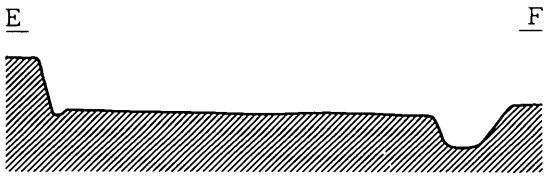
本址は、和手遺跡の住居址中最小の規模をもつ特殊な住居である。

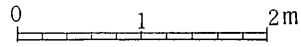
遺物　攪乱のためか、遺物はほとんど検出されていない。須恵器甕の破片と近世後期の埦の破片が２～３点出土しているが、本住居址の時期の詳細は不明である。



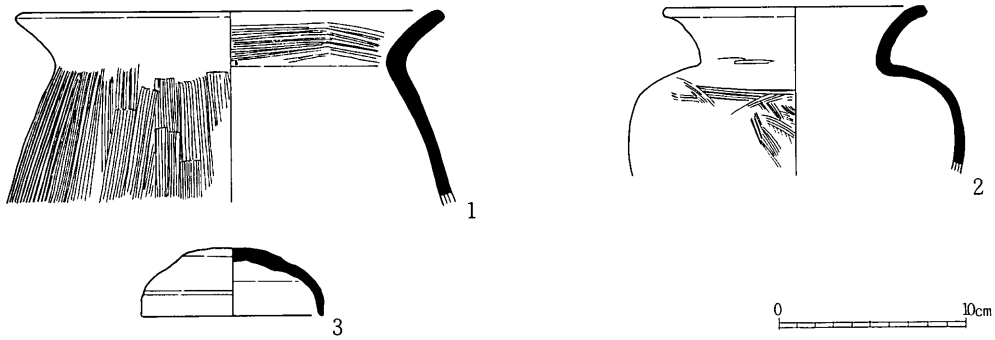


Ⅰ：暗褐色土（炭粒含む）
Ⅱ：黒色土
Ⅲ：暗褐色土（焼土多く含む）
Ⅳ：褐色土
Ⅴ：焼土
Ⅳ：暗褐色土（ローム粒含む）





第55図　第34、35号住居址



第56図　第34号住居址出土土器

土 器 観 察 表

番号	種別	器形	寸法(cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	甕	22.0			茶褐	茶褐	外面体部・口縁内面ハケメ	
2	〃	〃	14.0			暗茶	暗茶	口縁部ヨコナデ・外面ハケメ	
3	須恵	蓋	9.8		3.5	白色	白色	ロクロナデ・天井部ヘラ切り	磨耗

2）建物址

(1)　第1号建物址

B—8、9、10区にあり、溝1の東に隣接し、P_4は18号住居址を重複する。

本址は、桁行3間（530cm）、梁行2間（420cm）の建物址である。柱間寸法（柱穴掘り方中心間）は、桁行で150—200cm、梁行170—200cmを測る。掘り方の形態は、径50cm前後の円形を一般とするが、P_4は長径100cmの楕円形を呈する。掘り方の深さは25～40cmとバラツキがあり、住居の柱穴状の掘り込みとなっている。

(2)　第2号建物址

B、C—13、14、15区にある。調査区内では西半にあたり、今回発掘された3棟の建物址の中で、本址のみが溝1の西に位置する。27号住居址、小竪穴群の西に接し、北側は小空間を隔てて28号住居址に面している。

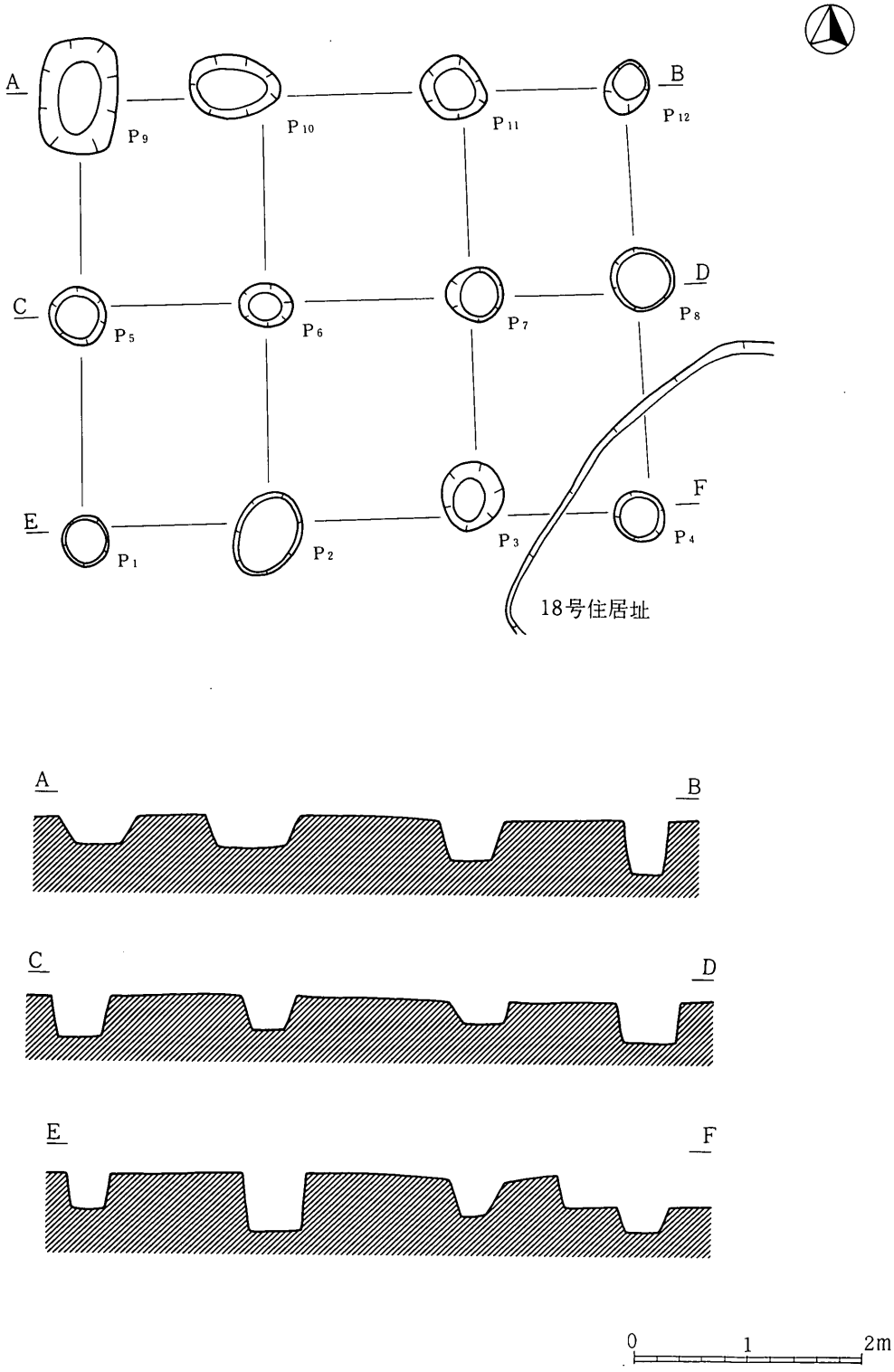
形態は、桁行4間（851cm）、梁行2間（440～456cm）である。柱間寸法（柱穴の中心間）は、桁行で220～180cm、梁行200～210cmを測る。掘り方の形状は、径50cm前後の円形を一般とし、東隅、西隅の3穴が楕円形を呈する。掘り込みは、柱穴状に垂直になされ、深さは20～40cmと深浅のバラツキがみられる。

(3)　第3号建物址

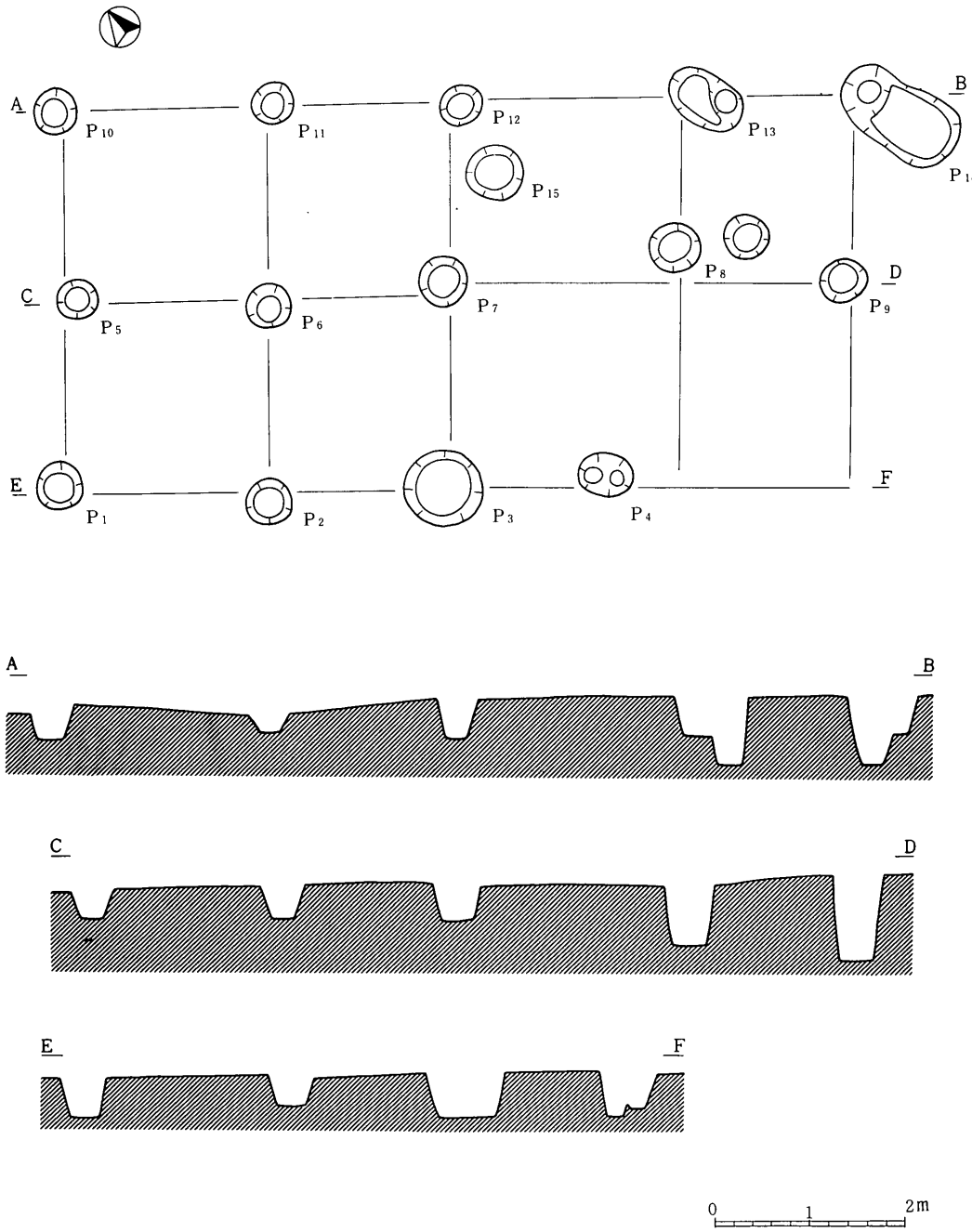
3号建物址は、E、F—8、9、10区にあり、1部は溝2と重複している。3号方形周溝墓、10号小竪穴に隣接する。形態は、桁行3間（6.0m）、梁行3間（5.05m）である。柱間寸法（柱穴掘り方の中心から中心）は、桁行で250cm、梁行で200～220cmを測る。掘り方の形態は、P_5が円形、P_1、P_3、P_4、P_6が楕円形、P_7、P_9が隅丸方形、P_2、P_8が不整形を呈し、P_2、P_3、P_4、P_5、P_6は底面にさらに柱当状の掘り込みを有する。掘り方は、大半が垂直に掘り込まれているが、P_3、P_6はやや傾斜をなす。底面は平坦を呈する。覆土は、暗褐色土、明茶褐色土、黒褐色土で、P_4、P_7は柱痕の痕跡が認められる。深さ40～50cmである。

第5表　住居址一覧表

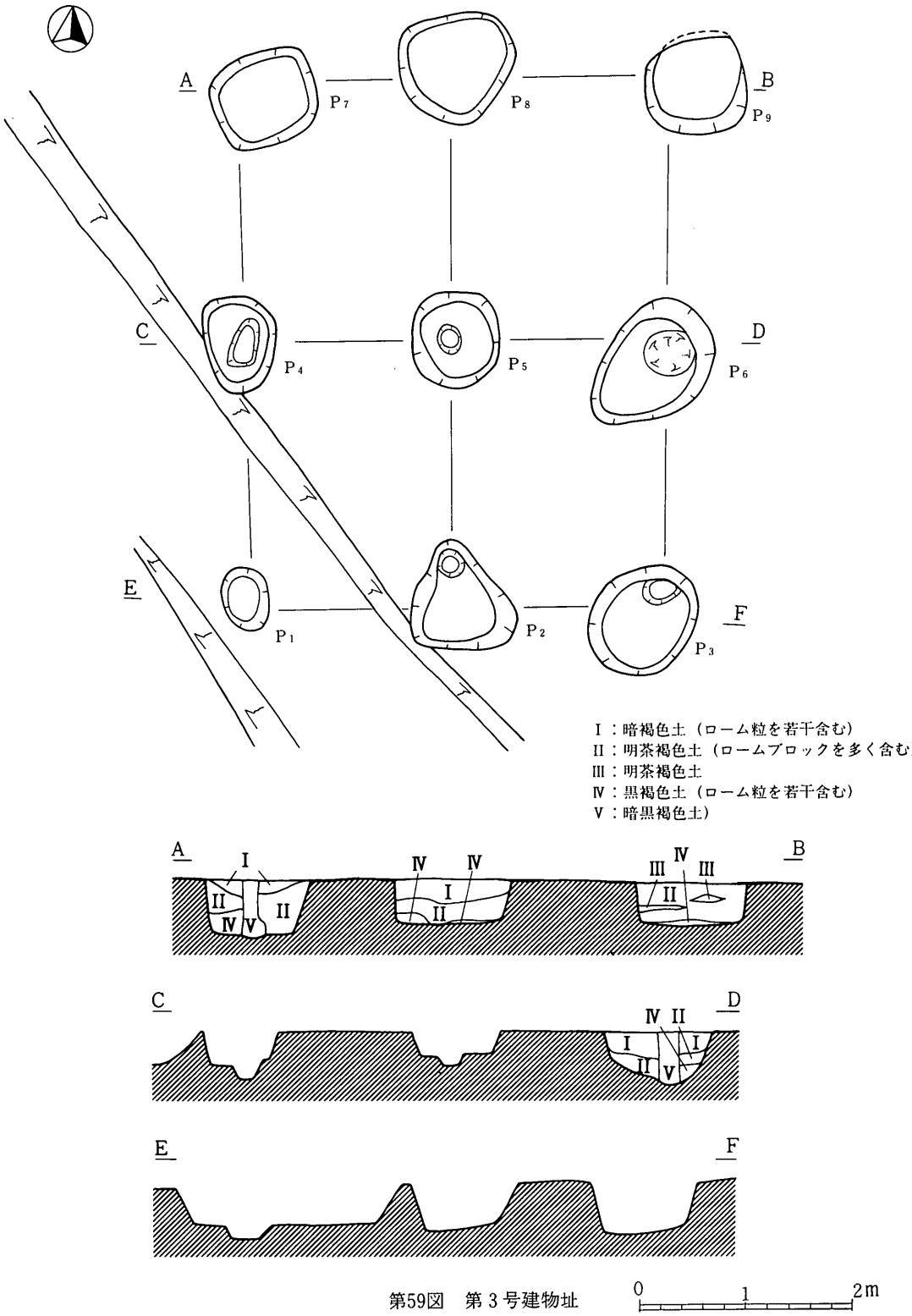
住居	グリット	平面形	方　向	規　模	壁　高	床　面	カ マ ド	位　置	周溝	切合い関係	備　考
12	B．C－1	隅丸方形	N－11°－W	335×330	12・30・18・20	堅緻	粘土	西壁中央	なし	なし	
13	D．E－1	隅丸方形	—	—	—・13・—・16	平坦、堅緻	—	—	なし	—	
14	D．E－7	隅丸方形	N－72°－W	345×260	5・10・11・12	平坦、堅緻	石組、粘土	北壁西寄	なし	なし	焼失家屋
15	C．D－7	隅丸方形	N－88°－N	435×405	28・21・25・29	堅緻	なし		なし	←16	
16	C－6．7	隅丸方形	N－18°－W	515×458	20・10・—・27	平坦、堅緻	石組、粘土	西壁中央	一部	→15 ←17	焼失家屋
17	C－6	隅丸方形	—	385×(160)	2・7・5・—	堅緻	粘土	東壁南寄	なし	→16	
18	A．B－8	隅丸方形	N－23°－E	388×350	26・28・22・23	堅緻	なし		なし	なし	
19	C．D－3	方　形	N－20°－W	350×—	—・34・46・42	平坦、堅緻	粘土	西壁中央	半周	→20	
20	C．D－1．2	方　形	N－24°－W	846×764	37・48・41・38	平坦、堅緻	粘土	東壁中央	全周	←19	焼失家屋
21	A－7．8	方　形	N－74°－W	395×—	43・48・—・40		なし		なし	なし	
22	E－6．7	隅丸方形	N－9°－W	(500)×415	19・21・32・—		石組、粘土	西壁中央	なし	←23	焼失家屋
23	F．G－6．7	方　形	N－80°－E	734×721	26・30・24・22	堅緻	石組、粘土	両壁中央	全周	→22	
24	F－3．4	方　形	N－4°－W	455×424	32・14・9・30	平坦、堅緻	粘土	東壁中央やや南	半周	←32	
25	C－8．9	隅丸方形	N－83°－W	470×405	20・—・—・14	平滑	なし	なし		←26	
26	C．D－9	隅丸方形	N－80°－W	460×450	—・10・—・18	一部貼床	粘土	北壁中央東寄	一部有り	→25	
27	B－12．13	方　形	N－30°－W	—×—	22・—・—・25	平坦	粘土	東壁	一部有り	なし	
28	E．F－13．14	隅丸方形	N－82°－E	415×388	45・40・47・43	平坦、堅緻	石組、粘土	東壁中央	全周	なし	
29	C．D－16	隅丸方形	N－S	542×373	35・38・32・38	傾斜	石組	西壁中央	カマド附近を除き全周	なし	
30	B．C－17．18	方　形	N－74°－E	358×358	52・54・57・59	平坦、堅緻	石組、粘土	東壁中央南寄り	全周	なし	
31	F－1	隅丸方形	N－83°－E	298×269	41・39・43・40	平坦	石組、粘土	北壁中央東寄り	なし	なし	
32	F－4．5	方　形	E－W	343×(315)	20・27・—・22	平坦、堅緻	石組	西壁、北壁とのコーナ	一部有り	→24	
33	F．G－19．20	方　形	N－85°－E	513×502	38・26・27・29	平坦、堅緻	旧一不明 新－石組粘土	旧西壁中央 新北壁中央	旧には無 新には全周	なし	建て直し
34	F．G－14．15	方　形	N－S	370×—	37・46・—・43	平坦、堅緻	粘土	西壁中央	カマド附近を除き全周	→35	
35	F．G－14	方　形	N－85°－E	(250)×(220)	—・—・28・—	平坦、堅緻	なし	なし	なし	←34	



第57図　第1号建物址



第58図　第２号建物址


A
B
C
D
E
F
P7
P8
P9
P4
P5
P6
P1
P2
P3
Ⅰ：暗褐色土（ローム粒を若干含む）
Ⅱ：明茶褐色土（ロームブロックを多く含む）
Ⅲ：明茶褐色土
Ⅳ：黒褐色土（ローム粒を若干含む）
Ⅴ：暗黒褐色土）
0
1
2m

第59図　第3号建物址

第6表　建物址ピット一覧表

第1号建物址

柱穴No.	平　面　形	規　模（cm）	深　さ（cm）	柱痕跡	備考
P_1	円　形	44× 28	29.5		
P_2	楕円形	78× 54	48.5		
P_3	円　形	60× 60	29.5		
P_4	円　形	50× 46	9.0		
P_5	円　形	50× 50	36.5		
P_6	円　形	48× 40	27.0		
P_7	円　形	50× 48	18.5		
P_8	円　形	56× 54	32.5		
P_9	隅丸長方形	102× 68	26.5		
P_{10}	楕円形	84× 76	27.0		
P_{11}	隅丸方形	54× 54	26.5		
P_{12}	楕円形	40× 50	47.5		

第2号建物址

柱穴No.	平　面　形	規　模（cm）	深　さ（cm）	柱痕跡	備考
P_1	円　形	48× 48	42		
P_2	円　形	52× 48	32		
P_3	円　形	88× 88	48		
P_4	楕円形	60× 44	47・38		重複
P_5	円　形	46× 42	29		
P_6	円　形	48× 46	33		
P_7	円　形	54× 54	37		
P_8	円　形	52× 52	62		
P_9	円　形	48× 46	90		
P_{10}	円　形	48× 48	36		
P_{11}	円　形	44× 44	19		
P_{12}	円　形	44× 42	40		
P_{13}	楕円形	84× 52	40.5・72		重複
P_{14}	楕円形	156× 76	40.5・72		重複
P_{15}	円　形	62× 56	65		
P_{16}	円　形	48× 48	14		

第3号建物址

柱穴No.	平　面　形	規　模（cm）	深　さ（cm）	柱痕跡	備考
P_1	楕円形	60× 48	14		
P_2	不整形	108×100	63	26× 24	
P_3	楕円形	104× 96	47.5	36× 28	
P_4	楕円形	90× 70	45.5	46× 26	
P_5	円　形	92× 88	33.5	30× 22	
P_6	楕円形	136× 94	55.5	47× 42	
P_7	隅丸方形	100× 88	51		
P_8	円　形	110×104	44		
P_9	円　形	94× 86	39.5		

3）方形周溝墓

(1)　第3号方形周溝墓

F—9、10区で発見された3号方形周溝墓は、南側の一部を調査し得たのみで、大半は調査区域外に伸びている。

調査されたのは南西のコーナー部の周溝で、幅50～65cm、深さ20cm前後を測る。

4）小竪穴

1号小竪穴

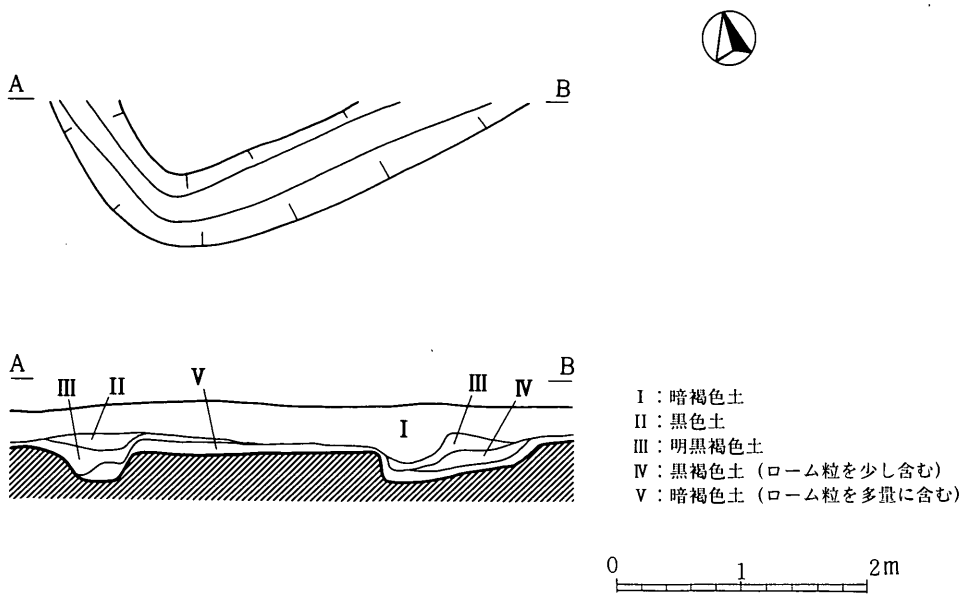
A—3区にあり、調査区域内では東南端にあたる。160cm×94cmの略楕円形を呈する。掘り込みはタライ状をなし、覆土は、上からローム粒を含む暗褐色土、黒褐色土となっている。

2号小竪穴

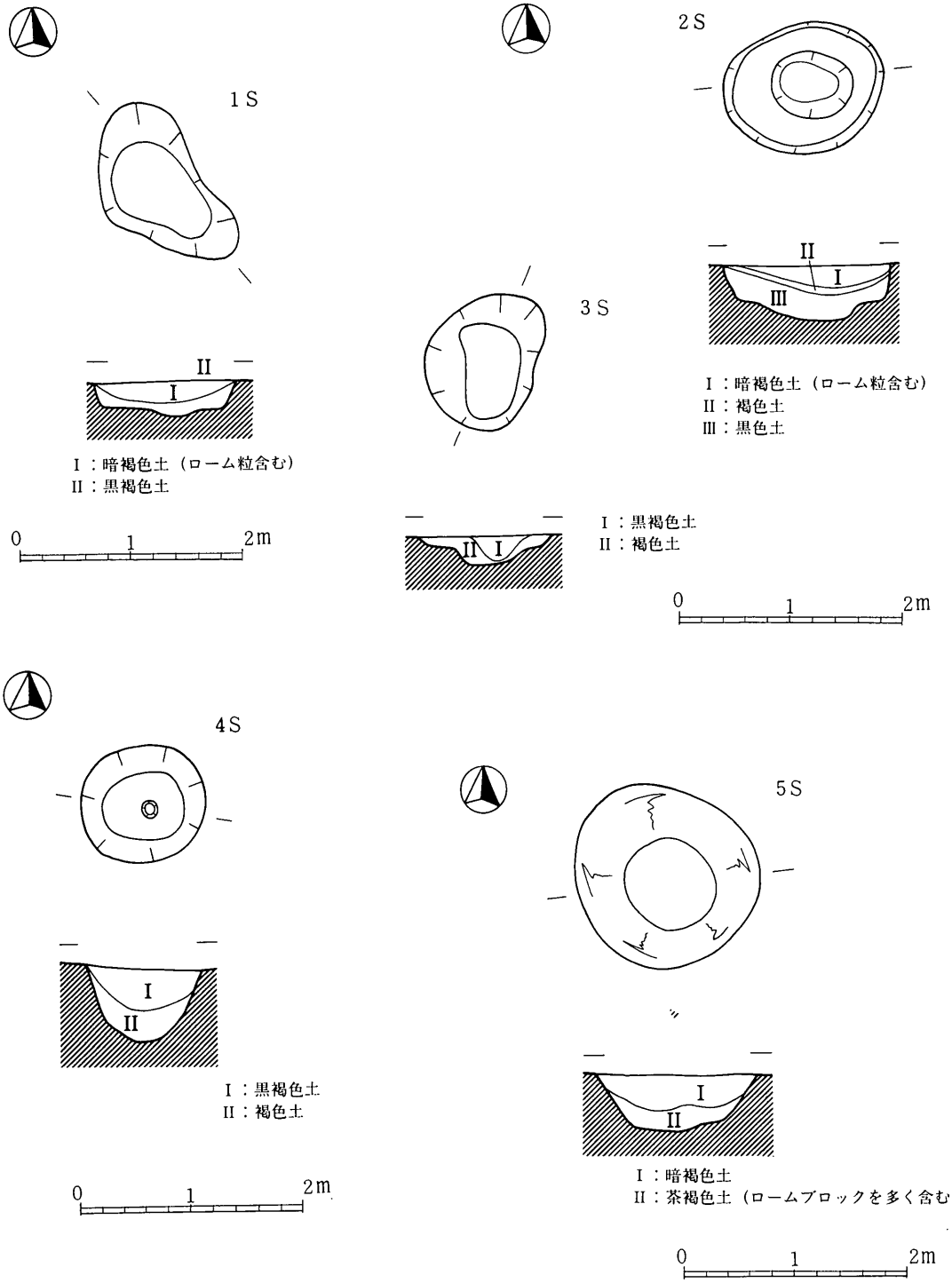
A—4、5区にある。149cm×116cmの楕円形を呈し、掘り込みは垂直で、深さ32cm。底面には、75cm×55cm、深さ23cmのピットがある。ローム粒を含む暗褐色土、褐色土、黒褐色土が自然流入の状態で堆積している。

3号小竪穴

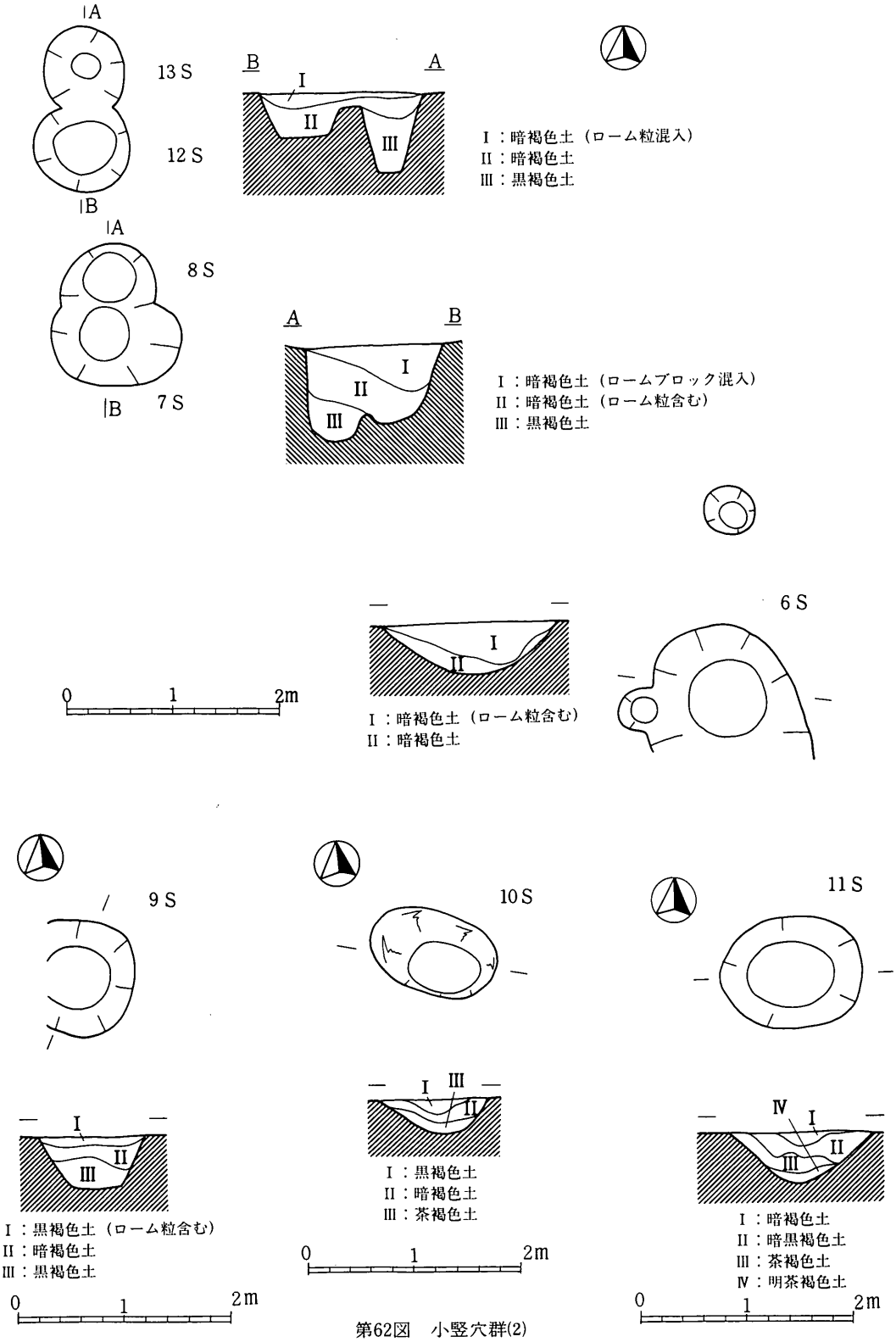
A—5区にある。128cm×102cmの不整円形を呈する。深さ34cmの擂鉢状である。黒褐色土、褐



第60図　第3号方形周溝墓


1S
II
I
I：暗褐色土（ローム粒含む）
II：黒褐色土
0
1
2m
2S
II
I
III
I：暗褐色土（ローム粒含む）
II：褐色土
III：黒色土
3S
II
I
I：黒褐色土
II：褐色土
0
1
2m
4S
I
II
I：黒褐色土
II：褐色土
0
1
2m
5S
I
II
I：暗褐色土
II：茶褐色土（ロームブロックを多く含む）
0
1
2m

第61図　小竪穴群(1)


13 S
12 S
8 S
7 S
6 S
9 S
10 S
11 S
Ⅰ：暗褐色土（ローム粒混入）
Ⅱ：暗褐色土
Ⅲ：黒褐色土
Ⅰ：暗褐色土（ロームブロック混入）
Ⅱ：暗褐色土（ローム粒含む）
Ⅲ：黒褐色土
Ⅰ：暗褐色土（ローム粒含む）
Ⅱ：暗褐色土
Ⅰ：黒褐色土（ローム粒含む）
Ⅱ：暗褐色土
Ⅲ：黒褐色土
Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：暗褐色土
Ⅲ：茶褐色土
Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：暗黒褐色土
Ⅲ：茶褐色土
Ⅳ：明茶褐色土
0　1　2m

第62図　小竪穴群(2)

色土が覆土となっている。

4号小竪穴

E—8区にある。東西110cm、南北103cmの円形を呈し、深さ82cmの擂鉢状をなす。底面中央には、径14cm、深さ6cmの小ピットが穿たれている。覆土は黒褐色土・褐色土がレンズ状に堆積している。

5号小竪穴

E—1区にあり、31号住居址に隣接する。東西172cm、南北166cmのほぼ円形を呈する。深さ56cmの擂鉢状をなす。覆土は、暗褐色土、ローム粒を多量に含む茶褐色土がレンズ状に堆積している。

6号小竪穴

B—11、12区りあり、南側半分は調査区域外のため未調査。東西146cmを短径とする楕円形を呈し、掘り込みは擂鉢状をなす。西端にピットが穿たれている。ローム粒を含む暗褐色土がレンズ状に堆積し、その下層に暗褐色が薄く認められる。

7号小竪穴

B—12区にあり、8号小竪穴と重複している。東西125cm、南北88cmの楕円形で、深さ77cmと深い。暗褐色土がレンズ状に堆積し、それが8号小竪穴上面にも続いていることから8号小竪穴より新しいものと考えられる。

8号小竪穴

B—12区にあり、7号小竪穴を重複している。東西88cm、南北はこれより長くなる楕円形を呈すると思われる。掘り込みは垂直になされている。黒褐色土が堆積し、その上面には7号小竪穴の覆土が覆っている。7号小竪穴に先行して造られたものであろう。

9号小竪穴

C—10区に発見され、調査区の西端に位置し、一部は調査区域外に及んでいる。直径112cmの円形プランで、深さ50cmの擂鉢状を呈する。覆土は、上面に黒褐色土が、その下位には暗褐色、黒褐色が堆積している。内部からの遺物の出土はない。

10号小竪穴

G—9区にある。東西118cm、南北75cmの楕円形を呈し、深さ38cmの傾斜の緩い擂鉢状をなす。黒褐色土、暗褐色土、茶褐色土がレンズ状に堆積し、自然流入の状況を良く示している。

11号小竪穴

F—19区にあり、調査区内では最西端に発見された小竪穴である。33号住居址に隣接する。平面形は、166cm×130cmの楕円形で、掘り込みは深さ66cmの擂鉢状である。暗褐色土、暗黒褐色土、茶褐色土、明茶褐色土がレンズ状に堆積している。

12号小竪穴

B—13区にあり、北側を13号小竪穴と重複している。東西90cm、南北84cmのほぼ円形を呈し、深さ42cmのタライ状の掘り込みを有する。ローム粒混入の暗褐色土と暗褐色土とが堆積している。

13号小竪穴

B—14区にあり、南側を12号小竪穴と重複している。東西75cm、南北80cmの円形プランで、深さ71cmと深い。掘り込みは傾斜が著しい。ロームを混入した暗褐色土、暗褐色土、黒褐色土が堆積している。

第7表　小竪穴一覧

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備　　考
1	162×90	楕　円	N－40°－W	タライ状	100×67	平坦	25	
2	142×116	楕　円	N－80°－E	タライ状	127×100	二段	48	
3	125×98	不整円	N－24°－E	タライ状	80×40	二段	25	
4	111×107	円　形	N－80°－W	擂鉢状	74×64	丸底	64	
5	168×163	円　形	N－84°－E	タライ状	84×80	平坦	50	
6	135×(134)	楕　円	N－83°－W	擂鉢状	72×70	丸底	48	
7	120×(76)	楕　円	N－80°－W	擂鉢状	50×46	丸底	73	
8	87×(58)	楕　円	E－W	コップ状	50×45	丸底	88	
9	107×(100)	円　形	N－20°－E	コップ状	(62)×58	平坦	49	
10	120×75	楕　円	N－80°－W	擂鉢状	65×45	丸底	31	
11	135×104	楕　円	N－88°－E	擂鉢状	82×60	丸底	49	
12	90×(80)	円　形	N－80°－E	コップ状	55×49	平坦	40	
13	75×(75)	円　形	E－W	コップ状	26×(25)	平坦	73	

5）溝

溝１

遺構　A、B、C、D、E、F—10、11、12区(29m)にかけて存在し、調査区域外の南側、北側へと続いている。

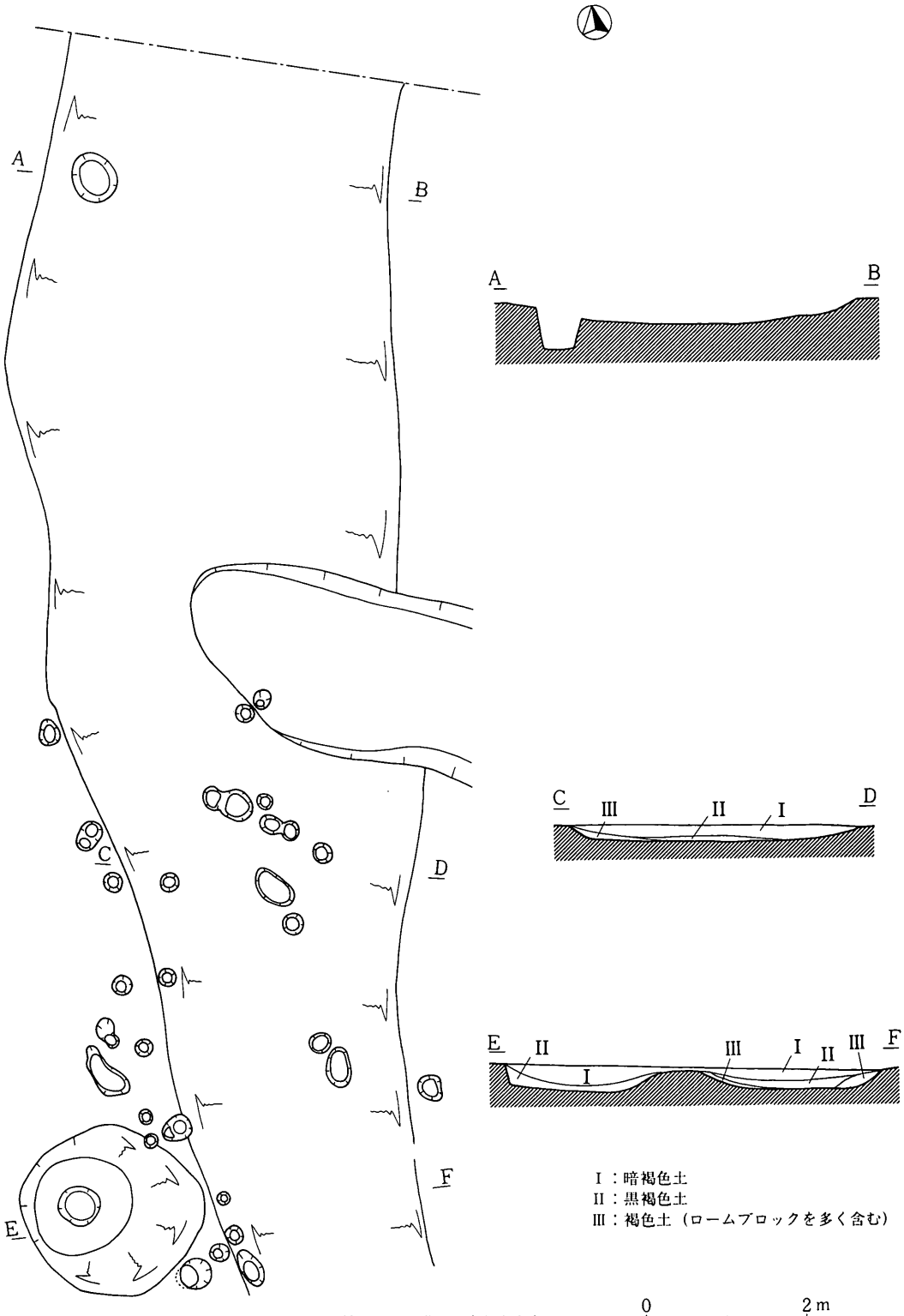
検出時、ローム面への暗褐色土の落ち込みが南北に細長く発見され、溝状遺構の存在を確認した。暗褐色土を除去すると、黒褐色土が溝底面までレンズ状に堆積し、溝の壁周辺にはロームブロックを多く含む褐色土が認められた。

南端のB—10区付近では、幅260cm、深さ26cm、10～20cm前後の礫が６個集められた部分がある。C—10、11区付近では、幅をやや増し350cmとなり、深さ25cmとなる。D、E—11、12区では幅は250～350cmと広狭が著しくなり、深さ15～24cmと深浅がみられる。D—11では礫が１ケ所にかたまることもなく散在する。このD、E—11、12では、溝内および溝の西側にピットが多数検出されている。径15cmから大きなものでは径30～45cmのものまであり、主体は径20cmほどのものである。溝に伴うものか否か明確でない。溝の西側にあるものは柵列のようにも感じられるが判然としない。F、G—11、12区では、東側から溝２が入り込み、幅は最大の480cmとなる。ピットはほとんど見当らない。

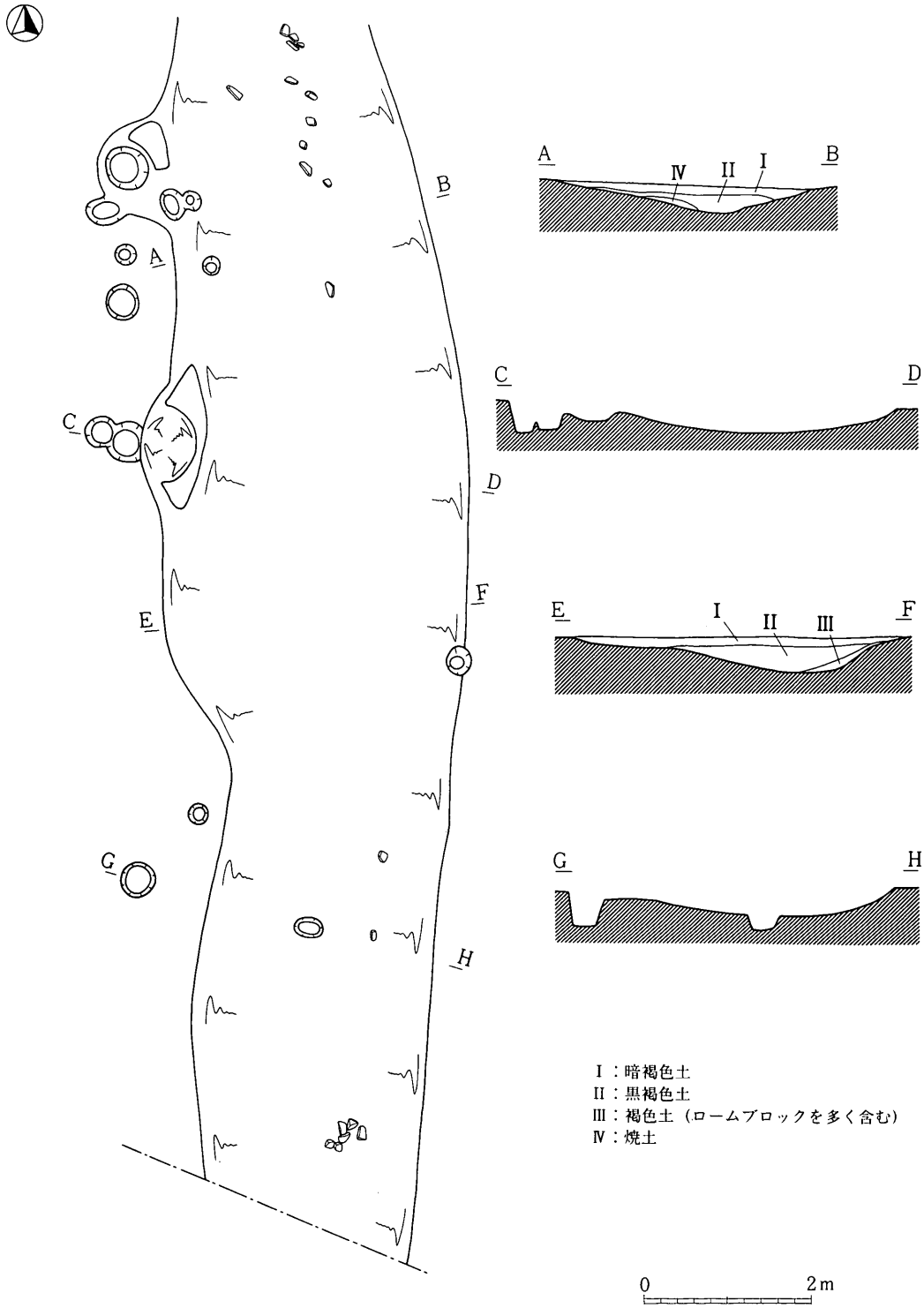
この溝状遺構の底面は、起伏が著しいが、堅緻で、斜面はゆるやかである。人工的なものか自然のものか判断する資料に乏しいが、遺物の出土状態、水が流れたような痕跡が全く認められないことなどから、人工的なものとの感を強く受ける。

遺物　本溝址からは、大量の須恵器が検出された。器種は、蓋、坏、鉢、平瓶、横瓶、長頸壺、短頸壺、甕などである。

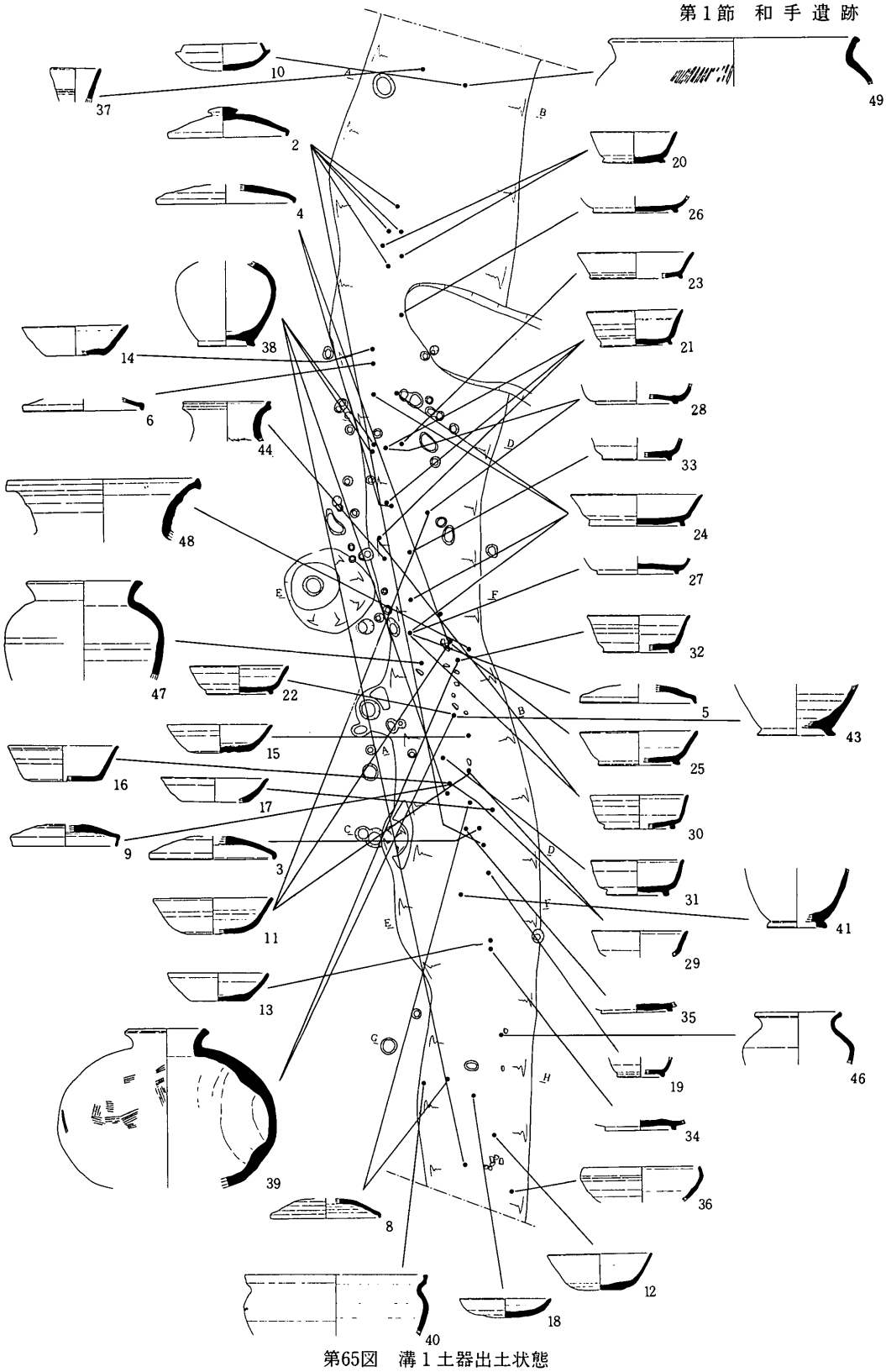
１～９は須恵器蓋で、１～８は有台坏と、９は壺とセットになるものと思われる。有台坏とセットとなるこれらの蓋は、口径17cm以上の大形のもの(４)と、口径15cm前後のもの（１～３、５～８)の２つに大きくわかれる。また、８は他に比べ胎土が粗く、青灰色を呈するが、１～７は、胎土もよく、外面に自然釉のかかるものがある。(２、３、５、７)、なお９は天井部の一部に糸切り痕を残しており、糸切り技法により切り離された後、周辺部を回転ヘラケズリしたものである。11～18は須恵器無台坏である。11、12は器高が比較的高く、底部はやや丸みをおびる。13～15、17は、器高が低く、底部は平らである。16は酸化焔焼成されたもので、20号住で検出された一連の坏（４～７）と、同じ性格をもつものと思われる。18は皿形を呈する小型の坏である。なお底部調整であるが、16、17については判然としないが、他はすべて回転ヘラ切り技法によって切り離され、切り離し痕をそのまま残している。19～35は須恵器有台坏である。器形によって二種類に大きくわかれる。外側にふんばる高台をもち、全体形が台形状のもの（19～28）と直立する高台をもち、底部と体部の境の稜が比較的はっきりして、全体形が箱形に近いもの（29～35）の二つである。前者は、法量によりさらに区別できよう。口径11～12cmの小形のもの（20、21、22)、口径15cm前後のもの（23、25)、口径17cm前後の大形のもの（24）の３つに分化される。器高はす



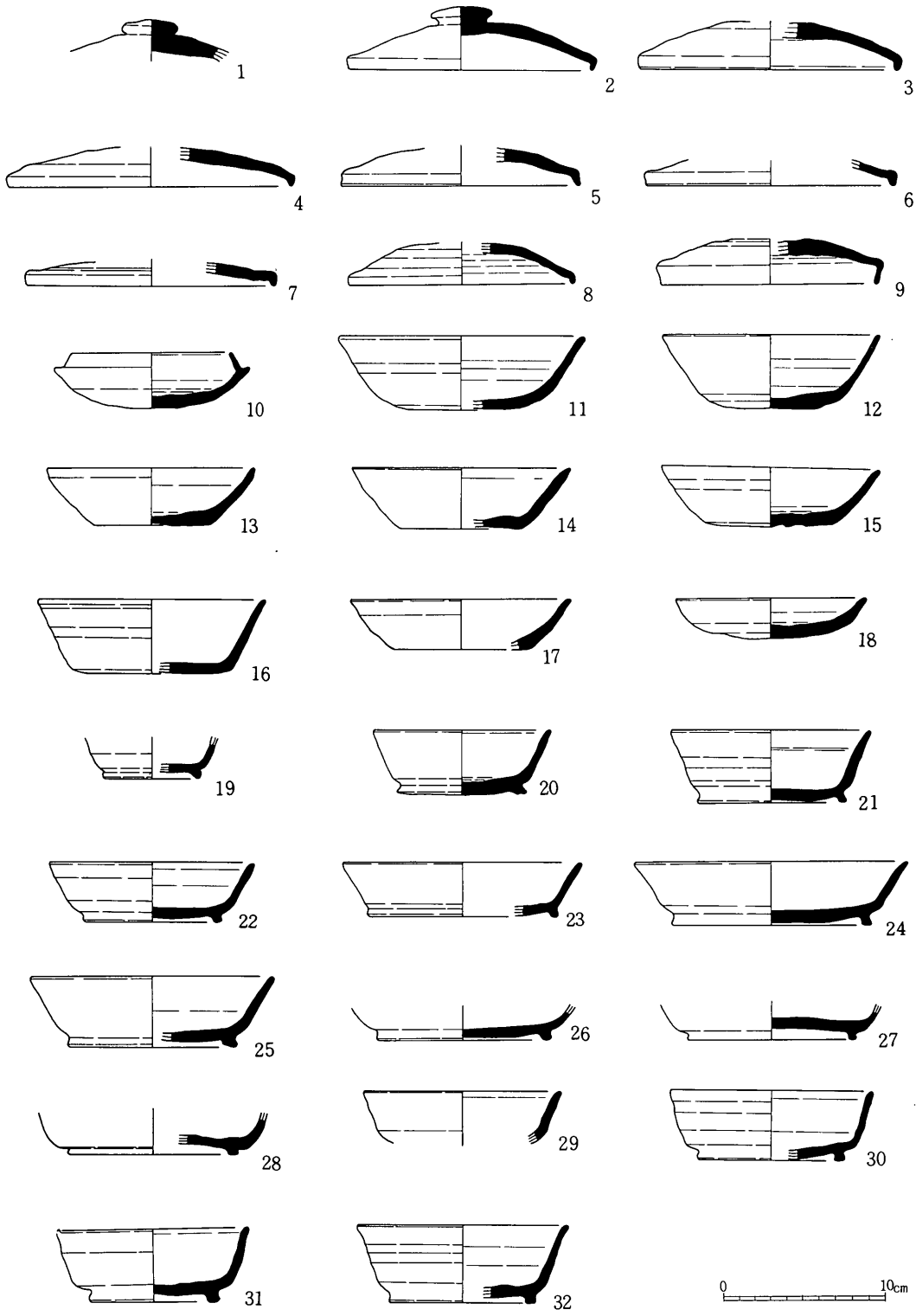
第63図　溝1（北半部）



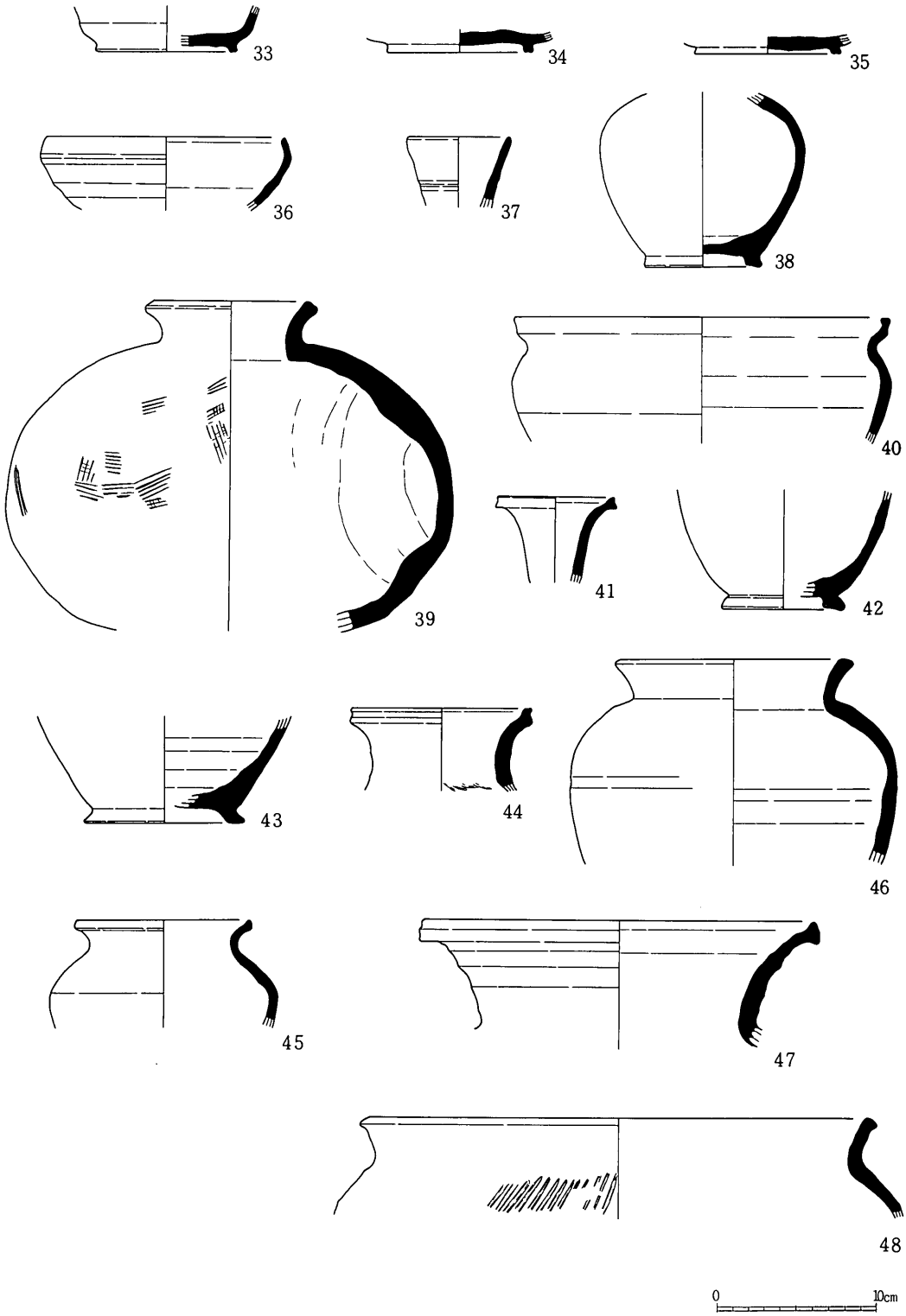
第64図　溝１（南半部）



第65図　溝1土器出土状態



第66図　溝 1 出土土器(1)



第67図　溝1出土土器(2)

土器観察表

番号	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	整形・調整の特徴	備考
1	須恵	蓋				灰白	灰白	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ(?)	
2	〃	〃	15.0		4.0	緑灰	〃	ロクロナデ	外面自然釉
3	〃	〃	15.6			〃	〃	ロクロナデ・内面中央部ナデ	〃
4	〃	〃	17.4			灰白	〃	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ	
5	〃	〃	14.6			〃	〃	〃 〃	外面自然釉
6	〃	〃	15.0			〃	〃	ロクロナデ	
7	〃	〃	15.2			〃	〃	ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ	外面一部自然釉
8	〃	〃	13.8			青灰	青灰	〃 〃	
9	〃	〃	13.0			灰白～青灰	灰白～青灰	ロクロナデ・天井部・糸切り後・回転ヘラケズリ	
10	〃	坏	9.8		3.4	黒灰	青灰	ロクロナデ・内面中央部ナデ・重ね焼きの口縁部付着	外面自然釉
11	〃	〃	15.0	6.4	4.5	灰白	灰白	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	焼成不良
12	〃	〃	13.2	6.0	4.5	青灰	青灰	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り後・手持ちケズリ	
13	〃	〃	12.8	7.2	3.5	白灰	白灰	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	
14	〃	〃	13.4	7.6	3.7	〃	〃	〃 〃	
15	〃	〃	13.4	8.0	3.7	青灰	青灰	〃 〃	
16	〃	〃	14.0	9.6	4.5	赤褐	赤褐	ロクロナデ・底部手持ちヘラケズリ(?)	酸化焔焼成
17	〃	〃	13.6			灰白	灰白	ロクロナデ・ヘラ切り(?)	
18	〃	〃	11.6		2.5	茶灰	茶灰	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	22号住出土土器と一致
19	〃	〃		5.8		青灰	青灰	ロクロナデ	
20	〃	〃	11.0	8.0	4.0	灰白	灰白	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	底部窯印の一部
21	〃	〃	12.0	9.2	4.5	〃	〃	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリナデ・内面中央ナデ	
22	〃	〃	12.6	8.6	4.2	青灰	青灰	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ・内面中央ナデ	
23	〃	〃	14.6	11.8	3.3	〃	〃	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
24	〃	〃	16.8	12.4	3.9	〃	〃	〃 〃	
25	〃	〃	14.8	10.2	4.4	〃	〃	〃 〃	
26	〃	〃		10.8		茶灰	茶灰	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ後ナデ・内面中央ナデ	
27	〃	〃		10.4		灰白	灰白	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ・内面中央ナデ	
28	〃	〃		10.4		青灰	青灰	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
29	〃	〃	12.0			〃	〃	ロクロナデ	
30	〃	〃	12.4	9.0	4.3	〃	〃	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
31	〃	〃	11.8	8.0	4.5	茶灰	茶灰	ロクロナデ・底部回転糸切り後・周辺部回転ヘラケズリ	
32	〃	〃	13.0	9.0	4.7	青灰	青灰	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
33	〃	〃		8.8		〃	〃	〃 〃	
34	〃	〃		9.0		青灰	〃	ロクロナデ・底部手持ちケズリ	
35	〃	〃		9.0		灰緑	茶灰	ロクロナデ・底部回転糸切り後・周辺部回転ヘラケズリ	
36	〃	鉢	14.8			灰白	灰白	ロクロナデ	
37	〃	平瓶	6.2			〃	〃	ロクロナデ・外面・2条沈線巡る	
38	〃	長頸壺	4	7.2		黒灰	青灰	ロクロナデ・底部静止糸切り	自然釉
39	〃	横瓶	9.0			灰白	灰白	口縁部ヨコナデ・体部平行タタキ	
40	〃	鉢	27.2			〃	〃	ロクロナデ	
41	〃	長頸壺	7.			〃	灰黒	〃	自然釉
42	〃	〃		7.6		青灰	灰白	ロクロナデ・体部下部回転ヘラケズリ・底部静止糸切り(?)	
43	〃	〃		10.0		灰白	〃	ロクロナデ・体部下部回転ヘラケズリ	
44	〃	横瓶	11.0			灰白～緑灰	灰白～緑灰	ロクロナデ・内面・体部青海文	自然釉
45	〃	短頸壺	10.6			青灰	青灰	ロクロナデ	
46	〃	〃	14.6			灰白～緑灰	灰白～緑灰	〃	自然釉
47	〃	甕	24.0			灰白	灰白	〃	
48	〃	〃	30.4			白	白	口縁部ヨコナデ・体部外面平行タタキ	磨耗

べて3～4cm前後で一定している。なお、底部調整はすべて回転ヘラケズリ調整をうけ、21、26のようにさらにナデ調整を施すものもある。後者の有台坏は、底径8～9cm前後で一定しており、口径も29～32に関して12～13cm前後とほぼ一定している。底部調整については、すべて回転ヘラケズリ調整をうけ、31、35は中央部に回転糸切り痕を残している。

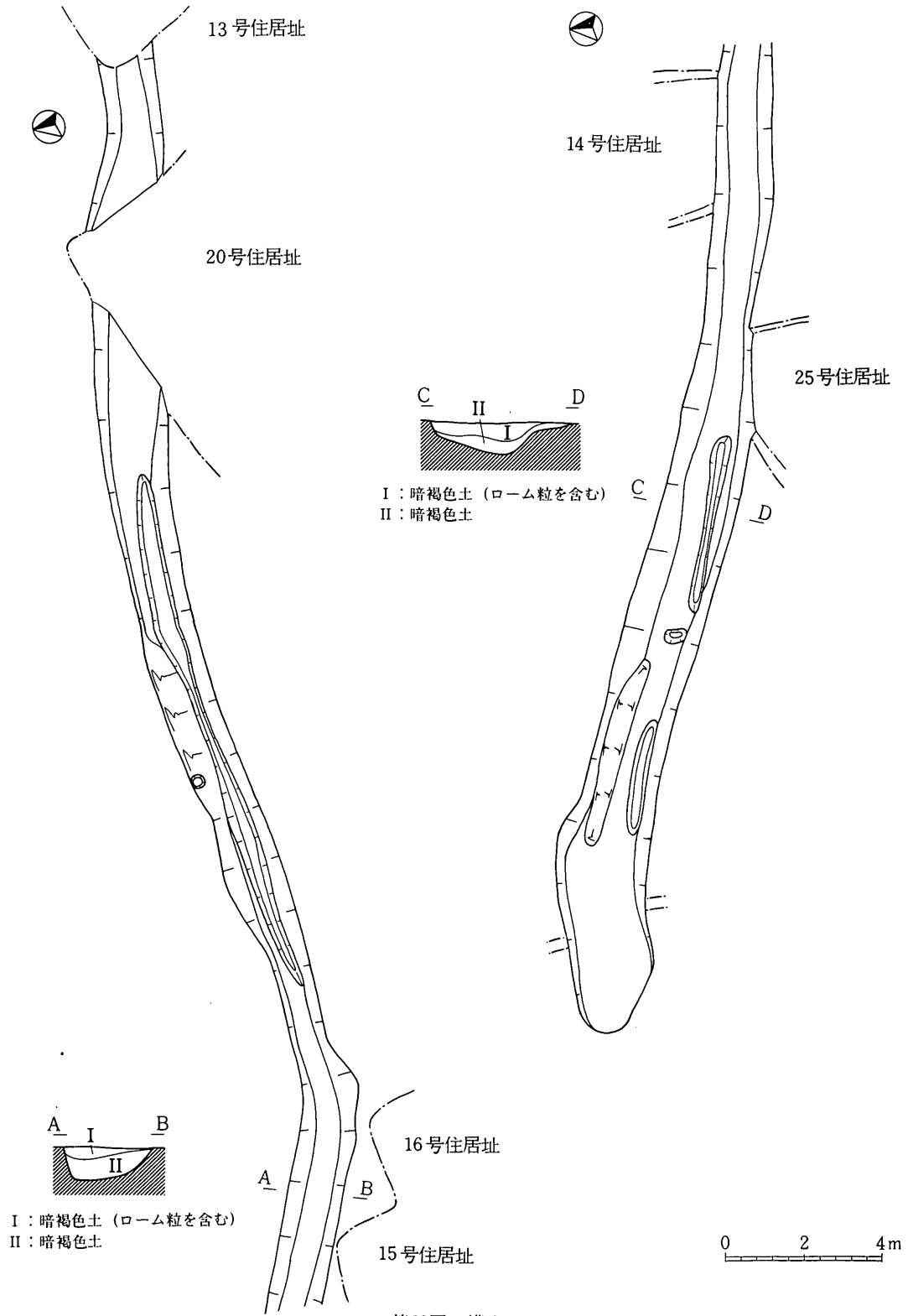
36、40は須恵器鉢形土器である。37は外面に二条の沈線が巡る。平瓶の口縁部であろう。38、42、43は長頸壺の体部～底部で、38は底部に静止糸切り痕を残す。41は長頸壺の口縁部である。39は、横瓶で、外面は平行叩きされる。44も横瓶の口縁部であろうか。45、46は須恵器短頸壺、47、48は甕の口縁部である。

本溝址の継続した時期は、検出された遺物から、古墳時代末～平安時代初頭、和手Ⅰ期～和手Ⅲ期にまたがるものであろう。

溝2

遺構　C、D、E—1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11区にかけて存在する。東側はさらに調査区域外に延びている。

検出時、ローム面へのローム粒を多く含む暗褐色土の落ち込みが溝状に続く部分が発見され、掘り下げると、東西に走る全長54.5mの溝状遺構となり、その西端は1号溝状遺構に達していた。


13号住居址
20号住居址
14号住居址
25号住居址
16号住居址
15号住居址
C
D
II
I
I：暗褐色土（ローム粒を含む）
II：暗褐色土
A
B
I
II
I：暗褐色土（ローム粒を含む）
II：暗褐色土
0
2
4m

第68図　溝2

東端のD—1区は、13号住居址と重複し、E—2、3区では20号住居址によって分断されている。この付近は幅150～180cm、深さ30～40cm。E—4、5区では幅80～140cmと狭くなる。ここまではほぼ西に向かって延びてきた溝が、南西方向に折れ曲がり、方向を変える。E—6、7区では、幅140cmとほぼ一定した幅員で、深さは20cmと浅い。E—8、9区も変化はない。E—10、F—11では、幅200cm、深さ40cmと再び幅広で深くなる。

この溝状遺構の性格であるが、人工・自然どちらとも断定する材料がないため判然としない。

6）遺構外遺物

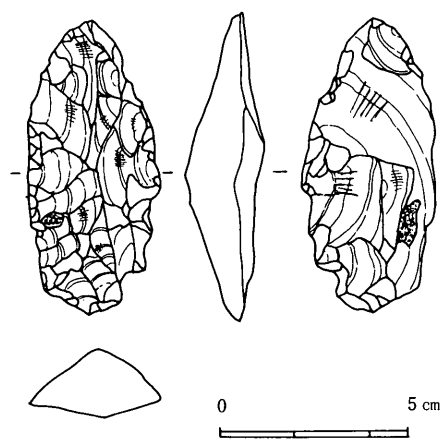
(1)　先土器時代

遺構検出中、23号住居址北脇から出土した尖頭器が1点ある。長さ3.9cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm、重量4.5gの木の葉形尖頭器である。断面形は凸レンズ状を呈する。基部付近に気泡を含む粗雑な黒曜石を素材とし、調整も粗い。

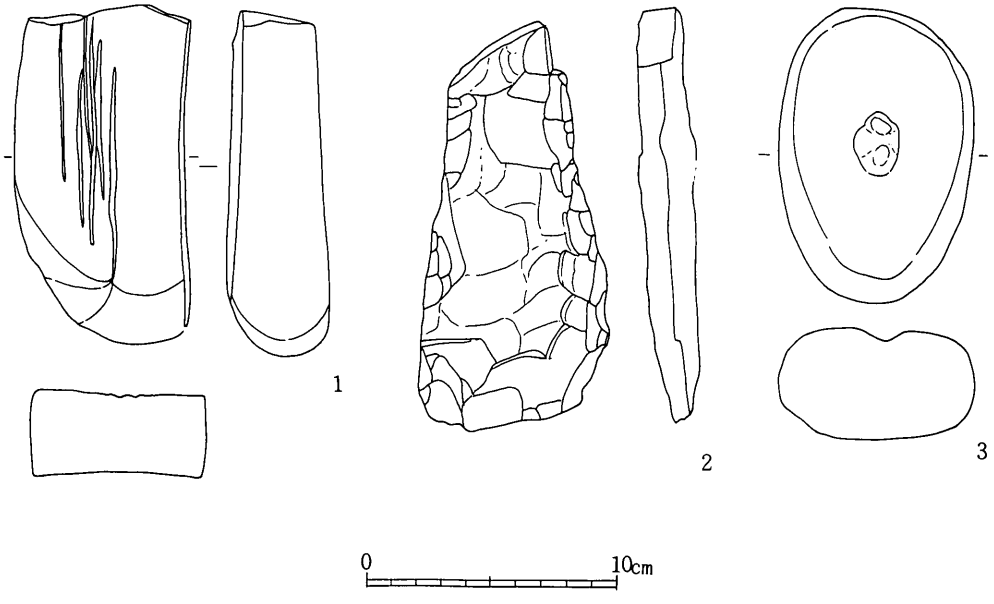
田川左岸に展開する高出遺跡群には、丘中学校、北ノ原、黒崖など松本平で最も先土器時代遺跡が集中している所として知られている。今回の尖頭器の出土は、面的拡がりが更に南にまで達していたことを示すとともに、田川流域の先土器文化を考えるうえで貴重な一資料を提供したといえる。

(2)　縄文時代

住居址の覆土中から縄文時代に属すると思われる打製石斧と凹石が出土している。打製石斧2は、1号溝址から出土したもので、撥形を呈する。重量290gのしっかりした石斧で、調整も比較的丁寧である。凹石3は、29号住居址覆土から出土し、打痕の集中による凹みが表面に残されている。



第69図　先土器時代出土石器



第70図　縄文時代出土石器（1：3）

石器観察表

番号	遺構	種別	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
1	28H	砥石	砂岩	133	35	35	620	
2	溝1	打製石斧	頁岩	160	23	23	290	
3	29H	凹石	凝灰岩	118	43	43	172	

6　成果と課題

1）土器について

今回、和手遺跡の調査によって、奈良時代を中心とする、7～9世紀代に属すると思われる大量の遺物が検出された。当地域において、該期の資料がこれほどまとまって出土したことはなく、調査のまとめとして、和手遺跡における奈良時代を中心とする土器様相の段階的な把握を試みたい。

第Ⅰ期　（古墳時代末～奈良時代初頭）

本期の遺物を出土する代表的な住居址に12号、22号、29号住居址がある。供膳形態には、須恵器、土師器がある。須恵器では、6世紀以来の受部を有する坏とツマミをもたない蓋がセットとなる蓋坏が本期まで残る。蓋坏は小型化し、底部（天井部）の回転ヘラケズリ調整は省略化され、回転ヘラ切り痕をそのまま残す傾向にある。また、口径が小さく、口縁がほぼ垂直に立ちあがる埦形の坏もみられる。これは、カエリを有し、擬宝珠状のツマミを付す蓋とセットになるものであろうか。有台坏は基本的にみられないが、本期後半においては、新しい食膳具として入ってくる可能性がある。土師器坏は、底部手持ちヘラケズリされ、内外面ヘラミガキされることを基本

とし、内面黒色処理されるものと、されないものがある。形態的には、底部と口縁部の間に明瞭な稜をもち、口縁が外開するものと、稜が不明瞭で口縁が内湾気味に端部に至る二種類がある。いずれにせよ、非ロクロ坏であり、鬼高式の流れをくむものである。煮沸形態は土師器のみで、甕、甑がある。土師器甕には、小型甕、長胴甕、球胴甕がある。小型甕、長胴甕は基本的に、ヘラミガキ、ハケ目等の調整が行われず、弱いナデ状の擦痕を残す程度である。器体は肉厚し、器面も平滑ではない。口縁の形態については、「く」字状に近いもの、外湾気味に端部に至るもの短く形だけ外開するものなど種類に富む。なお、長胴甕は、積み上げ痕を明瞭に残し、底部に木葉痕を有するものもある。球胴甕は、内外面丁寧なヘラミガキをうける。貯蔵形態には須恵器、短頸壺、平瓶などがある。

以上、第Ｉ期の土器について概観してきたが、全体的に古墳時代的様相を色こく残す段階といえよう。組成に占める須恵器の割合は小さく、土師器の須恵に対する優位がしられる。本期の特徴的要素をまとめてみる

須恵器―蓋坏、カエリをもつ蓋

　　回転ヘラケズリ手法の省略化

土師器―非ロクロ坏

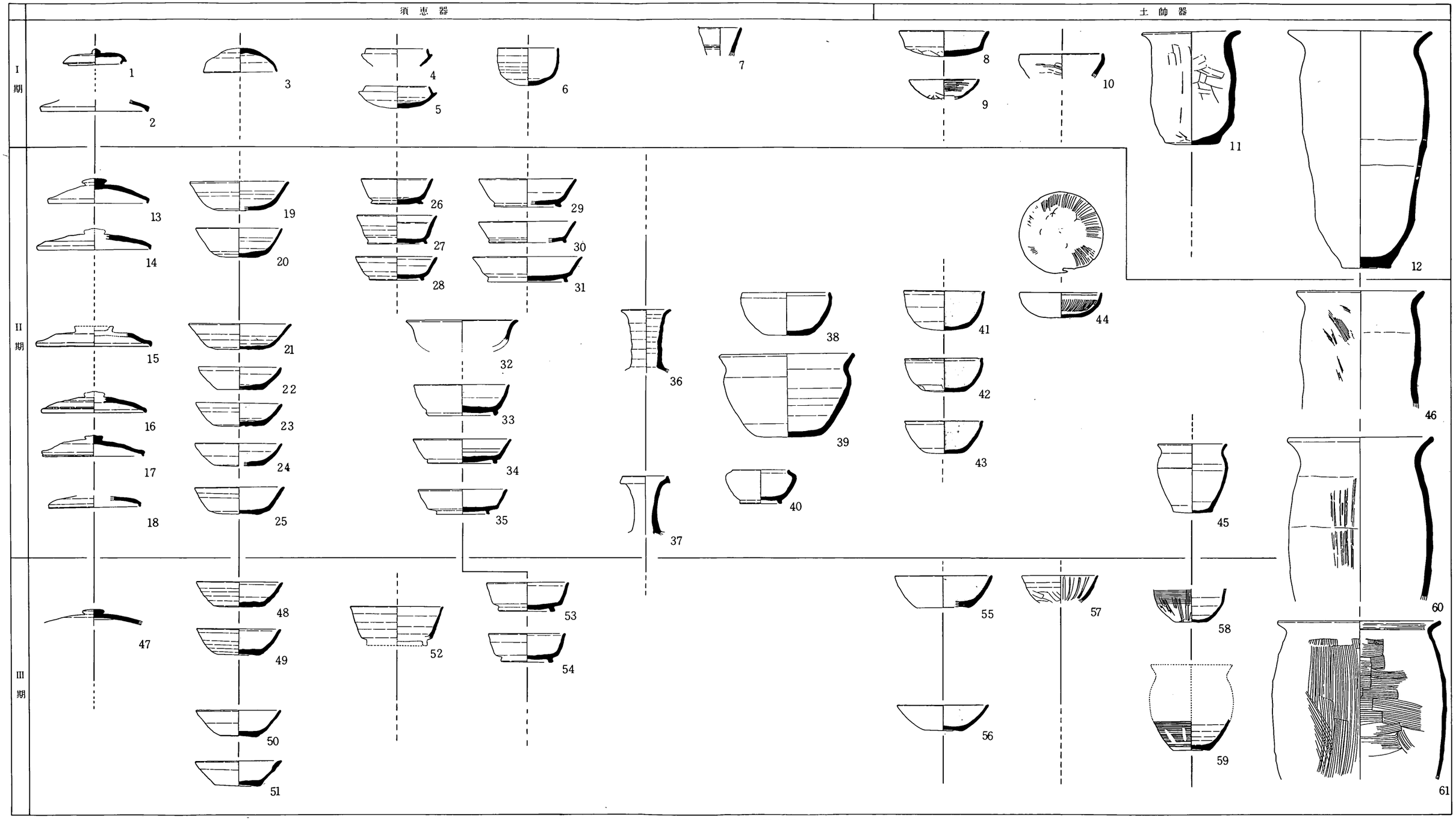
　　甕は、小型甕、長胴甕、球胴甕が存在

第II期　（奈良時代前葉～中葉）

本期の遺物を出土する代表的な住居址に20号、23号、33号住居址があり、１号溝址からも本期の遺物が検出されている。供膳形態においては、須恵器無台坏、有台坏が主流を占めるようになる。無台坏は回転ヘラ切り技法によって切り離され、基本的に底部は再調整をうけないが、まれに、手持ちヘラケズリされるものもみられる。有台坏は、底部切り離し後回転ヘラケズリ調整をうけ、さらに底面、内面中央部をナデ調整するものもみうけられる。また有台坏は、口径により、比較的小型のもの、中型のもの、比較的大型のものというように、法量に分化が認められる。なお、無台半、有台坏とも、本期の後半において新しい製作技法として糸切り技法が導入されるとみられる。33号住居址において、回転ヘラ切りによる無台坏と、静止糸切り技法の無台坏が共存している。また糸切り痕を残す有台坏も検出されている。蓋は内面のカエリが消滅し、有台坏とセットになる比較的大型のものが残る。つまみは扁平化する。蓋も有台坏同様法量に分化がみら

変　遷　図　土　器　一　覧　表

番号	遺構	遺物	番号	遺構	遺物	番号	遺構	遺物	番号	遺構	遺物	番号	遺構	遺物	番号	遺構	遺物	番号	遺構	遺物	番号	遺構	遺物
1	29号住	1	9	12号住	1	17	20号住	12	25	33号住	3	33	20号住	9	41	23号住	2	49	19号住	6	57	16号住	1
2	〃	2	10	〃	2	18	33号住	2	26	溝１	20	34	〃	8	42	〃	3	50	28号住	8	58	24号住	4
3	22号住	9	11	22号住	2	19	溝１	11	27	〃	21	35	33号住	6	43	〃	5	51	〃	9	59	28号住	2
4	〃	10	12	〃	5	20	〃	12	28	〃	22	36	20号住	14	44	18号住	1	52	19号住	9	60	16号住	3
5	溝１	10	13	溝１	2	21	23号住	15	29	〃	25	37	33号住	8	45	33号住	1	53	〃	8	61	30号住	1
6	22号住	11	14	〃	4	22	溝１	13	30	〃	23	38	20号住	16	46	23号住	9	54	溝１	31			
7	溝１	37	15	23号住	14	23	〃	15	31	〃	24	39	〃	18	47	24号住	5	55	19号住	3			
8	22号住	1	16	〃	13	24	20号住	2	32	20号住	10	40	33号住	7	48	19号住	5	56	28号住	1			



第71図　和手遺跡土器変遷図

れるのであろうが、詳細は不明である。その他、須恵器鉢がある。平らに底部から内湾しながら口縁にいたる小型のもの、口縁が「く」字状にひらく大型のものなどがみられ、供膳形態における須恵器の充実を物語る。

一方土師器の供膳形態については出土例が少なく、その消長については須恵器ほど明確でないが、古墳時代以来の非ロクロ坏は須恵器の供膳具に駆逐されるものと思われる。そして大きな変化としてロクロ手法が土師器にも導入されはじめる。これは、II期でも後半であろうか。具体的には、23号住居址から、ロクロ手法により整形、調整されたとみられる土師器坏が検出されている。これらの坏は、内面黒色処理されること、底部ケズリ調整を受けること、内外面ヘラミガキされることなど、存地の土師器坏の製作技法の流れをくむものであるが、佐波理鋺を模倣した、典型的な「金属器指向型」の坏で、土師器としては当地域において他にあまり例をみないものであることなどから、ロクロ手法の土師器への導入とその背景を考える上で極めて有効な資料といえよう。土師器食膳具におけるもう一つの特徴的要素として、畿内系暗文土器が検出されている。煮沸形態には、I期同様土師器甕、甑がある。供膳形態に大きな変化がみられるのに対し、煮沸形態の変化は緩慢である。土師器甕にはI期同様、球胴甕、長胴甕、小型甕がみられる。球胴甕は内外面ヘラミガキされる。長胴甕は肉厚し、III期以降のハケ目状調整を駆使した甕とは一線を画す。小型甕の消長については明確ではないが、少なくとも本期の後半には小型甕にもロクロ手法が導入されるものとみられる。このことは坏類における変化と一致しており、本期における重要な要素の一つである。

貯蔵形態には須恵器長頸壺、短頸壺、横瓶、甕などがある。

II期における土器様相を考える上で、忘れてならないものに「金属器指向型」とよばれる器種の存在がある。具体的には、23号住居址の佐波理鋺模倣の土師器坏、同じく23号住居址の佐波理鋺模倣の須恵器蓋、20号住居址出土の佐波理鋺模倣の須恵器坏、有台坏らがあり、土師器、須恵器両方にみられる現象である。

なお、須恵器にみられるもう一つの特徴として、蓋、有高坏、鉢などに、精選された胎土をもつ一群の須恵器が認められるが、美濃産の須恵器が本期においてある程度流入していると思われる。(表の13、15、22、32、38)

以上II期における特徴的要素についてまとめてみる。

須恵器—高台坏に法量の分化が認められる。

　　美濃産須恵器の流入（蓋、有台坏、鉢など）

　　「金属器指向型」の器種が認められる。

　　糸切り技法の導入

土師器—ロクロ手法の土師器への導入（坏、小型甕）

　　「金属器指向型」の器種が認められる。

　　（畿内系暗文を有する土器が認められる。）

第III期　（奈良時代末～平安時代初頭）

本期の遺物を出土する代表的な住居址に19号、24号、28号住居址がある。須恵器坏に糸切り技法が一般化するとともに、ロクロ手法をとり入れた土師器坏(黒色土器)が出現することを特徴的要素とする段階である。供膳形態においてはII期にひきつづき、須恵器坏類（無台坏、有台坏）が主体を占めるが、組成にしめる割合は減ずるものとみられる。須恵器無台坏は回転糸切り技法が一般化し、切り離し後再調整はうけない。有台坏は高台が垂直に近く、全体形が箱形に近くなる。一方新しい器形として身の深い高台坏があらわれる。有台坏は切り離し後回転ヘラケズリ調整をうけるが、中央部に切り離し痕（糸切り痕）を残すものがかなり出てくる。なお、本期後半になるに従い、有台坏の割合は減じ、無台坏も整形、焼成の粗雑化がみられるようになる。

一方、土師器においては、内面黒色研磨され、ロクロ手法により整形される黒色土器の坏が出現する。底部切り離しは糸切り技法によるものとみられ、切り離し後周辺部手持ちヘラケズリ、あるいは前面手持ちヘラケズリされるものがある。再調整を基本的にうけない須恵器とは対照的である。なお、本期後半になるに従い、このケズリ調整も省略化され、回転糸切り痕をそのまま残すようになる。本期のもう一つの特徴として、「甲斐型」とよばれる坏も散見される。

煮沸形態には大きな変化がみられる。土師器甕はI期以来の球胴甕がなくなり、小型甕と長胴甕にしぼられる。長胴甕は、「く」字口縁で、ハケ目状調整を駆使した薄手のものとなり、胴部はやや丸味をおびる。小型甕は、ロクロ整形が定着し、表面にカキ目状の調整を施す。一方「武蔵型」とよばれる暗茶褐色のケズリ手法の甕が流入するのも本期の特徴であり、口縁部は「コ」字状を呈するものが多い。

貯蔵形態には須恵器壺らがあるが詳細は不明である。

III期の特徴的要素についてまとめてみる。

須恵器―回転糸切り技法の定着

土師器―黒色土器の出現

ハケ目状調整の長胴甕と、カキ目状調整の小型甕

「甲斐型」坏、「武蔵型」甕の流入

I～III期の奈良時代を中心とする土器について概観してきたが、最後にそれぞれの年代的位置について触れておきたい。本遺跡の調査で直接年代を示す遺物は検出されていない。また、松本平における奈良・平安時代の土器編年が自体が、現在模索期にあることなどから、猿投窯編年など東海地方における須恵器を中心とする編年研究に依拠しながら考えてみたい。

I期で須恵器を出土した住居址に22号住居址がある。須恵器蓋坏と椀形の坏が共存しており、カエリをもつ蓋もこれに共伴する可能性がある。このような特徴をみたす段階は猿投窯編年においては岩崎41号窯式である。岩崎41号窯式については7世紀後半代の年代が与えられており、22号住居址についても7世紀後半を中心とする年代が考えられよう。ただ、29号住居址においてカエリを有する蓋とカエリのない蓋が共存し、有台坏もみられることから、やや幅をもたせて、奈良時代初頭も含める形で、第I期を7世紀後半～8世紀初頭の年代を予想しておくこととしたい。

いずれにせよ、当地域における7世紀代の土器様相について土師器を含めた形で検討していく必要があろう。

II期とIII期の時期を考える上で33号住居址を一つの指標として考えたい。本住居址において須恵器底部の切り離し技法として回転ヘラ切り技法と静止糸切り技法が共存しており、糸切り技法が須恵器に導入された時期に近い年代が与えられると考えられる。猿投窯においては8世紀中葉に比定されている岩崎25号窯式において、糸切痕が普遍的に出現することが確認されており、33号住居址の遺物を8世紀中葉～後葉とすると、II期は8世紀前葉～中葉と考えられ、III期は8世紀末～9世紀にかけての年代が与えられるのではないかと思われる。なお、詳細は触れなかったが、IV期の年代については、32号住居址から、大原2号窯式に該当すると思われる灰釉陶器の椀が検出されており、10世紀代を中心とする年代が与えられよう。

以上、和手遺跡における奈良時代を中心とする土器様相について概観してきたが、畿内系暗文土器の性格など、明確にできなかった点も多い。またI期～III期の時期区分についても不備な点が多く御教示いただければ幸いである。

参考文献

小平和夫、直井雅尚他『長野県考古学会誌—信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相—55、56号』　1987年

島田哲夫　「土器について」『吉田向井』塩尻市教育委員会　1983年

山下泰永　「遺物—土器」『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条理的遺構』　松本市教育委員会　1985年

堤隆　「前田遺跡における奈良・平安時代の土器様相」『前田遺跡—長野県北佐久群御代田町前田遺跡発掘調査報告書』　御代田町教育委員会　1987年

原明芳　「松本平における食膳具」『信濃』39—4　1987年

荻野繁春他『老洞古窯跡群発掘調査報告書』　岐阜市教育委員会　1981年

楢崎彰一　「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』III　1983年

斎藤孝正　「施釉陶器年代論」『論争、学説日本の考古学』　雄山閣　1987年

2）集落の変遷

田川左岸の河岸段丘上に位置する和手遺跡は今回の調査によって住居址24軒、建物址3軒、溝2基が検出され、古墳時代末から平安時代の集落址であることが判明した。しかし、今回の調査では道幅分という限界があり、和手遺跡の一部を調査したにすぎない。ここでは、このように限定された範囲内ではあるが集落の発生、発展、そして廃絶の模様を時期を追って検討してみたい。なお、当遺跡の東北端から北へ約100mにわたって、市道建設に伴う発掘調査が行われており、平安時代の住居址が8軒検出されているため、その結果も含めて検討してみたい。

具体的な検討を加える前に、各住居址の時代区分について触れておきたい。今回の調査で得ら

れた土器の文責からⅠ～Ⅳ期までに大別できた。しかし、II期において第25号、第26号住居址は重複関係にあり、また、III期においても第15号、第16号、第17号住居址は重複関係にあるなど各時期はさらに細分される。ここでは、不充分ではあるが各住居址を4時期に分け、各時期ごとの状態を考えてみたい。なお、所属時期の判然としなかった住居址、建物址、溝2については分析の対象から除外し、今後の課題としたい。

Ⅰ期

古墳時代末から奈良時代初頭、すなわち7世紀後半から8世紀初頭がこの時期に相当し、第12、13、14、22、27、29、34号住居址の7軒が属する。住居址は調査区全域に散在しており、住居址の切り合い関係は認められない。第12、13号住居址、第14、32号住居址がそれぞれ隣接し合っている。また、市道の発掘でこの時期の住居址は検出されなかった。この時期は当遺跡の集落の発生段階であり、少数の住居によって集落が形成されていたのであろう。

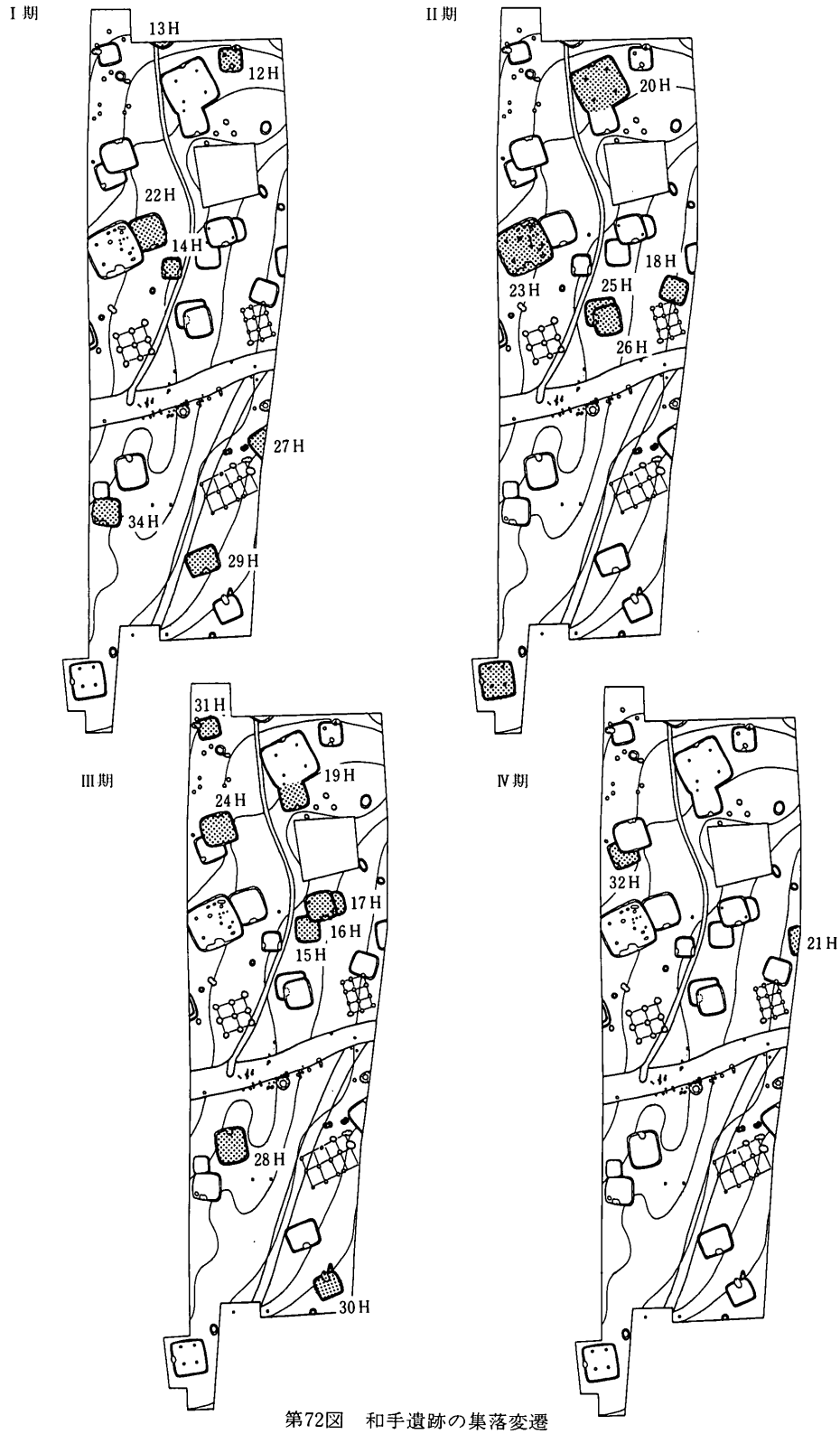
II期

奈良時代前葉から中葉、すなわち8世紀前半から後葉がこの時期に相当し、第18、20、23、25、26、33号住居址の6軒が属する。また、溝1よりこの時期に属する多くの遺物が出土しているため、溝1はこの時期のものと考えられる。前時期において調査区の全域に散在していた住居址は溝1の東側に集中し、グループを形成している。また、調査区西端に位置する第33号住居址がII期からIII期への過渡期に位置する住居址であることを考慮すれば、一時的にではあるが溝1の東側だけに居住空間がもたれた時期があったことがうかがえる。こう考えると、溝1は単に土器の廃棄場としてだけでなく、集落域をも示すものとしても機能していたと言える。溝1の東側に展開する集落は大型住居と小型住居という二形態の住居によって形成されており、大型住居である第20、23号住居址は出土遺物も大変多く、この集落の中核的な存在であったと思われる。なお、市道の発掘調査ではこの時期の住居址が検出されていないため、北方向への集落の大規模な拡大は考えられない。

III期

奈良時代末から平安時代初頭、すなわち8世紀末から9世紀前半がこの時期に相当し、第15、16、17、19、24、28、30、31号住居址の8軒が属する。住居址の検出数は一番多く、前時期において溝1の東側に集中していた住居址の分布は再び調査区全域に広がっていった。また、調査区の北側において行われた市道に関連する発掘調査においてもこの時期の住居址が検出されていることより、この地域において居住空間は飛躍的に拡大し、大規模な集落が営まれていたことがうかがえる。溝1については、量は減少するもののこの時期の遺物も出土しているため、この時期においてもその機能を果たしていた可能性もある。さて、次に検出された8軒の住居址をみてみると、第28、30号住居址はやや孤立した状態で存在しているが、溝1の東側に展開する第15、16、17、19、24、31号住居址群はグループを形成しており、第15、16、17号住居址は重複関係にあるため、多くても5軒ほどのグループだったと思われる。

Ⅳ期



第72図　和手遺跡の集落変遷

10世紀代がこの時期に相当し、この時期に所属するのは代21、32号住居址の２軒のみである。２軒の住居址はともに孤立して存在する。和手遺跡における集落は、このIV期をもって廃絶され、終りをつげるのである。集落は田川下流に移動していったのであろうか。現時点では明確な解答は得られない。

以上、大雑把に各時期ごとの集落の変遷をたどってきたが、和手遺跡は奈良時代を中心として７世紀から10世紀に展開した集落であることが判明した。調査面積に限界があったため多くの課題を今後に残すことになったが、奈良時代に関しては塩尻でこれだけの住居址がまとまって検出された例は初めてであり、当地域における律令制波及期の集落と考えられるであろう。

３）古道と和手集落

和手遺跡は、田川左岸段丘上にあり、丘中学校から下大門にかけて４kmにわたって展開する高出遺跡群の南端に位置している。周囲には歴史的環境の項でも述べたごとく、田川左岸にはやや南方に瓦塔の出土した下大門字汐添、銅鐸出土の柴宮が、そして北側には上村、北原、一夜窪、丘中学校など和手遺跡と同時代の遺跡があり、また田川右岸にも同出来の集落址である中島、中挾遺跡が残されている。

この地域の古代において田川の果たした役割の大きさは、中島、中挾、和手、丘中学校、君石、吉田向井、吉田川西などの大集落がことごとくこの河川の両岸に発達したことからもうかがえる。この田川は塩尻峠に源を発し、西流し、下西条周辺で流れを大きく北に向け、筑摩山地山麓を一直線に北流する。和手遺跡は、ちょうど流れの向きを北に変える付近に位置する。また縄文中期から平安時代まで継続的に大集落が営まれた平出遺跡成立の第一要因となった平出の泉から流出した渋川は、大門上の山の山麓を流れ、旧若宮八幡の泉をあつめ柴宮銅鐸出土地の大門神社の所から向きを北に変え、柱狩の墓地のところで国道20号線を横切り和手遺跡のすぐ手前の桟敷花見から田川に落ち込んでいる。

この田川、渋川両河川の地理的位置に重なるようにして、伊那―西条―柴宮―柱狩―和手と木曽―平出―柴宮―柱狩―和手の古道の通過が考えられており、また伊那から長畝、桟敷境による五日市場へとつながる古道にもつながり、この和手から段丘に沿って松本方面への道も想定され、さらには桔梗ケ原を肥えて郷原、堅石を通り、安曇につながる道の追分とも考えられる位置にあたる。和手遺跡周辺は、古代の交通の要衝であったといえよう。

このことは既に一志茂樹氏により、「塩尻市下大門の瓦塔遺跡」（信濃11―８、昭34）の中で考察が加えられている。以下、関連する部分を抄録する。

「古代に溯っては、美濃から御坂峠を越え伊那路によって通じていた東山道と、同様に、美濃から木曽谷を過ぎ鳥居峠越によって通じていた木曽路とは、この地点を分岐点としたものと、わたくしは推考している。前者は、南方の善知鳥峠から上西条に下り、下西条を経、田川の左岸に沿うてこの地にいたり、その下大門地籍では、ほゞ国道19号線上を北走し、渋川を渡ってからは、それに沿うて和手地籍に出、高出を過ぎ、吉田を経て、覚志駅のあったと推考される村井中村地

籍に至っており、後者は、鳥居峠北麓の奈良井から、旧宗賀村の本山・洗馬・床尾を経、こえどを過ぎて平出に出、渋川の左岸に沿うて下大門地籍に至り、東山道と合していたもののようである。」「東山道と木曽路とがもっぱら用いられた古代にあっては、この大門地籍が、また鎌倉道の使われた中世に入っては、その東北の桟敷地籍にあった五日市場が庄園市場として、さらにその後期に至っては、その東南方の古町地籍が古宿として、つづいて近世に入っては、中山道の通過関係からその南方の仲町地籍が塩尻宿として栄え、かくて明治35年12月篠ノ井線が、同39年6月中央東線が、同44年5月中央西線と、鉄道が開通して、ここがその分岐点となるに及んで、再び大門地籍が脚光を浴びるに至り、いはば千数百年にして、円環的に一巡したことになる。かかる事態は、この土地が木曽・伊那・諏訪の三地方を結ぶ要の地点に位している自然環境が然らしめた歴史的現象であって、まことに興味深い事実といはねばならない。」

なお、この一志氏とは別に、桐原健氏の「東山道と吉蘇路」（平出遺跡考古博物館ノート1、昭62）があり、ここでは東山道を田川右岸の五千石街道に、吉蘇路を北国西往還に比定している。いずれにしても和手周辺地域は、交通上重要地点であったことに変りはない。18号住居址から出土した畿内系暗文土器、23号住居址出土の金属器指向型の土師器坏は類例に乏しいもので、交通上重要な地点に位置した和手遺跡の性格をよく物語っていよう。

7　まとめ

和手遺跡は、田川左岸段丘上の下大門～丘中学校までの4kmにわたって展開する高出遺跡群の最南端に位置する集落址である。遺跡は田川に沿って南北に細長く連なるが、今回の調査はちょうど遺跡中央を東西に横断する形で実施された。この調査とは別に、バイパスから北に向かって開かれる市道部分（遺跡を南北に縦断）でも併行して調査が行われ、遺跡の拡がり、性格を知るための資料が得られている。

和手遺跡が栄えた中心的時代は、古墳時代末～平安時代中頃にかけての時期であるが、そのほかに先土器時代、弥生時代にもその痕跡が見い出せる。

先土器時代には、尖頭器が1点得られている。高出遺跡群には、尖頭器、ナイフ形石器を主体とする多くの遺物を出土した化中学校遺跡、尖頭器、ナイフ形石器、有茎尖頭器等を出土した北ノ原遺跡、そして尖頭器を出土した黒崖の諸遺跡がすでに知られており、和手での発見でまた1遺跡が追加されたことになる。高出遺跡群は、松本平の中でも先土器時代遺跡が最も多く存在する遺跡群として重視されてきたが、今回の発見は遺跡群の面的拡がりを更に拡大させ、該期遺跡群研究の地域としてますますその価値は高まろう。

先土器時代以降、弥生時代まで遺構はもとより遺物も全く発見されず、空白の時期が長い。市内に所在する遺跡では、大半が縄文期の遺跡と重複するという状況の中で、これを全く欠いていることは、この遺跡の1つの特徴としてよいであろう。

弥生時代では、本調査区内から方形周溝墓が1基、そして市道部分から住居址、方形周溝墓が検出されている。未調整区では遺構、遺物が希薄であり、市道部分で濃密であることからこの時

期の中心地域はより北寄りの地域であったと思われる。住居と墓とがセットで発見されていることから、住居域・墓域を考えるうえでの好例となろう。この時期の遺跡としては、田川対岸の中挾遺跡・中島遺跡、やや南方に位置する大門３番町遺跡、田川端遺跡がある。大門３番町を除き住居址が発見されており、中挾・田川端（焼町の方形周溝墓と関連）では方形周溝墓を伴っており、この地域の拠点的集落であったといえる。銅鐸を出土した柴宮遺跡も程近い。田川沿近に展開する弥生時代遺跡群は、１つの水系内での集落相互の関連性追求がある程度可能にさせるものである。

和手遺跡では、古墳時代末～平安時代中頃の集落址の発見がとりわけ重要である。23軒の住居址、建物址３、溝址２、小竪穴11の遺構が検出され、この遺構に伴って多くの遺物の出土をみた。今まで市内における古墳時代から奈良時代にかけての集落址の調査は、昭和20年代に平出遺跡で行われた程度で、以来ほとんど調査例がなかった。それだけにこの時期の継続性の強い集落の発見は多くの新知見をもたらすこととなった。住居・集落形態、土師器、須恵器など同時代の様相を把握するための大きな手がかりが得られた。とりわけ不明確であった土器の編年には、１つの展望が開け、基礎的資料となろう。また、本遺跡の南方の下大門汐添からは瓦塔が発見されており、東山道のルートとも関連して研究が進められている。本遺跡の成果もそうしたこの地域の古代の実態を明らかするための新たな資料となるものである。

第2節　中挾遺跡

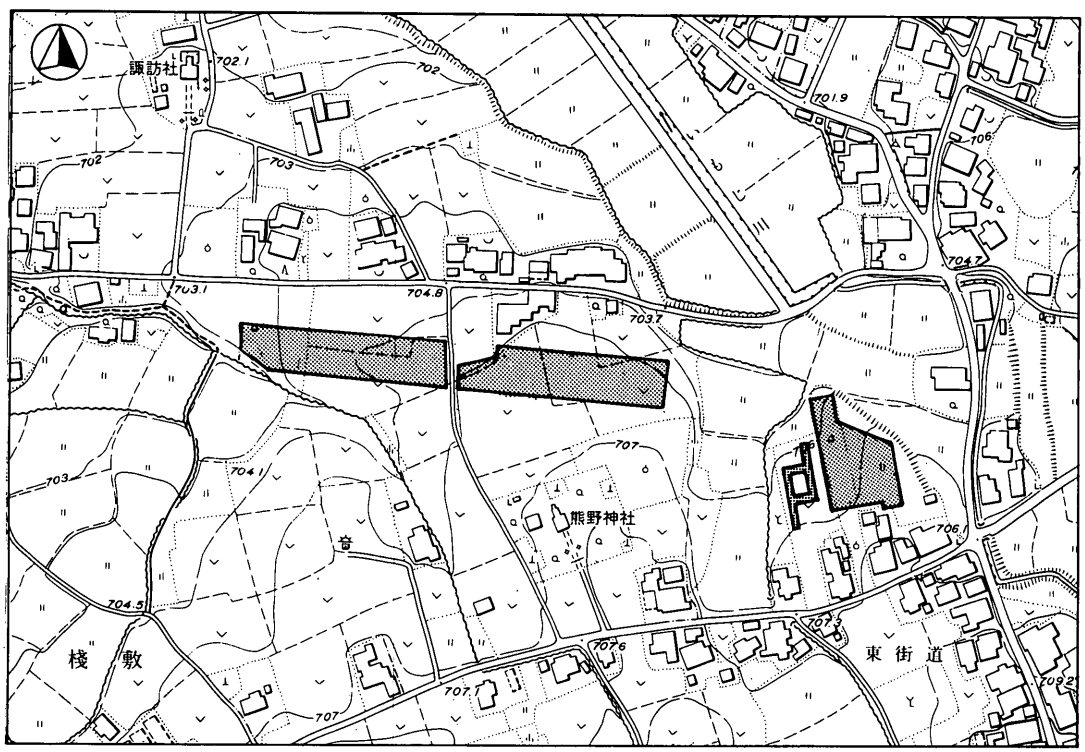
1　位置と地形

中挾遺跡は片丘地区中挾区と塩尻東地区桟敷区の両区にまたがり、東西約400m、南北約200mの非常に広範囲に展開している。

付近は田川河岸段丘右岸に位置し、田川の本流とその支流である鋳物師屋川によって形成された小舌状台地に立地している。この舌状台地の先端部には現在、中挾諏訪社が建てられているが、この付近を遺跡の北縁とみてよいだろう。遺跡はそこから桟敷熊野神社付近まで展開しており、地形を概観すると北西方向の緩斜面を利用している。

また第73図にも明瞭に示されるように熊野神社東側には南北方向の浅谷地形が存在し、調査地区をⅠ地区とⅡ地区に分けている。本来の中挾遺跡は、おそらくこの浅谷の西側、すなわちⅠ地区側と思われるが、Ⅰ地区調査過程でⅡ地区からも同時代の遺構・遺物が検出されたため同遺跡に含めたものである。しかし浅谷の存在からⅡ地区はおそらく別遺跡になるものと考えられ、今後、残された南側からの資料加味により再検討が必要になると思われる。

最後に本遺跡の名称について多少、誤解を招いているため注釈しておきたい。前述したように

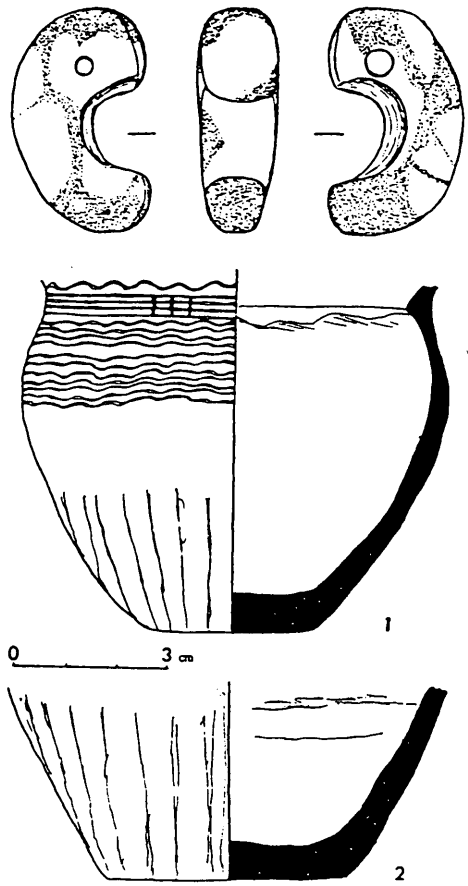


第73図　中挾遺跡調査地区図

本遺跡は中挟、桟敷両区にかかっているが、従来は中挟側にその中心があると考えられていたため「中挟遺跡」と命名されたものである。折りしも今回のバイパス用地が桟敷側を通過したため「桟敷の中挟遺跡」というまぎらわしい名称になってしまった。

2　過去の調査経過

中挟遺跡は、昭和31年に刊行された「信濃史料」の遺跡地名表にはまだその名が見い出せないことから、識者に注意され始めたのは比較的新しいことといえる。



第74図　塩尻市桟敷出土勾玉と弥生式土器

第 8 表　塩尻市桟敷出土玉計測

番号	種類	石質	色調	長さ(mm)	直径(mm)	備考	番号	種類	石質	色調	長さ(mm)	直径(mm)	備考
1	勾玉	硬玉	緑色	45	16	厚さ15．35グラム	80	水玉	水晶	白色	3.5	3	
2	管玉	鉄石英	赤色	33.5	3.5		81	〃	〃	〃	3	4	
3	〃	〃	〃	32.5	4		82	〃	〃	〃	3	4.5	
4	〃	〃	〃	31.5	3		83	〃	〃	〃	4.5	4	
5	〃	〃	〃	29.5	3.5		84	〃	〃	〃	2.5	4.5	

6	〃	〃	〃	30	3.5	
7	〃	〃	〃	22.5	3.5	
8	〃	〃	〃	21.5	3	
9	〃	〃	〃	21.5	3	
10	〃	〃	〃	21.	3.5	
11	〃	〃	〃	19.1	3.1	
12	〃	〃	〃	19.5	3.5	
13	〃	〃	〃	19	2.5	
14	〃	〃	〃	17	3	
15	〃	〃	〃	11.5	2.5	欠損した一端再磨研
16	〃	〃	〃	10	3	
17	〃	〃	〃	24.5	3	一端欠損
18	〃	〃	〃	22	3	〃
19	〃	〃	〃	18	3	〃
20	〃	〃	〃	17	3	〃
21	〃	〃	〃	15	3	〃
22	〃	〃	〃	12	3	〃
23	〃	〃	〃	11.5	2.5	〃
24	〃	〃	〃	11	3	〃
25	〃	〃	〃	9.5	3	〃
26	〃	〃	〃	8.5	3.2	〃
27	〃	碧　玉	萌黄色	25	3	
28	〃	〃	〃	21	3	
29	〃	〃	〃	20	3	
30	〃	〃	〃	20	3	
31	〃	〃	〃	19	3	
32	〃	〃	〃	18.8	3	
33	〃	〃	〃	19	3	
34	〃	〃	〃	16.5	3	
35	小玉	水　晶	白　色	4.5	6	算盤玉6面
36	〃	〃	〃	6	5.5	〃　〃
37	〃	〃	〃	6	5.5	〃　〃
38	〃	〃	〃	5.5	5	〃　〃
39	〃	〃	〃	4	5.6	〃　〃
40	〃	〃	〃	3.5	5	〃　〃
41	〃	〃	〃	4.5	5.2	算盤玉5面
42	〃	〃	〃	5.5	5.5	〃　6面
43	〃	〃	〃	5	5	〃　〃
44	〃	〃	〃	4	6	〃　〃
45	〃	〃	〃	4	5	臼玉状
46	〃	〃	〃	4	5.5	算盤玉
47	〃	〃	〃	4.5	5	〃
48	〃	〃	〃	4.5	5	〃
49	〃	〃	〃	4	4.5	〃
50	〃	ガラス	空　色	3	5	
51	〃	〃	〃	2.5	4	
52	〃	〃	〃	3	4	
53	〃	〃	〃	3.5	4	
54	〃	〃	〃	3	4	
55	〃	〃	〃	3	4.5	
56	〃	〃	〃	3	4	
57	〃	〃	〃	3	4	
58	〃	〃	〃	3	4	
59	〃	〃	〃	2	3.5	
60	〃	水　晶	白　色	4	4	
61	〃	〃	〃	2.5	2.5	
62	〃	〃	〃	3	3	
63	〃	〃	〃	3	3	
64	〃	〃	〃	2.5	2.5	
65	〃	〃	〃	3	3	
66	〃	〃	〃	3.5	3.5	
67	〃	〃	〃	2	2	
68	〃	〃	〃	3.5	3.5	
69	〃	〃	〃	3	3	
70	〃	〃	〃	3	3	
71	〃	〃	〃	3	3	
72	〃	〃	〃	2.5	2.5	
73	〃	〃	〃	4.5	4.5	
74	〃	〃	〃	2	2	
75	〃	〃	〃	3.5	3.5	
76	〃	〃	〃	2	2	
77	〃	〃	〃	3	3	
78	〃	〃	〃	4	4	
79	〃	〃	〃	2.5	2.5	
85	〃	〃	〃	4	4	
86	〃	〃	〃	3	4.5	
87	〃	〃	〃	3	5	
88	〃	〃	〃	3	4.5	
89	〃	〃	〃	3	4	
90	〃	〃	〃	3	4.5	
91	〃	〃	〃	3	4.5	
92	〃	〃	〃	3	3.5	
93	〃	〃	〃	3.5	4	
94	〃	〃	〃	2.5	4	
95	〃	〃	〃	4	4	
96	〃	〃	〃	4	4	
97	〃	〃	〃	3.5	4	
98	〃	〃	〃	3.5	4	
99	〃	〃	〃	3	4	
100	〃	〃	〃	3.5	3.5	
101	〃	〃	〃	2	2	
102	〃	〃	〃	2.5	3.5	
103	〃	〃	〃	2	3.5	
104	〃	〃	〃	3	3	
105	〃	〃	〃	3	3.5	
106	〃	〃	〃	3	3.5	
107	〃	〃	〃	3	4	
108	〃	〃	〃	1.5	3	
109	〃	〃	〃	2	3	
110	〃	〃	〃	2.5	3	
111	〃	〃	〃	2.5	4	
112	〃	〃	〃	2.5	3	
113	〃	〃	〃	3	3	
114	〃	〃	〃	3	3.5	
115	〃	〃	〃	2.5	4	
116	〃	〃	〃	2	4	
117	〃	〃	〃	2.5	3.5	
118	〃	〃	〃	2.5	3.5	
119	〃	ガラス	空　色	3.5	3.5	
120	〃	〃	〃	3	3.5	
121	〃	〃	〃	3	3	
122	〃	〃	〃	2	3.5	
123	〃	〃	〃	2	4	
124	〃	〃	〃	2	4	
125	〃	〃	〃	3	4.2	
126	〃	〃	〃	3	4	
127	〃	〃	〃	3	3.5	
128	〃	〃	〃	2.5	4.5	
129	〃	〃	〃	3	4	
130	〃	〃	〃	2	5	
131	〃	〃	紺　色	4.5	6	
132	〃	〃	〃	5	5.5	
133	〃	〃	〃	4	5.5	
134	〃	〃	〃	6	6.5	
135	〃	〃	〃	5	6	
136	〃	〃	〃	4	6	
137	〃	〃	〃	4.5	6	
138	〃	〃	〃	4.5	6.5	
139	〃	〃	〃	4.5	5.5	
140	〃	〃	〃	4	5	
141	〃	〃	〃	4.5	6	
142	〃	〃	〃	4.5	5.5	
143	〃	〃	〃	4	6	
144	〃	〃	〃	4.5	5	
145	〃	〃	〃	5	5	
146	〃	〃	〃	4.5	5.5	
147	〃	〃	〃	2.5	5.5	
148	〃	〃	〃	4.5	5	
149	〃	〃	〃	5	5	
150	〃	〃	〃	3.5	5	
151	〃	〃	〃	4.5	5	
152	〃	〃	〃	3	5	
153	〃	〃	〃	4	4.5	
154	〃	〃	〃	4	4.5	
155	〃	〃	〃	2.5	4.5	
156	〃	〃	〃	2.5	4	
157	〃	〃	〃	2.5	3.5	
158	〃	〃	〃	2.5		

昭和41年刊行の「塩尻市片丘区君石遺跡及びその周辺遺跡の調査」(『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』所収）の周辺の遺跡の中に、「南熊井―中挟、弥生土器、勾玉、細形管玉、小玉、須恵器など出土」の記載がみえ、中挟遺跡が文献に現われた最初の記録となっている。ここには「田川の沿辺には、旧寿・芳川の両地区にも団地が設けられ、加えて個人による新築家が日毎に激増して数年前の面影はない。昭和31年編纂の信濃史料に載る遺跡の外に、次のような遺跡が主として、田川の右岸地域に発見されている」という記述がなされていることからもうかがえるように、昭和30年代から40年代にかけて、田川流域の考古学的調査は飛躍的に進み、その多くの新発見の遺跡の１つに中挟遺跡があったことになる。

その後、昭和48年の「松本市、塩尻市、東筑摩郡誌歴史上」および昭和49年の「中央自動車道長野線建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告諸」でも弥生時代の項に同様の記載がなされている。

こうした田川流域の多くの遺跡の中の１小遺跡としての評価から一転して考古学研究者の注目をあびる重要遺跡としての位置づけがなされるようになったのは、昭和48年４月に発表された桐原健氏の「信濃における弥生時代玉のありかたについて」(信濃25―４）からである。この論考中、中挟遺跡の玉類が詳細に報告され、弥生時代装身具の在り方を考えるうえでの重要資料として取り上げている。長文になるがその部分を以下に転載する。「中挟在住の小沢芳市氏が昭和24年頃、林檎樹改植にあたって地表下50糎のところから玉類を発見した。範囲はさして広くはない。土器破片が２点伴出しているので、氏は玉類は壺中にあったものと考えている。玉は勾玉１、小玉123、細形管玉（碧玉17、鉄石英25）42で、勾玉は全長4.5糎の硬玉で、頭部は径2.2、厚さ1.5糎と大きい。孔は片抉りで、重量は35グラムある。小玉はうち15が水晶で、平面六角形、丈が低く算盤玉状をなすものと、たけがやや高く、いわゆる切子玉状をなすものとが大部分を占めるが、稜線がなるし、棗玉状、臼玉状に堕しているものもある。孔はみな片抉りである。他の小玉108ケはガラス製で、色調にはライトブルーとダークブルーの２種類があり、これは小玉の大きさと関係がある。前者は径３粍、厚さ3.5～4.5粍が平均で、これに対して後者は径・厚さともに前者を凌ぎ、径５～６粍、厚さ4.5粍前後を測る。孔は直通で、内径はみな２粍であるが、真中を穿っているものが総てではない。ガラス製ゆえ果して可否は断じ得ないが、あたかも管玉を切断してつくられたかと思わせるものがある。鉄石英製管玉25のうち、完存品は15点であるが、短小なものは欠損したものの一端を磨いたと思われるもおで、長さ3.0～3.5糎が本来の大きさではないかと考えられる。表面平滑なものは無く、いずれも数条の稜線を残している。両抉りになる孔の直通してはいるも必ずしも中心に穿たれてはおらず、孔の形も正円ではない。碧玉製管玉については完存品16点で、長さは鉄石英製には及ばないが、２粍前後とほぼ均一、大きさも1.5～2.0粍と一定している。表面は平滑である。次に伴出した土器について述べよう。玉が収納されていたといわれる１点の小形甕の半欠品で、口縁は欠いているが短く外反して終っているらしい。器高に比し肩部幅の広いもので、頸部には１ケ処が簾状となっている幅狭い櫛描直線文帯を深く刻み、その上下には動きの弱く乱れた櫛描波状文を繞らしている。下胴部は箆による縦削りで一部分に煤

黒の痕がある。現在高7、最大腹径8.4糎を計る。もう1点はこれも小形の甕下胴部破片で、器質は粗耗、火熱を受けている。」

松本平はもとより、県内においても弥生時代玉類の一括資料としては稀有な例として注目を集めることとなった。そして、この発表以来、中挾遺跡への関心は高まり、その正式な発掘調査が大いに待たれることとなった。

3　調査概要

今回の発掘調査地区は塩尻市大字桟敷地籍にあり、田川の右岸河岸段丘上に位置する。付近は片丘丘陵が盆地域に接する箇所にあたり、田川とその支流である鋳物師屋川によって形成された台地上に遺跡は立地する。

調査区は熊野神社北側をⅠ地区、五千石街道沿いの小台地をⅡ地区とし調査総面積は5,350m²に及ぶ。

発掘調査の結果、調査区全域にわたって遺構が検出され、縄文、弥生、古墳、平安、中世の5時代の集落跡を確認することができた。

縄文時代ではⅡ地区で住居址が3軒検出された。時期はいずれも中期初頭に比定され、2軒は埋甕炉、1軒は小形石囲炉を有している。他にⅠ地区でロームマウンドが7基確認された。

弥生時代はⅠ地区に限られ、住居址3軒、方形周溝墓4基が検出された。住居址は弥生後期のもので、2軒が埋甕炉、1軒が埋甕石囲炉を有している。

古墳時代は5軒検出され、内3軒は一辺7m以上の大形住居址であった。確認が一番遅かった第51号住居址は、弥生時代の第8号住居址覆土に遺物のみ確認された住居である。

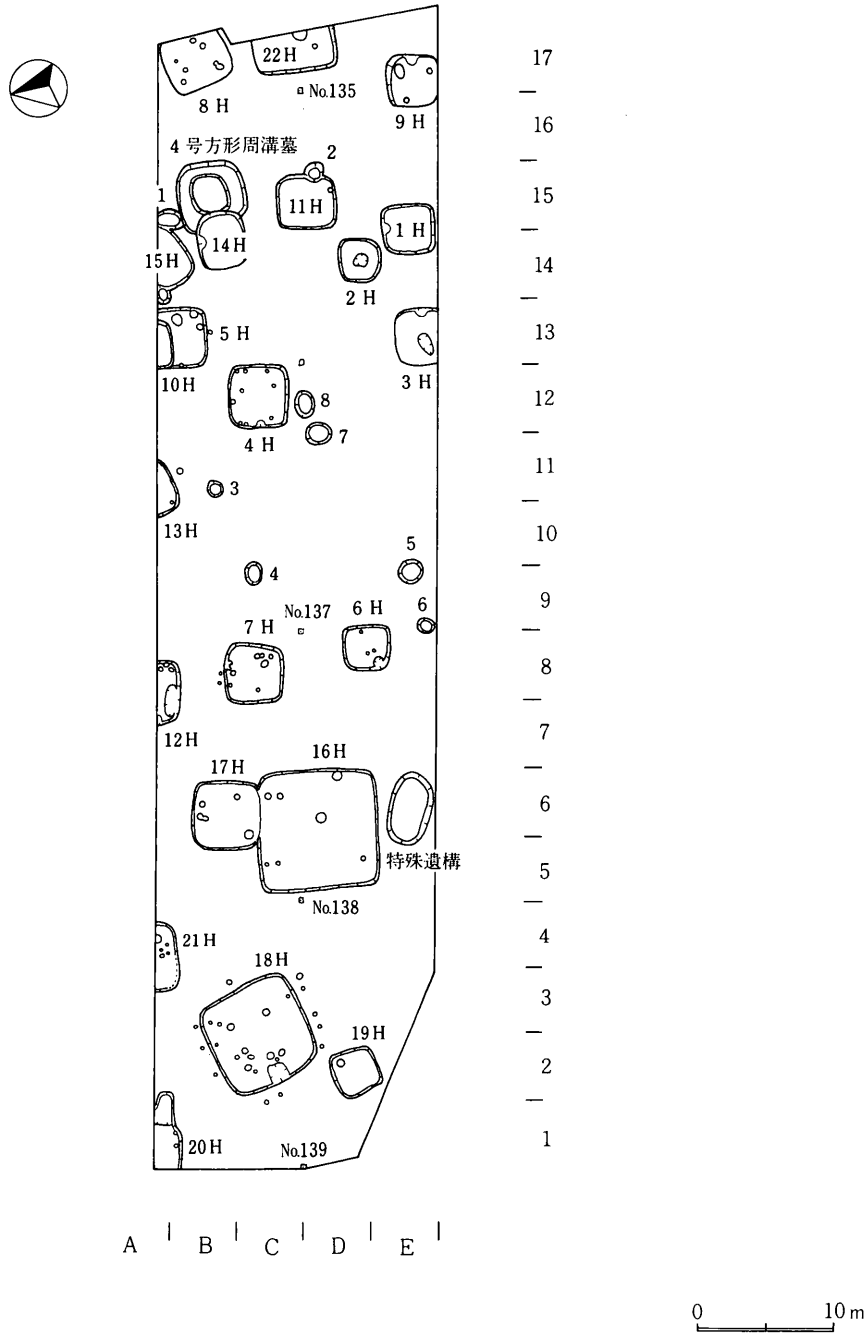
平安時代では両地区にわたり39軒の住居址が発見され、本遺跡の中核的時代となった。時期的には9世紀から10世紀にかけての平安時代前半である。

中世ではⅡ地区に市内では初めての住居址1軒が発見され、内耳土器が出土している。またⅠ地区では掘立柱建物址が1棟検出された。

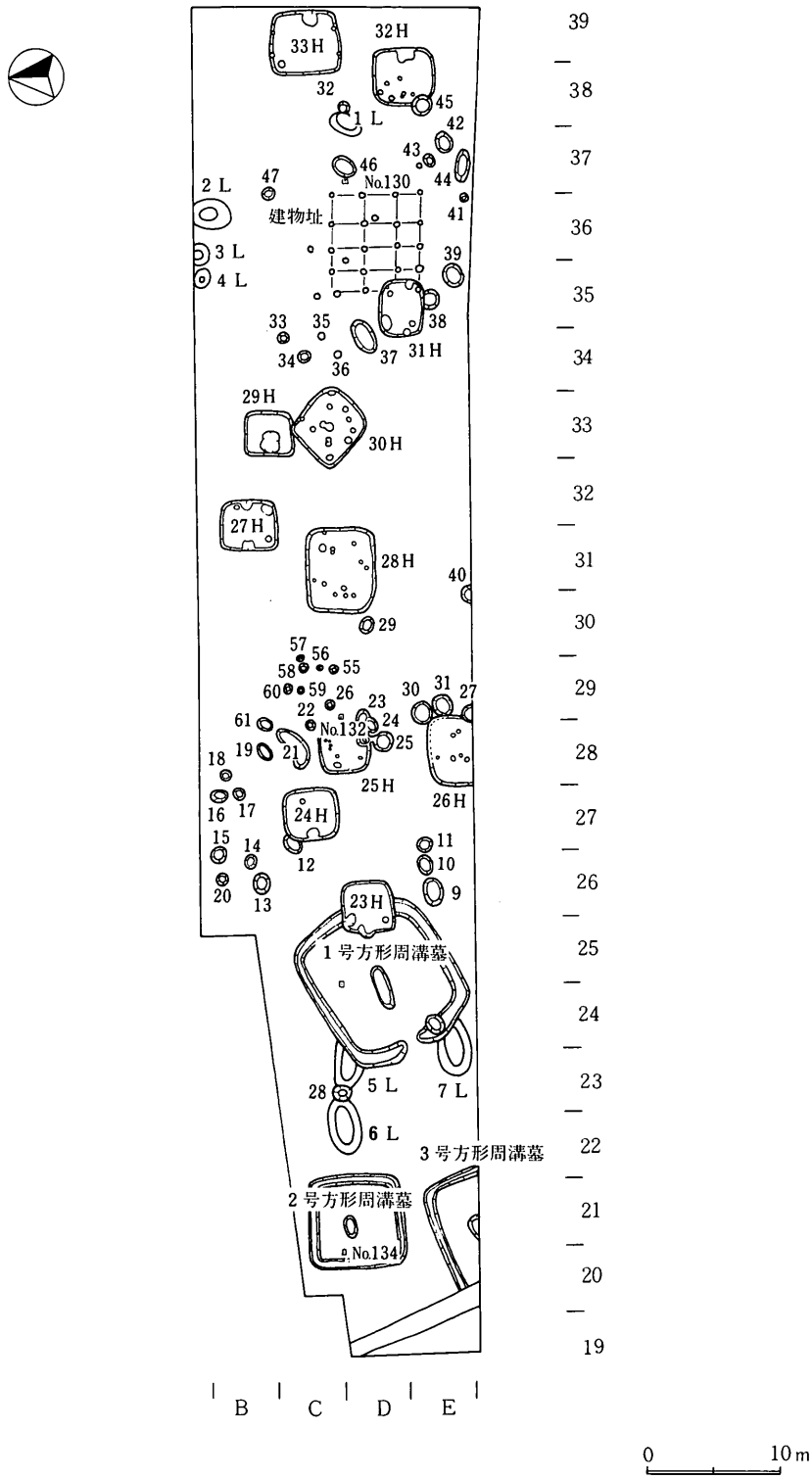
以上が調査の概要であるが、本遺跡は先述したように縄文から中世までそろった極めて稀な複合遺跡であり、当遺跡の良好な立地環境を反映している。また周辺遺跡との関連性、田川流域における集落の変遷を考えるうえで貴重な資料を提供してくれたと言えよう。

4　発掘区の設定

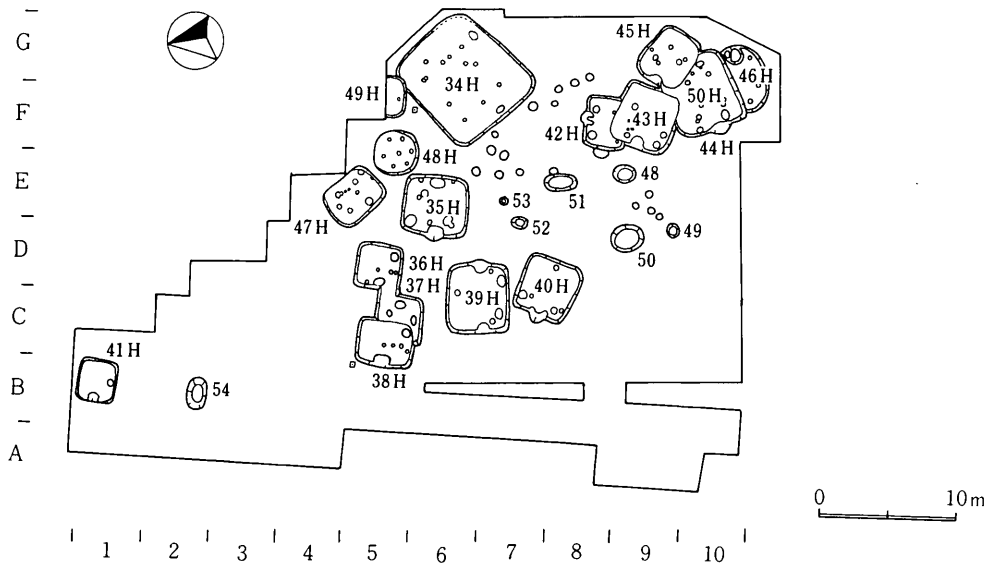
本遺跡はこれまでかなり広い範囲で把えられており性格がつかみにくい存在であった。遺跡の中心はむしろ道路を隔てた北側の「中挾区」側と考えられており、今回のバイパス用地は、たとえ遺跡にかかっていたとしても南側の縁辺部に位置するものと思われていた。そこで発掘調査に先立ち遺構、遺物の保存状態と表土の堆積状況を把握するために数ケ所に試掘抗を入れた。地表面の観察でも畑に細かな砂利がかなり顕著に目立っていたため旧河川による表土の削平、流出が予想され、試掘の結果でも平均20cmでローム層にあたり、最も浅い所では僅か10cmを測るにすぎ



第75図　中挟遺跡全体図（Ⅰ地区西区）



第76図　中挟遺跡全体図（Ⅰ地区東区）



第77図　中挟遺跡全体図（II地区）

なかった。このように表土およびローム層中にはかなり細礫が混入しており、淘汰の悪い土壌ではあったが、堆積は驚くほど整然としており、耕作等による攪乱が遺構検出面までほとんど及んでいなかったことは幸いであった。

調査はまずバックホーとブルドーザーによる表土除去を行ったのち、グリッドを設定した。グリッドは5m間隔で北から南へ向かってA～E、西から東へ向かって1～39（うち18区は道路下のため未調査）を設定した。

また発掘が実施されている際中、東側の浅谷を挟んで待峙する舌状台地において行われた表面踏査において遺物が採取されたため、急拠、同遺跡の一部としてII地区と命名し、本来のI地区の調査が終了後、引き続いて調査が行われた。II地区はやはり5mグリッドで西から東へA～G、北から南へ1～10の発掘区と試掘のトレンチが西隣りに設定された。発掘総面積は5,350m²である。

5　土層

前述したように中挟遺跡の表土は表流水の影響を受け、かなり礫を含む淘汰の悪い土壌であり、しかも層厚10～20cmと薄層である。このような状態ではかなり攪乱が入っているものと考えられるが、比較的保存状態の良好な箇所の土層を参考に基本的な層存を組み立ててみたい。

I地区は概観して3層に区分される。細礫～中礫をおびただしく含む2次堆積ロームを基盤に、やはり細礫を顕著に含む黒褐色土が覆い、表面に暗褐色土を乗せている。遺構検出面は黒褐色土層最下部にあたり、本層を遺物包含層としている。

これに対しII地区はやや層序が安定しており、明瞭な6層を確認することができる。すなわち

上位から第Ⅰ層礫混り暗褐色土、第Ⅱ層礫混り黒褐色土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層茶褐色土、第Ⅵ層礫混りロームである。遺構検出面は第Ⅴ層中または第Ⅵ層上面にあり、第Ⅲ層～第Ⅴ層を遺物包含層としている。なお介在する第Ⅳ層は非常に薄層であり、局所的に存在する層である。

6　遺構・遺物

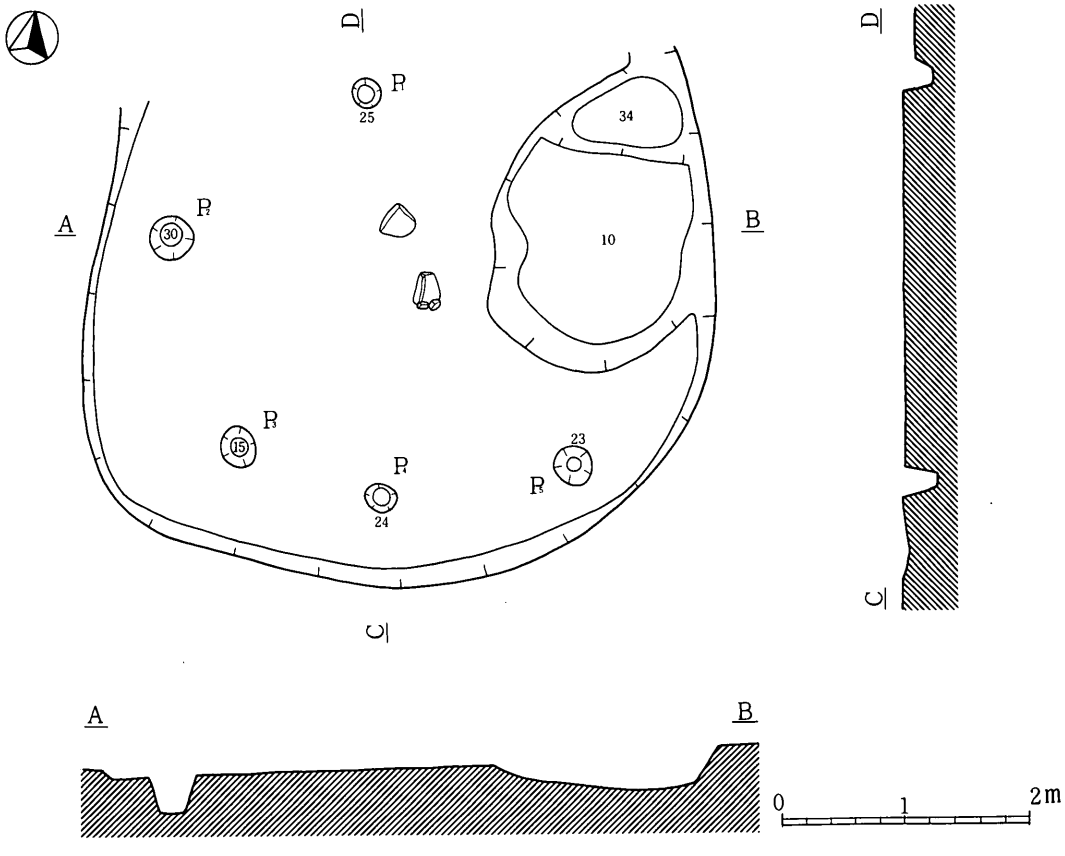
1）住居址

(1)　縄文時代

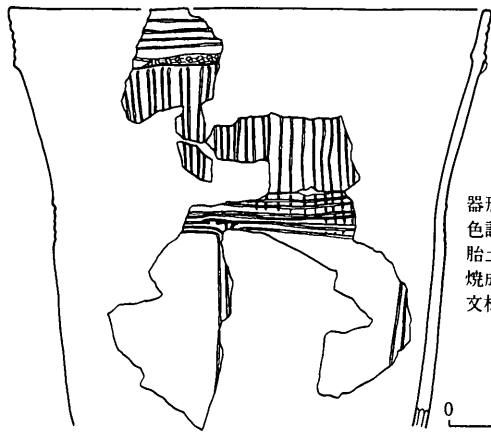
第46号住居址

遺構　F・G―10区にあり、北側3分の2ほどは44号住居址に、また東側は攪乱によって破壊されている。今回の調査中、最南端で検出された住居址である。

東西503cm、南北も同規模と推定される不整円形プランを呈する。掘り込みは浅く、遺存状態は悪い。壁高は、東壁13cm、西壁8cm、南壁17cmである。床は比較的平坦で、炉周辺は特に良く踏み固められ、状態は良好。柱は、6～7本主柱と考えられるが、P_1～P_5の5本のみ検出すること



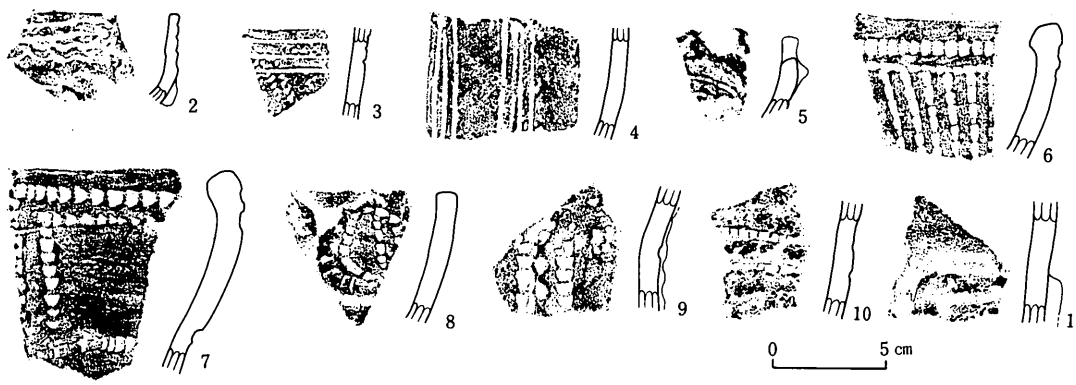
第78図　第46号住居址



器形　深鉢
色調　褐色　　褐色
胎土　石英、雲母混入
焼成　良好
文様要素　隆線、半截竹管による平行沈線、LR縄文

0　10cm

第79図　第46号住居址出土土器(1)



第80図　第46号住居址出土土器(2)

土 器 観 察 表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	胎土	備考
2	46住	深鉢	口縁	隆線、平行押し引き文　沈線	ミガキ	石英、雲母	
3	〃	〃	胴上半	平行沈線、RL縄文	〃	〃	
4	〃	〃	胴	平　平行沈線	〃	〃	
5	〃	〃	口縁	平行押し引き文	〃	白色粒子	
6	〃	〃	〃	角押文	〃	〃	
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	9と同一個体
8	〃	〃	〃	隆線、角押文、刻み	〃	〃	7と　〃
9	〃	〃	胴上半	連鎖状隆線、角押文	〃	〃	
10	〃	〃	胴	隆線、角押文	〃	白色粒子、雲	
11	〃	〃	〃	隆線	〃	母	

ができた。P_1（23×20cm、深さ25cm）、P_2（36×34cm、深さ30cm）、P_3（35×25cm、深さ15cm）、P_4（25×23cm、深さ24cm）、P_5（34×28cm、深さ23cm）を測る。炉は、中央に設けられている。小形の石囲炉で、30×20cmの小さなものである。炉底までの深さは5cmと浅く、焼土の堆積はない。炉から30cm離れて、石皿が磨面を上にして床に裾えされていた。

遺物　大きく2系統に分けられる。1～4の4個体は平出第三類A系統である。5～11をはじめとする7個体が勝坂式土器系統に属する。この内の1個体（第80図7・9）は50号住居址出土のものと同一個体と考えられる。また、6は半截竹管を使った平行押し引き文であり、純粋な勝

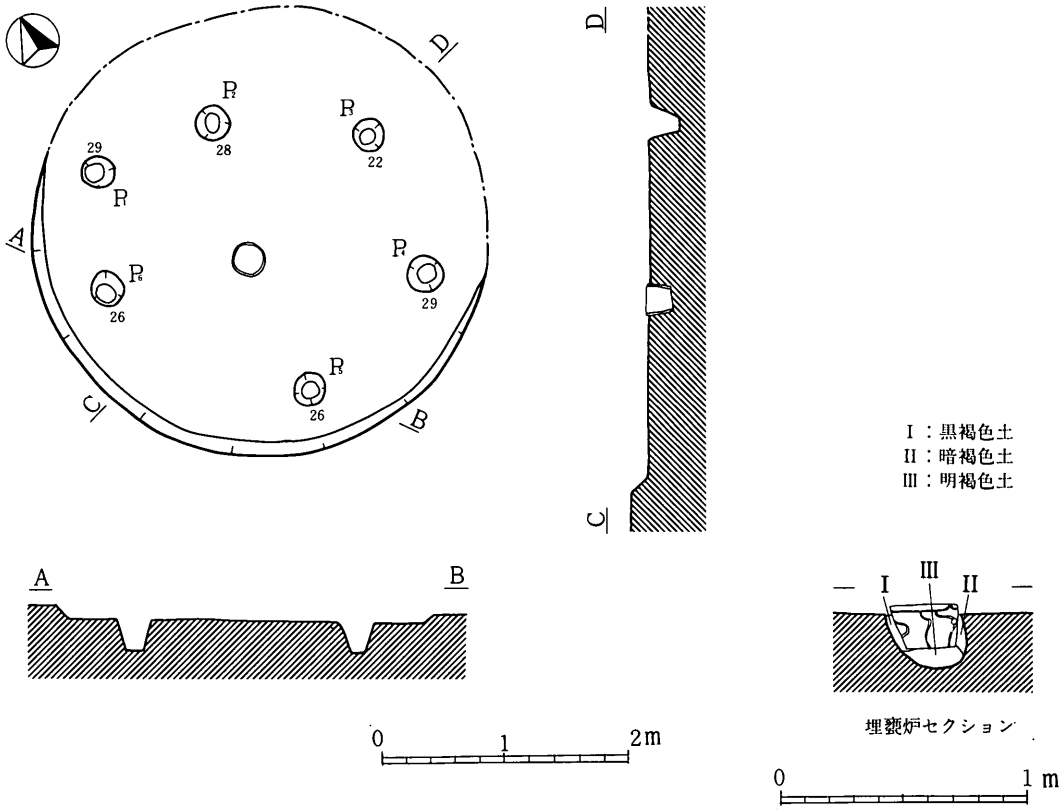
坂系統とは異なっている。時期は勝坂Ⅰ（狢沢）式土器の段階である。

第48号住居址

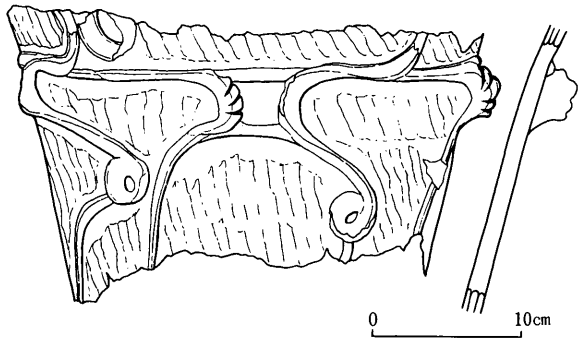
遺構　E・F—5区にあり、北側は流出している。

北壁が流失しているため正確な規模は知ることはできないが、残存部分から推定すれば、直径360cmの円形を呈すると思われる。残っている南壁も、壁高5～10cmと極めて浅く、わずかな立ち上りから壁の存在を知り得た状態である。床は、礫混りのローム面に構築され、ほぼ平坦であるが、踏み固められて良好な床面とはなっていない。柱は、6本主柱で、P_1（27×25cm、深さ29cm）、P_2(27×27cm、深さ28cm)、P_3(24×24cm、深さ22cm)、P_4(30×27cm、深さ29cm)、P_5(26×25cm、深さ26cm)、P_6（29×27cm、深さ26cm）がこれにあたる。各柱穴間は100cm程度の間隔を有するが、P_5、P_6間のみは180cmと幅広くなっている。炉は、中央やや南寄りに設けられている。深鉢形土器の胴部を輪切りにして埋設した埋甕炉である。土器の縁は、床面より5cmほど突き出している。焼土はみられない。

遺物　炉体土器Ⅰ個体のみである。胴部の隆線による構成は左右対称を基本にしており、阿玉台Ⅰb式土器に類似するものである。一方、2種の突起を貼付し、さらに指頭圧痕をナデつぶしており、阿玉台式土器とは異なっている。勝坂Ⅰ式土器に併行する土器であろう。



第81図　第48号住居址



器形　深鉢
色調　赤褐色
胎土　白色粒子混入
焼成　良好
文様要素　隆線、貼付文

第82図　第48号住居址出土土器

第50号住居址

遺構　G—9・10区にあり、44号住居址の床面精査中、埋甕炉が検出され住居の存在が判明した。そして、44号住居址に伴うには不自然な柱穴があり、これらの幾つかが本址の柱穴であろうと推定される。

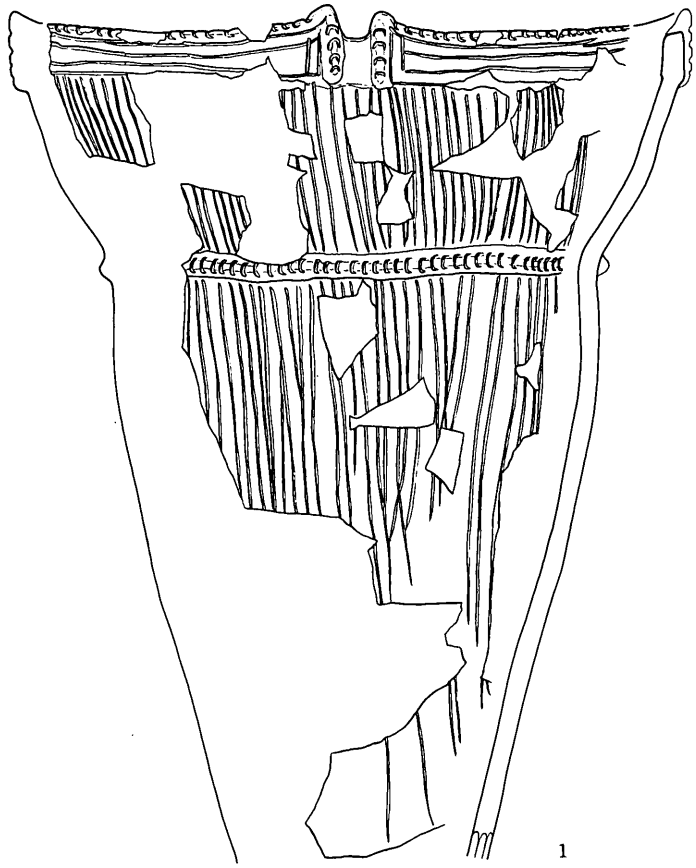
壁、床は全く失われてしまっているので、規模・プランは不明である。炉は、埋甕炉であり、痕跡的に残存する。柱穴は、P_{13}(26×24cm、深さ22cm)、P_{14}(20×19cm、深さ14cm)、P_{15}(15×13cm、深さ22cm)があたり、他にP_{11}、P_{12}も関係するかも知れない。炉、柱穴以外の施設は破壊されており検出することができなかった。

遺物　中信地区において縄文中期前葉から中葉への移行を知る上で重要となる資料である。炉体土器（第83図２）は懸垂文の一条が蛇行を始めており、五領ケ台式土器の最終末を飾るものである。覆土中には五領ケ台から勝坂段階の各系統の土器が含まれている。五領ケ台段階では沈線文系（いわゆる踊場系）が３個体（第84図３～５）、縄文系が５個体（第84図９～16)。後者は五領ケ台II式のうちでも新しい段階のものである。12～16は同一個体と考えられ、16には押し引きの手法がみられる。五領ケ台式土器の最終末の段階に属するものは、第83図２のほか１がある。後の平出第三類Aの構成を整えているものの半截竹管による連続刻み文が残存している。２には結束縄文が残存しており、これは関東地方では見られない本地域の特徴である。勝坂I式段階のものでは平出第三類A系統の古手が３個体。勝坂系統が３個体である。このほかこの時期に伴うと思われる無文の深鉢１、浅鉢１個体。不明１個体がある。攪乱を激しく受けた住居ではあるが、北陸系統の土器が認められないのも一つの特徴である。

(2)　弥生時代

第８号住居址

遺構　本址はI地区西区の東端にあり、A・B—17グリッドに存在する。調査区を南北に横切る道路下に一部はいっているため住居の全容を現わすにいたらなかった。表土が浅く攪乱が著し



1

器形　深鉢
色調　赤褐色
胎土　白色粒子混入
焼成　良好
文様要素　キザミのある隆線、半截竹管による平行沈線

2

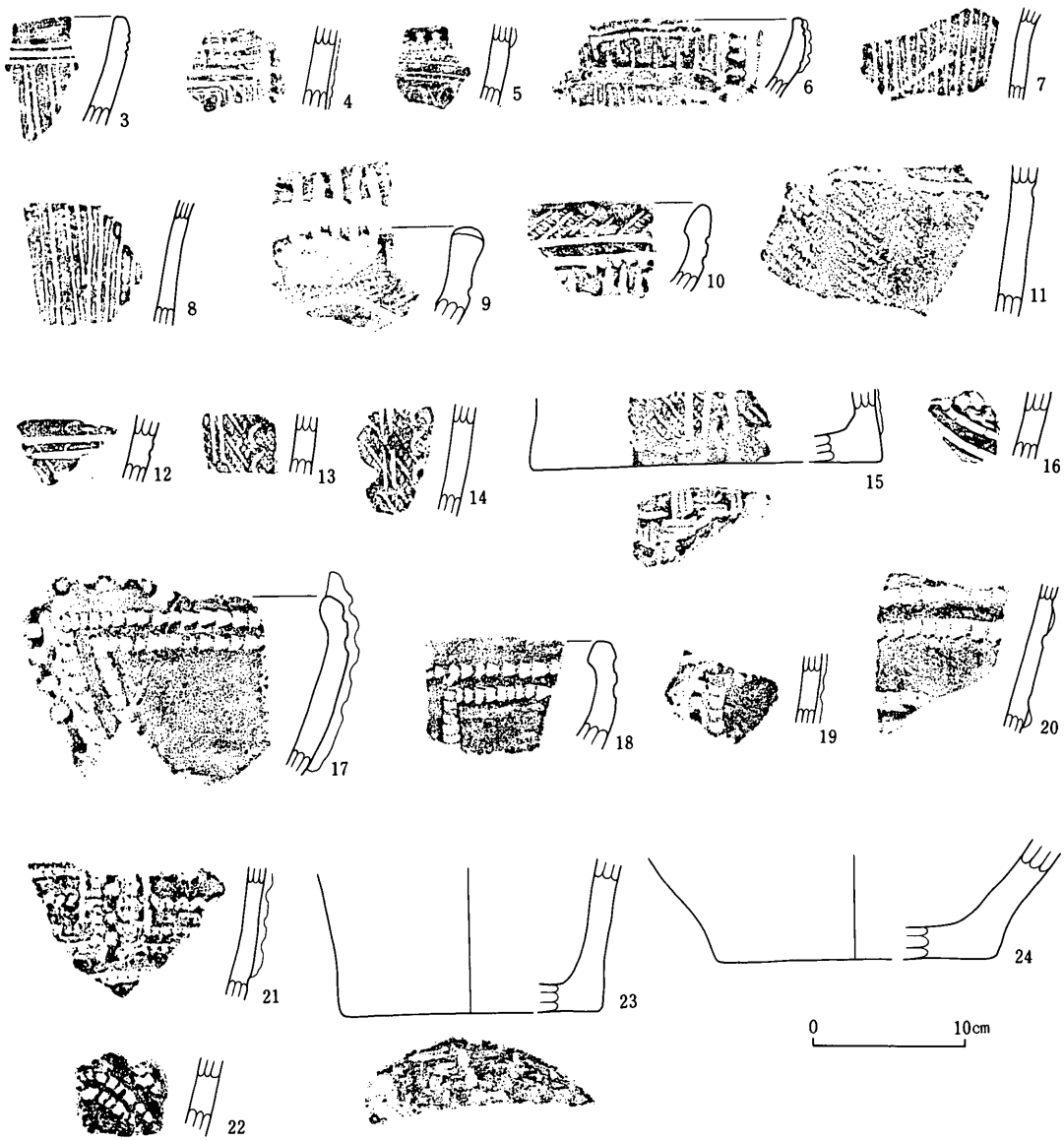
器形　深鉢
色調　褐色～黒褐色
胎土　白色粒子混入
焼成　良好
文様要素　隆線、沈線、結束のあるLR縄文

0　10cm

第83図　第50号住居址出土土器(1)

かったこと、また壁が明瞭でなかったことなどから住居址の検出に困難をきたしたが、埋甕炉が出土したことから住居址と認定した。なお、本住居址は埋甕炉の存在から弥生時代の住居址と判明したが、覆土内に一括の古墳時代の遺物が出土したことから、おそらく本址の直上には古墳時代の住居址があったが、耕作による攪乱のため消滅したものと推察される。後者については第51号住居址とした。

東壁の一部が調査区域外にあるためプランを正確に把握することはできないが、残存壁より推して南北5.58m、東西3.80mを測る隅丸方形プランを呈すると思われる。主軸方向はN—12°—Wである。



第84図　第50号住居址出土土器(2)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	胎土	備考
3	50住	深鉢	口縁	半載竹管による平行沈線	ミガキ	白色粒子混入	
4	〃	〃	胴上半	隆線、平行沈線	〃	雲母、石英	
5	〃	〃	〃	〃	〃	白色粒子など	
6	〃	〃	口縁	隆線、角押文、平行沈線	〃	雲母、石英	
7	〃	〃	頸部	平行沈線	〃	石英多量	
8	〃	〃	〃	〃	〃		
9	〃	〃	口縁	沈線、縄文、刻み	〃		
10	〃	〃	〃	沈線、縄文、刺突	〃		
11	〃	〃	胴	沈線、ＬＲ縄文	〃	白色粒子	
12	〃	〃	胴上半	沈線、ＬＲ結束縄文	丁寧なミガキ	〃	12～15同一個体
13	〃	〃	胴	〃	〃	〃	
14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
15	〃	〃	底部	〃	〃	〃	
16	〃	〃	胴上半	角押文、刺突	〃	〃	12～15と同一個体か？
17	〃	〃	口縁	隆線、角押文、刺突	ミガキ	〃	
18	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
19	〃	〃	胴	〃	〃	〃	
20	〃	〃	〃	隆線、角押文	〃	〃	
21	〃	筒？	〃	隆線、角押文、刺突	〃	白色粒子など	
22	〃	深鉢	〃	隆線、角押文	〃	黒色粒子	
23	〃	〃	底部		ナデ	白色粒子	
24	〃	浅鉢	〃		ミガキ	白色粒子多量	

床面は礫混りロームに構築しており、起伏が著しい。ピットは6基検出され、このうち主柱穴はP_1、P_2、P_3、P_4の4本柱と考えられる。

壁は極めて遺存状態が悪く、住居址の確認を手間どらせる元となったが、残存する壁について言えば良好な掘り込みをしている。壁高は西壁12cm、南壁12cm、北壁5cmを測る。

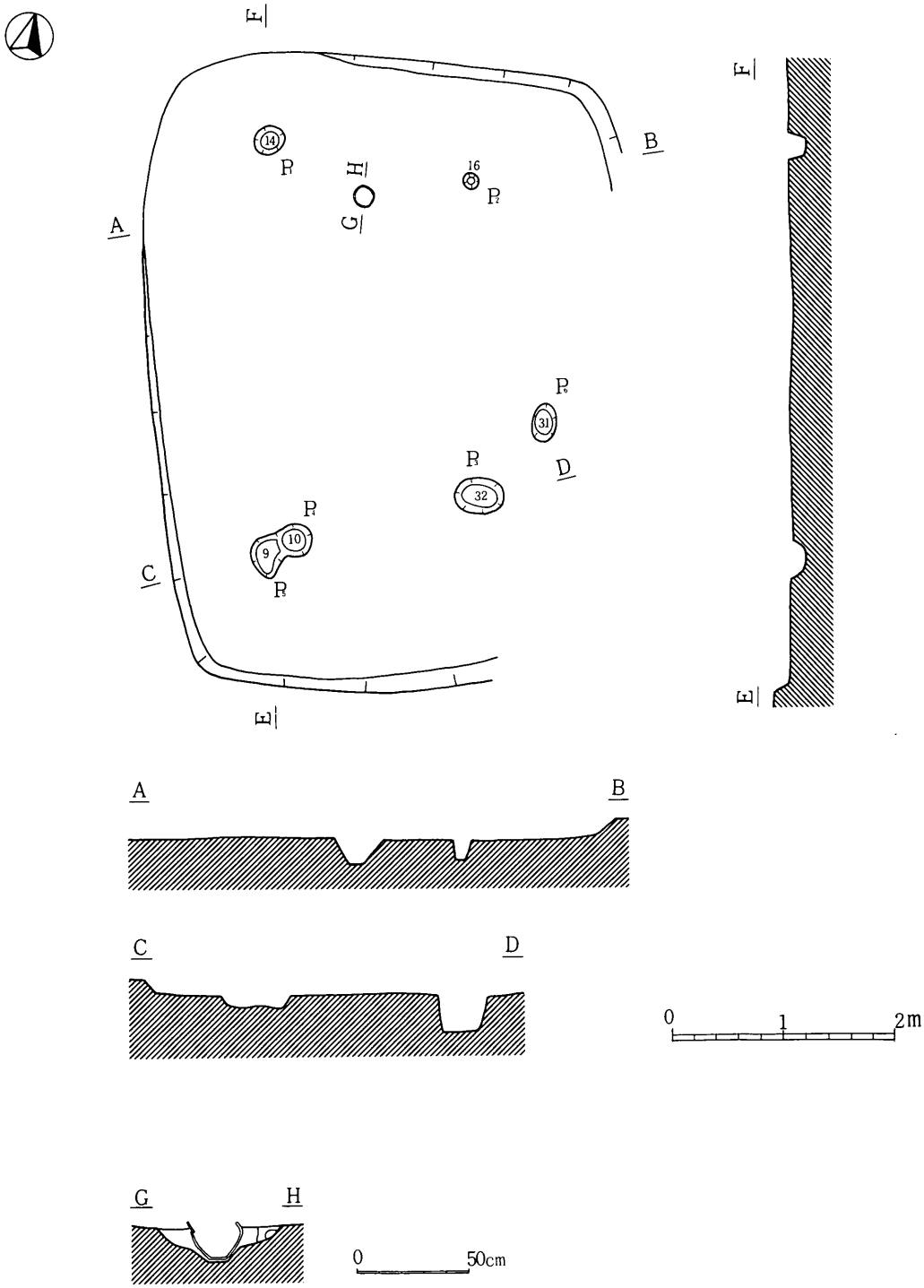
埋甕炉は主柱穴P_1、P_2を結んだ線の約20cm内寄りに設置しており、底部と口縁を欠く甕を埋設している。付近は焼土、炭等はほとんど確認できなかった。

遺物　本址の遺物として埋甕炉(1)が図示できたのみで、他は破片が数点得られたのみである。埋甕炉(1)は口縁部および底部を欠く他はほぼ完形で検出された。胴部上半に皮状文が一帯確認できるのみである。調整方法は胴部外面上半は横方向の、そして胴部外面下半は縦方向の強く、ケズリにちかいヘラミガキによる。焼成は大変良く、胎土には約5mm大の小石を多く含む。(2)は甕の口縁部の破片である。全面に波状文が施されており、外面には炭化物の付着が認められる。(3)～(10)は甕の頸部の破片であろう。波状文、簾状文が認められる。調整はヘラミガキによる。

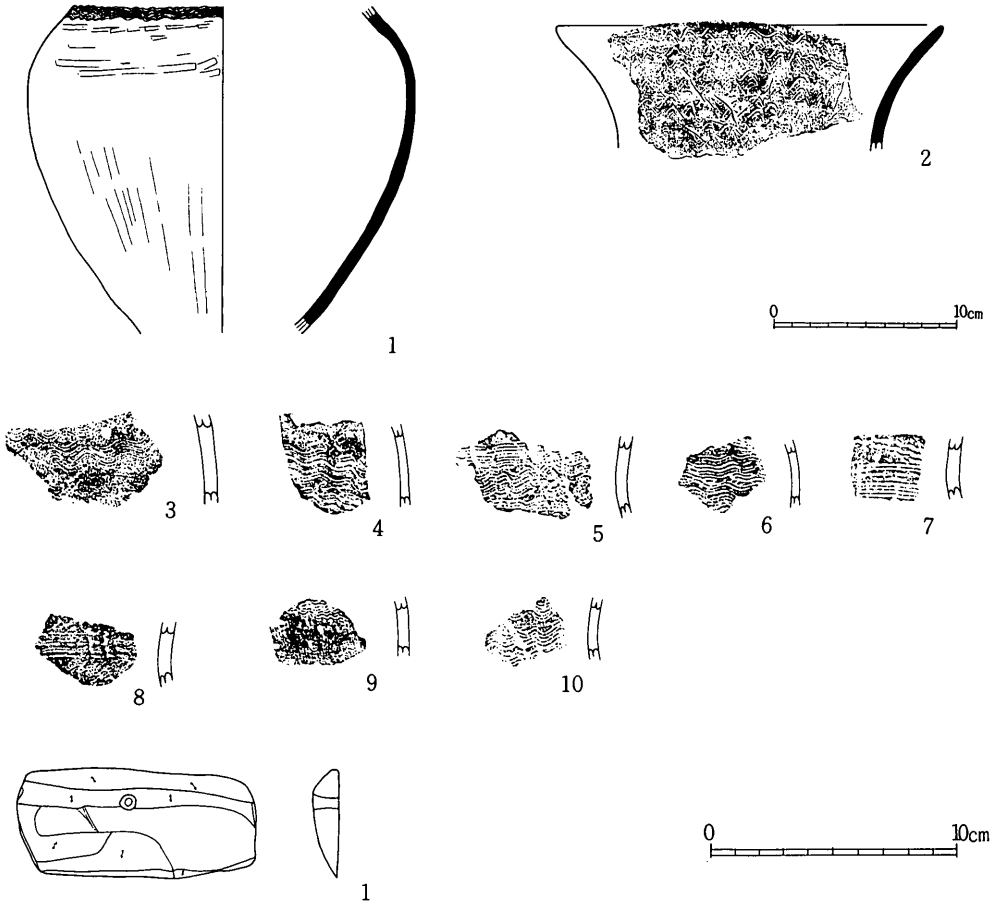
本遺跡で唯一の石包丁が出土している。精巧に加工された磨製品で、孔は1つ有し、両側から穿孔されている。長さ9.5cm、幅4.3cm、厚さ0.9cm、重さ68.3gを測り、石材にはホルンヘルスを用いている。

第26号住居址

遺構　E—28区にあり、南半部が調査地区外のため未調査となっている。Ｉ地区東地域のちょうど中央にあたり、同じ弥生時代の住居址である28号住居址は東北方10mの位置に、また1号方形周溝墓は西方10mの場所にある。



第85図　第８号住居址

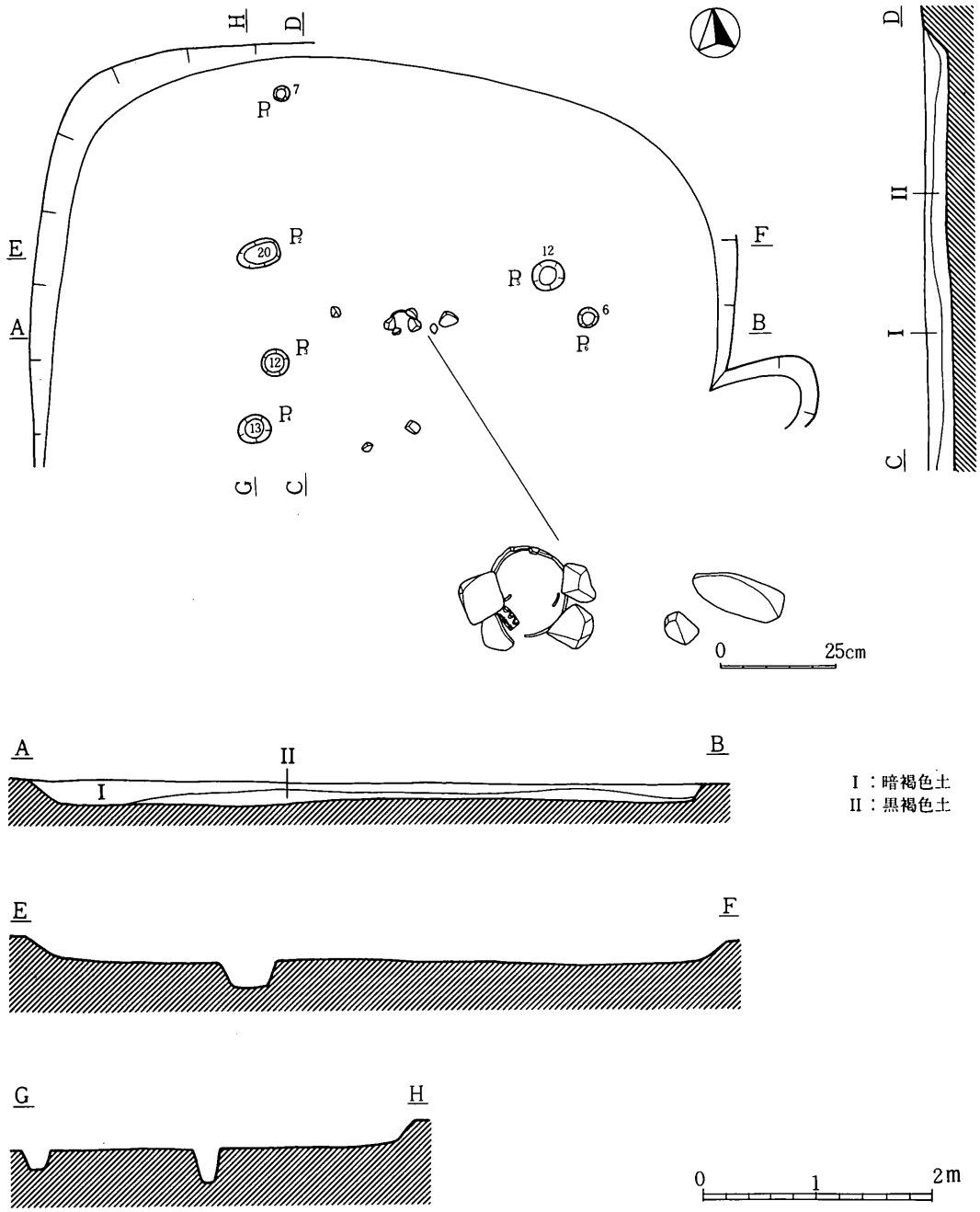


第86図　第8号住居址出土遺物

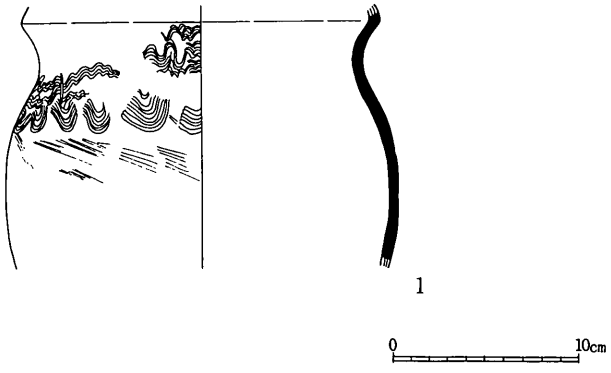
土器観察表

番号	器形	部位	文様構成要素	器面調整	胎土	備考
1	甕		波状文	ミガキ	長石 小石多く含む	埋甕炉
2	〃	口縁	〃	〃		
3	〃	頸部	〃	〃	長石	
4	〃	〃	〃	〃		
5	〃	〃	〃　簾状文	〃	長石 砂粒	
6	〃	〃	〃	〃	長石	表面にスス付着
7	〃	〃	〃　簾状文	〃		〃
8	〃	〃	〃	〃	長石	少々摩耗
9	〃	〃	〃	〃	長石	
10	〃	〃	〃	〃	長石	摩耗激しい

検出されたのは北半のみであり、しかも北壁の大半が攪乱にあっているため正確な規模・プランは把握できない。おそらく長方形プランを呈すると思われるが断定できない。短辺と思われる東西が615cmを測ることからかなり大形の住居址であろうと予測される。壁は、東壁18cm、西壁17cm、北壁23cmの壁高をもち、傾斜のある掘り込みである。床は北壁沿いが堅く良く残されている。



第87図　第26号住居址



第88図　第26号住居址出土土器

土器観察表

番号	器形	部位	文様構成要素	器面調整	胎土	備考
1	甕		波状文、円弧文	外面ハケメ状調整 内面ミガキ	長石 石英 雲母	埋甕炉

柱穴には、P_2（39×22cm、深さ20cm）、P_5（27×23cm、深さ12cm）P_4（29×21cm、深さ13cm）が該当し、P_1、P_3、P_6は支柱的役割を果たすものかもしれない。炉は、北壁に寄ったP_2、P_5の中間からやや内側に設けられている。石囲い埋甕炉である。

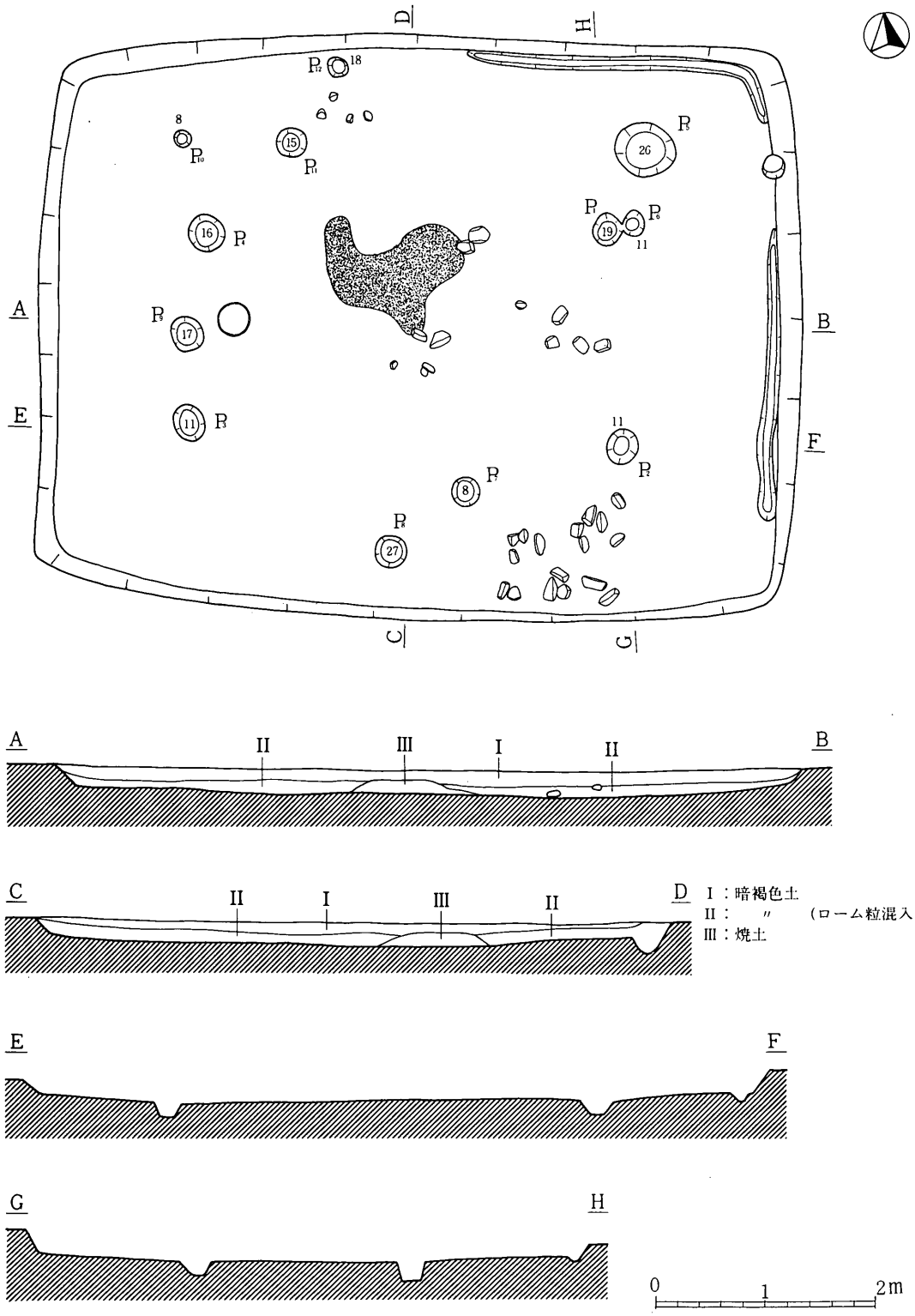
遺物　本址の出土遺物は大変少なく、埋甕炉(1)が図示できたのみである。口縁部に一条の稜をもつ。波状文が施文された後円弧文が施文されている。文様帯の下にはハケメ調整痕が認められる。図示できなかったが、朱を塗彩した土器片が出土している。

第28号住居址

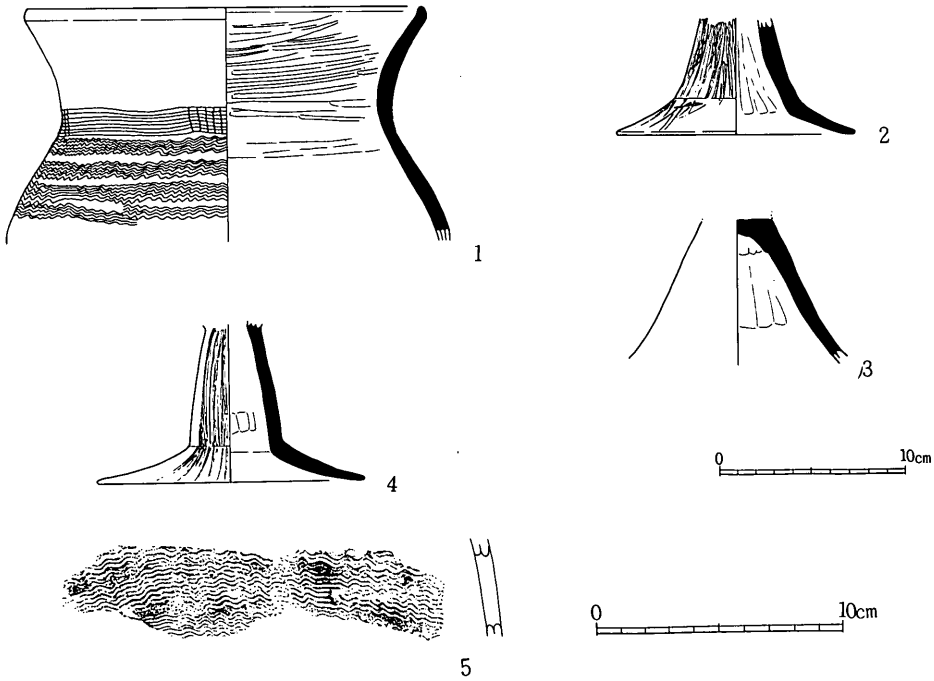
遺構　C・D—31区にある。方形周溝墓群の東方20mに位置する。

東西710cm、南北540cmの東西に長い長方形を呈する。砂利混りローム面を掘り込んで構築された住居で、覆土は暗褐色土、ローム粒混入の暗褐色土が流入している。壁はやや傾斜をもつもしっかりした掘り込みで、壁高は、東壁16cm、西壁10cm、南壁22cm、北壁9cmを測る。床は、砂利混りローム面上のため起伏が著しく、特に中央部分の起伏が顕著である。南東壁下に長径10cm前後の礫が11個存在する。周溝は、東壁および北壁の一部にあり、幅10～15cm、深さ7cmである。柱穴は、P_1(09×26cm、深さ19cm)、P_2(31×30cm、深さ11cm) P_3(33×26cm、深さ11cm)、P_4(35×31cm、深さ16cm)、P_9（30×25cm、深さ17cm）がこれにあたり、他に性格不明のピットがみられる。炉は、西側主柱穴のP_3、P_4間のやや内側寄りに設けられている。50×50cmの掘り込みの中に甕の口頸部を逆位に埋設した埋甕炉である。

遺物　本址より甕、高坏が検出されたが、量的には大変少ない。埋甕炉(1)は口縁部に施文は認められず、頸部から胴部上半にかけて一帯の簾状文、三帯の波状文が施文されている。内面調整は横方向のヘラミガキによる。また内面にはススの付着も認められる。高坏は3点出土したが、



第89図　第28号住居址



第90図　第28号住居址出土土器

土　器　観　察　表

番号	器形	部位	文様構成要素	器面調整	胎　土	備　考
1	甕		波状文 簾状文	ミガキ	長石 雲母	埋甕炉
2	高坏	脚部		〃	長石	
3	〃	〃		〃	長石	
4	〃	〃		〃		混入品（和泉期）
5	甕	頸部	波状文	ナデ	長石 雲母 石英(少)	

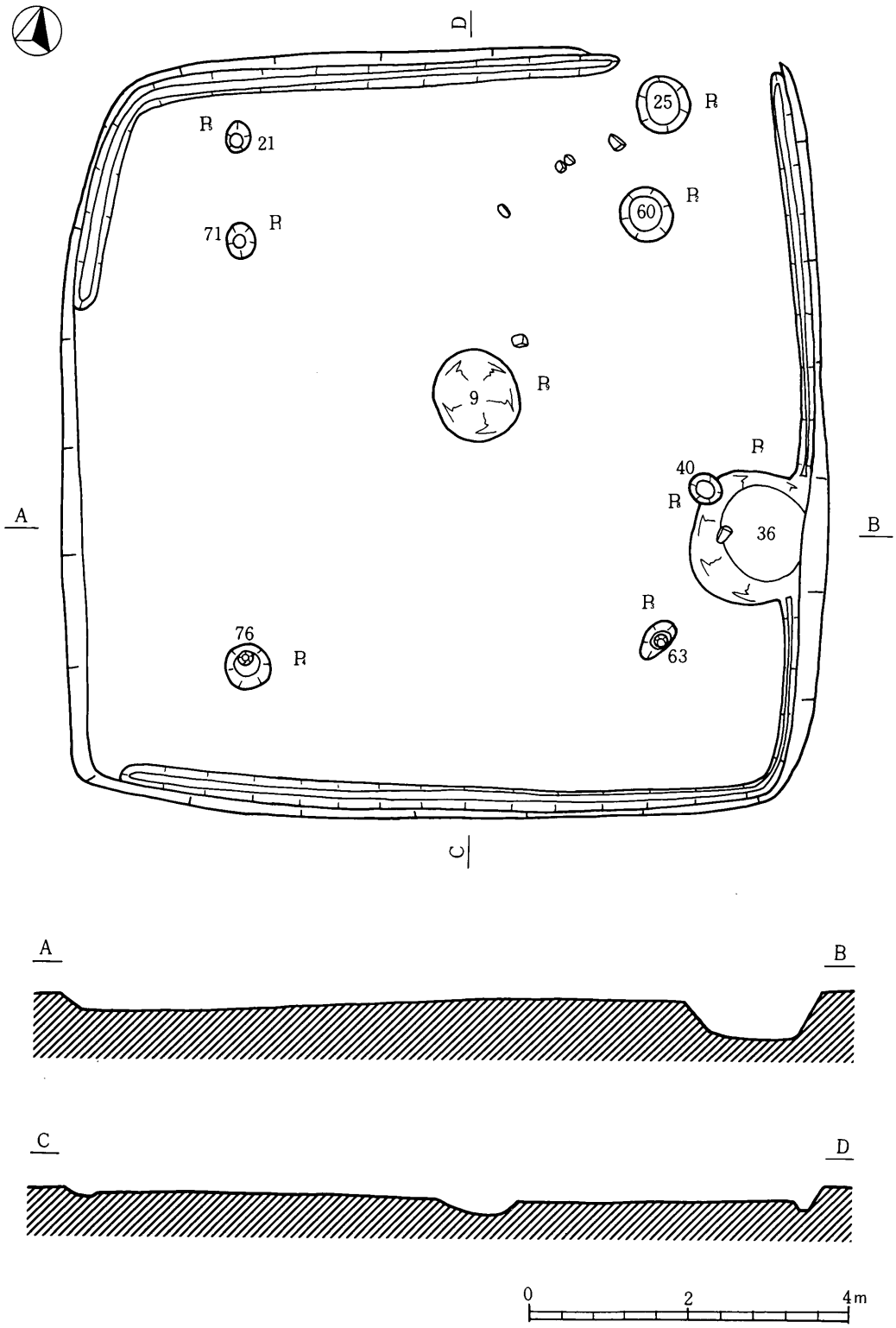
本址に属するかはやや疑問である。(4)は古墳時代和泉期のもので明らかに混入品である。(5)は甕の頸部である。波状文が施文されている。

(3)　古墳時代

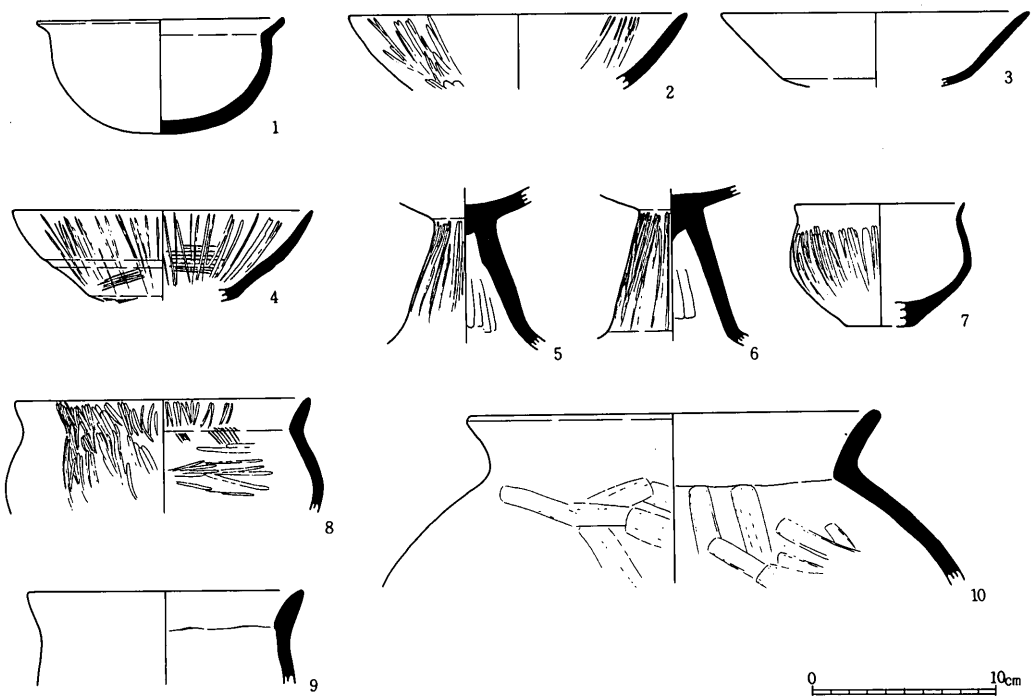
第16号住居址

遺構　本址はⅠ地区西区のやや西寄りにあり、C・D・E—5・6グリッドに位置する。古墳時代の大形住居址であり、本遺跡で検出された住居址の中では最大級のものである。北側に平安時代の第17号住居址が床面同レベルで接しており、また西側には約6m隔てて同じ古墳時代の第18号住居址が存在する。本址は遺構検出の段階でローム面に暗褐色土の落ち込みがすでに認められていたが、規模が大きかったため複数の住居址の重複も考えられ、最終的に壁の直線的なつながりを確認した段階で1軒の住居址としたものである。

遺構、プランはN—75°—Eの主軸方向を指す方形プランで、東西9.40m、南北9.28mの大形住居址である。



第91図　第16号住居址



第92図　第16号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	13.0		6.0	赤褐	赤褐	内面ヘラミガキ	両面とも摩耗激しい
2	〃	高坏	18.0			茶褐	明褐	ヘラミガキ	〃
3	〃	〃	16.4			赤褐	赤褐		〃
4	〃	〃	16.0			〃	〃	ハケによる調整の後ヘラミガキ	
5	〃	〃				茶褐	茶褐	外面ヘラミガキ	
6	〃	〃				赤褐	赤褐	〃	
7	〃	小型壺	9.0	3.6	6.5	黒	黒	口縁部横ナデ 外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ？	
8	〃	小型甕	15.4			赤褐	茶褐	ヘラミガキ 内面の一部ハケによる調整	
9	〃	〃	14.6			明褐	黒	口縁部横ナデ	
10	〃	甕	22.0			赤茶褐	赤茶褐	〃　胴部内外面ヘラナデ	

壁は北壁の第17号住居址との重複部分が欠損しており、また南壁は削平によりほとんど消滅している。壁高は東壁17cm、西壁13cm、南壁1cm、北壁11cmを測る。

床はローム面に構築しており、平坦でよく踏み固められている。周溝は西壁南半部を欠除しているほかは遺存しており、深さ5cm前後で掘り込まれている。なお、北壁東寄りの欠除部分は第17号住居址重複による削平部分と考えられる。ピットは全9基検出され、このうちP_1、P_2、P_3、P_4の4本が主柱穴と思われる。

本址のカマド、炉は不明確であり、掘り下げの段階ではP_7がカマドとして、またP_9が掘り込み炉としてそれぞれ可能性が伺われたが、いずれも焼土、炭等の決定的な判断材料を確認することはできなかった。

遺物　本址より土師器の坏、高坏、小型壺、小型甕、甕の出土がみられた。坏(1)はほぼ完形で

出土した。内外面とも磨耗が激しいため調整方法は判然としない。高坏は５点出土している。(4)はハケメ整形の後、ヘラミガキによって調整されている。小型壺(7)はほぼ全形をうかがうことができる。薄手のつくりで、焼成は良好である。黒色を呈し、口縁部は横ナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキによって調整されている。小型甕(8)は外面はヘラミガキ、内面はハケメの後ヘラミガキによって調整されている。甕(10)は「く」の字に外反する口縁部をもち、胴部は丸くふくらむ形態をもつであろう。内外面ともヘラナデによって調整されている。

本址の所属時期は出土土器より和泉期に該当しよう。

第18号住居址

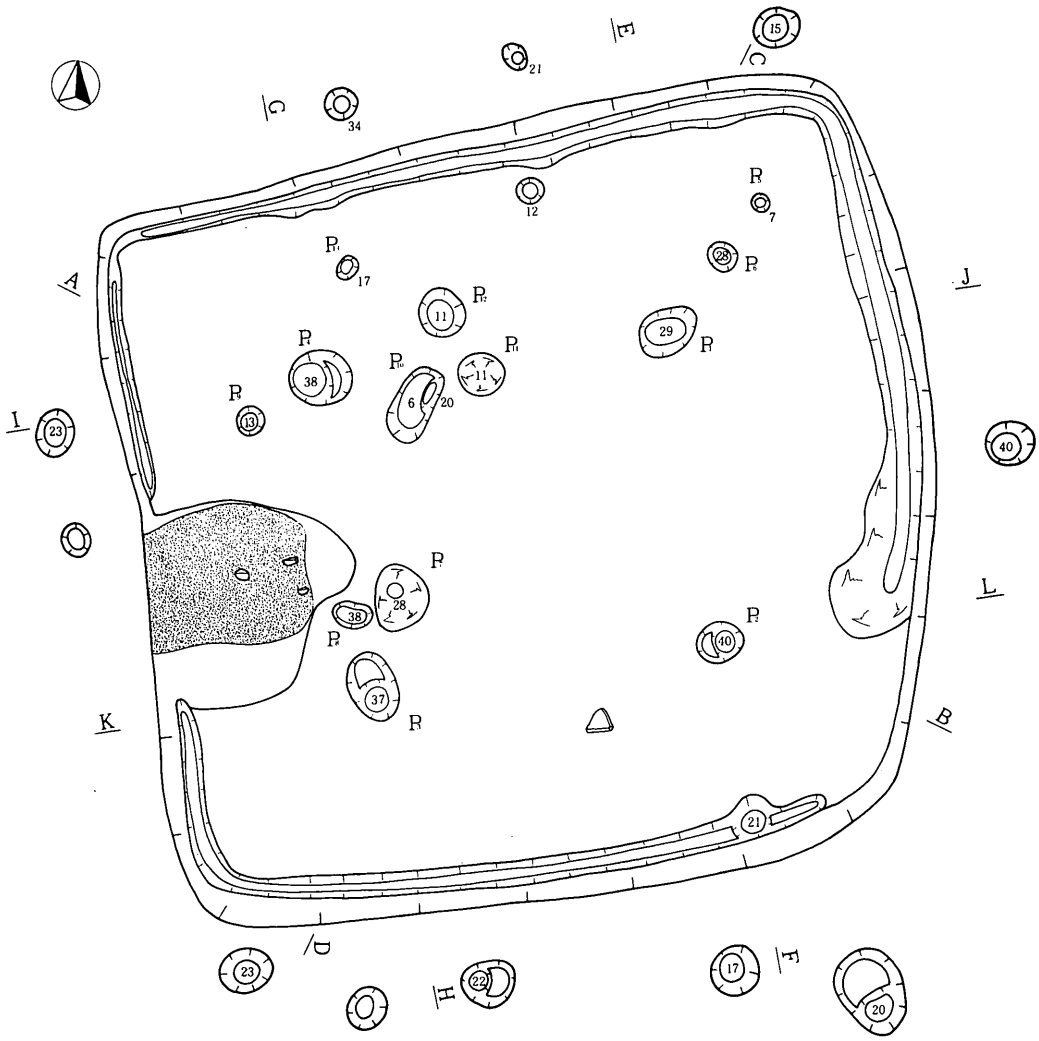
遺構　本址はＩ地区西区の西側にあり、Ｂ・Ｃ・Ｄ―２・３グリッドにかかる大形住居址である。南西側には第19号住居址が、また北東側には第21号住居址がそれぞれ隣接している。この付近は発掘調査区の中でも例外的に礫の混入が少なく、比較的安定した土壌堆積を示している。そのため遺構検出面での黒褐色土の落ち込みが明瞭な方形プランを呈していたため、住居址の存在は当初から容易に把握されていた。本址は今回の発掘調査により検出された住居址の中で最も遺存状態の良好な住居址の一つである。

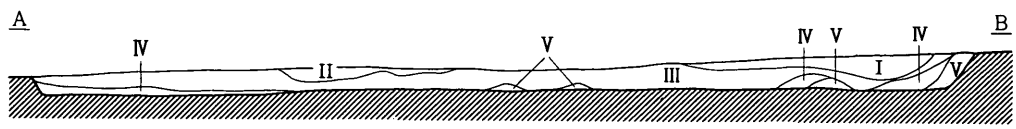
プランは7.06m×6.84mの大形方形プランを呈し、主軸はＮ―55°―Ｅの方向を指している。壁は全周にわたり遺存状態がよく、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は東壁36cm、西壁20cm、南壁28cm、北壁21cmを測り、他住居と比べかなり深い竪穴の感を受ける。

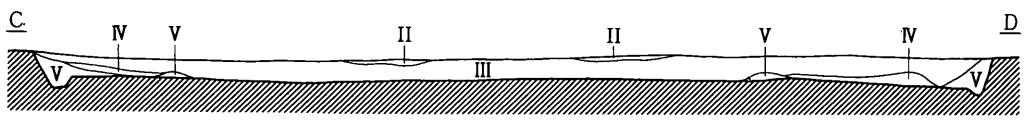
床面はローム面上に構築されており、全面よく踏み固められている。概観してほぼ水平な平坦面であるが、中央東寄りの箇所に230×60cmの範囲で床が約５cm盛り上がっている。柱穴はP_1、P_2、P_3、P_4の４本が主柱穴と推察される。このうちP_1を除く３本は２段の掘り込みがみられる。また壁から約40～60cm外側には、やや不規則な並びをする屋外柱穴が径11基検出された。各壁沿いに並ぶ屋外柱穴の数は一定でなく、とりわけ東壁沿いには僅か１基検出されたのみである。周溝はカマド付近と南東隅を除くと比較的残りがよく、特に南壁下に顕著である。

カマドは西壁中央に設置された粘土カマドで間口1.8m、奥行き1.9mを測る。カマド内に焼土の量は多く、かなり前面の床面にも飛び散っていた。

遺物　本址の出土土器は大変多く、カマドおよびカマド周辺を中心に土師器の坏４点、高坏12点、甕８点、ミニチュア土器１点を数える。坏(3)はカマド内出土である。口縁部外面は横ナデ、体部外面はヘラナデ、内面はヘラミガキによって調整されている。(1)(2)にくらべて口縁部は直立的である。これに対し、坏(4)はやや内湾した口縁部を有する。内外面ともヘラミガキによって調整されている。口縁部内面には指圧痕も認められる。高坏(5)はほぼ復元可能であった。口縁部は横ナデ、坏部内外面および脚部外面はヘラミガキによって調整されている。また坏部と脚部の接合点付近にはヘラケズリ痕も認められる。高坏(6)～(12)は坏部である。いずれもヘラミガキによって調整されている。甕(17)は胴部下半を欠くのみである。「く」の字に外反する口縁部と球形状の胴部を有する。甕(18)は焼成良好で、硬質である。外面はハケメ調整が施されており、その後口縁部

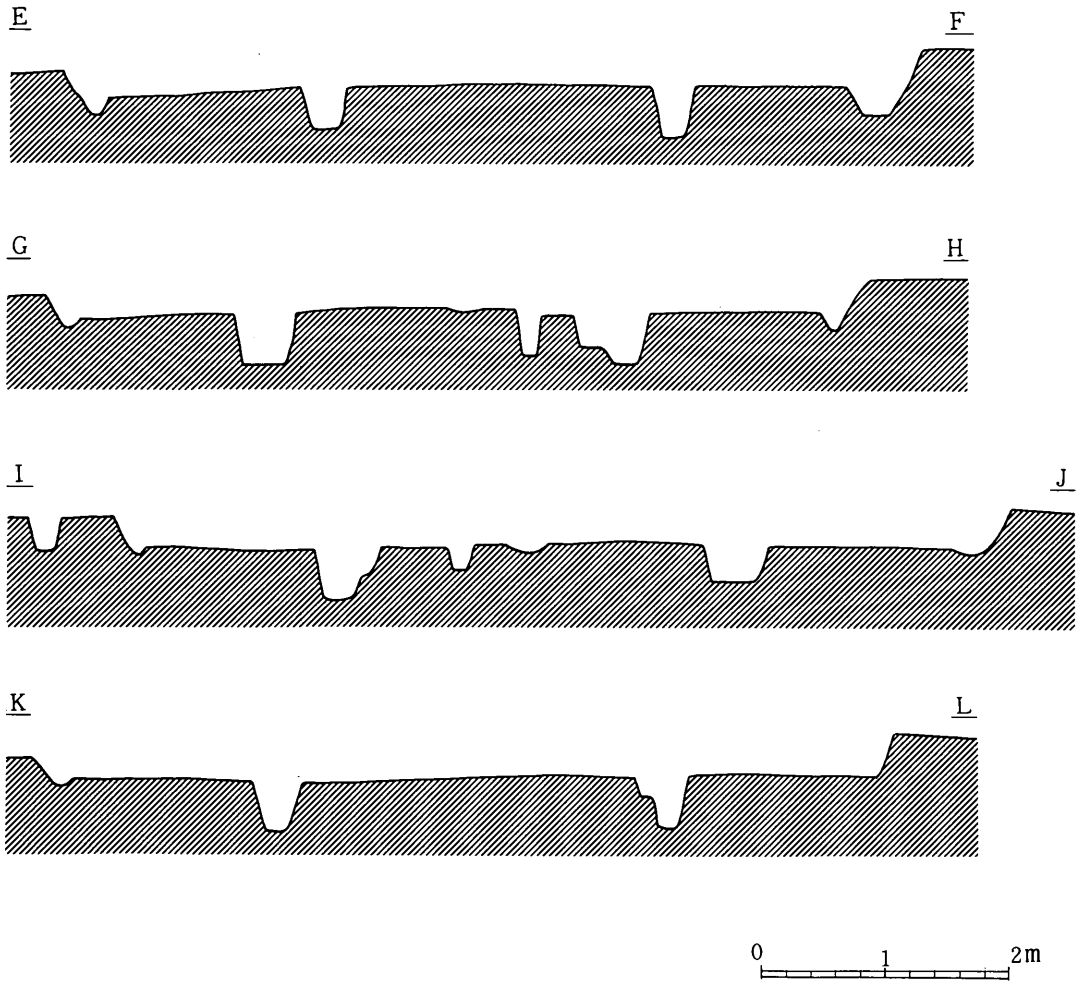






Ⅰ：暗褐色土（ローム・ブロックを含む撹乱）
Ⅱ：黒褐色土（焼土粒、炭を含む）
Ⅲ：暗褐色土（焼土、炭を含む）
Ⅳ：黒褐色土
Ⅴ：暗褐色土（ローム粒を多く含む）

第93図　第18号住居址

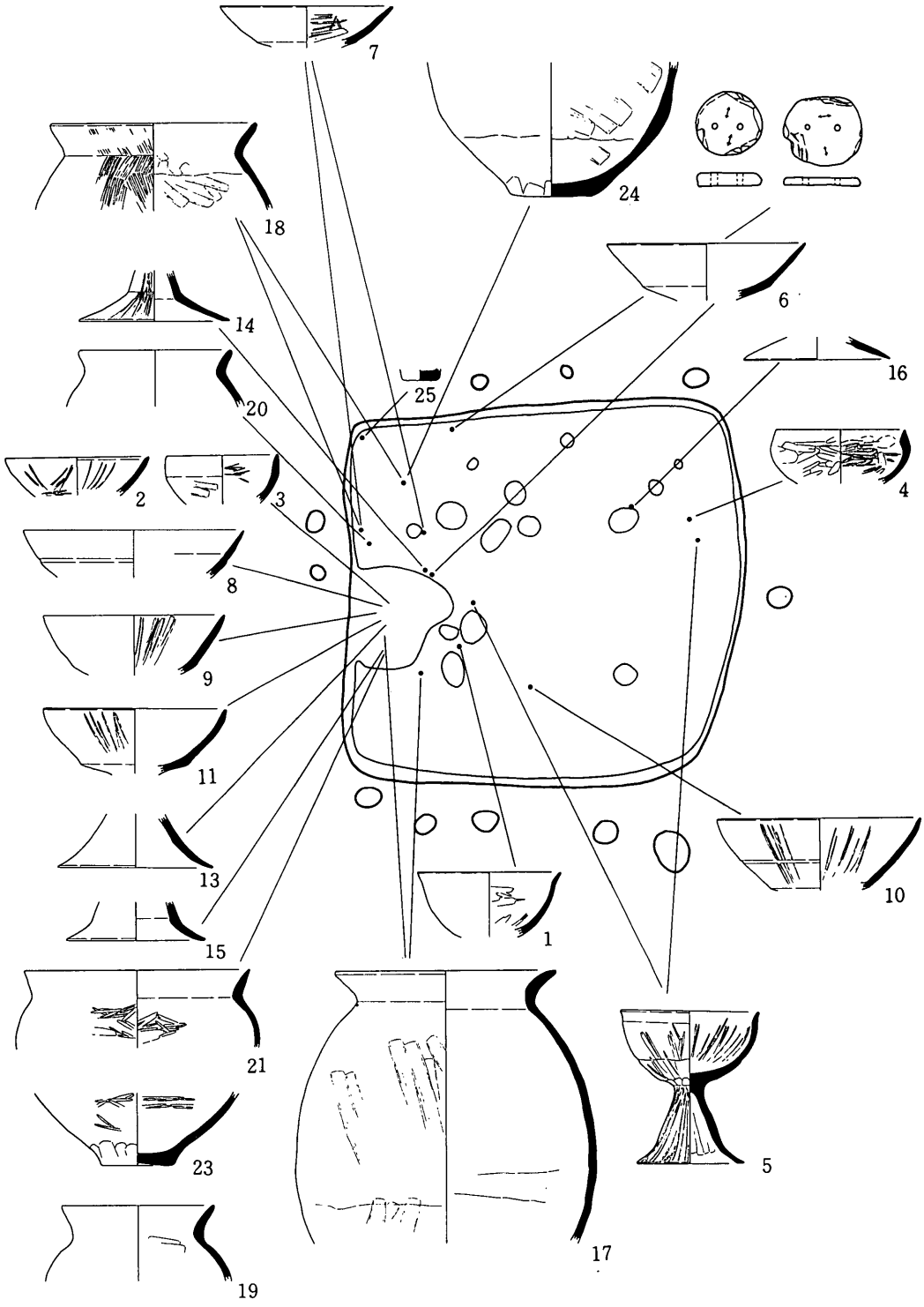


第94図　第18号住居址エレベーション

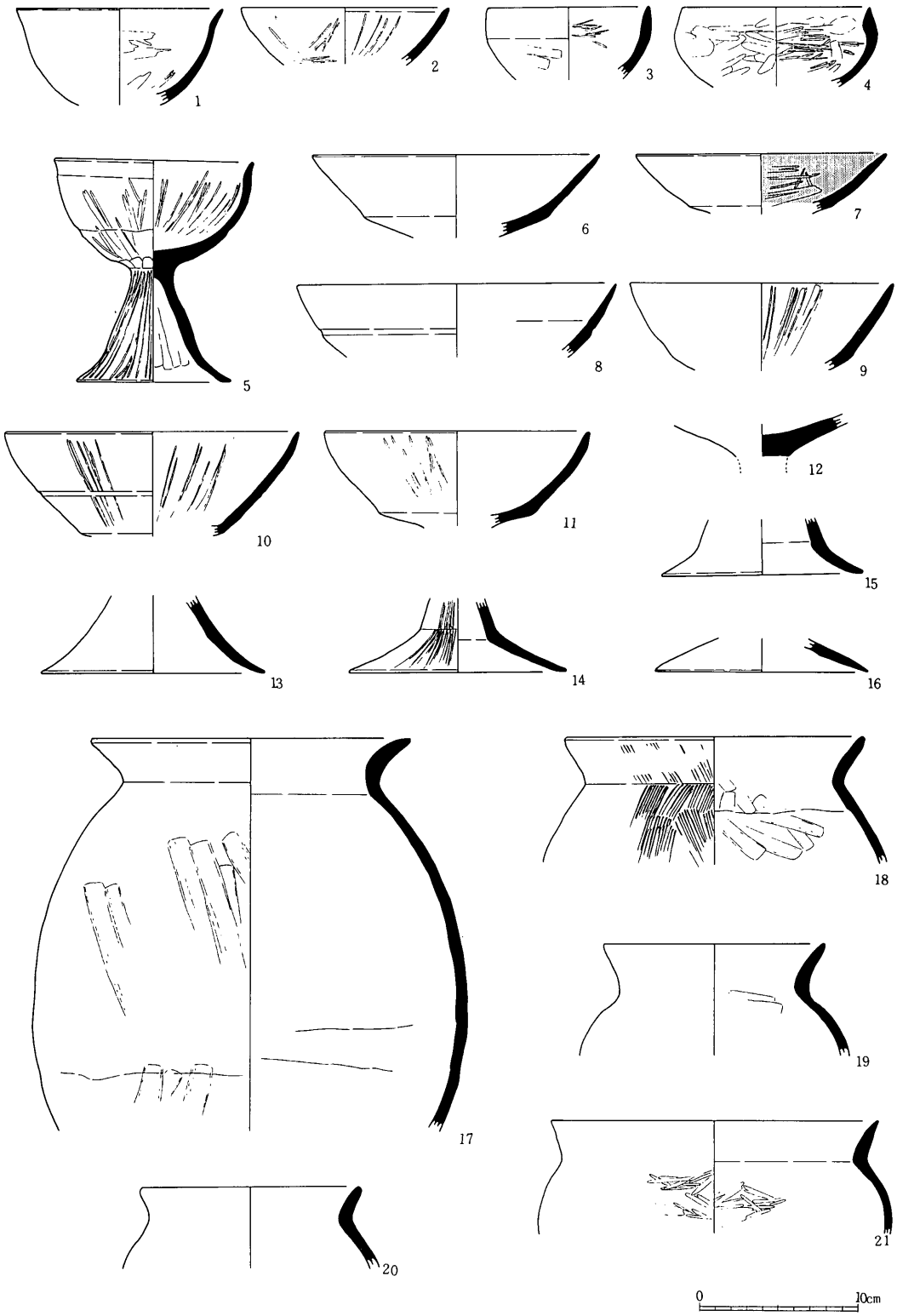
外面は横ナデされている。胴部内面はヘラナデによって調整されている。甕(21)は口縁部と胴部の接合点にはっきりした稜線をもつ。胴部は内外面ともヘラミガキによって調整されている。甕(23)、(24)は胴部下半のみである。球形状の胴部を有する。(23)はヘラケズリ、ヘラミガキ、(24)はヘラケズリ、ヘラナデによって成形、調整されている。また、(24)の底部には木葉圧痕が認められる。

本址の所属時期は出土土器より和泉期に該当しよう。

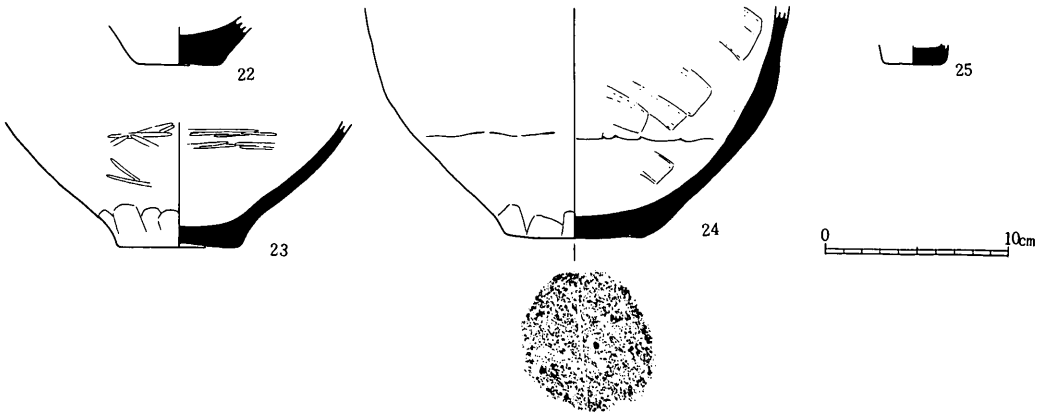
石製品１は断面台形を呈する珍しい石製品で、各面はよく研磨されている。頂上中央には穿穴がみられるが約４㎜の深さで止まっている。上面径2.3×2.1cm、下面径4.3×4.0cm、高さ1.9cm、重さ40.1ｇを測り、粘板岩製である。２・３は双孔円板で共に輝緑凝灰岩製である。２は径2.4×2.2cm、重さ2.9ｇ、３は2.0×1.9cm、重さ2.9ｇを測る。



第95図　第18号住居址土器出土状態



第96図　第18号住居址出土土器(1)



第97図　第18号住居址　出土土器(2)

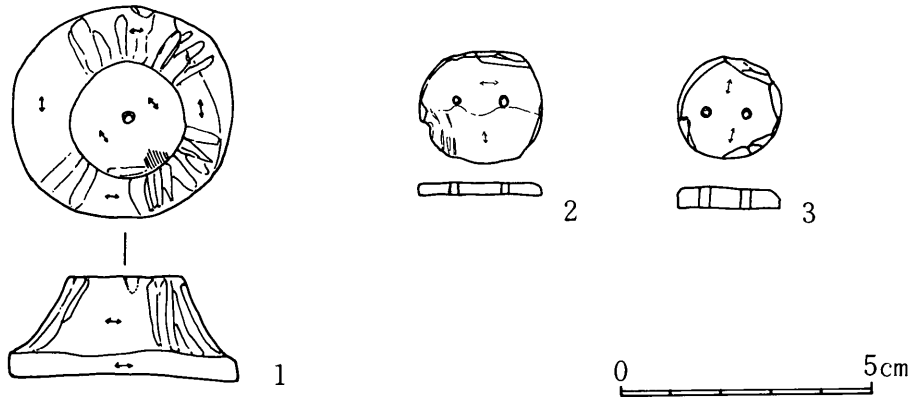
土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	13.0			暗褐	橙褐	口縁内面横ナデ、体部内面ヘラミガキ	外面摩耗激しい
2	〃	〃	13.0			橙褐	〃	ヘラミガキ	カマド内出土
3	〃	〃	10.0			〃	〃	口縁外面横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ヘラミガキ	〃
4	〃	〃	11.8			黒	黒褐	〃 〃 ヘラミガキ 内面に指圧痕	
5	〃	高坏	12.5	9.6	13.8	赤褐	赤褐	坏部ヘラミガキ ヘラケズリ 脚部外面ヘラミガキ 内面横ナデ	
6	〃	〃	18.0			茶褐	茶褐	ヘラミガキ	両面とも摩耗
7	〃	〃	15.6			暗褐	黒	〃	外面摩耗
8	〃	〃	20.0			橙褐	橙褐	〃	両面とも摩耗カマド内出土
9	〃	〃	16.4			明褐	茶褐	内面ヘラミガキ	多面摩耗 カマド内出土
10	〃	〃	18.2			橙褐	橙褐	ヘラミガキ	
11	〃	〃	16.6			〃	〃	〃	カマド内出土
12	〃	〃				赤褐	黒褐	〃	
13	〃	〃		14.0		明褐	明褐	ヨコナデ	少々摩耗、カマド内出土
14	〃	〃		13.6		橙褐	橙褐	外面ヘラミガキ	〃
15	〃	〃		12.4		〃	〃	〃	〃 カマド内出土
16	〃	〃		13.2		〃	明褐	〃 内面ヨコナデ	
17	〃	甕	20.0			明褐	〃	口縁部横ナデ 胴部外面ヘラナデ 内面輪積痕あり	
18	〃	〃	18.6			茶褐	暗褐	外面ハケによる調整の後 口縁は横ナデ 内面ヘラナデ	
19	〃	〃	13.8			明褐	明褐	胴部内面ヘラナデ	
20	〃	〃	13.6			〃	〃		両面とも摩耗激しい
21	〃	〃	20.4			橙褐	橙褐	口縁様ナデ 胴部内外面ともヘラミガキ	カマド内出土
22	〃	〃		4.2		茶褐	赤褐		〃
23	〃	〃		6.4		橙褐	茶褐	底部外面ヘラケズリ 胴部 内外面ともヘラミガキ	〃
24	〃	〃		7.2		暗褐	暗褐	〃 胴部内面ヘラナデ	底部に木葉圧痕
25	〃	ミニチュア土器		3.0		〃	〃		

第30号住居址

遺構　C・D—33にあり、北端が29号住居址と接している。

東西500cm、南北472cmのやや不整形の方形プランを呈する。壁は、立ち上がりもしっかりしており、きれいな掘り込みである。壁高は、東壁20cm、西壁2cm、南壁9cm、北壁15cmで、浅い。周溝は、東壁下で100cmほど切れるほかは全周している。幅8～16cm、深さ3～6cm、床は、多少起伏があるが、堅くしっかりしている。炉は、床面中央にある。東西90cm、南北60cm、深さ13cmの楕円形の掘り込みで、東端に土器片が出土している。土器片周囲には焼土が残されている。柱は、4本でP_1～P_4がこれにあたる。P_1(50×50cm、深さ38cm)、P_2(35×30cm、深さ37cm)、P_3



第98図　第18号住居址出土石製品

(35×32cm、深さ38cm)、P_4 (44×40cm、深さ36cm)で、P_4には30×30cm、深さ17cmの張り出しがある。ピットは、このほかに西壁から南壁にかけてP_5～P_8が存在する。深さ10～20cmのもので性格ははっきりしない。

本址は、覆土中に多くの礫があり、特異であった。

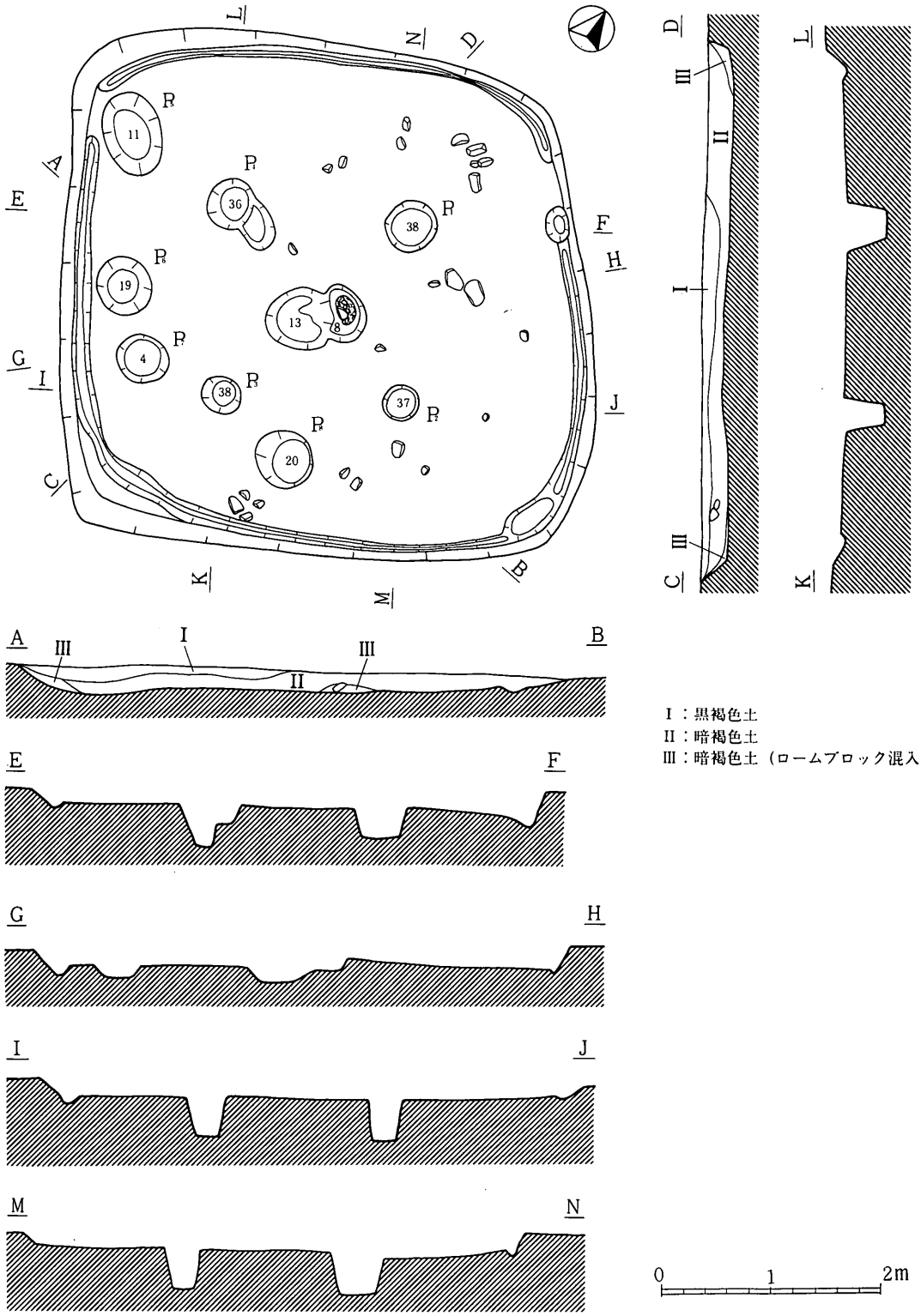
遺物　本址より土師器の高坏５点、鉢、坩、甕それぞれ１点ずつが出土した。高坏(2)はカマド内より出土した。脚部のみで、外面上方には不純物が付着している。壊れた後、羽口に転用したものと思われる。磨耗が大変激しい。高坏(5)は厚手で粗雑なつくりをしている。坩(7)は口縁を欠く以外は完形で出土した。外面は黒色を呈し、大変丁寧にヘラミガキが施されている。甕(8)は口縁部は横方向のヘラミガキ、胴部はヘラナデによって調整されている。やや粗雑なつくりである。

本址の所属時期は出土土器より和泉期に該当しよう。

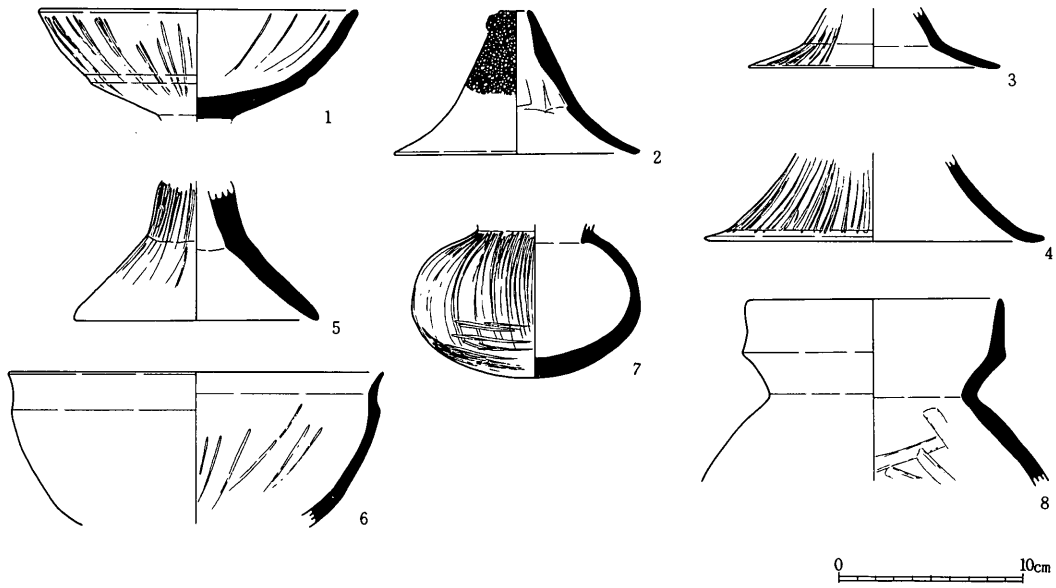
第34号住居址

遺構　F・G―５・６・７区にあり、北壁の一部が49号住居によって切られ、東壁の一部は流失している。台地崖に面して立地する。

砂利混りのローム面を掘り込んで構築した住居址で、礫を混入した暗褐色土・黒褐色土を覆土としている。東西870cmの大形隅丸方形を呈する。壁は、東壁の一部が流失しているほかは良く残っている。掘り込みは傾斜を示す。壁高は、東壁43cm、西壁12cm、南壁25cm、北壁32cmである。東壁中央は張り出しが認められるが、攪乱によるものと思われる。周溝は、東北コーナーが切れるほかは全周している。幅21cm、深さ13cm。床は、中央部はやや荒れているが柱穴から壁にかけての部分は平坦で堅く良い状態を示している。南東部分を中心にして床面に密着して炭化



第99図　第30号住居址



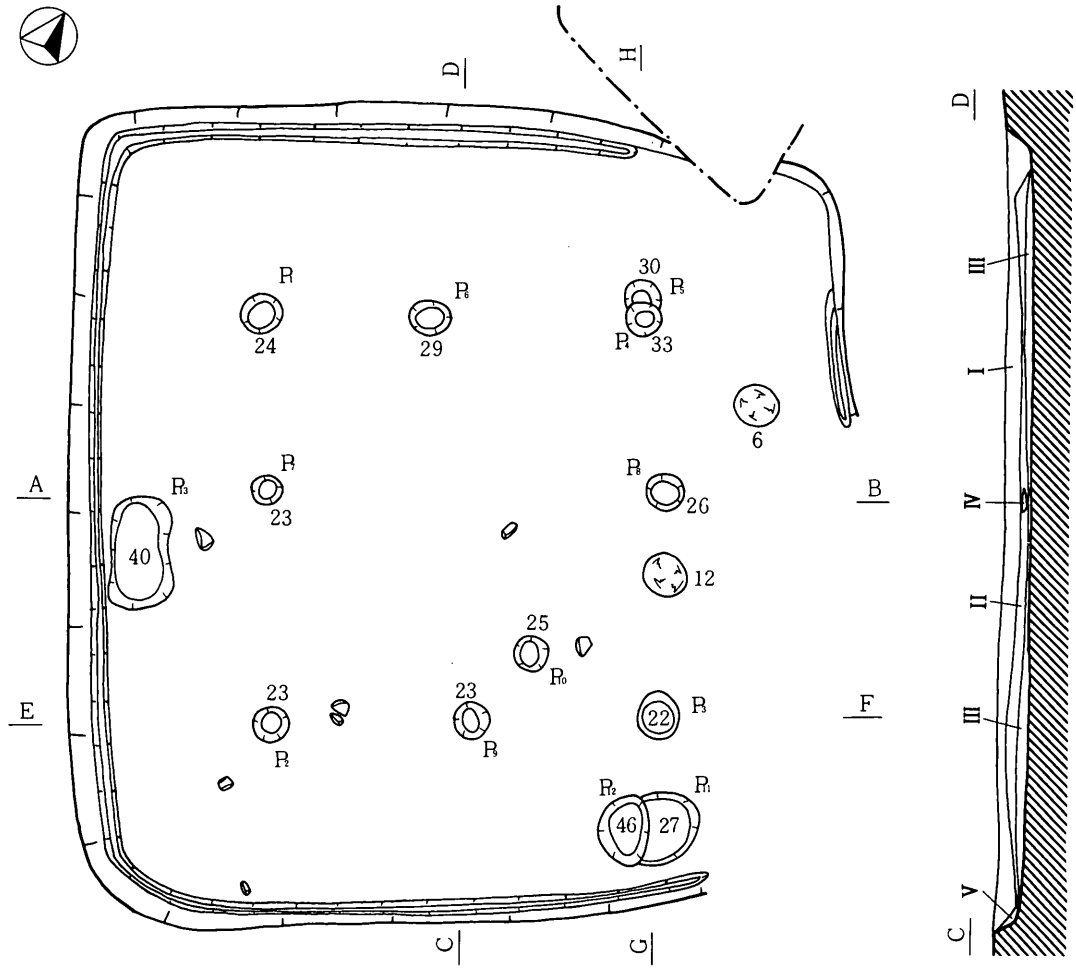
第100 図　第30号住居址出土土器

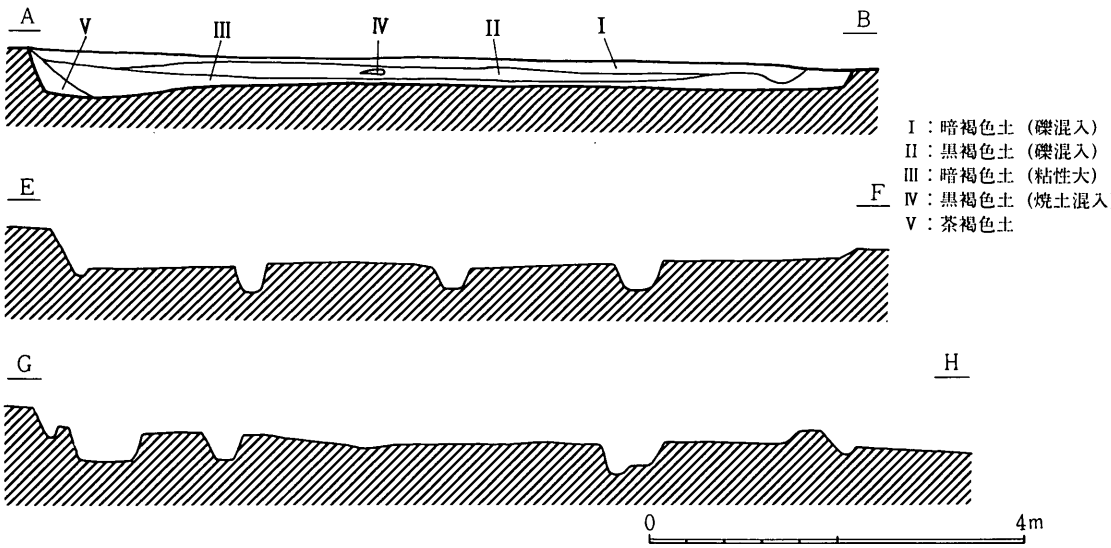
土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	高坏	17.0			赤褐	赤褐	ヘラミガキ	少々摩耗
2	〃	〃		13.0		茶褐	茶褐	〃　内面ヨコナデ	摩耗激しい
3	〃	〃		13.4		赤褐	赤褐	外面ヘラミガキ　〃	羽口に転用
4	〃	〃		18.0		明褐	〃	〃　〃	
5	〃	〃		13.0		灰	灰	〃	
6	〃	鉢(?)				暗褐	暗褐	口縁部横ナデ 内面ヘラミガキ	外面摩耗激しい
7	〃	坩				黒	〃	外面ヘラミガキ 内面不明	
8	〃	甕				暗褐	〃	口縁部外面ヘラミガキ 胴部ヘラナデ	

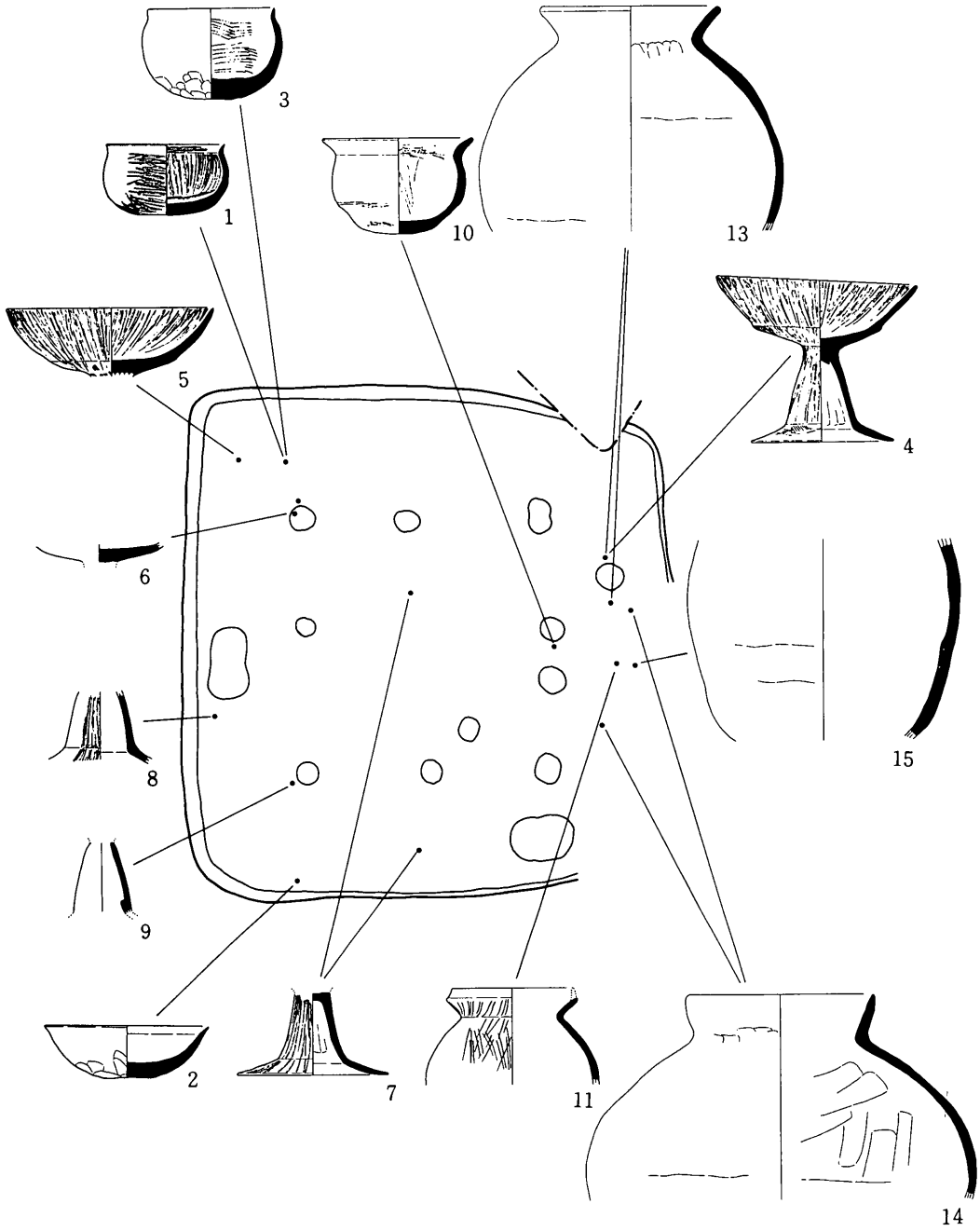
材が検出されている。焼土は見当らないが、消失家屋の可能性がある。柱は、8本柱で四隅のP_1～P_5までがやや太く、その中間のP_6～P_9が細い。P_1（44×42cm、深さ24cm）、P_2（38×34cm、深さ23cm）、P_3（45×44cm、深さ22cm）、P_4とP_5は切り合っておりP_4（径30、深さ33cm）、P_5（40×30cm、深さ30cm）。P_6（40×38cm、深さ29cm）、P_7（28×26cm、深さ23cm）、P_8（30×32cm、深さ26cm）、P_9（38×32cm、深さ23cm）。柱穴の掘り込みは比較的浅い。カマド、炉の痕跡は発見されていない。南壁下および西壁下に長径100cm前後、深さ30cmほどのピットがある。

遺物　土師器の坏、高坏、小型甕、甕が出土した。坏(1)は内外面とも黒色処理が施されており、体部外面、口縁部内面は横方向の、体部内面は縦方向のヘラミガキによって調整されている。また、口縁部外面は横ナデ調整である。坏(3)は坏(1)と似た形態をもつが、やや厚手である。底部外面はヘラケズリによって整形されている。体部内面はハケメによる整形の後、ナデによって調整されている。高坏は6点の出土をみた。(4)はほぼ完形で出土した。内外面ともこまかいヘラミガキによって調整されており、脚部の一部にはハケメ整形の跡も認められる。(5)は坏部のみほぼ完形で出土した。(4)が坏部外面に一段の稜をもっているのに対して、(5)は稜をもたず、丸味をおびている。小型甕(10)もほぼ完形で出土した。内外面ともヘラミガキによって調整されている。外面

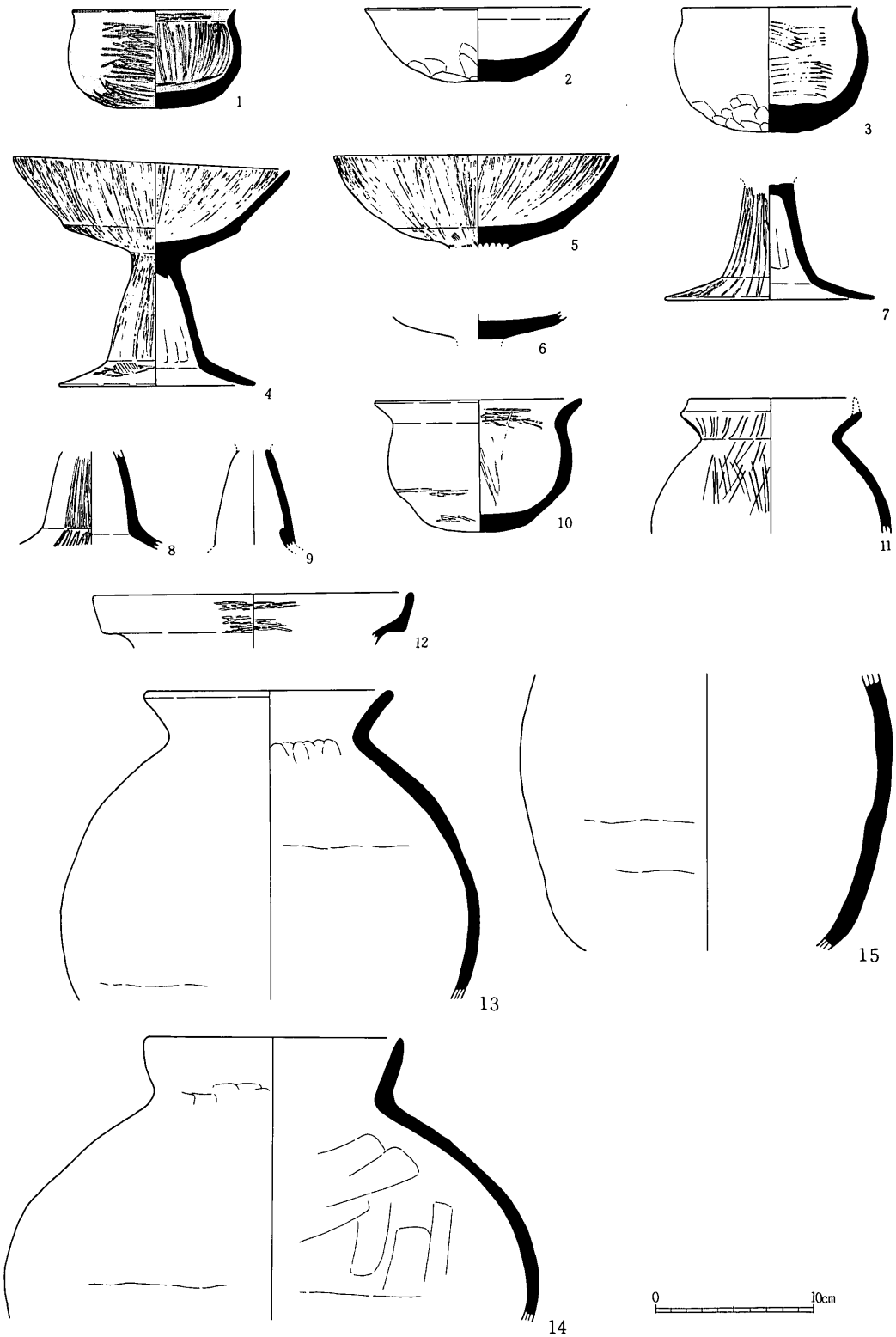




第101 図　第34号住居址



第102 図　第34号住居址土器出土状態



第103 図　第34号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	10.2		6.1	黒	黒	ヘラミガキ 黒色処理	
2	〃	〃	14.0		3.3	茶褐	茶褐	底部外面ヘラケズリ	
3	〃	〃	10.8		7.6	黒褐	暗褐	〃　内面ハケによる調整の後ナデ	
4	〃	高坏	17.3	12.2	14.2	赤褐	赤褐	坏部ヘラミガキ 脚部外面ヘラミガキ一部ハケ調整	
5	〃	〃	17.6			〃	〃	〃　一部外面ハケ調整	
6	〃	〃				暗褐	橙褐	ハケ調整 ヘラミガキ	
7	〃	〃				橙褐	明褐	ヘラミガキ	
8	〃	〃				〃	橙褐	〃	
9	〃	〃				橙	橙		両面とも摩耗激しい
10	〃	小型甕	12.8		8.2	暗褐	茶褐	ヘラミガキ	外面スス付着
11	〃	甕	10.4			茶褐	〃	外面くし状工具による沈線	少々摩耗
12	〃	〃	20.0			赤褐	赤褐	ヘラミガキ	
13	〃	〃	14.8			明褐	明褐	口縁部横ナデ 頸部内面に指圧痕？	
14	〃	〃	15.4			〃	〃	〃　頸部外面 胴部内面ヘラブナ	外面スス付着
15	〃	〃				暗褐	暗褐		内面スス付着

にはススが付着している。甕(11)は口縁部を欠くが有段の口縁部を有するであろう。口縁部および胴部上半には沈線による文様が施されており、特異である。甕(13)は「く」の字に外反した口縁と、丸くふくらんだ胴部をもつ。口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデによって大変丁寧に調整されている。頸部内面には指圧痕が認められる。甕(14)も(13)同様球形状の胴部をもつが、口縁部はやや直立的である。外面上半にかけてススの付着がみられる。甕(15)は胴部のみである。(13)、(14)にくらべふくらみは小さく、凸凹している。内面にはススの付着がみられる。

本址の所属時期は出土土器より和泉期に該当しよう。

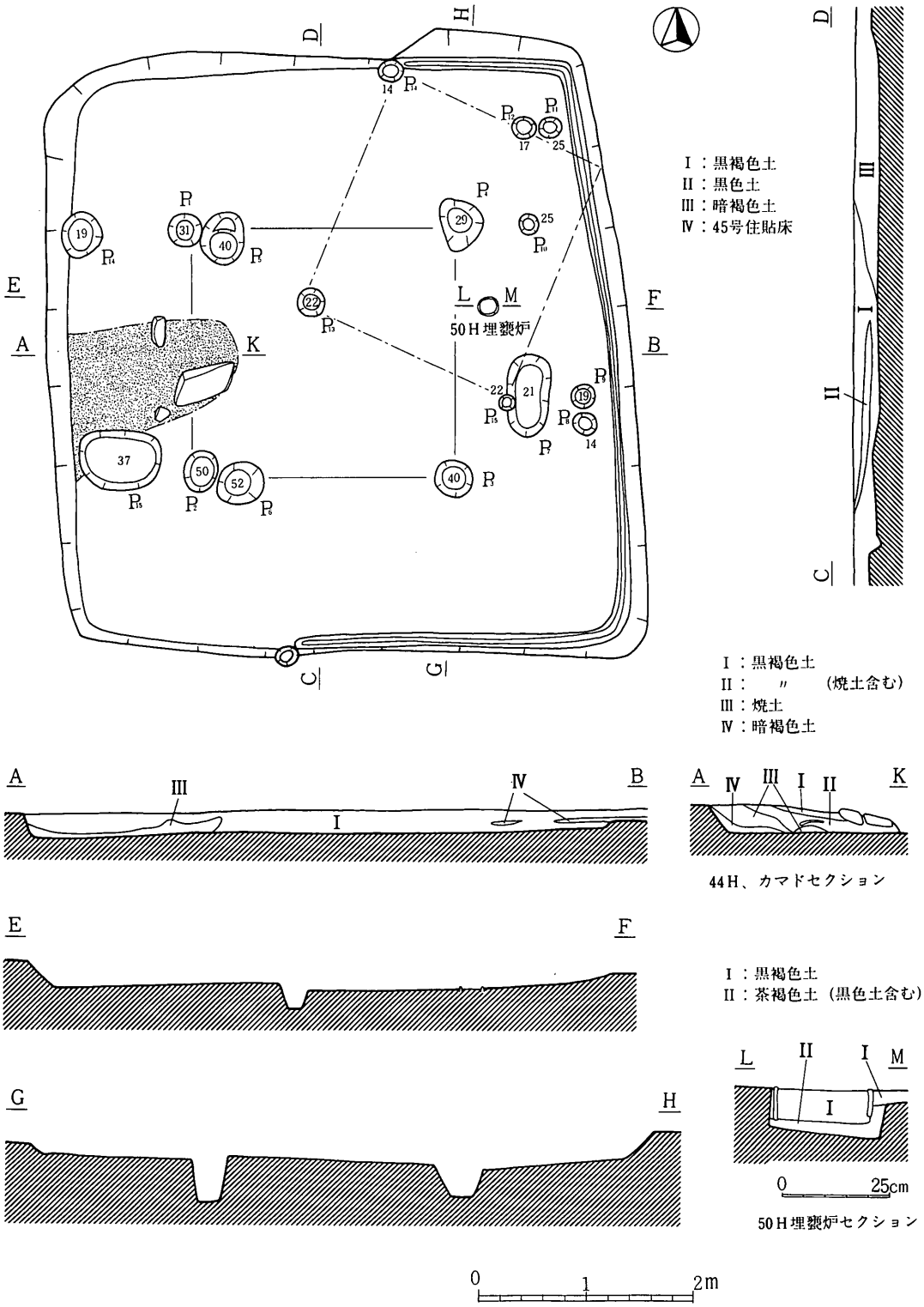
第44号住居址

遺構　F・G—9・10区にあり、南側を46号住居址に、東側を45号住居址に、北側を43号住居址と重複している。中挟遺跡発見の住居中、最南端に属する。

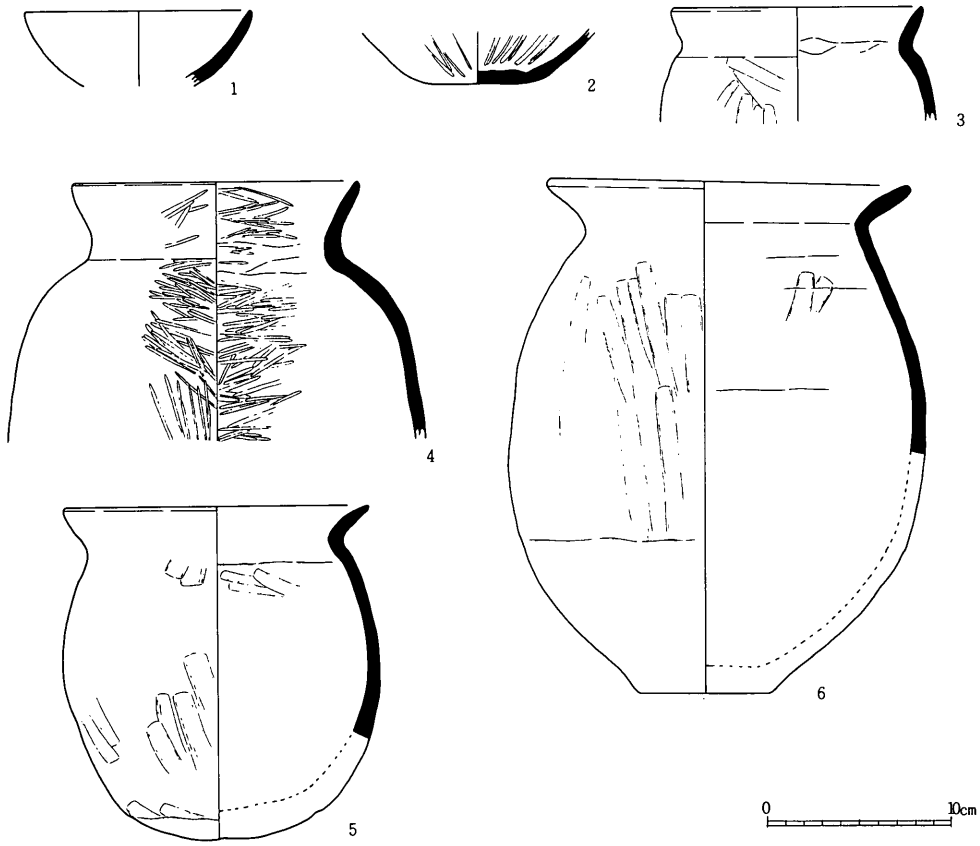
他住居との重複が激しい割合には遺存状態は良い。東西545cm、南北550cmの整った方形プランである。壁は、深浅の差はあるが四周とも残存している。掘り込みは傾斜をなし、壁高は、東壁11cm、西壁6cm、南壁30cm、北壁9cmを測る。周溝は、東壁と北・南壁の一部にあり、幅10cm、深さ3cmと浅い。床面は起伏が著しいが、中央を中心に良く踏み固められている。柱は4本主柱で、P_1(32×29cm、深さ31cm)、P_2(36×30cm、深さ50cm)、P_3(35×33cm、深さ40cm)、P_4(45×40cm、深さ40cm)がこれにあたる。本址は柱の付け替えが行われており、P_1の代わりにP_5(45×40cm、深さ40cm)、P_2の代わりにP_6(43×35cm、深さ52cm)がそれぞれ連接して掘り込まれている。カマドは、西壁中央にあり、石組み粘土カマドである。カマド左手には、75×55cm、深さ42cmの楕円形のピットがあり、貯蔵穴であろう。

遺物　本址より土師器の坏、壺、小型甕、甕が出土した。遺物はカマド内に集中しており、図示したものの中で甕(5)以外はいずれもカマド内出土である。

甕(4)は内外面ともヘラミガキによる調整が施されている。これに対し甕(5)(6)は口縁部は横ナデ胴部はヘラナデによって調整されている。また、内外面に輪積痕が認められる。



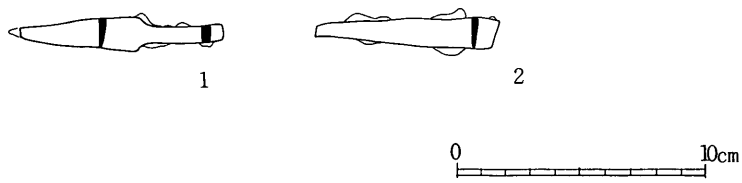
第104 図　第44、50号住居址



第105 図　第44号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	12.0			明褐	明褐	口縁部横ナデ	カマド内出土
2	〃	壺		5.6		赤褐	赤褐	ヘラミガキ	〃
3	〃	甕	13.2			茶褐	暗褐	胴部外面ヘラミガキ	〃
4	〃	〃	15.0			赤褐	赤褐	ヘラミガキ	〃
5	〃	〃	16.2		17.5	暗褐	暗褐	口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ	
6	〃	〃	19.2	7.0	27.0	茶褐	茶褐	〃　〃	〃



第106 図　第44号住居址出土鉄製品

出土鉄製品一覧表

No.	製品名	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	刀子	先端部を少々欠損	(8.0)	1.4	0.2	(12)	
2	〃	先端部と基を欠損	(7.5)	1.3	0.2	(15)	

鉄器は刀子が2点出土している。(1)は先端部を少々欠くのみでほぼ完存している。

本址の所属時期は出土遺物より鬼高II期に該当するであろう。

第47号住居址

遺構　E—4・5区にあり、崖端に立地しているため北東辺は流失している。

小礫混りのローム面を掘り込んで構築された住居で、掘り込みが浅く、しかも一部が流失しており、遺存状態は悪い。覆土は、黒褐色土・暗褐色土である。

東西480cm、南北600cmの南北に長い長方形プランを呈する。壁の状態は、ゆるい傾斜をなし、東壁14cm、西壁16cm、南壁19cm、北壁5cmと浅い。床は起伏が著しく、軟弱。柱は、4本主柱で、P_1（50×47cm、深さ20cm）、P_2（30×25cm、深さ19cm）、P_3（39×35cm、深さ22cm）、P_4（85×90cm、深さ35cm）がこれにあたる。このほかにP_5—P_9および南壁中に2ケ所のピットがあり、P_6—P_8は、主柱のP_2・P_3の線上に並び補助的な役割りをなすものであろうか。調査範囲内にはカマドは検出できなかった。

遺物　本址の出土遺物は大変少なく、土師器の高坏1点が図示できたのみである。内外面ともヘラミガキによって調整されている。外面は磨耗が激しく、口縁部には炭化物の付着が認められる。

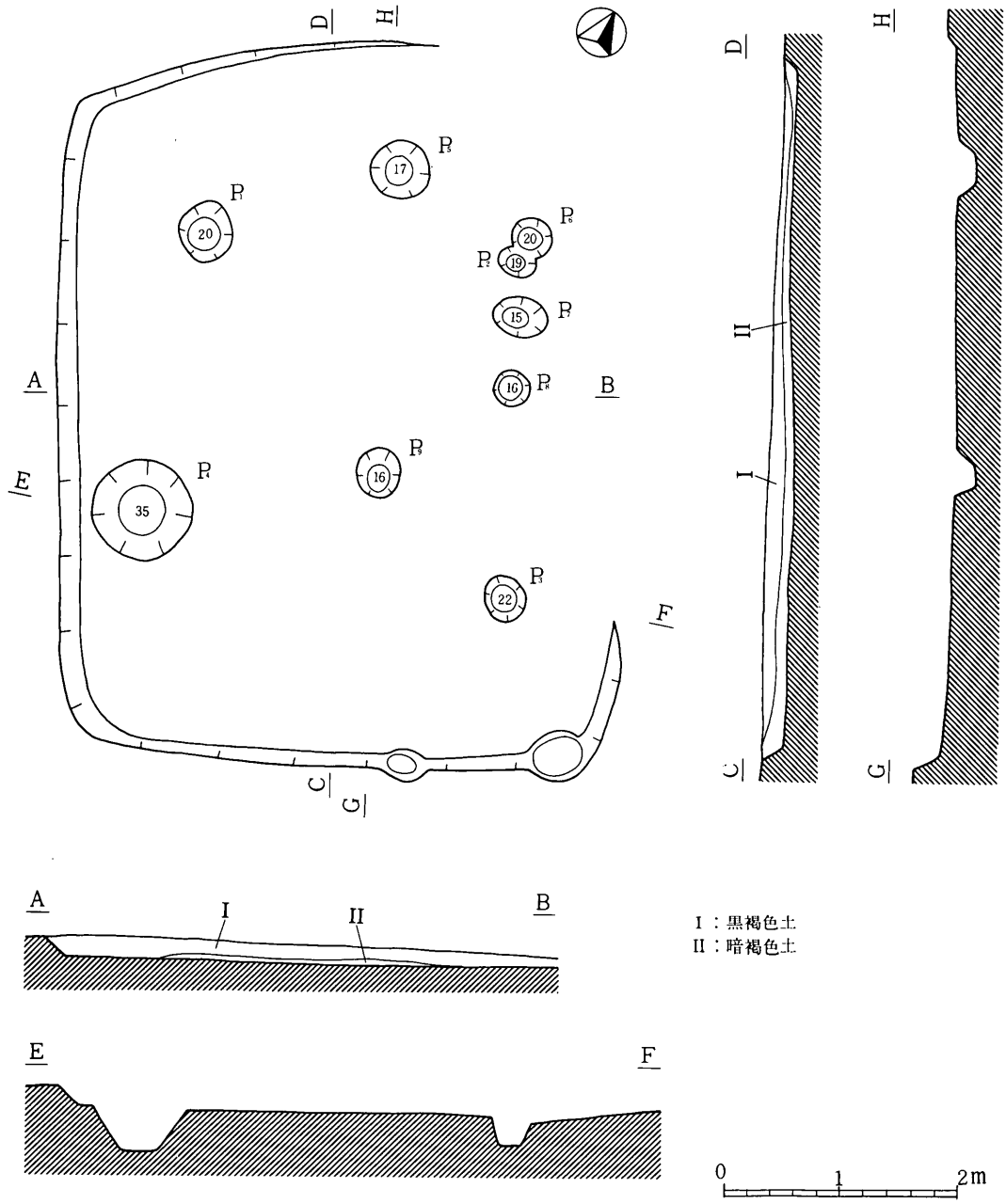
本址の所属時期は、出土遺物が少なかったこと、そして古墳時代の遺物と平安時代の遺物とがほぼ同量出土したことより判断しかねる。

第51号住居址

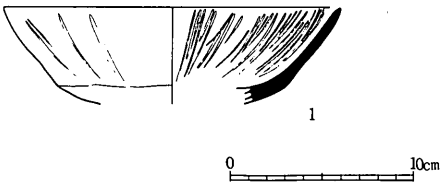
遺構　本址は第8号住居址覆土の遺物を整理中、住居址の時期（弥生後期）とは異なる古墳時代の遺物が一括、確認されたことから、残存する遺構がないものの古墳時代の住居址として命名されたものである。付近は表土が著しく薄く、耕作による攪乱がはいっていたため住居址は削平されたものと思われる。従って本址の遺構図はなく遺物のみ掲載することとする。

遺物　本址より土師器の坏、高坏、甕がそれぞれ1点ずつ出土している。坏(1)は甕(3)とともにつぶれた状態で出土した。「く」の字に外反した口縁部と丸味をもった体部が特徴的である。内外面ともヘラミガキによって調整されており、精巧なつくりである。高坏(2)は坏部と脚部が別々に出土した。坏部内外面、脚部外面はヘラミガキによって調整されており、坏部外面にはハケメ調整も認められる。器高は約12.0cmを計るであろう。甕(3)は胴部上半を一部欠くが、器高は約38.0cmを計るであろう。胴部は球形状である。調整方法は口縁部が横方向のヘラミガキ、胴部外面が縦方向のヘラミガキである。

本址の所属時期は出土土器の様相より和泉期に該当しよう。



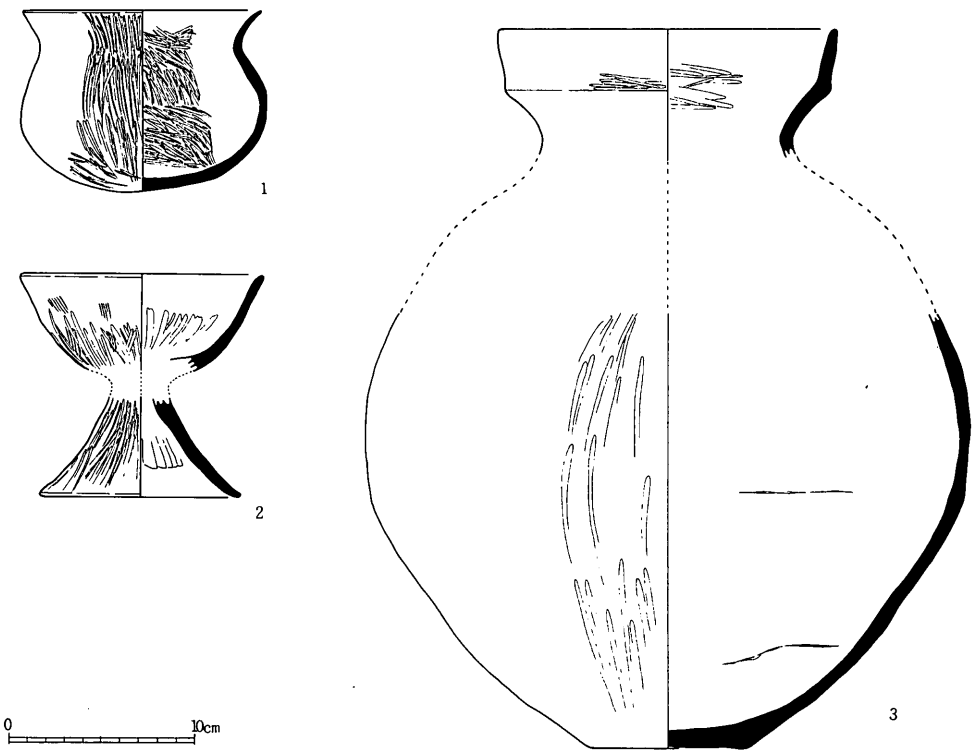
第107 図　第47号住居址



第108 図　第47号住居址出土土器

土　器　観　察　表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	高坏	18.0			茶褐	茶褐	ヘラミガキ	



第109 図　第51号住居址出土土器

土　器　観　察　表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	12.6		9.6	赤褐	赤褐	ヘラミガキ	
2	〃	高坏	12.8	10.6	12.0	淡褐	暗褐	坏部ヘラミガキ 外面一部 ハケ調整 脚部対面ヘラミガキ	
3	〃	甕	18.0	8.0	38.0	茶褐	橙褐	口縁部 胴部外面ヘラミガキ	

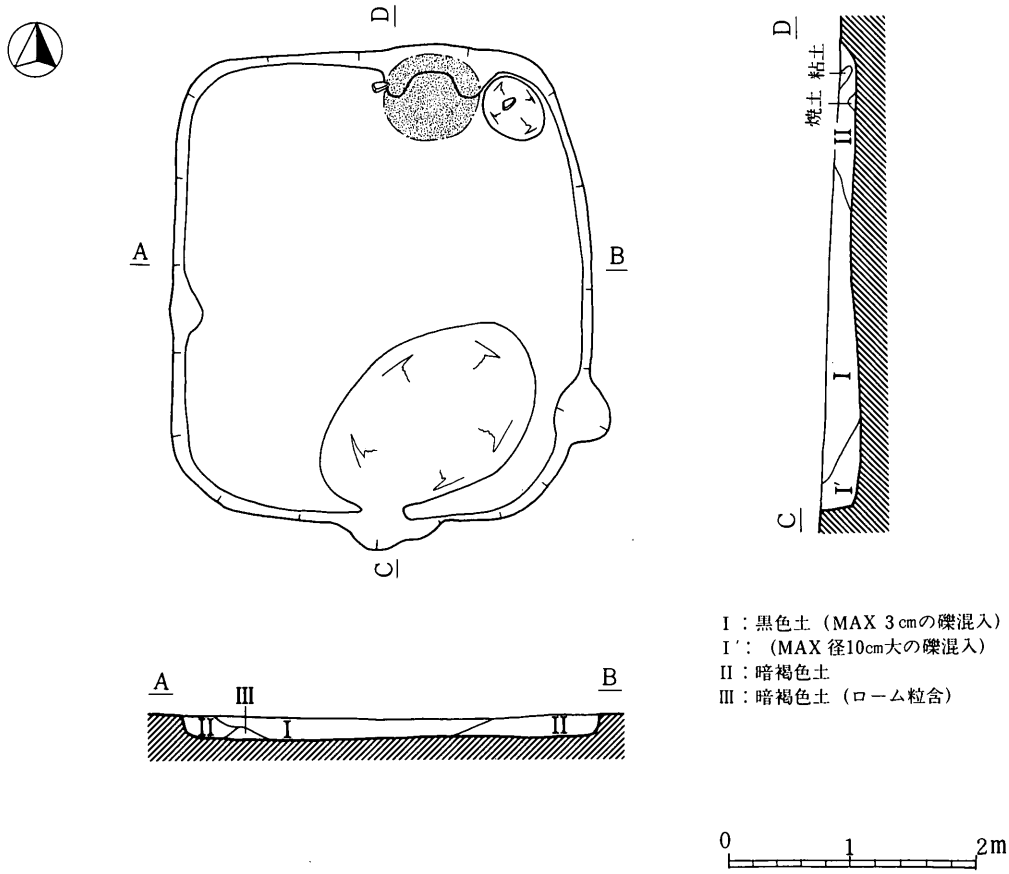
(4)　平安時代

第１号住居址

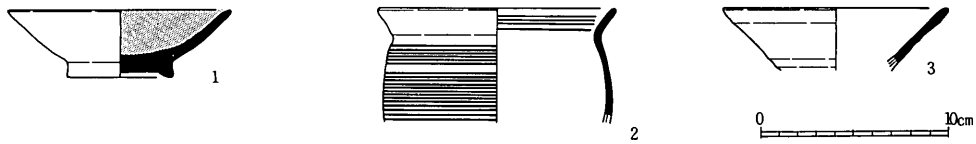
遺構　本址はＩ地区西区の南壁沿いのやや東寄りにあり、Ｅ―14、15グリッドに存在する。北側には第２号住居址が隣接している。遺構検出面において隅丸方形プランを有する黒褐色土の落ち込みが明瞭であったため、住居址の存在は当初より容易に把握されたが、壁や床面が著しく礫質であったため、住居址の確認はやや遅れた。北壁下の床面を精査中、カマドの掘り方と焼土を確認したため住居址と断定した。

プランはやや東側に張り出してはいるものの方形に近い隅丸方形を呈している。主軸方向は南北を指し、南北3.60m、東西3.30mを測る。

壁は礫質のため非常にもろく検出に困難をきわめたが、各壁とも垂直に近く、壁高は東壁16cm、西壁18cm、南壁24cm、北壁14cmを測る。



第110 図　第１号住居址



第111図　第1号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	11.8	5.4	3.6	茶褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	小型甕	12.6			〃	茶褐	〃 カキメ	
3	須恵	坏	12.0			暗灰	暗灰	〃	重ね焼痕

床面も礫質で凹凸は著しいが、ほぼ水平を保つ。南半部に大規模な擂鉢状の落ち込みがあり、異なる時代の小竪穴が重複しているかのように見えるが、住居址覆土にその形跡がみられないところから、おそらく何からの付属施設と考えられる。床面に柱穴は検出されず、北を除く各壁の中央付近に壁柱穴の存在が確認された。

カマドは北壁やや東寄りに設置されており、規模は66cm×76cmである。支脚に使用されていたと思われる礫が袖部西脇と東側ピット内に2個確認されたが、その他は不明で崩壊が著しい。カマド内部には焼土が薄く残っていた。

カマド東側の住居址北東隅にあるピットは貯蔵穴と考えられ、規模は46×38cm、深さ30cmで擂鉢状を呈する。

遺物　本址の出土遺物は大変少なく土師器の坏、小型甕、須恵器の坏がそれぞれ1点ずつ図示できたのみである。土師器の坏(1)はロクロの成形後、内面は黒色処理が施されており、底部には回転糸切り痕が認められる。小型甕(2)の胴部外面、口縁部内面にはロクロ回転を用いたカキメ調整がなされている。須恵器の坏(3)はロクロ成形されており、外面に重ね焼痕がみられる。

本址は出土遺物の様相から9世紀中頃に属するものと考えられる。

第2号住居址

遺構　本址はI地区西区のD・E—14グリッドにあり、第1号住居址の北西側に隣接している。遺構検出段階で黒色土の落ち込みが確認されたため、住居址の存在は比較的早く判明し、第2号住居址としたが、付近は礫の混入が著しくプラン確認はやや遅れた。

プランは各辺がやや外側へ張る隅丸方形を呈し、南北3.64m、東西3.20mを測る。

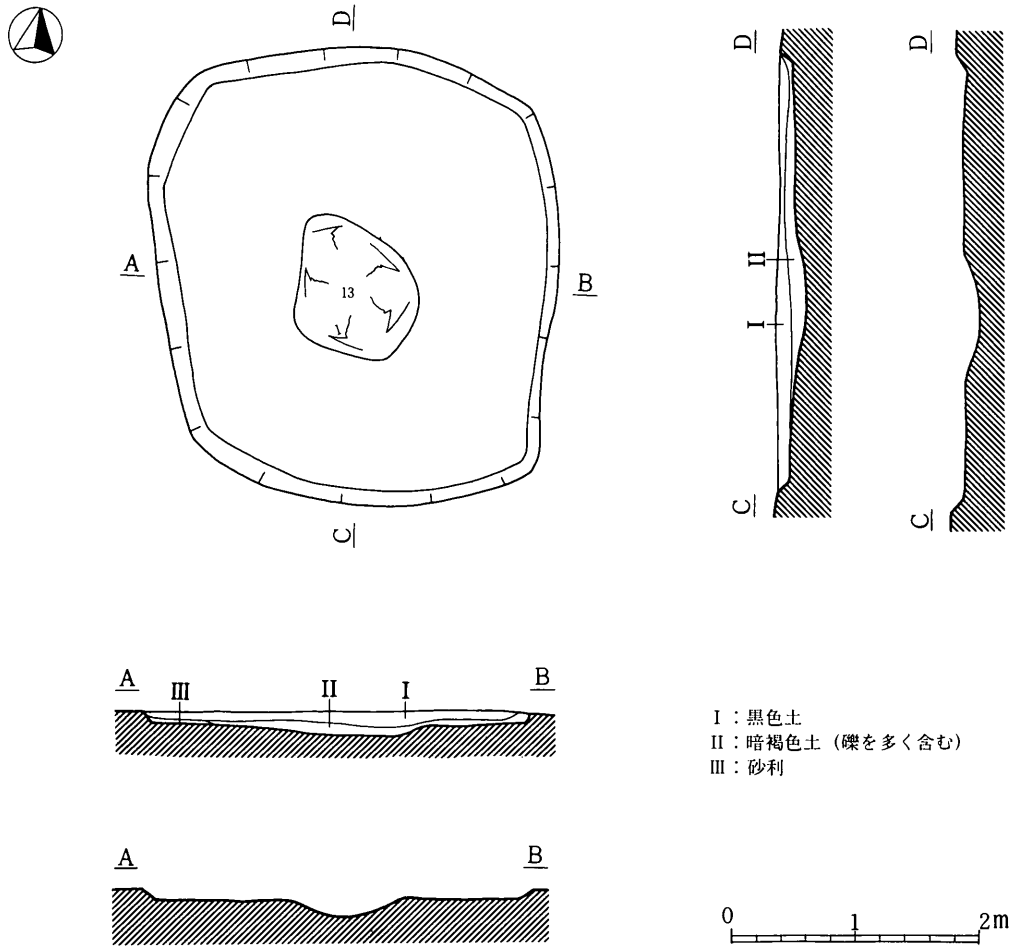
壁は礫混りのためがさつで検出にやや困難をきたした。ほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は東壁6cm、西壁9cm、南壁9cm、北壁9cmを測る。

床は中央部に不規則な落ち込みがあるのが特徴であるが性格は不明である。中央より北側は平坦で比較的良好な床面を有するが、南半部は礫が露出し、起伏が著しい。

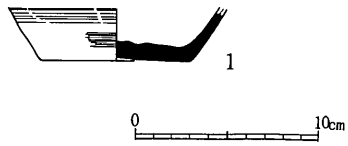
住居内にはその他にカマド、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物　本址の出土遺物として土師器の小型甕が1点図示できたのみである。外面はカキメ整形

されており、底部には回転糸切り痕がみられる。



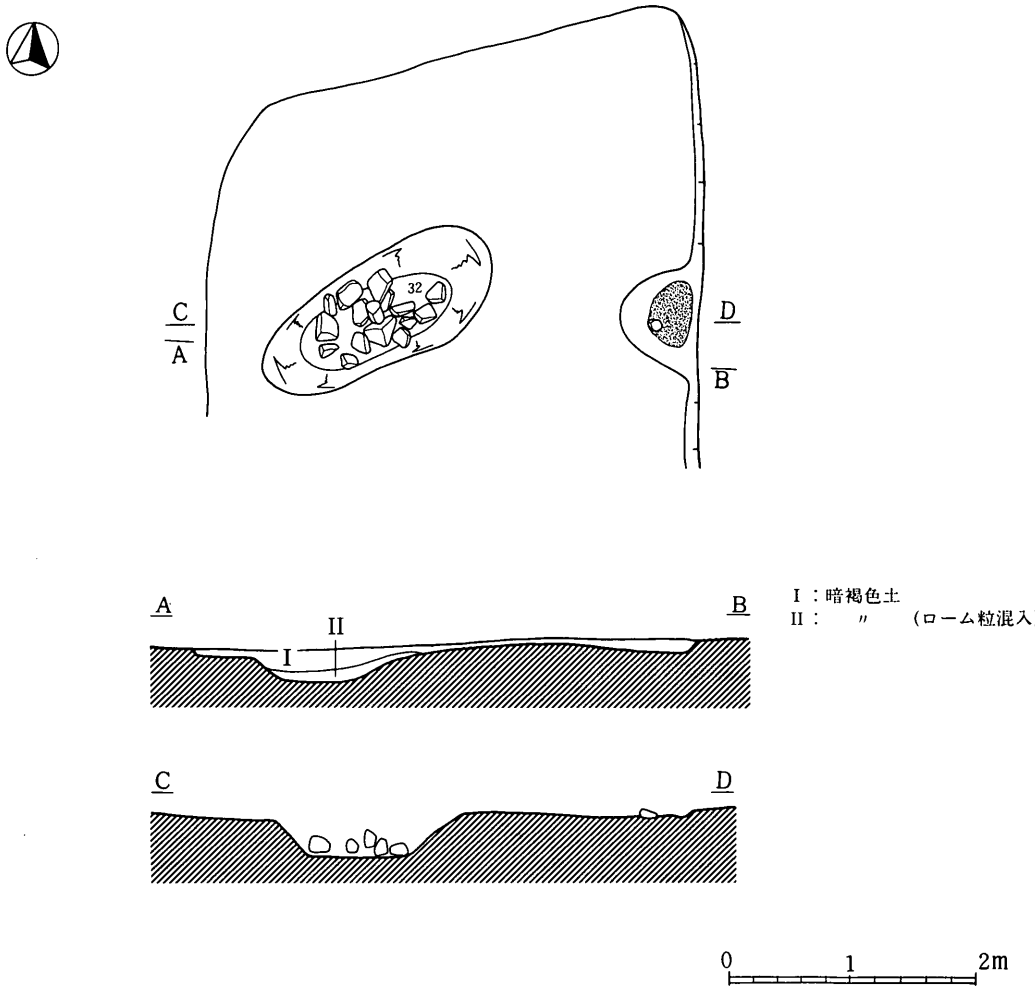
第112 図　第 2 号住居址



第113 図　第 2 号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法 (cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	小型甕		8.0		赤褐	赤褐	ロクロナデ カキメ 回転糸切り	



第114 図　第 3 号住居址

本址の所属時期は 9 世紀代であろう。

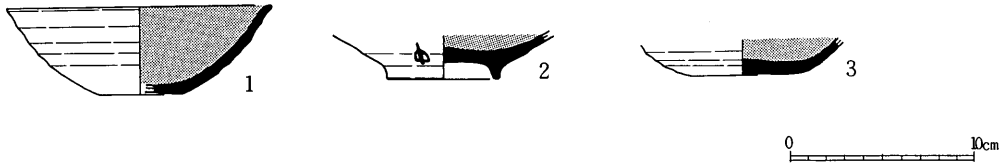
第 3 号住居址

遺構　本址は I 地区西区の中央やや東寄りにあり、E—13グリッドに位置する。南側は調査区域外のため住居址の南壁は確認されなかった。付近は礫層のため、かなり検出に困難を極めたが、東壁の落ち込みと、やはり東壁の中央にカマドの焼土を確認したことから住居址と認定した。

確認された壁が東壁のみのためプランを正確に把えることはできないが、隅丸方形の平面形態を呈すると考えられ、東西3.93mを測る。

壁は北壁および西壁の遺存状態が悪く、わずかな落ち込みを痕跡として残す程度である。壁高は東壁 4 cm、西壁 1 cm、北壁 3 cmといずれも低く、かなり削平されていることが伺える。

床は礫の露出が著しく起伏に富む。全体的には中央が最も高く、周囲ほど低くなる傾向がある。



第115 図　第 3 号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法 (cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	14.0	4.4	4.6	暗褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	〃		6.0		明褐	〃	〃 〃 〃	〃 墨書
3	〃	〃		5.6		灰褐	〃	〃 〃 回転ヘラケズリ	〃 〃

床面中央には径200×80cm、深さ28cmの大形ピットがあり、大量の礫が投入されていた。このピットは覆土の堆積状態から住居址使用時に埋没したものと思われる。

カマドは東壁中央に設置された石組粘土カマドで、多量の焼土と礫が確認されている。

遺物　本址より土師器の坏が 3 点検出された。いずれも内面は黒色処理されている。(2)は外面に「中」の墨書が認められる。(3)の底部は回転ヘラケズリによる。

出土遺物の様相より、本址は 9 世紀中頃に属するものと考えられる。

第 4 号住居址

遺構　本址はⅠ地区西区のほぼ中央に単独であり、C—12グリッドに位置する。付近は礫層による攪乱が著しく、加えて南西部では小竪穴との切り合いにより住居址のプランを検出する段階では困難を極めた。覆土が浅かったためプラン検出より先にカマドの焼土と床面を確認することができ住居址と断定するのも比較的早かった。

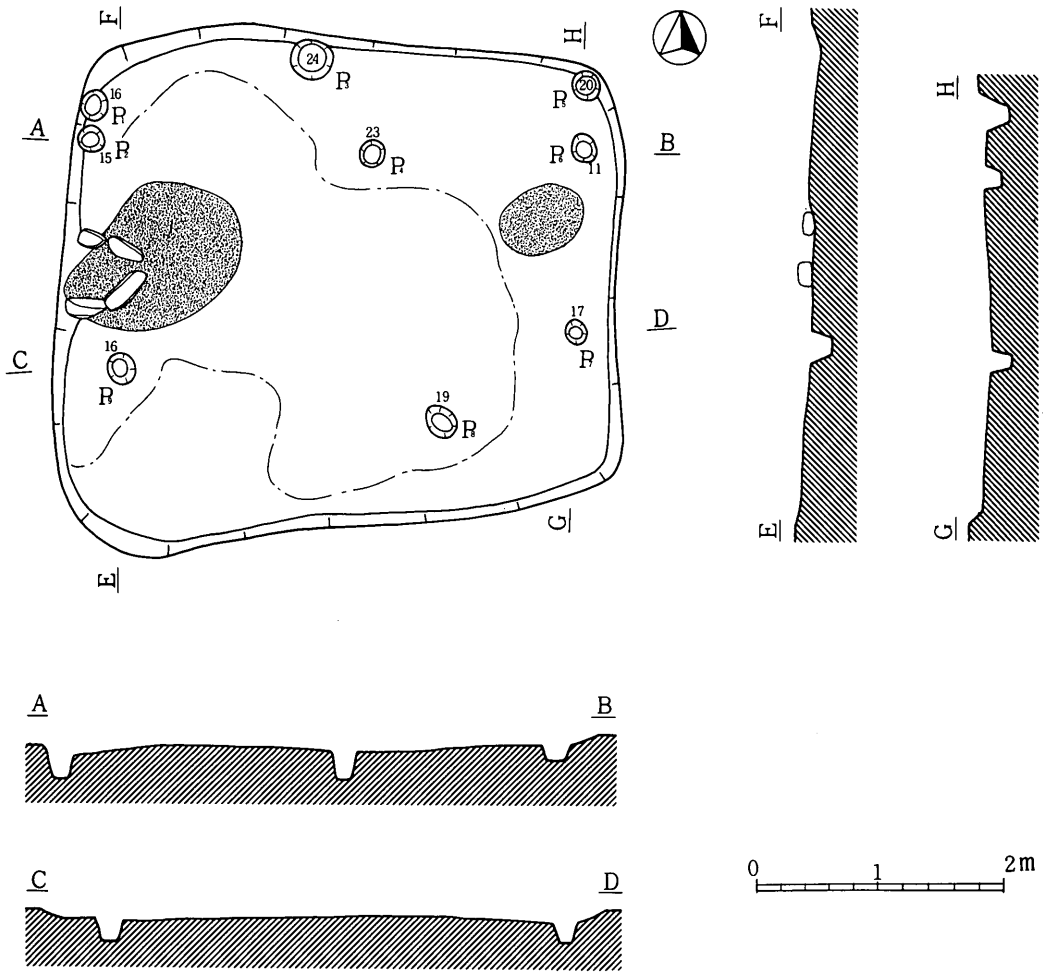
プランは隅丸方形の平面形態を呈し、東西4.45m、南北3.86mを測る。主軸方向はほぼ東西を指すが、南壁のみ約10°西へ振っている。これは住居址本来の形というよりむしろ南西隅の小竪穴との切り合いにより壁の把え方が間違っている可能性が強い。

壁は全周でかろうじて確認されているが掘り込みは浅く、壁高は東壁 6 cm、西壁 7 cm、南壁 9 cm、北壁 6 cmを測るにすぎない。

床面は礫混りローム上に構築しているためやや起伏に富むが総じて固く、とりわけカマド周辺と中央部はよく踏み固められている。ピットは全部で 9 基あり、3 基ずつ 3 列の並びをしているが主柱穴は不明である。

カマドは西壁中央に石組み粘土カマドが良好に遺存している。支脚石は細長い礫を 4 個横に並べて組み立てており、中にブロック状になった焼土と土師器甕片が多量に詰まっていた。焼土はこのカマド正面直上に広範囲に密集していたほか、東壁中央付近にも密集しており、カマドの付け替えの可能性もある。

遺物　本址より土師器の坏、須恵器の坏の破片が出土しているが、大変少量のため図示できるものはなかった。



第116図　第4号住居址

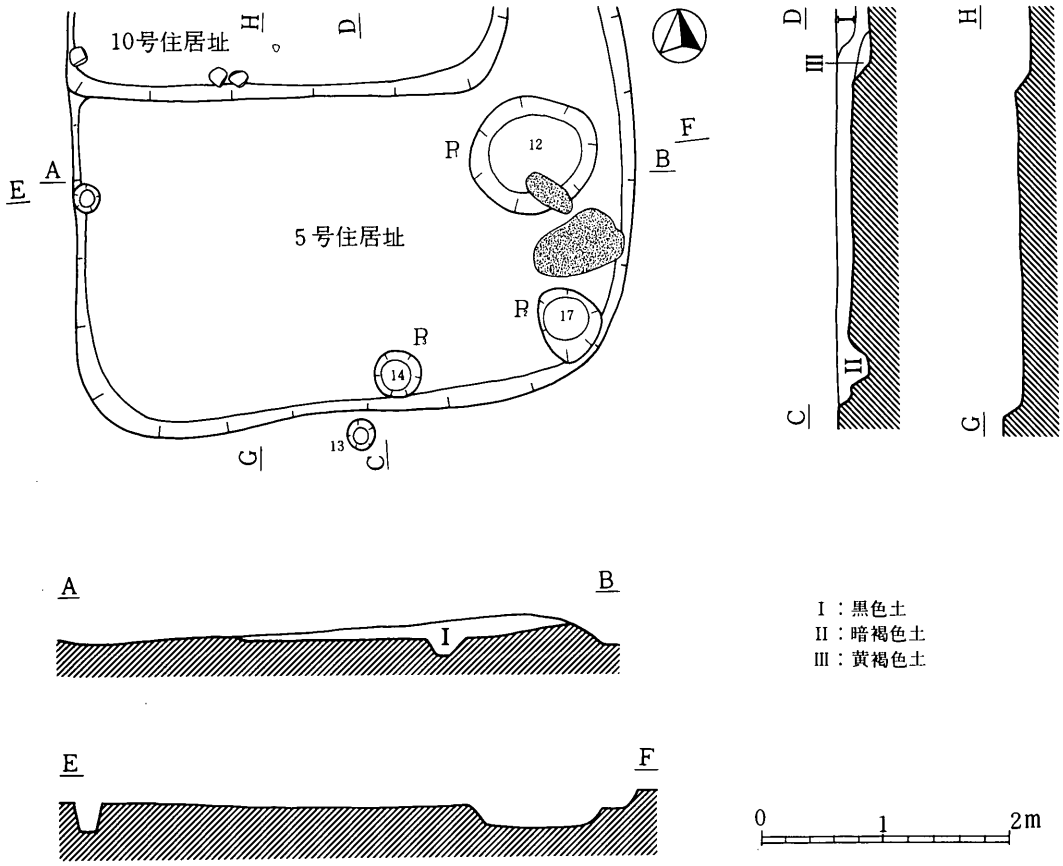
第5号住居址

遺構　本址はⅠ地区西区にあり、A・B—13グリッドに存在する。北側には第10号住居址が掘り込みによって切っており、また東側には第15号住居址が隣接している。本址は検出段階において明瞭な落ち込みがみられ、また東壁中央より焼土が多量に出土したことから、当初より住居址の存在が予想された。

本址は北側が発掘区域外であったため完掘はされなかったが、東西4.5mの隅丸方形プランを呈する。

壁は軟弱であり、僅かな立ち上がりを見せているが、東壁7㎝、西壁6㎝、南壁5㎝、北壁15㎝と全体的に低く、耕作等による攪乱が入っている可能性もある。

床はカマドから第10号住居址までの周辺が比較的良好に残されており、平坦で堅緻である。ピッ



第117図　第5・10号住居址

トは数基検出されたが、位置的な規則性がみつからず、柱穴の確認はできなかった。カマド脇にあるP₁は上面までカマドの粘土塊が覆っており、形態からみても貯蔵穴の可能性が強い。

カマドは東壁のやや南寄りに設置された粘土マカドである。カマド内は良く焼けた焼土の堆積が厚い。土師器片が数片混入していた。

遺物　本址より土師器の坏、小型甕、甕、須恵器の坏が検出された。土師器の坏はいずれも内面にミガキが施されており、(1)と(3)は不完全ではあるが黒色処理されている。小型甕(4)は大変磨耗が激しいが、胴部外面と口縁部内面にかすかにカキメが認められる。

本址は出土遺物の様相から9世紀中頃に属するものと考えられる。

第6号住居址

遺構　本址はI地区西区の中央南寄りに単独にあり、D・E—8グリッドに存在する。北側には第7号住居址が、西側には第16号住居址と特殊遺構があるが、東側は第3号住居址まで約20mの空白域が広がる。本址は表土除去作業時に明瞭な黒色土の落ち込みが確認され、当初より住居址の存在が予想されていた。十字にベルトを残し落ち込みを掘り下げたところ良好な床面とカマ

ドの焼土を確認し、第6号住居址とした。

プランは南北3.65m、東西3.50mを測り、主軸方向N—15°—Wの小形隅丸方形の平面形態を呈する。

壁は非常に良好な遺存状態を示し、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は東壁21cm、西壁12cm南壁17cm、北壁17cmを測り、遺構検出面が東から西へ傾斜していることを反映している。

床面は水平、平坦でよく踏み固められている。ピットは3基確認されたが、主柱穴は不明である。また住居址の南西隅に擂鉢状のピットが検出されているが、これは床面上の焼土および周溝を切って掘り込んでいるため、住居址より後の遺構である可能性が強い。周溝は南壁沿いのみに検出され、深さは5～6cmを測る。

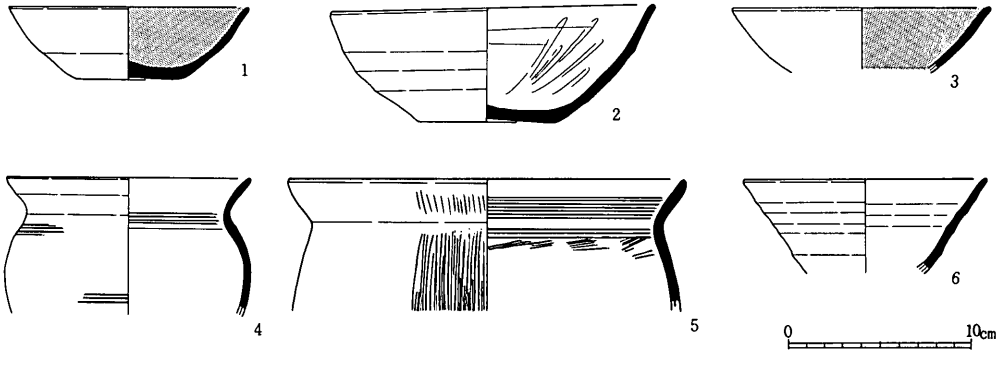
カマドは西壁中央に構築された粘土カマドであるが、崩壊が著しく原形をとどめていない。

遺物　本址より土師器の坏、小型甕、須恵器の坏が出土している。土師器の坏はロクロ成形の後、内面にはミガキが施されている。また、(2)と(3)は黒色処理されている。小型甕(4)、(5)はロクロ成形され、胴部外面はカキメによって調整されている。

本址は出土遺物の様相から、9世紀中頃に属するものと考えられる。

第7号住居址

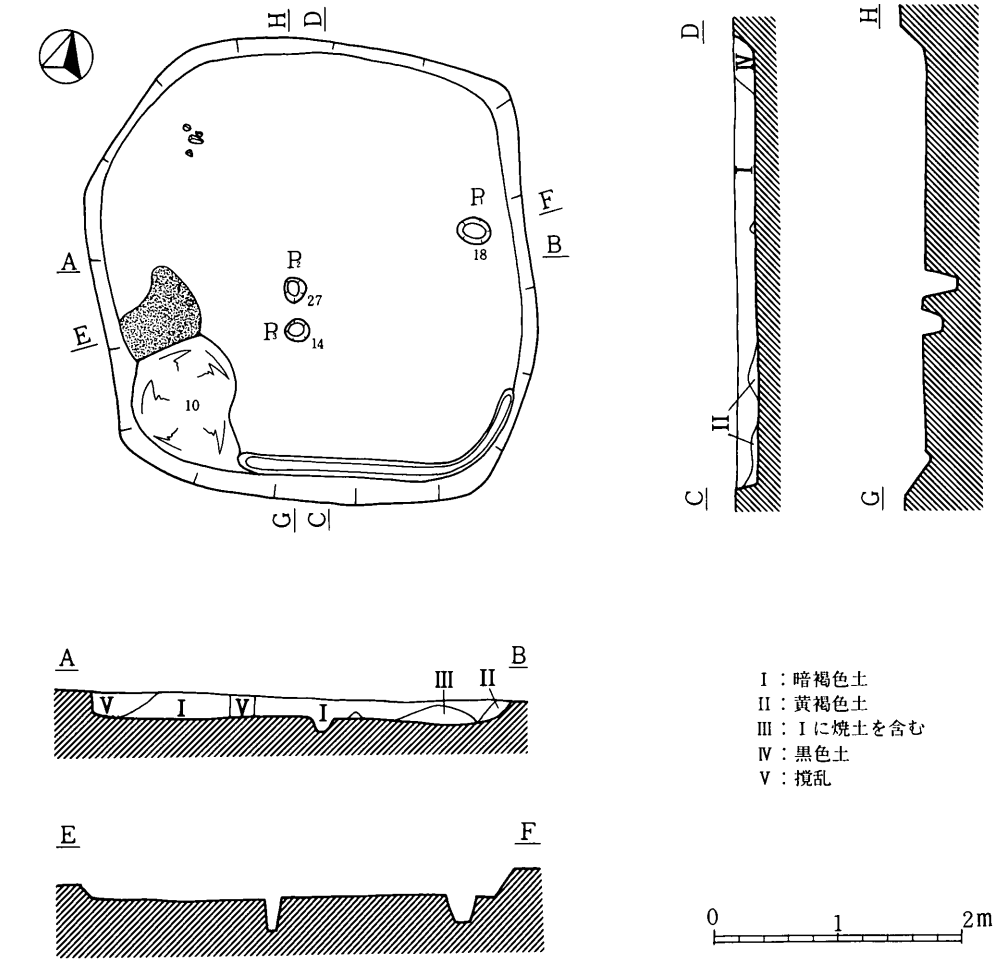
遺構　本址はI地区西区のほぼ中央に孤立した存在であり、B・C—8グリッドに位置する。遺構検出の段階においてローム面に黒褐色土の落ち込みが明瞭に確認できたため、当初より住居址の存在は予想されていたが、ほぼ同じ面で焼土を伴うカマドが検出されたため、住居址と断定



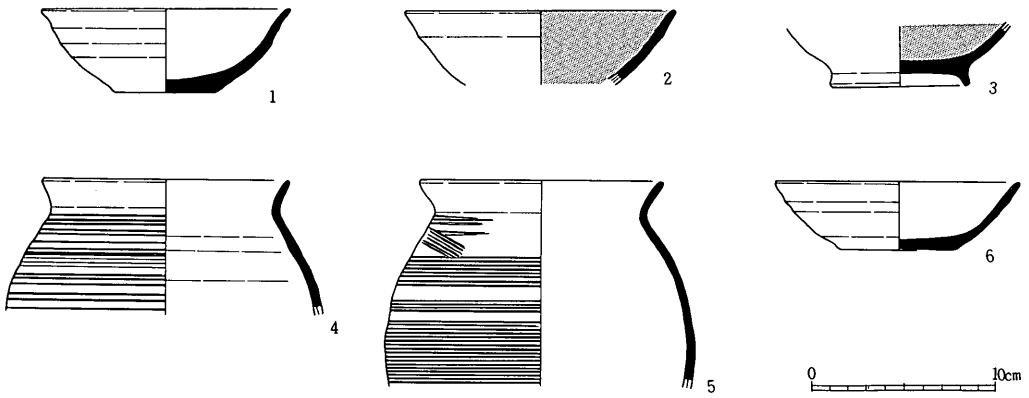
第118図　第5号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	口径	底径	器高	外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	12.8	5.4	3.8	茶褐	暗褐	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理(不完全)
2	〃	〃	17.4	7.4	6.3	〃	赤褐	〃 〃 〃	
3	〃	〃	13.8			暗茶褐	黒	〃 〃	黒色処理(不完全)
4	〃	小型甕	6.5			明褐	明褐	〃 カキメ	摩耗激しい
5	〃	甕	21.0			〃	暗褐	外面ハケメ 口縁内面カキメ	
6	須恵	坏	13.0			暗灰	暗灰	ロクロナデ	



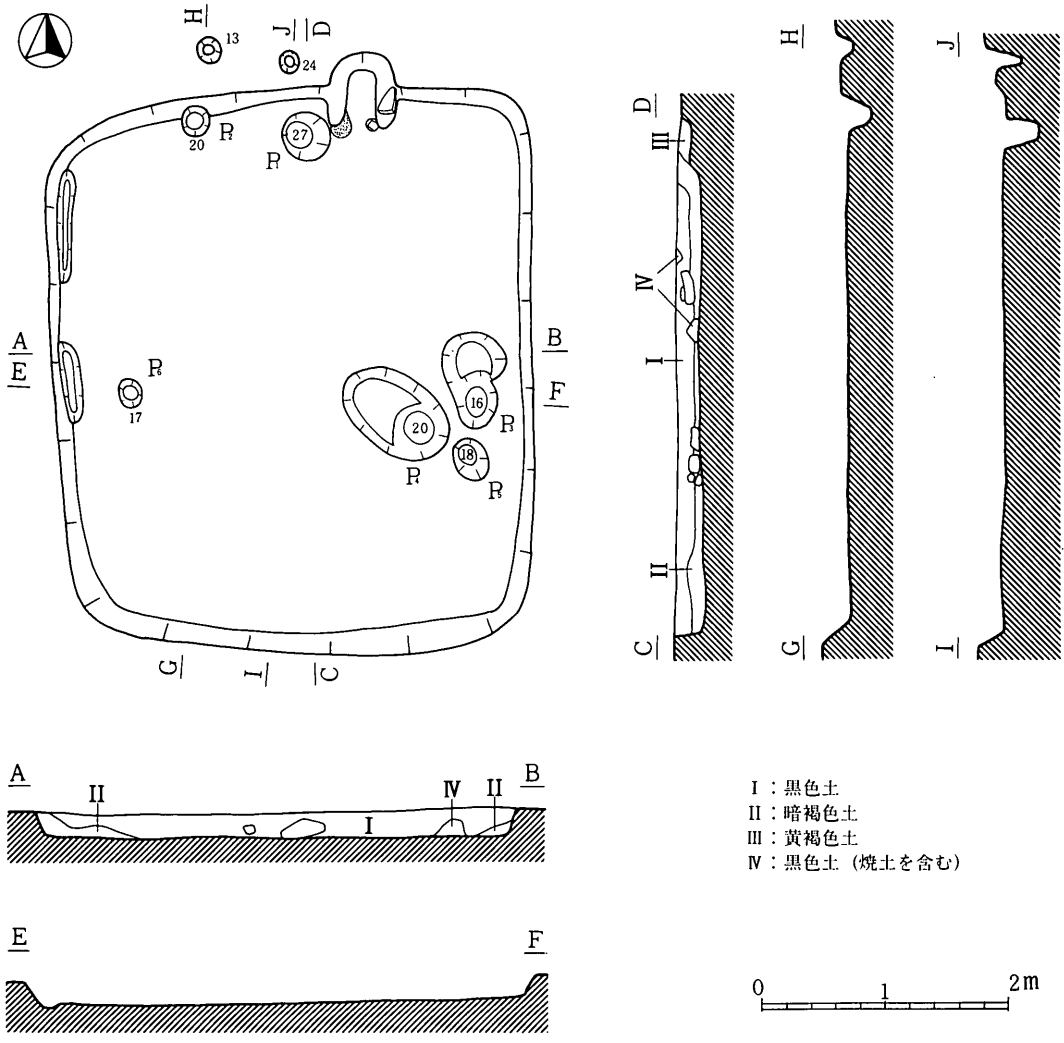
第119図　第６号住居址



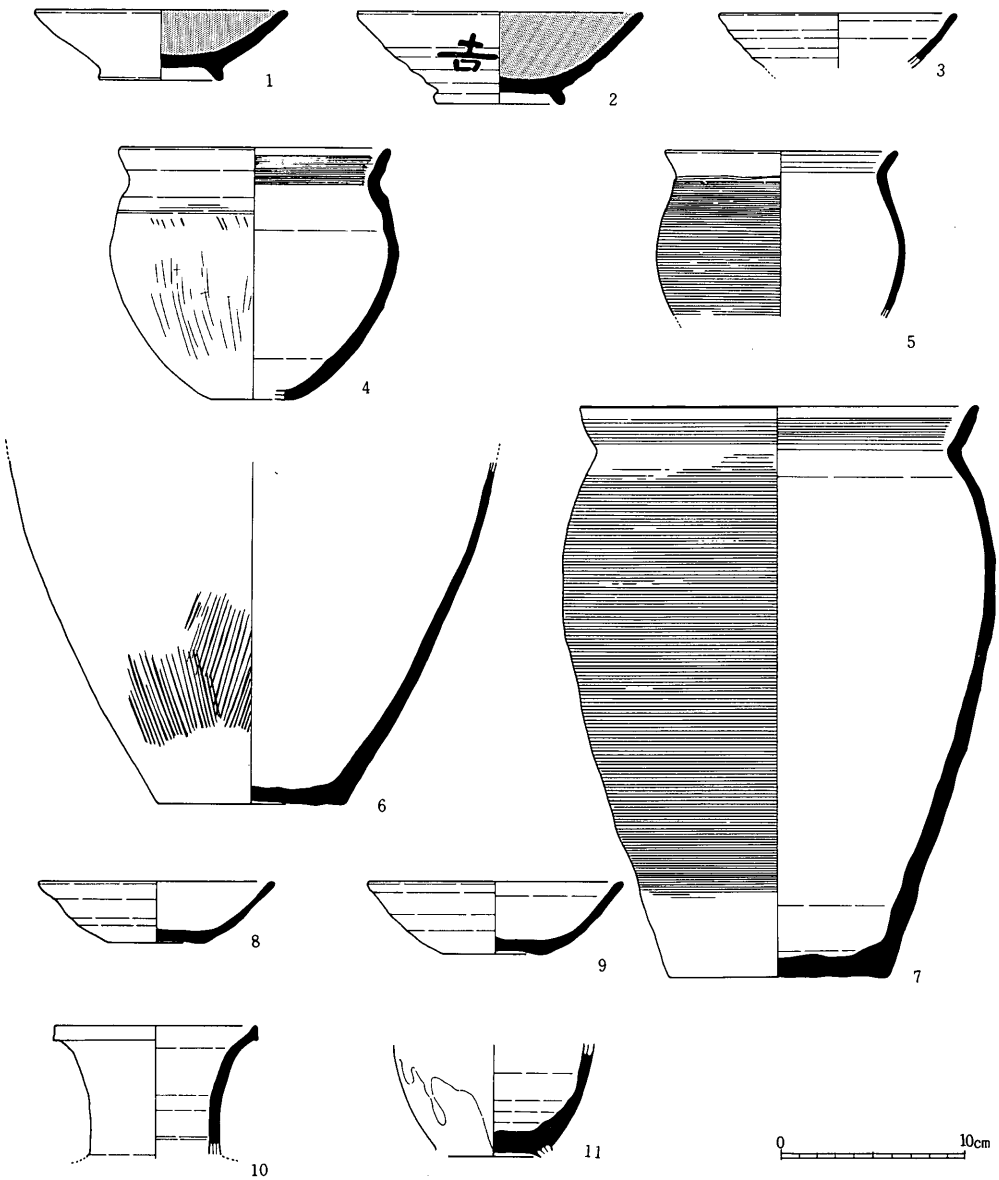
第120図　第６号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	13.2	5.4	4.4	茶褐	暗褐	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	
2	〃	〃	14.4			明褐	黒	〃 〃	黒色処理
3	〃	〃		7.0		〃	〃	〃 〃 回転糸切り	〃
4	〃	小型甕	13.0			茶褐	暗褐	〃 カキメ	
5	〃	〃	12.8			暗褐	明褐	〃 〃	
6	須恵	坏	12.8	6.0	3.6	白	白	〃 回転糸切り	



第121図　第7号住居址



第122図　第７号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	13.4	6.6	3.7	茶白	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	〃	15.2	3.8	4.8	〃	〃	〃 〃 〃	〃
3	〃	〃	12.8			茶褐	茶褐	〃	
4	〃	小型甕	14.4	4.4	13.2	〃	〃	体部に半横ナデ 下半ヘラケズリ 口縁内面カキメ	
5	〃	〃	12.2			〃	〃	カキメ	
6	〃	甕		10.0		茶褐	茶褐	ハケメ	
7	〃	〃	11.2	11.6	30.0	茶黒	茶黒	ロクロナデ カキメ	
8	須恵	坏	12.4	5.0	3.2	赤茶褐	赤茶褐	ロクロナデ 回転糸切り	
9	〃	〃	13.6	5.6	3.8	茶白	茶白	〃 〃	
10	灰釉	長頸瓶	10.6			灰白	灰白	〃	
11	〃	〃				〃	〃	〃	

した。

ほぼ南北を主軸方向とする隅丸方形の平面形態をもち、南北4.52m、東西3.82mの規模を測る。

壁は東壁および南壁の一部でやや攪乱がみられるが、概して整然としており、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は東壁20cm、西壁21cm、南壁22cm、北壁16cmを測るが、これは床面の傾斜というよりむしろ検出面において北側をやや削りすぎたことによる。

床はローム面に設けられているが、平坦でよく踏み固められている。ピットは住居址内に6基検出されたが、いずれも性格不明で、主柱穴と思われるものはなかった。

カマドは北壁東寄りに壁をやや抉って構築している石組粘土カマドで右側の袖部に2個、支脚石と思われる礫が残存していた。焼土は薄く分散しており、掘り込みの中はあまり焼けていなかった。

遺物　本址より土師器の坏、小型甕、甕、須恵器の坏、灰釉の長頸瓶が検出された。土師器の坏(1)、(2)は高台付で、内面は黒色処理されている。(2)の体部外面には「吉」の墨書が認められる。小型甕(4)、(5)はロクロ回転によって整形されており、(4)の口縁部内面、(5)の胴部外面、口縁部内面はカキメが認められる。また(4)の胴部外面下半はヘラケズリによって整形されている。甕(7)は口縁部内外面、胴部外面はロクロ回転によるカキメによって整形されており、底部内面にはロクロ成形痕が認められる。長頸瓶(10)はロクロ成形され、内面に施釉されている。(11)もロクロ成形による。底部はナデが施され、切り離し痕は認められない。

出土遺物の様相から、本址は9世紀中頃に属するものと考えられる。

第9号住居址

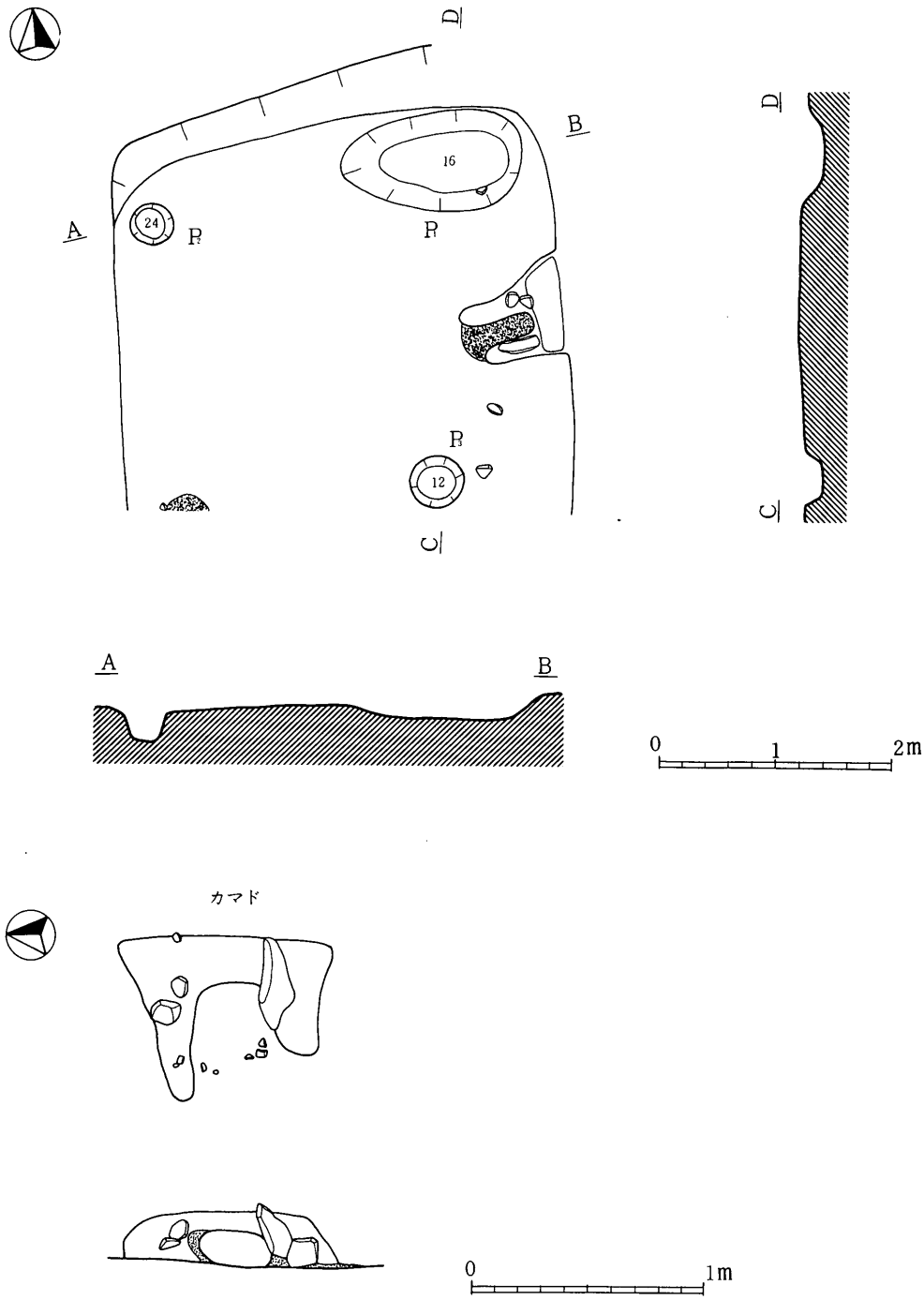
遺構　本址はⅠ地区西区の南東隅にあり、E—16・17グリッドに存在する。住居址南側は発掘区域外にかかっていたため、南壁沿いは確認されていない。付近一帯は攪乱が著しく、検出の段階でプランを確認することは困難をきたしたが、僅かに北壁の一部を確認し、また東側に焼土が集中的に存在していたことからカマドが予想され、住居址と断定した。なお東壁および西壁については攪乱のため最後まで確認することはできなかった。

検出された北壁のみでプランを把握することは難しいが、残存壁とカマドの位置から推して住居址の規模は東西3.70m、南北3.50m前後で、東西方向を主軸方向としている。

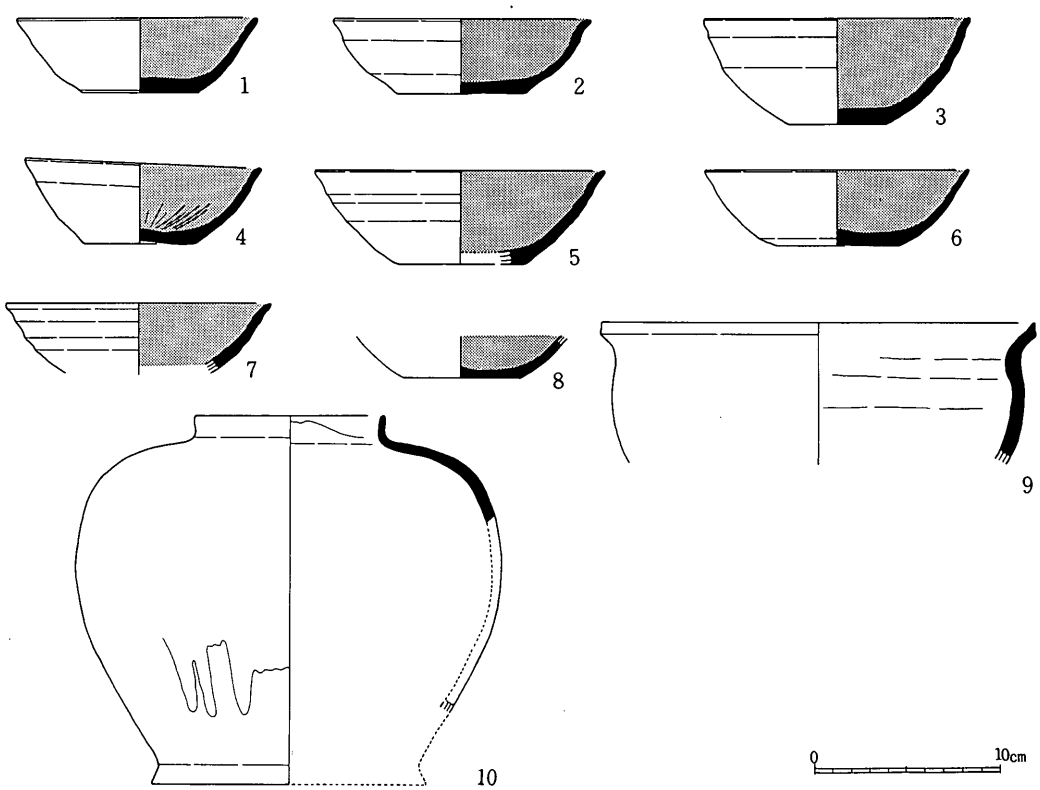
壁は北壁のみが残存しており、壁高は8cmを測るが、攪乱のため検出できなかった東壁および西壁でも比高差からほぼ同規模の壁高が推測される。

床は遺存状態が悪く、中央に残されているのみである。凹凸が著しく、中礫規模の礫がかなり露呈している。西壁および南壁沿いでは攪乱のため落ち込みがみられるが、残存する床部分も全体的には西傾斜の傾向がある。ピットは3基検出されたが柱穴と断定されるものはない。

カマドは西壁際中央付近に設置されているが、遺存状態が極めてよく、袖部、煙道がよく原形をとどめている。石組み粘土カマドで間口50cm、奥行き90cm、高さ46cmを測る。カマド内はよく焼けており、土師器片が数片出土している。



第123図　第９号住居址



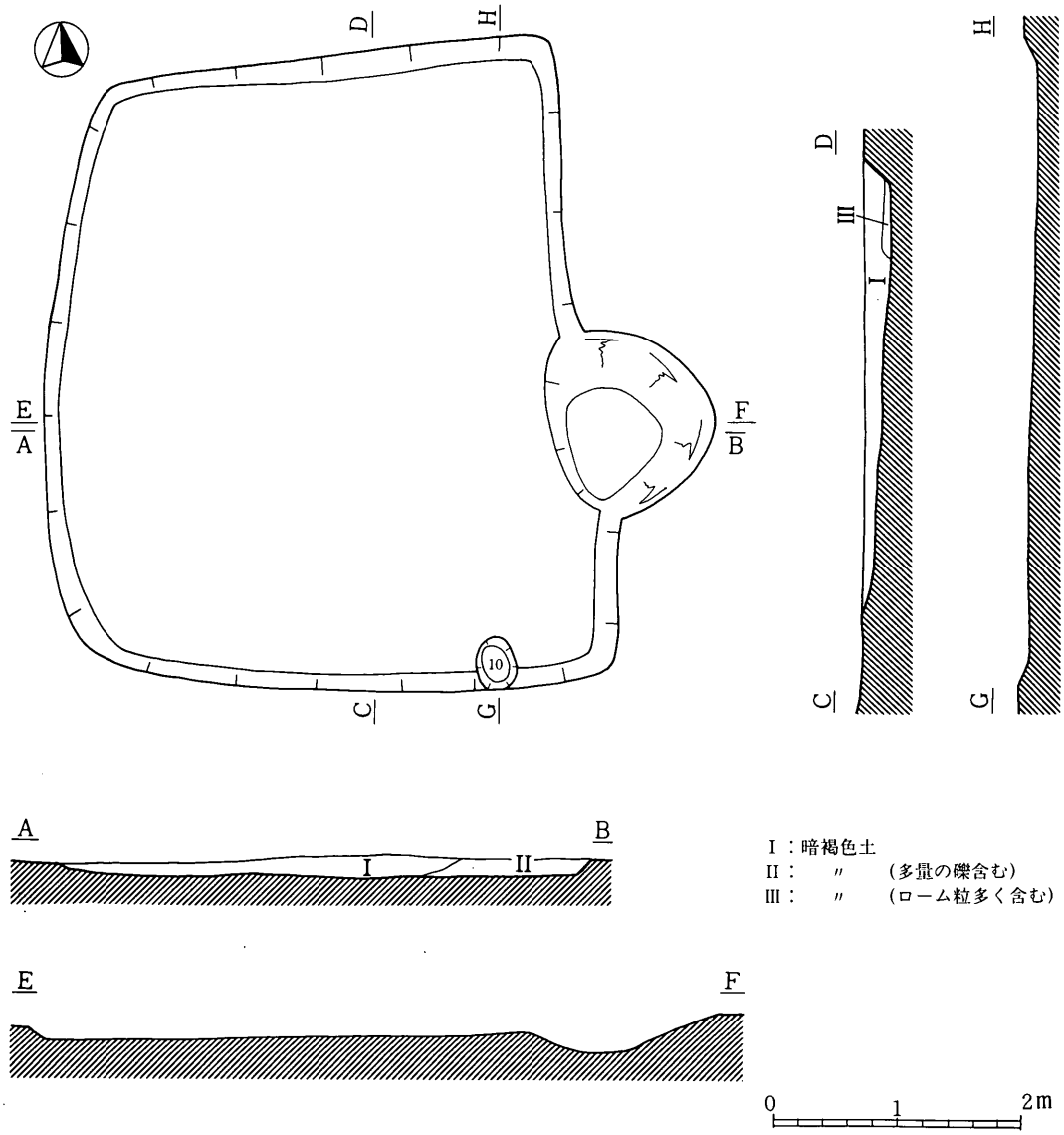
第124図　第9号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴			備考
			口径	底径	器高	外面	内面				
1	土師	坏	12.8	6.0	5.0	黒褐	黒	ロクロナデ	体部内面ミガキ	回転糸切り	黒色処理
2	〃	〃	13.6	7.8	4.0	茶褐	〃	〃	〃	〃	〃
3	〃	〃	14.0	5.2	5.6	〃	〃	〃	〃	〃	〃
4	〃	〃	12.5	6.0	4.5	〃	〃	〃	〃	回転ヘラケズリ	〃
5	〃	〃	15.4	6.4	5.0	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	〃
6	〃	〃	14.0	6.4	4.1	明褐	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	14.0			暗褐	〃	〃	〃		〃
8	〃	〃		6.4		明褐	〃	〃	〃	回転糸切り	〃
9	須恵	鉢	23.0			赤褐	明褐	〃	〃		
10	灰釉	短頸壺	10.0			白緑	灰白	〃	〃		

遺物　本址より土師器の坏、須恵器の鉢、灰釉の短頸壺が検出された。坏は8点とも内面に黒色処理が施されており、底部は(3)を除いて回転糸切り痕が認められる。(3)は底部は回転ヘラケズリによって調整され、体部外面の底部付近も回転ヘラケズリ調整されている。短頸壺(10)は緑色の釉が施されている。胴部下半を欠くが器高は約19.5cmを計るであろう。

出土遺物の様相から、本址は9世紀中頃に属するものと考えられる。



第125 図　第11号住居址

第10号住居址

遺構　本址はⅠ地区西区のA—13グリッドにあり、第５号住居址に掘り込み、重複している。第５号住居址と同様、北側は調査区域外となるため住居址の南側を一部、確認することにとどまった。住居址の掘り込みは完全に第５号住居址内にあるため、後者の床面精査の段階まで本址の存在を確認することはできなかった。検出された壁の存在をもって住居址と断定した。

上述のように確認された部分が住居址の南壁沿いの一部のため、プランは不明であるが、残存壁の在り方より推して東西3.53mを測る隅丸方形を呈すると推察される。

壁の掘り込みは、ほぼ垂直で東壁10cm、西壁14cm、南壁12cmの壁高を測るが、東壁および南壁

は第5号住居址床面との比高差しか測定できなかったため、若干の増加が考えられる。

床面はあまり踏み固められておらず軟弱で、また周溝、焼土等の施設も確認されなかった。

遺物　本址の出土遺物は大変少なく、図示できるものは出土していない。

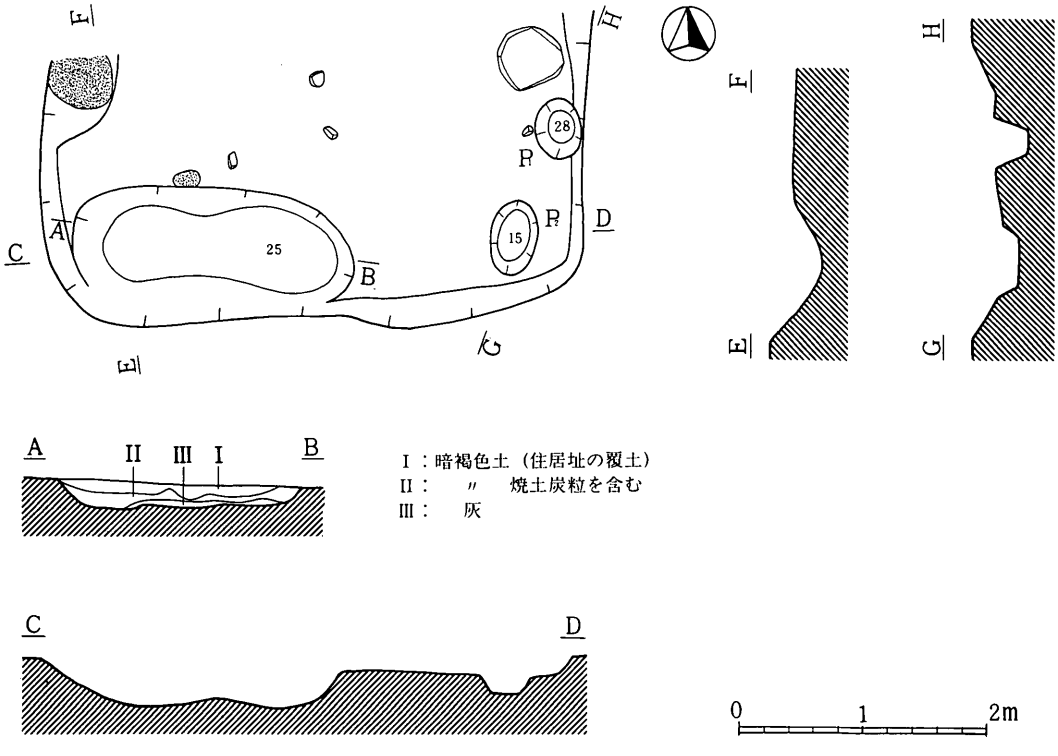
第11号住居址

遺構　本址はⅠ地区西区の東側中央にあり、C・D—15グリッドに位置する。北側には第14号住居址と第4号方形周溝墓が、南側には第1・2号住居址が隣接しており、また本址の東壁中央には第2号小竪穴が本址を切って重複している。本址付近は表土が薄く、礫混りの暗褐色土中での遺構検出であったためプランの確認には困難をきわめたが、検出段階で住居址中央に良好な床面が露呈したため（西壁検出面と住居址中央の床面は同レベル）、第11号住居址とした。

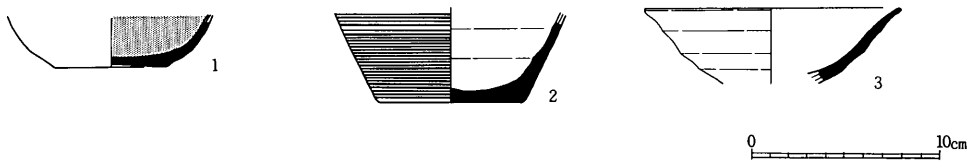
プランは主軸方向N—7°—Eを指す長方形で南北5.06m、東西4.28mを測る。

壁は北東隅が攪乱と小竪穴の重複のためやや不明確であるが、浅い割には総じて残存している。壁高は東壁9cm、西壁4cm、南壁7cm、北壁8cmと東から西へ漸減している。

床面は北半部が攪乱のため荒れているが、好対照に南半部はよく踏み固められた堅緻な面を残しており平坦域である。遺構検出面もやや西傾斜しているが、住居址の床面も同様の傾向がみられ、比高差は実に10cmにも及ぶ。床面に柱穴・カマドなどの痕跡はみとめられなかった。



第126図　第12号住居址



第127図　第12号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏		6.0		暗褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	小型甕		7.6		明褐	明褐	〃　カキメ	内面にススト付着
3	須恵	坏	13.6			灰白	灰白	〃	

遺物　本址より外面ハケメ調整されている甕の破片が出土しているが、大変少量のため図示できなかった。

第12号住居址

遺構　本址はI地区西区のほぼ中央にあり、A・B—7・8グリッドに位置する。北側は調査区域外となるため、住居址の南半部を検出するにとどまった。南側には約3m隔てて同じ平安時代の第7号住居址が、また南西方向約5mに同時代の第17号住居址が存在する。西区は総じて調査区北壁沿いがやや低いため、この線に沿って遺構検出段階では最後まで第II層の黒褐色土が残り、遺構検出が遅れた。この線上では偶然にも結果的に7軒もの住居址が検出されたが、壁や床で住居址が確認されたものは必然的に遅い発見となり、本址のようにカマドの焼土が途中で検出されたものは、かろうじて早い発見となった。なお、住居址の南東壁外で遺構検出面において確認された焼土は、当初、カマドの痕跡かと思われたが、十分な判断材料が整わないため、性格を明らかにすることはできなかった。

本址は北半部を欠くため、プランの全容は把握できないが、東西4.34mを測り、隅丸方形の平面形態を呈すると推察される。

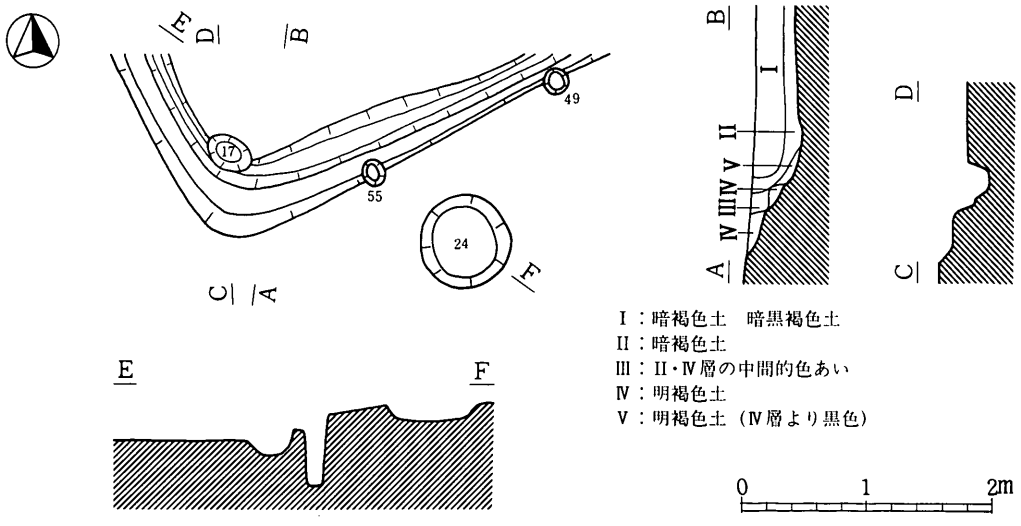
壁はローム面にほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は東壁18cm、西壁18cm、南壁15cmを測る。

床面は南東隅に若干、攪乱のため軟弱な箇所があるが、全般に非常に良好で、よく踏み固められている。東壁中央下に径50cmの台石が床面を僅かに掘り込み、すえ置かれており、上面には打痕による磨耗がみられた。ピットでは南西隅に6.00×2.50mの径を測る大形のものがあり、底部近くに灰の堆積をみることができ注目された。住居との関係は不明である。

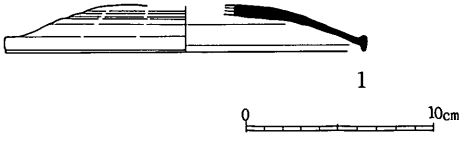
カマドは西壁中央に粘土カマドが構築されており、焼土の厚い堆積があった。

遺物　本址より土師器の坏、小型甕、須恵器の坏が検出された。いずれもロクロ成形され、小型甕(2)の外面は回転を用いたカキメによって調整されている。

本址の所属時期は出土遺物の様相から9世紀中頃と考えられる。



第128図　第13号住居址



第129図　第13号住居址出土土器

土　器　観　察　表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	須恵	蓋	19.0			灰白	灰白	ロクロナデ 天井部外面 回転ヘラケズリ	

第13号住居址

遺構　本址はI地区西区のほぼ中央にあり、A・B—10・11グリッドに位置する。本址の北半部は調査区北壁下に潜っているため、南半部のみの確認となった。付近は第II層の黒褐色土が厚く遺構検出に時間がかかったが、ローム検出面に明瞭な黒褐色土の落ち込みが認められたため住居址の存在を伺うことができた。

住居址の確認された部分が極一部であったためプランを把えることはできないが、唯一、検出されたコーナーよりおそらく隅丸方形の平面形態を呈するものと思われる。

壁は非常にきれいに掘り込まれており、ほぼ垂直をなす。壁高は西壁で27cm、南壁で22cmと比較的深い。

床面は良好でよく踏み固められている。壁沿いに走る周溝は深さ4～7cmと深く、調査区域内では連続している。

カマドは調査区域内では確認されなかった。

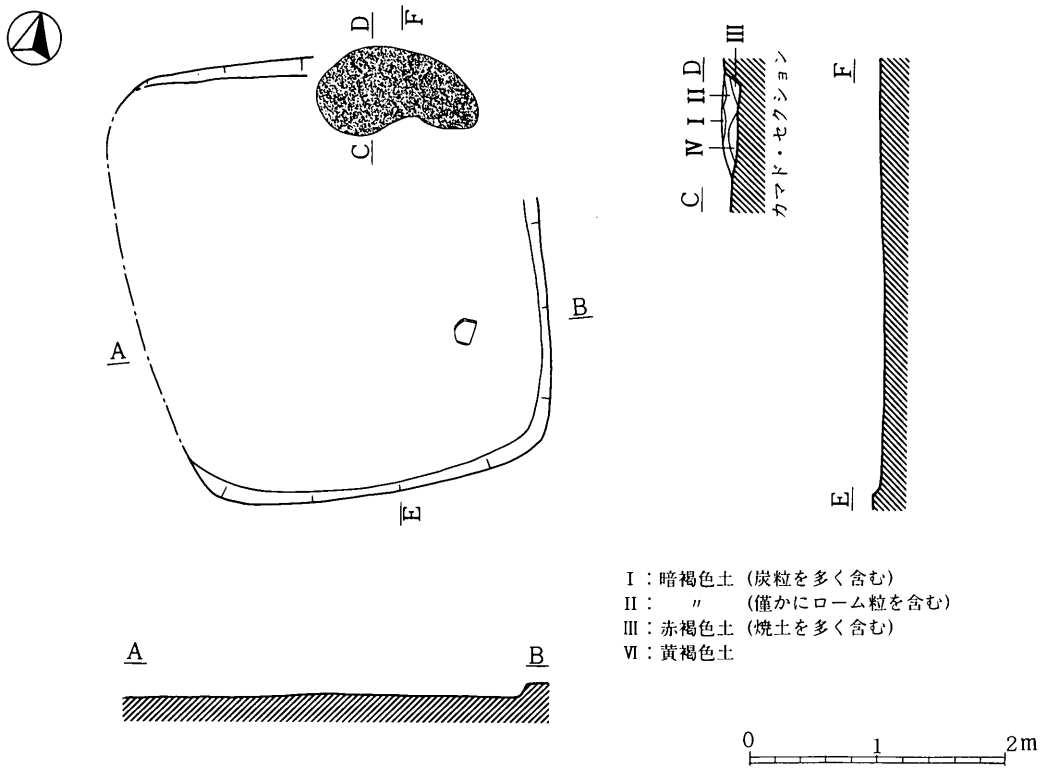
遺物　本址の出土遺物は大変少なく、須恵器の蓋1点が図示できたのみである。ロクロ成形さ

れ、天井部は回転ヘラケズりされている。

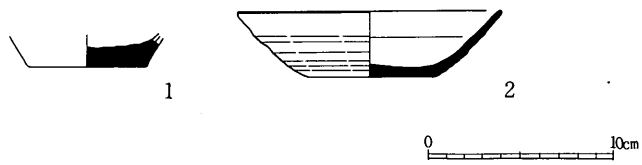
本址の所属時期は９世紀前半であろう。

第14号住居址

遺構　本址はＩ地区西区の東側にあり、Ｂ―14・15グリッドに位置する。本址は東側で第４号方形周溝墓を切っており、また北側には約50cm隔てて第15号住居址が存在する。当初の検出の段階では焼土のみが確認され、遺構の存在に気づかなかったが、焼土付近を精査したところ礫混り



第130図　第14号住居址



第131図　第14号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	小型甕		6.4		茶褐	茶褐	ロクロナデ 回転糸切り	
2	須恵	坏	14.0	6.6	3.5	明褐	明褐	〃　〃	

の床面と壁の立ち上がりの一部を確認したため第14号住居址とした。また焼土の西側に僅かに残存する住居址北壁が検出されたためこの焼土はカマドのものと判断された。

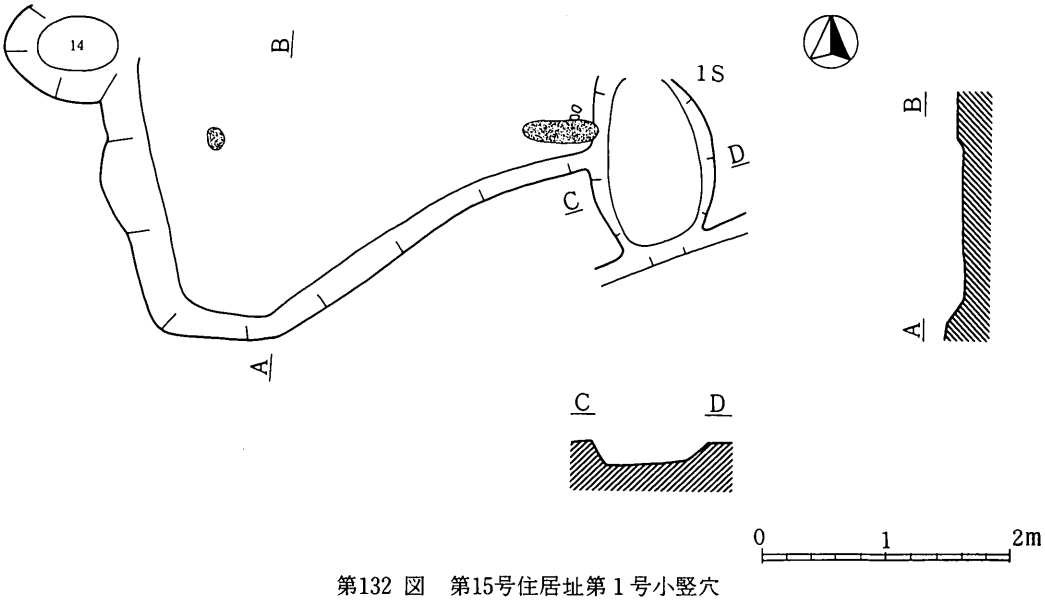
住居址西壁および北東壁が確認されなかったが、残存壁の在り方より推してプランは南北3.50m、東西3.30mを測る隅丸方形を呈し、主軸方向はN—25°—Wを指す。

壁は礫混りのロームをほぼ垂直に掘り込んでおり、壁高は東壁11cm、南壁6cm、北壁4cmと非常に浅い。また遺構検出面の緩やかな西傾斜により住居址の西壁は消滅している。

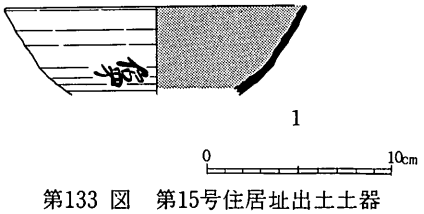
床面は同じく礫混りロームに構築しており、住居址東半域のみの残存であるが、よく踏み固められた堅緻な面を残している。ほぼ水平で平坦をなす。ピット、周溝等の施設は床面上に検出されなかった。

カマドは北壁東寄りに粘土カマドが設けられている。上部がすでに削平されており掘り込みのみが残存しているが、多量の焼土と炭が堆積していた。

遺物　本址の出土遺物は大変少なく土師器の小型甕と須恵器の杯が図示できたのみである。い



第132 図　第15号住居址第1号小竪穴



第133 図　第15号住居址出土土器

土　器　観　察　表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	坏	16.0			暗灰	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ	墨書 黒色処理

ずれもロクロ成形され、底部には回転糸切り痕が認められる。

本址の所属時期は出土遺物の様相より9世紀前半から中頃であろう。

第15号住居址

遺構　本址はⅠ地区西区の北壁沿いにやや東側にあり、B—14グリッドに存在する。北側が調査区域外であったため、南側⅓が検出された。本址の東側には第1号小竪穴が重複しており、また南側には約40cm隔てて第14号住居址および第4号方形周溝墓が位置している。本址付近は遺構が密集しているため、遺構検出時においてはなかなかプランの確認ができず、助簾による遺構検出作業を3～4回繰り返した箇所である。本址も例外ではなく付近の住居址群の中では最もプラン確認の遅れた住居である。プランより先に遺構検出面の高さで東端より焼土が検出され、住居址の存在が確認された。

プランは東西4.00m、南北2.30mと住居址のごく一部しか調査されなかったことから、全体の規模、形状については不明な点を多く残したが、残存壁の在り方より推して、やや隅丸をなす方形を呈するものと思われる。

壁は比較的遺存状態がよく、やや外傾する。壁高は南西隅が最も深く15cmを測るが、側方へ漸減し、南東隅および西壁で僅か6cmを測るにすぎない。

床面の残存はそれほど良好ではない。中央やや西寄りに80cm四方の範囲で周囲より10cmの比高差をもつ堅緻面が残されていたが、性格は不明である。柱穴、周溝等の施設は確認されなかった。カマドは東端に検出された焼土が何らかの関係があると思われるが、詳細を確認するに至らなかった。

遺物　本址の出土遺物は大変少なく土師器の坏が1点図示できたのみである。(1)は内面は大変丁寧に黒色処理されており光沢をおびている。外面には墨書が認められるが判読はできない。

本址の所属時期は9世紀中頃であろう。

第17号住居址

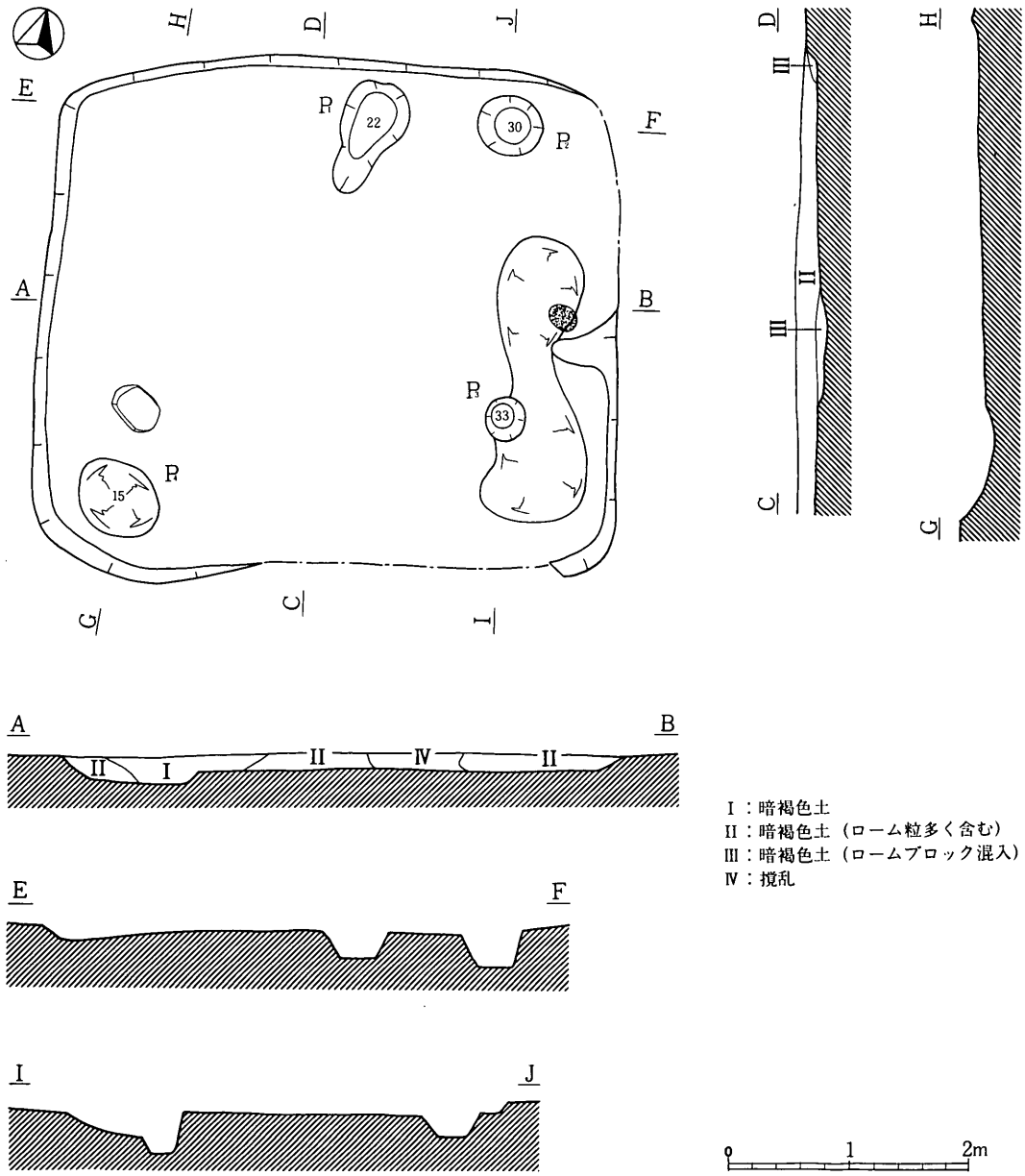
遺構　本址はⅠ地区西区のB・C—5・6グリッドに位置する。南側には古墳時代の第16号住居址が隣接しており、南壁が重複している。両者の床面に比高差がほとんどないことから遺物資料を加味しないと新旧関係を解明することは難しい。付近は包含層が薄いため攪乱がはいり掘り込みがはっきりしない部分があるが、南壁の重複部分を除くとほぼ壁を追うことができた。

プランは隅丸方形を呈し、東西4.80m、南北4.10mを測る。主軸方向はN—82°—Eである。

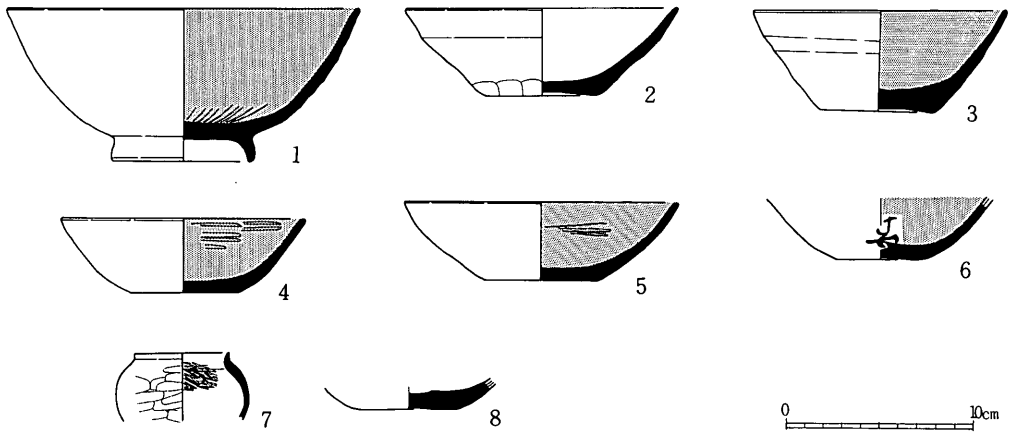
壁は南側の第16号住居址との重複部分および東壁北半を欠くが、概して残存しており、壁高は東壁11cm、西壁5cm、南壁8cm、北壁9cmと非常に低い。

床は中央域に非常に堅緻な面が残っており、周辺へいくほど軟弱になる。水平でほとんど平坦な床面を構築している。柱穴は4基あり、P_2、P_3、P_4は主柱穴になると思われる。

カマドは東壁中央の壁からの張り出し部が該当すると考えられ、焼土も僅かに検出されたが、



第134 図　第17号住居址



第135 図　第17号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸 決 (cm)			色 調		成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	坏	18.8	7.2	8.0	明褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	〃	14.4	5.6	4.6	〃	暗褐	〃 〃 底部ケズリ	
3	〃	〃	13.4	6.0	5.4	暗褐	黒	ロクロナデ 体部外面ミガキ 静止糸切り(？)	黒色処理
4	〃	〃	13.0	5.8	3.9	明褐	〃	〃 〃 回転糸切り	〃
5	〃	〃	14.4	6.0	4.1	〃	〃	〃 〃 〃	〃
6	〃	〃		4.0		黒褐	〃	〃 〃 〃	〃 墨書
7	〃	小型壺	5.0			赤褐	明褐	体部内外面ミガキ	
8	須恵	坏		5.0		明灰	明灰	ロクロナデ 回転糸切り	

原形をとどめておらず確認するに至っていない。

カマド南脇の落ち込みは貯蔵穴と思われるが、攪乱が著しくはっきりしない。

遺物　本址より土師器の坏、小型甕、須恵器の坏が検出された。土師器の坏はいずれもロクロ成形され、内面にはミガキが施されており、(2)を除いては黒色処理されている。(2)の体部外面はヘラケズリによって整形されており、底部の調整もヘラケズリによる。(3)の底部には静止糸切り痕が認められる。小型甕(7)は内外面ともヘラミガキによって調整されている。

出土遺物の様相から、本址は９世紀中頃に属するものと考えられる。

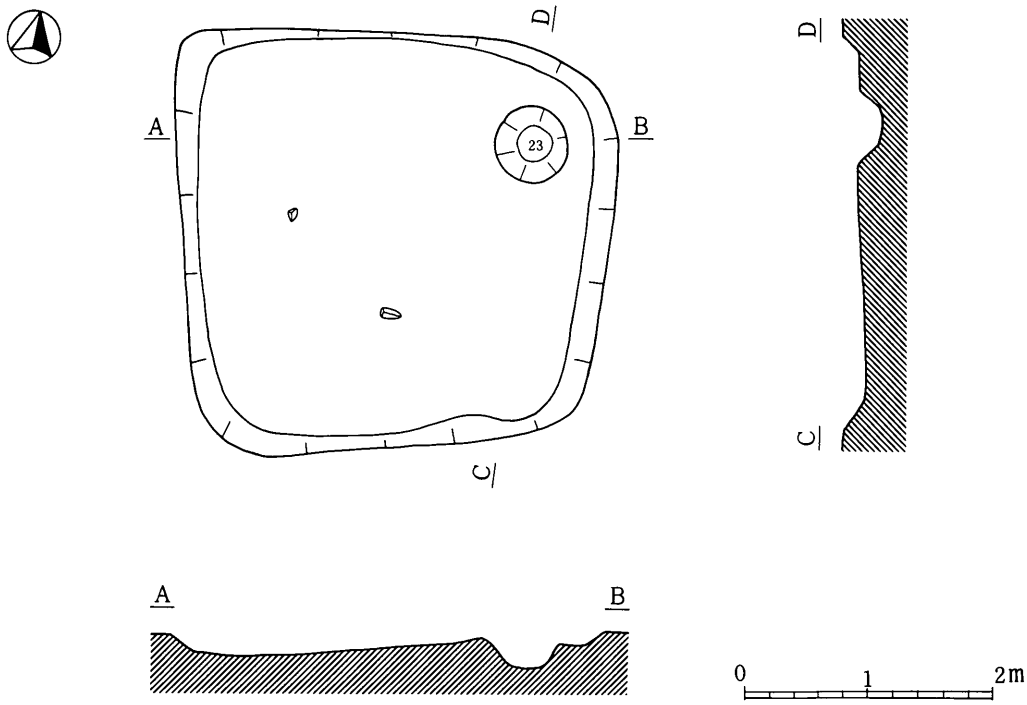
第19号住居址

遺構　本址はＩ地区西区の南西端にあり、Ｄ・Ｅ―２グリッドに位置する。北側には約１ｍ隔てて古墳時代の大形住居、第18号住居址が存在する。この第18号住居址の南縁付近から南へ緩い地形勾配があり、同時に砂礫の混入が著しい層となる。本址はこのような立地にあるにもかかわらず比較的、遺存状態が良好で、遺構検出段階で容易にプランを確認することができた。

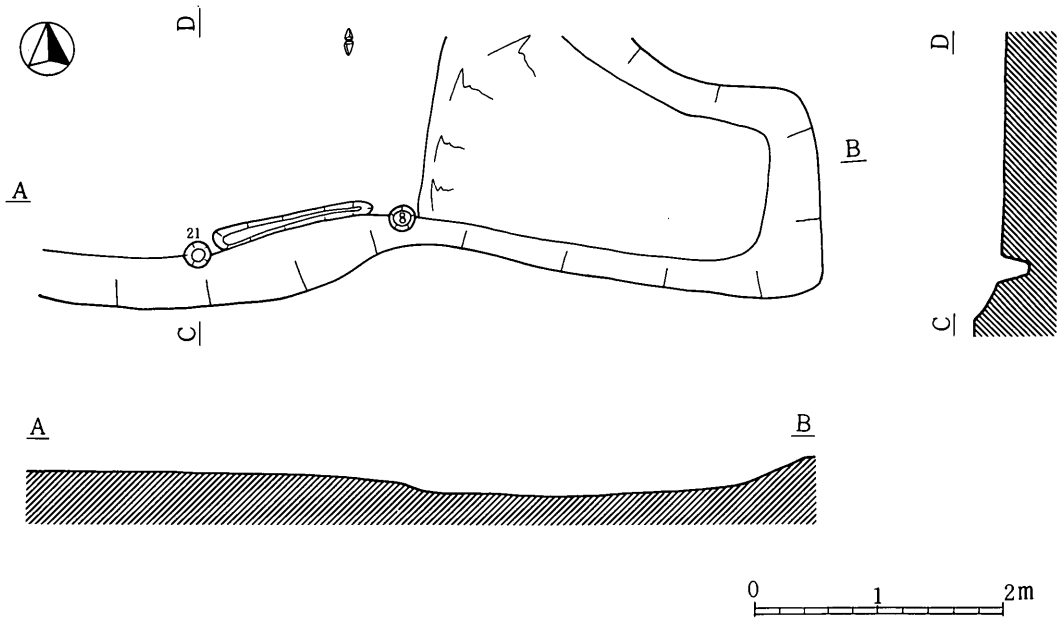
プランはやや不整な隅丸方形を呈し、東西3.45m、南北3.30mとやや小形の住居址である。主軸方向はＮ―70°―Ｅを指す。

住居址は砂礫混りロームを掘り込んで構築しているが壁の遺存は良好でほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は東壁11cm、西壁10cm、南壁17cm、北壁11cmを測る。

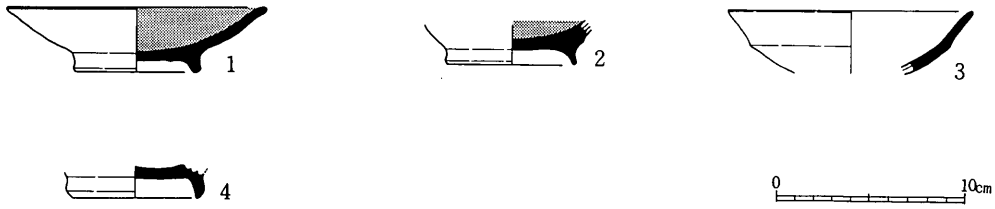
床面は砂礫の露出が著しく若干、起伏がみられるが全般的には水平な平坦域をなす。ピットは



第136 図　第19号住居址



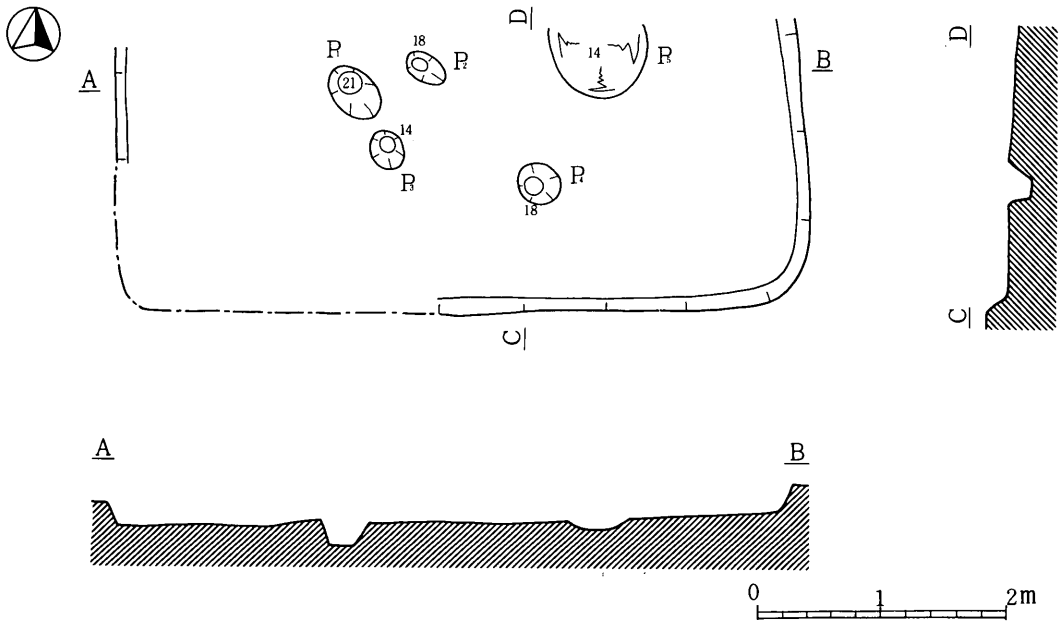
第137 図　第20号住居址



第138 図　第20号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	13.8	6.4	3.4	淡褐	黒	ロクロナデ 体面内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	〃	13.0			明褐	明褐	〃	
3	〃	〃		6.8		暗褐	黒	〃　体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
4	灰釉	埦		6.8		灰白	灰白	〃　底部回転ヘラケズリ	



第139 図　第21号住居址

北東隅に１基、確認されたのみであった。

カマド、周溝などの内部施設は確認されなかった。

遺物　本址の出土遺物は大変少なく、土師器の甕の破片が出土しているが図示できなかった。

第20号住居址

遺構　本址はＩ地区西区の最西端に位置し、Ａ・Ｂ―１グリッドに存在する。本址がある調査区北西隅は、かなり第II層の黒褐色土が厚く、遺構も黒褐色土中に掘り込まれ構築されていた。このため遺構検出にかなり手間取り、また検出面を下げすぎてしまった感がある。住居址の北側

および西側は調査区域外のため南半部の一部を確認するにとどまった。

なお、検出された竪穴は堅緻な床面を確認した西半部と、それより一段低い東半部に区別され、このうち後者についてはやや不明確ではあるが東壁が北側へ回り込んでいるため後世の小竪穴ともとれる。しかし前者と後者の覆土に明瞭な境がないこと、また南壁がほぼ直線状につながっていることからこれらを同一の住居址とした。

前述のとおり本址のプランを把えることは容易ではない。確認された範囲では東西6.15m、南北2.22mを測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、南壁で20cm、東壁で19cmを測る。

床面は西半部が堅緻でよく踏み固められているのに対し、東半部は軟弱で中央がやや低い擂鉢状を呈する。ピットは南壁沿いに2基確認され、同様の箇所に周溝も一部確認されている。

カマド、焼土などは検出されなかった。

遺物　本址より土師器の坏、灰釉の埦が出土している。土師器の坏はロクロ成形され、(1)、(3)は内面に黒色処理が施されている。灰釉の埦(4)は底部のみで、回転ヘラケズリによって調整されている。

出土遺物の様相から、本址は9世紀中頃に属するものと考えられる。

第21号住居址

遺構　A・B—3・4区にあり、北半部が調査区域外のため未調査のまま残されている。

東西447cmを測ることから、南北もほぼ同規模の方形プランを呈するものと思われる。南西隅に攪乱が入っており、西壁はわずかしか調査できなかったが、壁高19cm、ほぼ垂直の掘り込みとなっている。東壁は21cm、南壁は16cmでやはり掘り込みの状態は良い。床は、礫の混入したローム面上に構築されているが、平坦で状態は良い。P_1～P_5の5箇所のピットが検出されているが、柱穴か否か判然としない。カマド、周溝は未検出である。

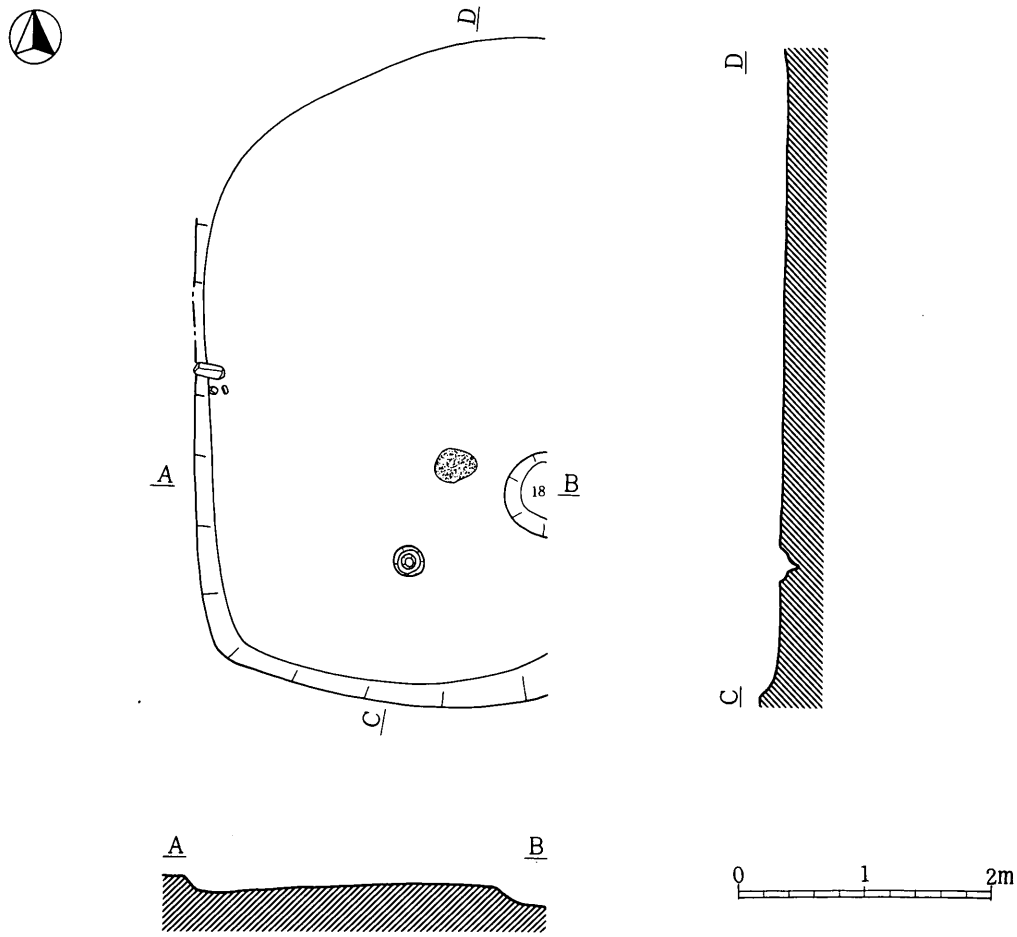
遺物　本址より土師器の坏、須恵器の破片が出土しているが、量的に大変少なかったため図示できるものはなかった。

第22号住居址

遺構　C・D—17・18区にあり、I地区西区の最東端に位置する。東側が調査区域外となっているため3分の1ほどが未調査として残されている。

掘り込みが極めて浅く、そのため遺構の遺存状態は悪い。壁は南壁と西壁の一部が残されているが他は消失したり未調査である。掘り込みはゆるやかな傾斜をなし、壁高は西壁8cm、南壁12cmである。床は、比較的保存状態が良く、良く踏み固められており堅緻である。柱穴は未検出である。炉は、南寄りに設けられた地床炉で、焼土師器がわずかに散布している。

遺物　本址の出土遺物は大変少なく、図示できる遺物は出土していない。

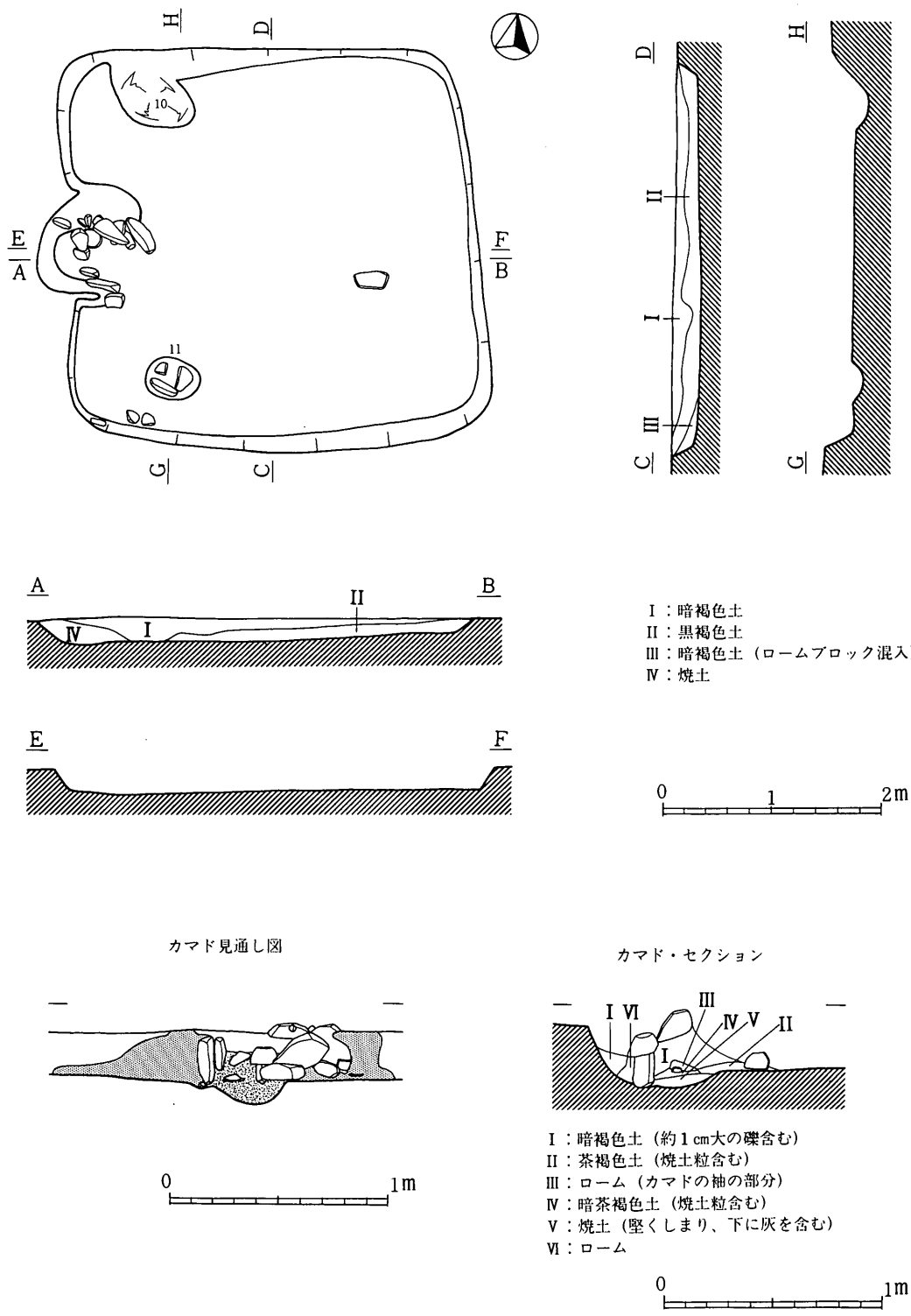


第140 図　第22号住居址

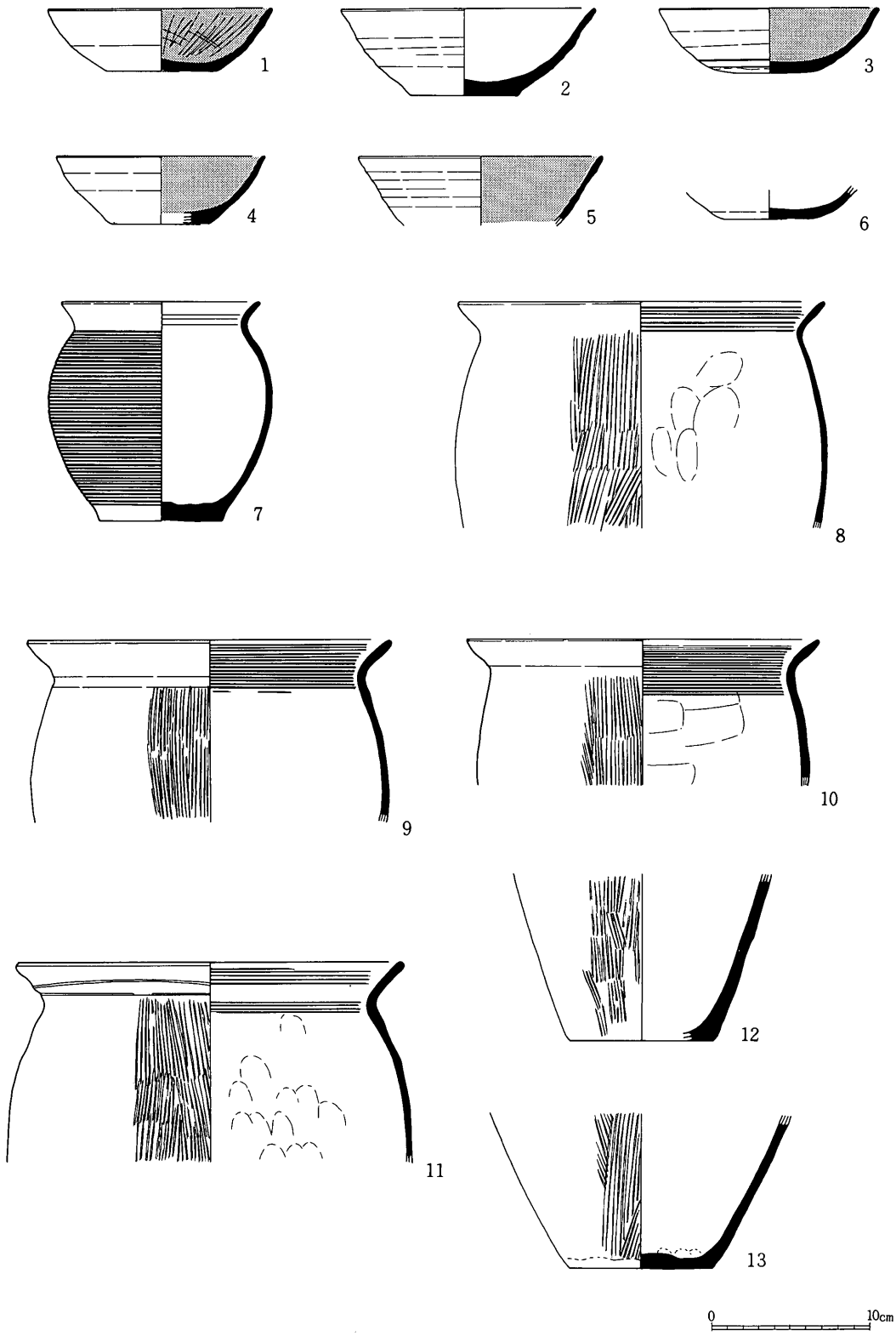
第23号住居址

遺構　D—26区にあり、1号方形周溝墓の溝を切って構築されている。Ⅰ地区東区発見の住居址中、最西端に位置する。

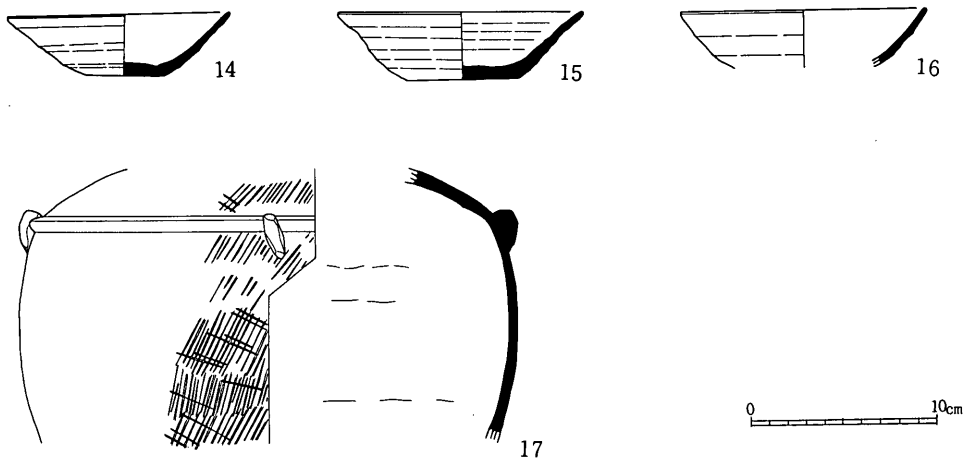
攪乱もなく遺存状態の良好な住居である。東西370cm、南北362cmの隅丸方形を呈する。壁は、垂直できれいな掘り込みで、壁高は、東壁20cm、西壁21cm、南壁23cm、北壁18cmである。床は、礫混りのローム面上に設けられている。カマド周辺は、砂利が少なく平坦であるが踏み固めが弱く比較的軟らかい。中央から東壁寄りにかけての範囲は砂利が多く、起伏がみられ、良く踏み固められている。カマドは、西壁中央に設けられている。幅80cm、奥行き100cmの規模を有し、石組み粘土カマドである。礫、粘土の残りが良く、カマドの形状を良く留めている。焚口中央に支脚石を埋設し、この石の上に土師器甕の胴下半部を逆位に被せている。カマド両脇に焼土が散布している。カマド両側には、50×45cm、深さ11cmの楕円形のピットがあり、内部に大きな礫が入っ



第141 図　第23号住居址



第142 図　第23号住居址出土土器



第143 図　第23号住居址出土土器(2)

ロクロナデ　土　器　観　案　表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	14.0	6.8	3.9	暗褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	〃	16.0	6.6	5.4	茶褐	暗茶褐	〃 〃 〃	
3	〃	〃	13.6	5.0	4.0	茶黒褐	黒	〃 〃 〃	黒色処理
4	〃	〃	13.0	6.0	4.2	暗褐	〃	〃 〃 〃	〃
5	〃	〃	15.2			黒褐	〃	〃 〃	〃
6	〃	〃		5.6		明褐	明褐	〃 〃 回転糸切り	
7	〃	小型甕	12.4	7.6	13.5	茶褐	暗褐	〃 カキメ 〃	
8	〃	甕	22.6			橙褐	灰褐	体部外面ハケメ 口縁内面カキメ 体部内面指圧痕(？)	
9	〃	〃	22.8			茶褐	暗褐	〃 〃	
10	〃	〃	22.0			〃	黒褐	〃 〃 体部内面ヘラナデ	
11	〃	〃	24.0			明褐	〃	〃 〃 体部内面指圧痕(？)	
12	〃	〃		9.0		茶褐	〃	〃	内面に灰付着
13	〃	〃		9.0		〃	暗褐	〃	
14	須恵	坏	11.9	4.0	3.4	灰白	灰白		
15	〃	〃	13.2	6.0	3.7	暗灰	茶灰		
16	〃	〃	13.0			〃	暗灰		
17	〃	四耳壺				青灰	灰白	体部外面タタキ	

ている。貯蔵穴的性格を有するものであろうか。柱穴、周溝は検出されていない。

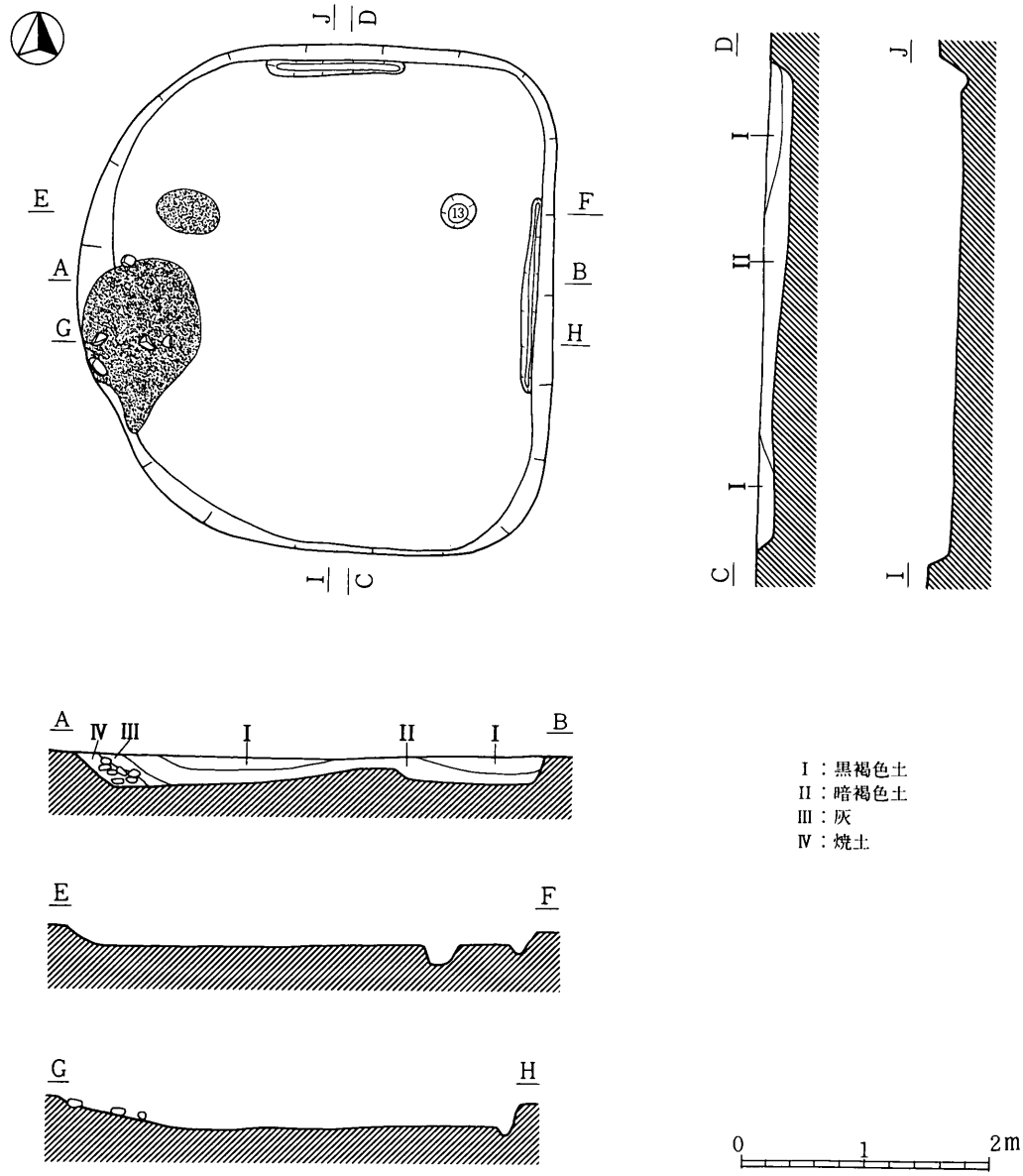
遺物　本址より土師器の坏、小型甕、甕、須恵器の坏、四耳壺が検出された。土師器の坏は6点ともロクロ成形され、内面はミガキが施されており、(1)、(3)、(4)、(5)は黒色処理されている。底部はいずれも回転糸切り痕が認められる。(3)の外面底部付近は手持ちヘラケズリによって調整されている。小型甕(7)はカマド内より支脚石の上にかぶせた状態で出土した。胴部外面、口縁部内面は回転を用いたカキメによって調整されており、底部には回転糸切り痕が認められる。土師器の甕の出土は多かった。いずれも胴部外面はハケメ、口縁部内面は回転を用いたカキメによって調整されている。胴部内面はヘラナデによるものと、指圧痕が認められるものとがある。(11)、(12)はカマド内出土である。須恵器の坏は3点ともロクロ成形され、底部には回転糸切り痕が認められる。四耳壺(17)は胴部上半のみ検出された。タタキ調整の後、凸帯と耳部をはりつけている。内面は横ナデによって調整されている。

出土遺物の様相から、本址は9世紀中頃に属するものと考えられる。

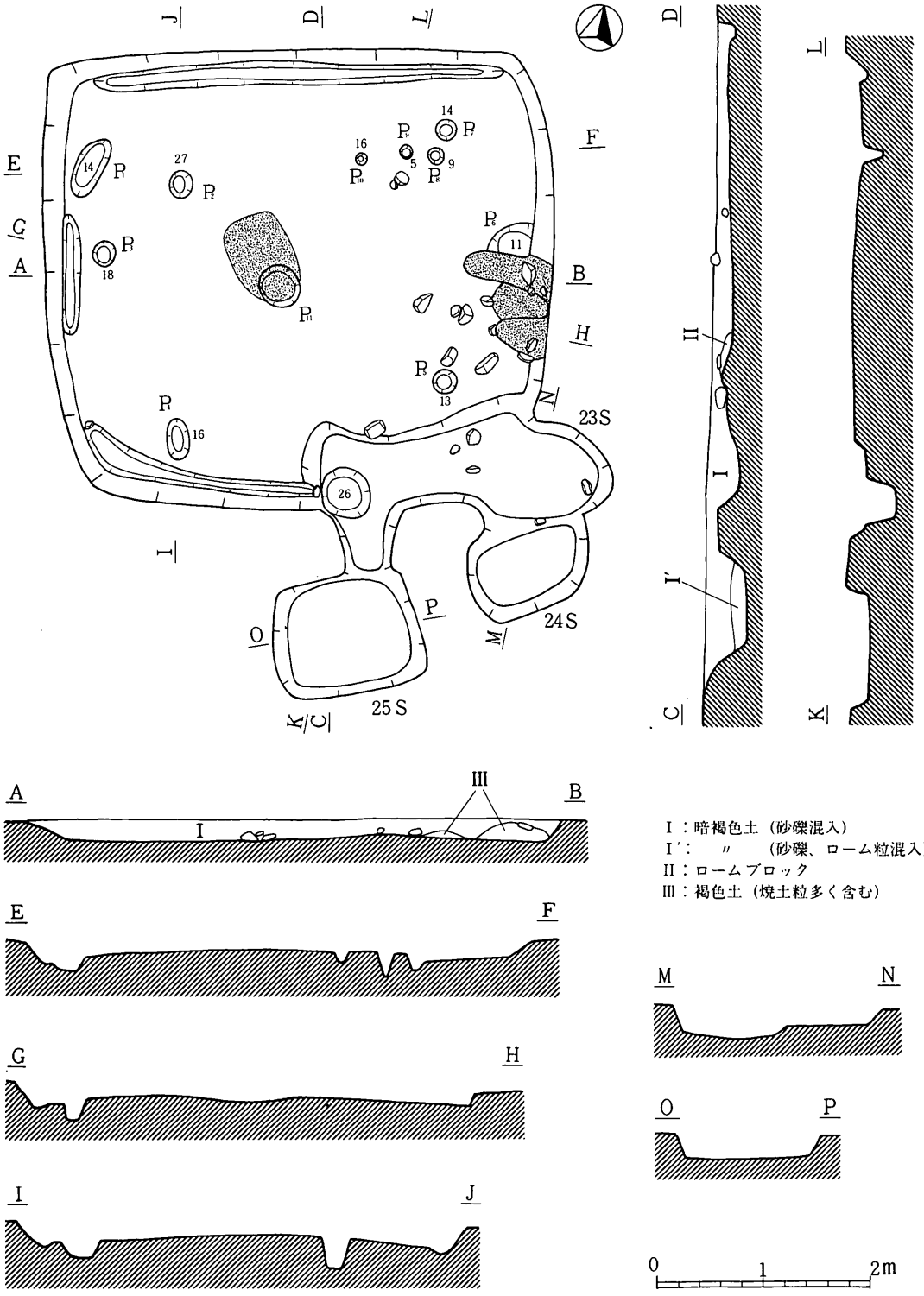
第24号住居址

遺構　C—27区にあり、西北端を12号小竪穴と重複する。

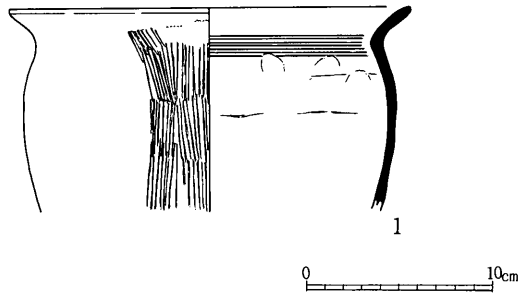
東西383cm、南北403cmの方形プランを呈する。壁は、ほぼ垂直のきれいな掘り込みで、壁高は、東壁14cm、西壁12cm、南壁15cm、北壁18cmである。周溝は、東壁、北壁下に部分的に認められる。幅13cm、深さ4～6cmを測る。床は、大小の礫混りローム面上に構築されたため、起伏が激しく、踏み固められた床は全くない。カマドは、西壁中央に設けられている。幅100cm、奥行90cm、小礫が数個存在する。石組みカマドであろうか。全面に焼土が散布する。ピットは、1箇所発見され



第144 図　第24号住居址



第145図　第25号住居址、第23・24・25号小竪穴



第146 図　第25号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種 別	器 形	寸 法 (cm)			色 調		成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
			口径	底径	器高	外 面	内 面		
1	土 師	甕	21.0			茶 褐	茶 褐	口縁部ロクロナデ 体部外面ハケメ内面カキメ指圧痕	

ている。30×25cm、深さ13cmであり、柱穴か否か判然としない。

遺物　本址より外面ハケメ調整による土師器の甕が出土しているが、胴部の破片のみで図示できなかった。

第25号住居址

遺構　C・D—28区にあり、南壁は小竪穴と重複し、東側は小竪穴群にとり囲まれている。

東西470cm、南北420cmの方形プランを呈する。南壁および西壁の一部は、小竪穴および攪乱のため破壊されているが、他の東、北壁は完存している。掘り込みは、きれいに立ち上がり、壁高は、東壁14cm、西壁18cm、南壁13cm、北壁10cmを測る。周溝は、北、西、南壁下にあり、幅10cm、深さ4～7cmである。床は、平坦で、中央部は特に良く踏み固められ堅緻である。中央部には、90×60cmの範囲に焼土が散布する。ピットは、10箇所あり、P_2(25×20cm、深さ27cm)、P_4(38×20cm、深さ16cm)、P_5(23×21cm、深さ13cm)、P_7(20×18cm、深さ14cm)が主柱穴にあたると考えられる。P_8～P_{10}は径10cm前後、深さ10cmほどの小穴で、支柱穴と思われる。カマドは、東壁中央に設けられ、かまど前面に散乱している礫、カマド内の礫の存在により石組み粘土カマドであろう。幅90cm、奥行80cmの規模を有する。カマド内部、両袖は焼土が充満している。

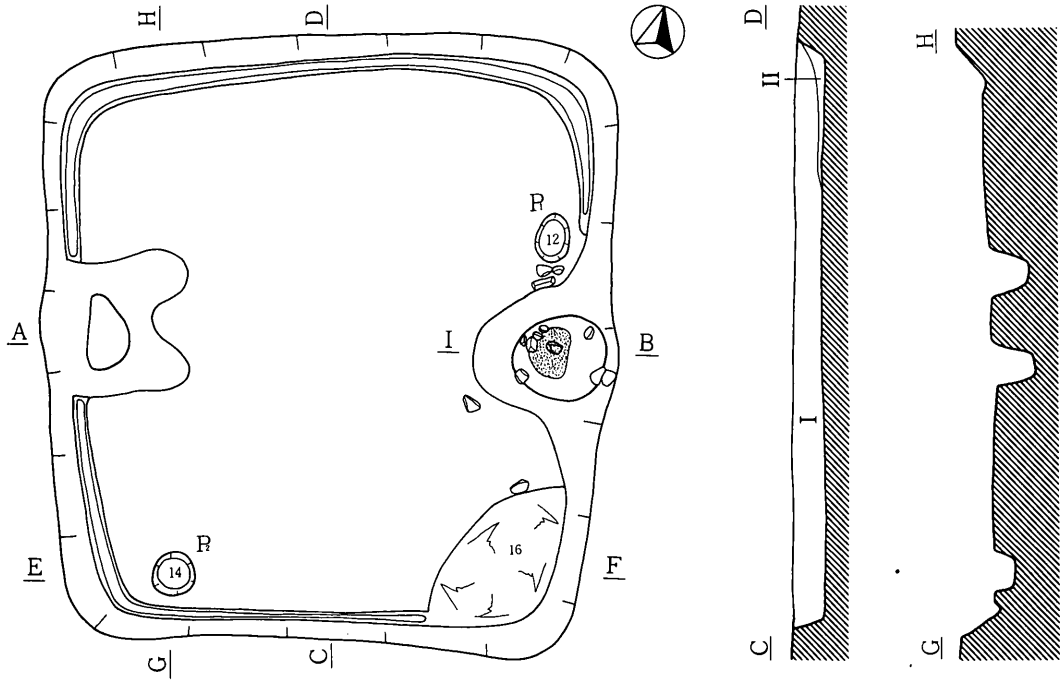
遺物　本址の出土遺物は大変少なく、土師器の甕が1点図示できたのみである。胴部外面はハケメ、口縁部内面は回転を用いたカキメによって調整されている。胴部内面には指圧痕が認められる。

本址の所属時期は出土遺物の様相より9世紀前半であろう。

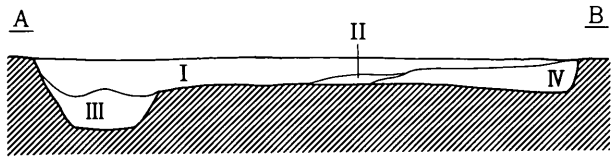
第27号住居址

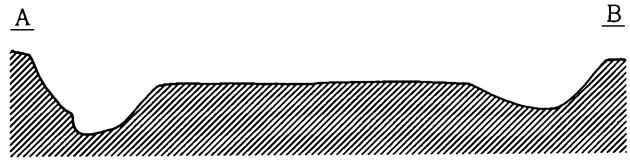
遺構　B—31・32区にあり、28・29号住居址に隣接する。

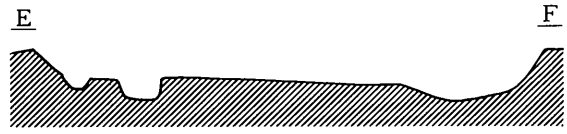
東西458cm、南北478cmの隅丸方形プランを呈する。壁は四周とも良好に遺存し、掘り込みはき



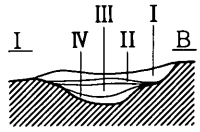
Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：　〃　（ローム粒混入）
Ⅲ：黒褐色土（　〃　）
Ⅳ：焼土、灰



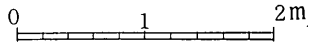




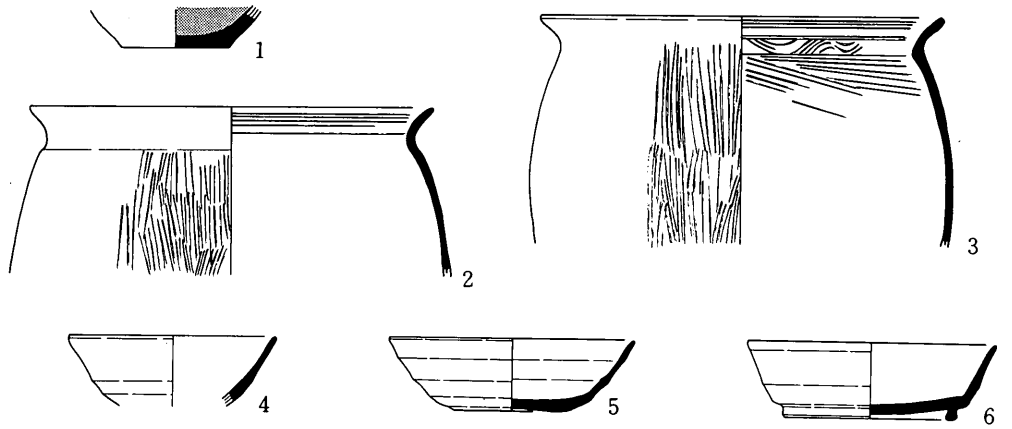
Ⅰ：灰褐色土（灰を多く含む）
Ⅱ：暗褐色土（焼土、灰を含む）
Ⅲ：焼土（赤褐色）
Ⅳ：暗褐色土（ローム粒混入）



カマド・セクション



第147 図　第27号住居址



第148 図　第27号住居址出土土器　　0　10cm

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏		5.6	茶褐	茶褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理(不完全)
2	〃	甕	21.4		〃	〃	茶褐	体部外面ハケメ 口縁内面カキメ	カマド内出土
3	〃	〃	21.0		明褐	明褐	明褐	〃　〃	カマド内出土
4	須恵	坏	11.0		暗灰	暗灰	暗灰	ロクロナデ	表面摩耗激しい
5	〃	〃	13.0	6.0	3.8	灰白	灰白	〃　回転糸切り	重ね焼痕
6	〃	〃	13.2	9.0	4.0	暗灰	暗灰	〃　〃　回転ヘラケズリ	

れいになされている。壁高は、東壁20cm、西壁26cm、南壁24cm、北壁19cmである。周溝はカマドおよび壁際の掘り込みを除き全周する。幅10～20cm、深さ2～7cm。床は、南半がやや高く、北半が低くなり、状態は堅緻で良い。カマドは、東壁中央に設けられた石組み粘土カマドである。幅150cm、奥行120cmの大きなもので、焚口中央に支脚石が埋め込まれている。支脚石周辺に焼土が残されている。このカマドの正反対の西壁中央にも幅110cm、奥行100cmの掘り込みがある。カマドの痕跡の可能性もあり、カマドの付け替えがなされたかもしれない。柱穴は、南西隅のP_2(35×35cm、深さ14cm)と、カマド脇のP_1(35×26cm、深さ12cm)の2箇所がある。

遺存状態の良い住居址である。

遺物　本址より土師器の坏、甕、須恵器の坏が検出された。土師器の坏(1)はカマド内出土である。内面は不完全ではあるが黒色処理されている。甕は2点図示できた。両者とも胴部外面はハケメ調整され、口縁部内面にはカキメが認められる。(2)はカマド内出土である。須恵器の坏はいずれもロクロ成形され、高台をもつ(6)の底部には回転ヘラケズリが認められる。

鉄器は鎌が1点出土している。ほぼ完存している。

本址の所属時期は出土遺物の様相から9世紀前半に属するであろう。

第29号住居址

遺構　B—33区にあり、南側を30号住居址に接し、27号住居址は西側に隣接している。

礫混りローム面を掘り込んで構築した住居で、覆土は暗褐色土・ローム粒を混入した暗褐色土

である。南北260cm、東西も同規模の方形プランを呈する。東、南、北壁は完存するも、西壁は破壊されている。掘り込みは良く、壁高は、東壁10cm、南壁20cm、北壁9cmを測る。床は、平坦で状態はよい。床面中央から西にかけて小竪穴状の掘り込みがある。カマド、柱穴、周溝は発見されていない。

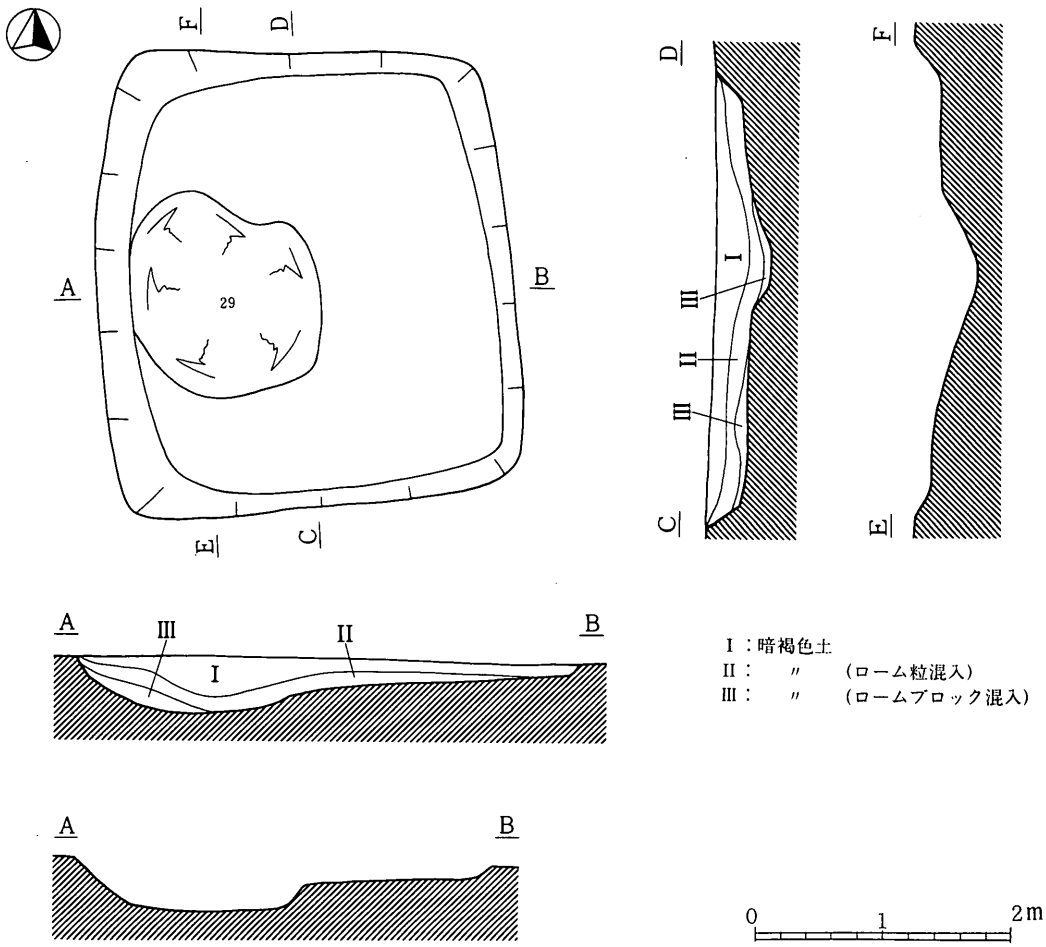
遺物　本址より土師器の甕、須恵器の蓋、坏が検出された。甕(1)は外面はハケメ調整され、口縁部内面にはロクロを用いたカキメが認められる。蓋(2)、(3)はいずれもロクロ成形され、天井部は回転ヘラケズリによって整形されている。

本址は出土遺物の様相から、9世紀前半に属するものと考えられる。

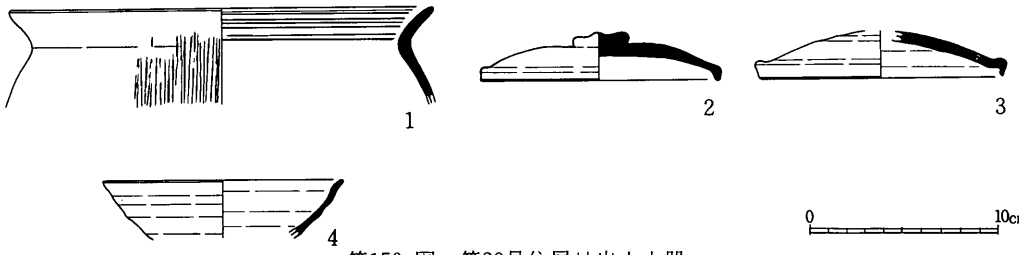
第31号住居址

遺構　D・E—35区にあり、建物址・小竪穴群に取り囲まれている。

南壁中央が38号小竪穴によって破壊されているほかは遺存状態は良い。東西360cm、南北370cm



第149 図　第29号住居址



第150 図　第29号住居址出土土器

土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	甕	22.6			明褐	明褐	体部外面ハケメ 口縁内面カキメ	
2	須恵	蓋	12.6		2.6	暗灰	暗灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	
3	〃	〃	13.0			茶灰	茶灰		
4	〃	坏				灰	灰		

の隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜するも掘り込み状態は良く、壁高は、東壁20cm、西壁22cm、南壁33cm、北壁16cmを測る。周溝は、西、南、北壁下にあり、幅7～23cm、深さ3cmである。床は、砂利混りのローム面上に設けられ、中央からカマド前にかけて若干低くなっている。全体的によく踏み固められ堅い。カマドは、東壁中央やや南寄りにあり、幅95cm、奥行95cmの石組み粘土カマドである。焼土が左袖に顕著である。ピットは、P_1（40×38cm、深さ15cm）、P_2（66×64cm、深さ18cm）、P_3（47×40cm、深さ16cm）の3箇所と、西北隅の深さ23cmのP_4とがある。P_1、P_3は柱穴の可能性が高いが、P_2は貯蔵穴かもしれない。他に東壁外の小ピットは攪乱気味のため存在が不確かであり、西壁への掘り込みは本址とは関係のない小竪穴であろう。

遺物　本址より土師器の坏、甕、須恵器の蓋、坏が出土した。土師器の坏(2)は甲州型坏である。ロクロ成形の後、体部面の底部付近を中心にヘラケズリによって調整されている。底部の調整もヘラケズリによる。甕(3)は胴部内外面とも目の粗いハケメによって調整されている。須恵器の蓋、坏はロクロ成形により、坏の底部には回転糸切り痕が認められる。

本址は出土遺物の様相より、9世紀前半に属するものと考えられる。

第32号住居址

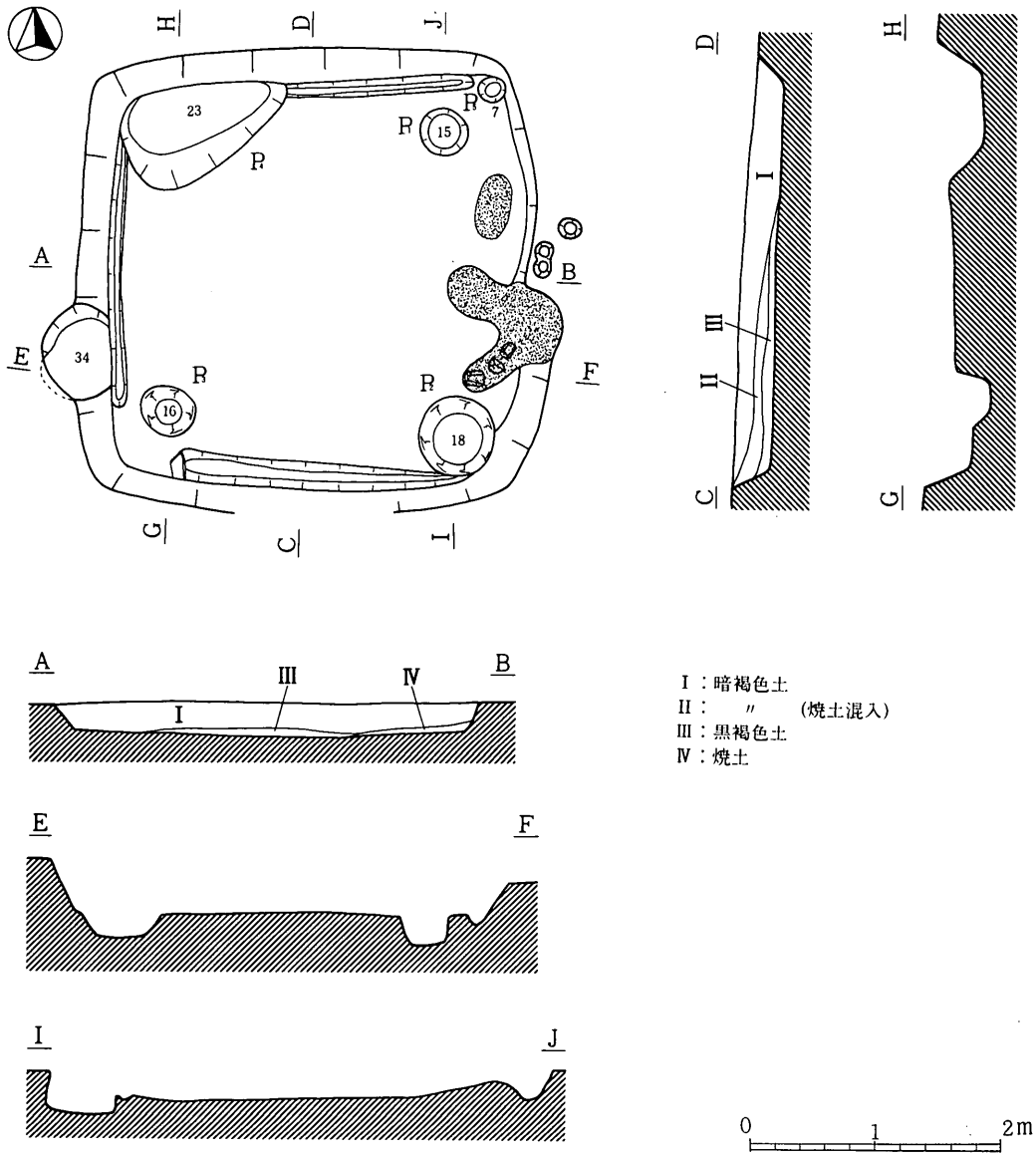
遺構　D・E—38・39区にあり、I地区の東端に位置する。

東西447cm、南北455cmの規模を有し、方形プランを呈する。壁は、重機により上面が削平されているため、東壁6cm、西壁12cm、南壁15cm、北壁18cmと浅い。掘り込みは、東壁を除き垂直になされている。周溝は、東、西、北壁下に部分的にあり、幅20cm、深さ6cmを測る。床は、ブドウ棚支柱が掘り込まれていたため北半は攪乱が著しい。比較的良く遺存しているのは中央部からカマド前面の範囲である。多少起伏はあるが堅緻である。カマドは東壁中央に設けられた石組み粘土カマドである。壁から床中央にかけて150cmの範囲に粘土・礫・焼土の散乱が認められる。西壁沿いに深さ10cmほどのP_1～P_6のピットが存在する。柱穴か否か判断できない。

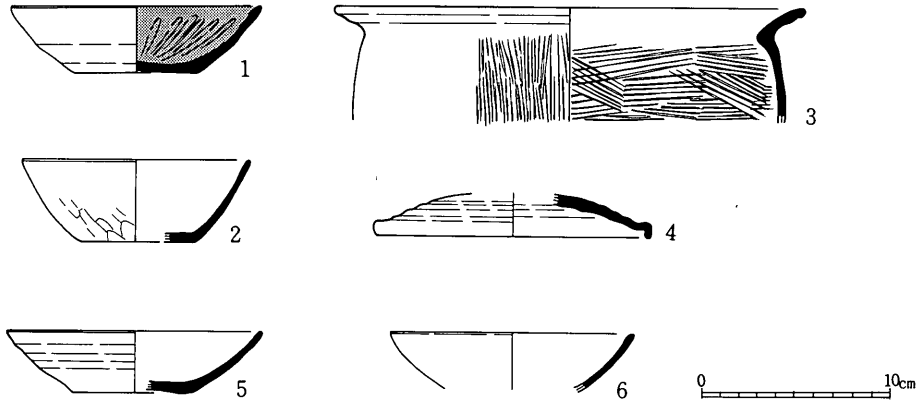
遺物　本址より土師器の坏、小型甕、甕、須恵器の四耳壺、長頸瓶が検出された。坏はいずれ

もロクロ成形され、(1)と(2)は内面に黒色処理されている。甕は3点ともカマド内出土である。いずれも外面はハケメ調整されており、(5)は口縁部内面をカキメ整形され、胴部内面に指圧痕が認められる。四耳壺(8)は胴部上半のみを有す。タタキ調整された後、凸帯と耳部をはりつけてある。長頸瓶(9)はロクロの成形の後、胴部外面の底部付近は回転ヘラケズリによって調整されている。底部にはかすかに回転糸切り痕が認められる。

本址は出土遺物の様相から9世紀中頃に属するものと考えられる。



第151 図　第31号住居址



第152 図　第31号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師	坏	13.4	6.6	3.5	茶褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ 回転糸切り	黒色処理
2	〃	〃	12.0	6.0	4.3	明褐	明褐	〃　体部外面下半ヘラケズリ	甲州型坏
3	〃	甕	25.0			暗褐	暗褐	口縁部 ロクロナデ 体部内外面ハケメ	
4	須恵	蓋	14.6			灰	灰	ロクロナデ	
5	〃	坏	13.6	6.4	3.2	灰白	灰白	〃　回転糸切り	
6	〃	〃	13.0			暗灰	暗灰	〃	

第33号住居址

遺構　C—39区にあり、I地区最東端に発見された住居址で、遺存状態は良い。

東西485m、南北540mの方形プランを呈する。覆土は、3cm大の礫を多く含む黒褐色土、焼土粒を混入する黒褐色土が自然堆積の状態である。壁は、垂直にきれいに掘り込まれ、壁高は、東壁56cm、西壁46cm、南壁46cm、北壁27cmである。周溝は、カマド部分を除き全周している。幅12cm、深さ3cm。床は、礫混りのローム面上に、わずかなローム土を敷き、良く踏み固めて床としている。ほぼ平坦で状態は良い。西壁下とカマド脇の南壁下に大きな礫を据えている。カマド脇のものは、45×22cm、厚さ13cmで、上面は平らであり、台石としたものであろう。柱穴は、南・北壁に食い込むようにして掘り込まれている。P_1（24×21cm、深さ54cm）、P_2（35×30cm、深さ54cm）、P_3（28×24cm、深さ78cm）、P_4（35×29cm、深さ92cm）である。掘り方は、ほぼ垂直である。カマドは東壁中央に設けられている。カマド前面の床上に粘土・礫が散乱していることから石組み粘土カマドであろうと思われる。

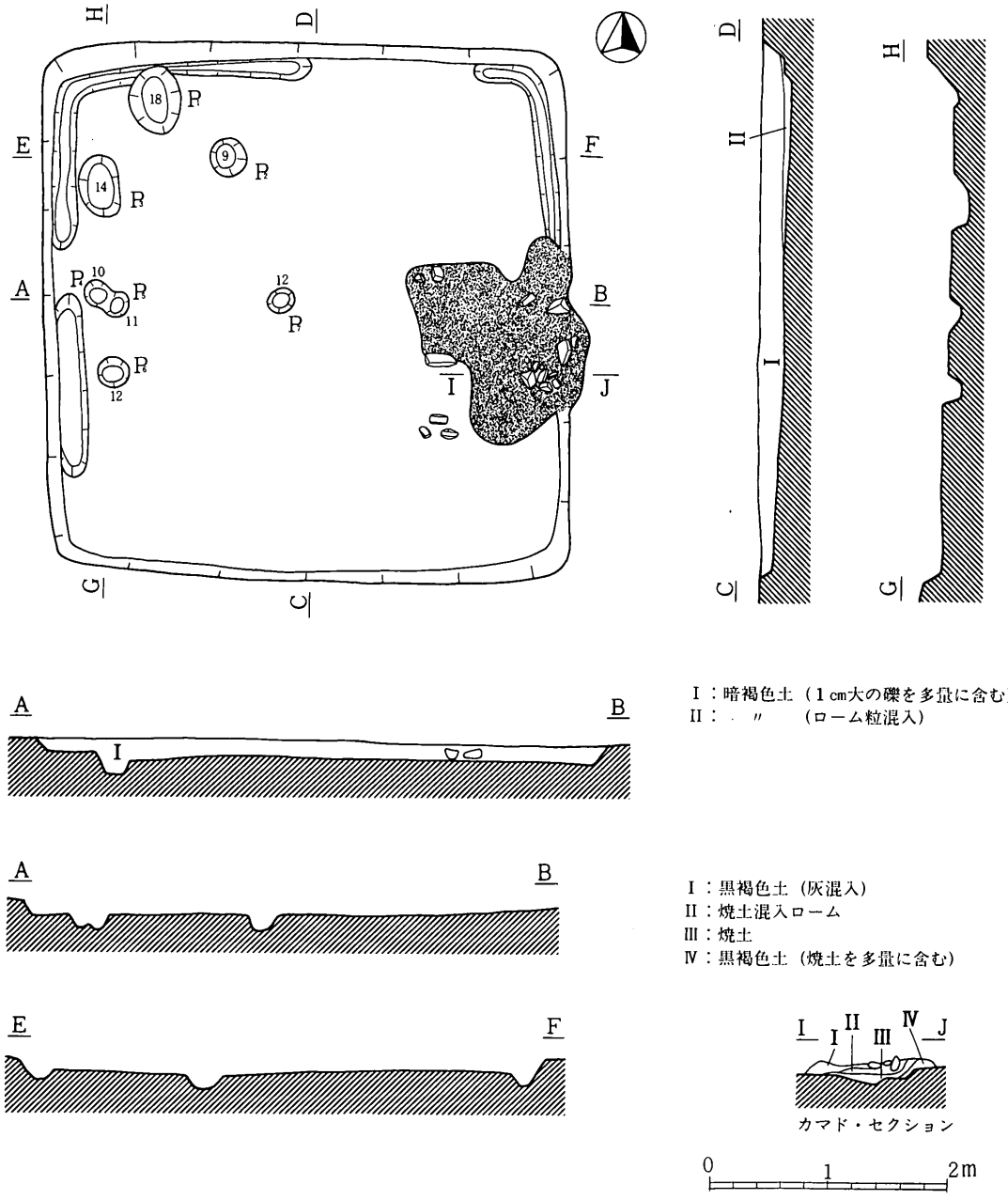
遺物　本址より須恵器製品を中心に多くの遺物が検出された。土師器の坏は2点図示できたのみである。内面は黒色処理されているが、(1)はやや不完全である。甕(4)はカマド内出土である。胴部外面はハケメ、口縁部内面は回転を用いたカキメによって調整されている。外面は少々磨耗しており、焼土の付着がみられる。蓋(5)、(6)はロクロ成形され、(5)の天井部は回転ヘラケズリによる。須恵器の坏は16点出土した。高台付の坏は4点検出された。ロクロ成形され、底部は回転糸切りと回転ヘラケズリが使用され、糸切り痕は中央に残る。(11)～(22)はロクロ成形され、底部は

回転糸切りによる。大きさは均一的でいずれも口径12～13cm、底径5～6cm、器高3～4cmを計る。四耳壺(23)は胴部上半のみ有する。タタキ調整の後、凸帯と耳部をはりつけたものと思われる。

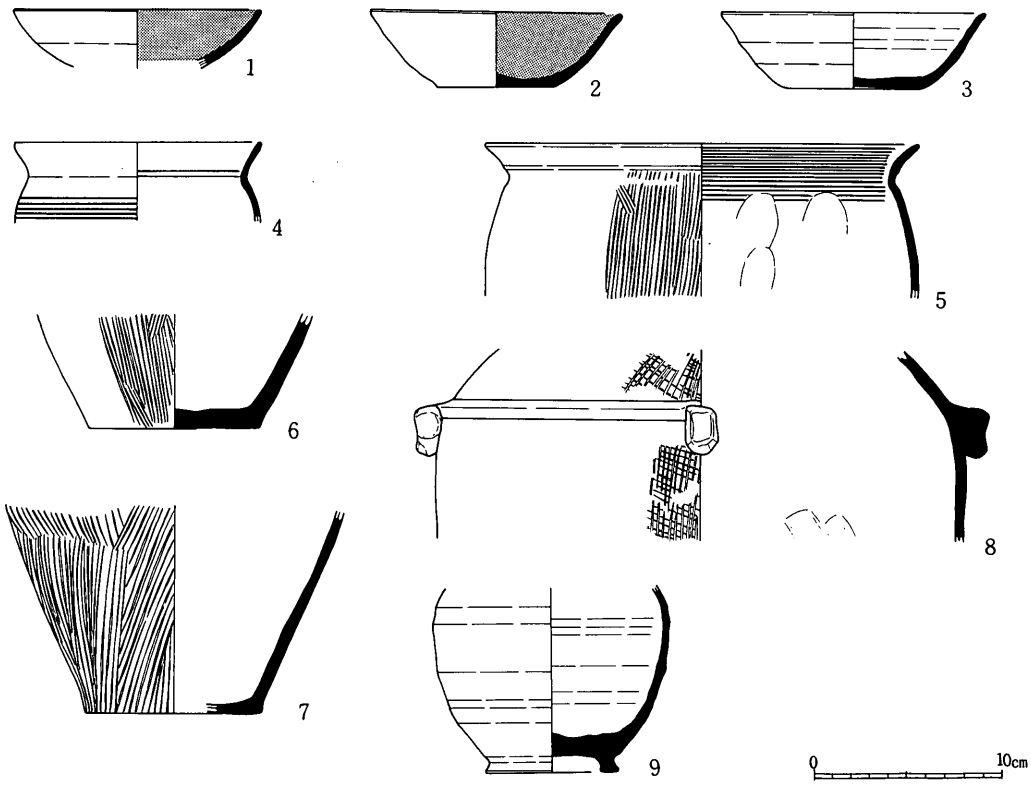
鉄器は刀子と思われるものが1点出土している。先端部を欠損している。

これらの遺物の様相より、本址は9世紀前半に属するものと考えられる。

石製品　石製紡錘車が1点出土している。径4.8×4.4cm、高さ1.4cm、重さ37.9gと大型のもの



第153図　第32号住居址



第154 図　第32号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底部	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	13.2			明褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ	黒色処理
2	〃	〃	3.4	6.2	4.1	〃	〃	〃 〃 回転糸切り	〃
3	〃	〃	14.0	7.0	4.0	灰白	灰白	〃	
4	〃	小型甕	13.0			茶褐	茶褐	〃 カキメ	
5	〃	甕	23.0			〃	暗褐	体部外面ハケメ 口縁内面カキメ 体部内面指圧痕	カマド内出土
6	〃	〃		9.0		〃	〃	〃	〃
7	〃	〃		9.3		〃	茶褐	〃	〃
8	須恵	四耳壺				暗灰	灰	タタキ	
9	〃	長頸瓶		7.0		明灰	明灰	ロクロナデ 底部付近 回転ヘラケズリ	

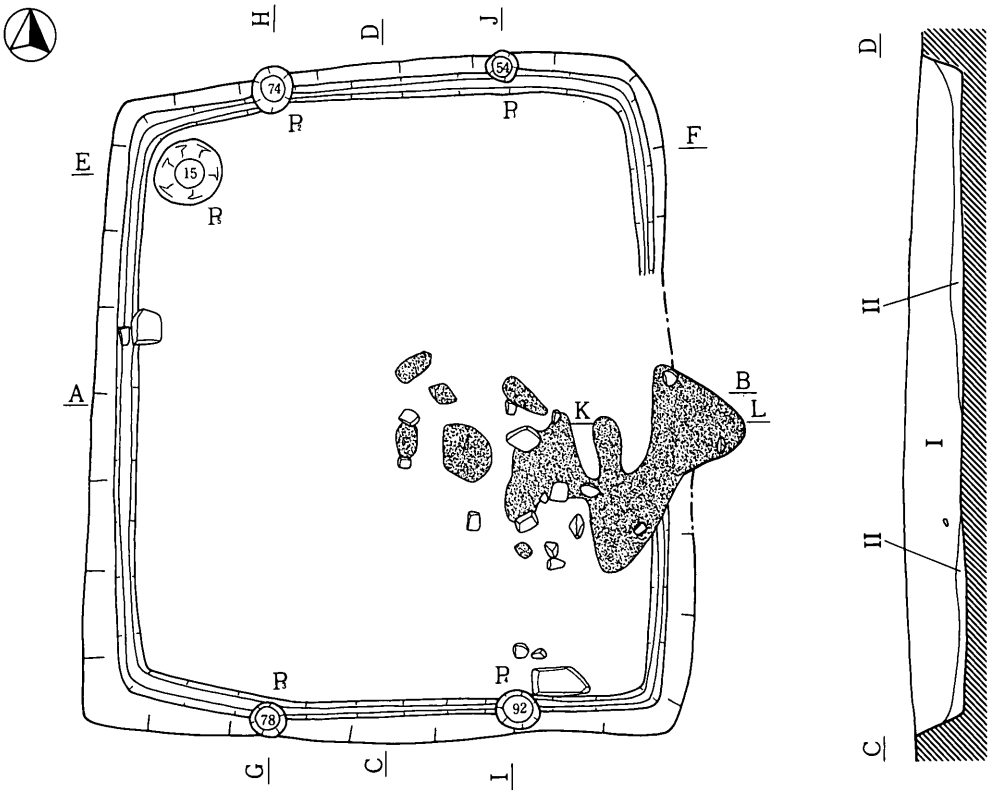
で中央に太い孔が貫通している。表面はよく磨かれているが、裏面には剥脱の跡がみられる。粘板岩製である。

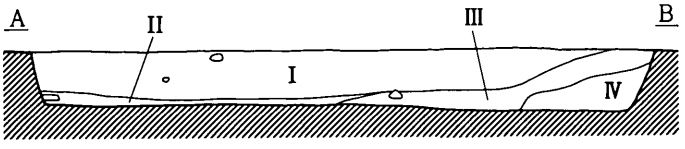
第35号住居址

遺構　E—5・6区にあり、34・48・36・39号各住居址に取り囲まれている。

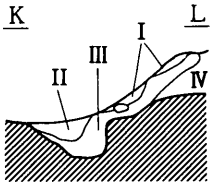
砂利を含むローム面に掘り込んで構築された住居で、覆土は上から小礫混りの黒褐色土、小礫混りの暗褐色土となっている。

東西480cm、南北525cmのやや南北に長い隅丸長方形プランを呈する。四壁とも良く残り、壁高





Ⅰ：黒褐色土（3㎝大の礫を多く含む）
Ⅱ：暗褐色土（Ⅰにローム粒少量混入）
Ⅲ：　〃　（焼土粒混入）
Ⅳ：焼土、灰

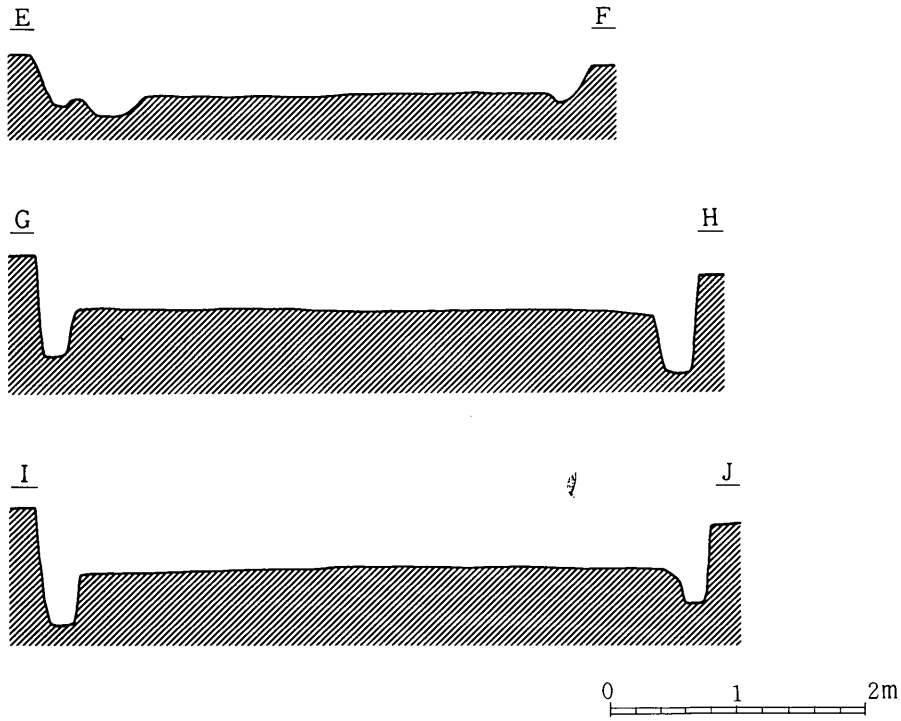


カマド・セクション

Ⅰ：灰（僅か焼土粒混入）
Ⅱ：赤褐色焼土（僅かに灰を含む）
Ⅲ：暗褐色土（焼土粒、Ⅳ層のブロックを多量に含む）
Ⅳ：黒褐色土（掘り込み層）

0　1　2m

第155 図　第33号住居址

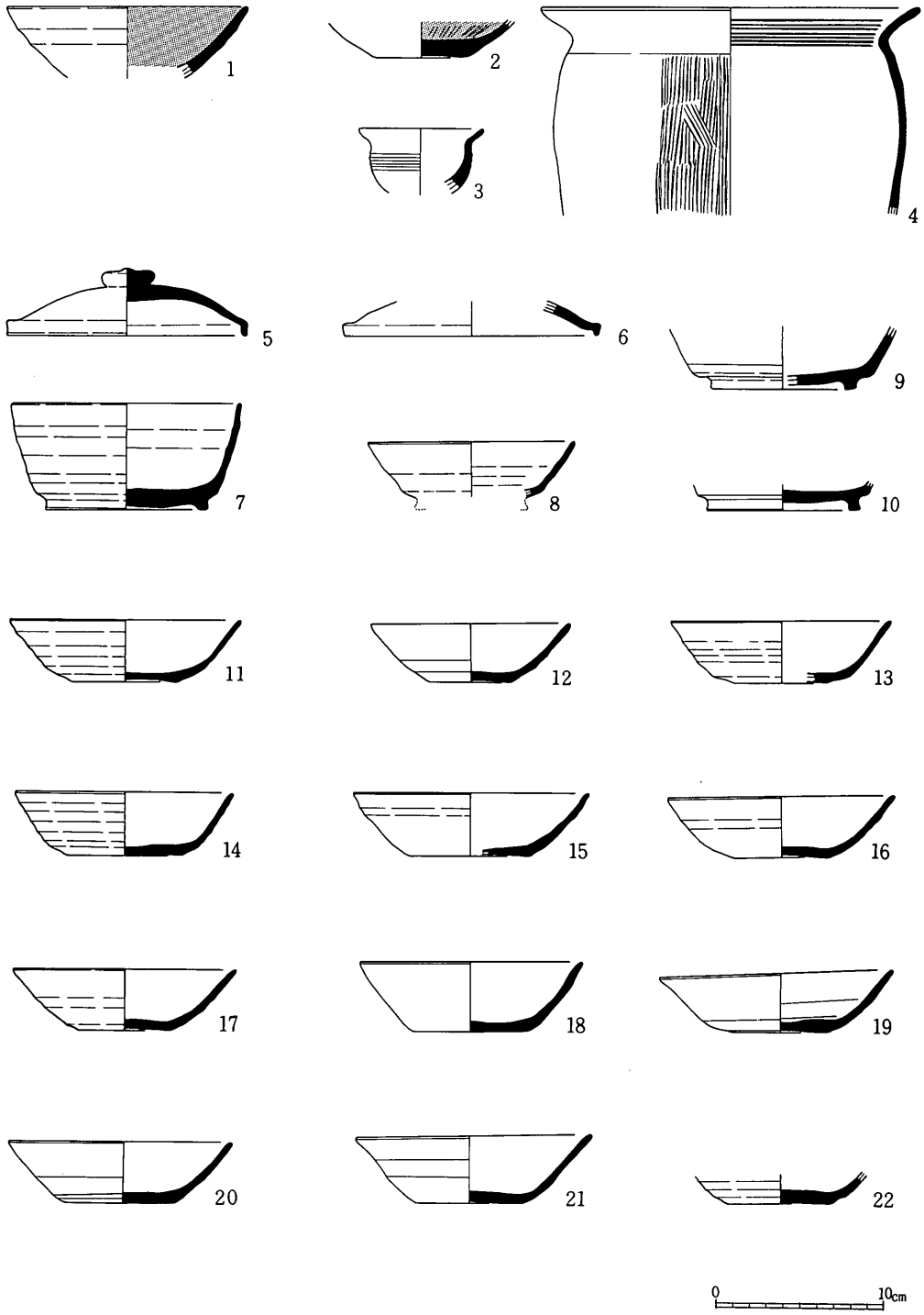


第156 図　第33号住居址エレベーション

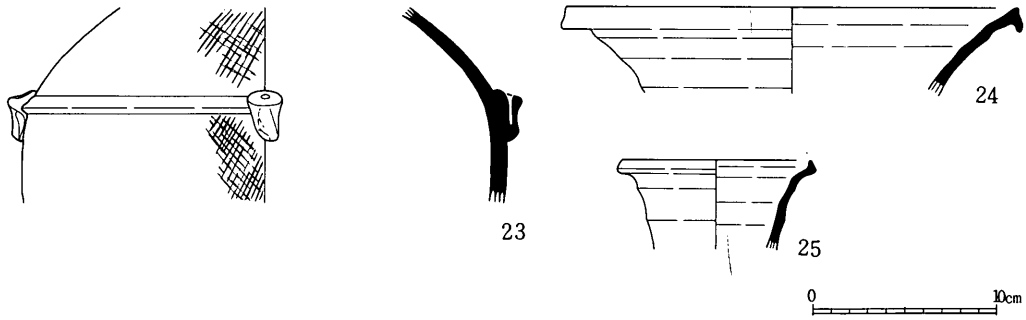
は、東壁37cm、西壁26cm、南壁25cm、北壁18cmを測る。床は起伏が激しく、南半部が比較的平坦を保っている。周溝は、カマド付近と北壁の中央部分が切れる以外は検出されている。幅10～17cm、深さ3～4cmである。カマドは、西壁中央にあり、粘土、焼土が残存している。粘土カマドであろう。床中央にも2箇所焼土の堆積が認められる。柱穴にあたると思われるピットには、P_4、P_6、P_8、P_9があり、P_6、P_8、P_9は壁柱穴である。P_4(38×32cm、深さ30cm)、P_6(35×30cm、深さ13cm)、P_8(31×29cm、深さ8cm)、P_9(36×33cm、深さ8cm)である。カマドの両脇にもP_2、P_3があり、不規則ではあるがP_3は柱穴になるかもしれない。北西隅、P_4脇には深さ10cmの掘り込みがみられる。

遺物　本址より土師器の坏、甕、須恵器の蓋、坏、鉢、壺が検出されたが、須恵器が主体であった。土師器の坏(1)、(2)はロクロ成形され、内面は黒色処理されている。(2)はカマド内出土である。底部は大変丁寧にヘラケズリされている。甕はいずれもハケメ調整されている。(3)はカマド内出土である。蓋(6)はロクロ成形され、天井部には回転ヘラケズリが認められる。須恵器の坏、鉢はロクロによって成形され、底部は回転糸切りによる。

本址は出土遺物の様相から9世紀前半に属するものと考えられる。



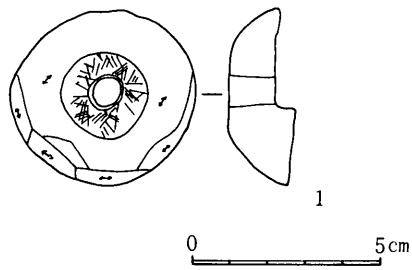
第157図　第33号住居址出土土器(1)



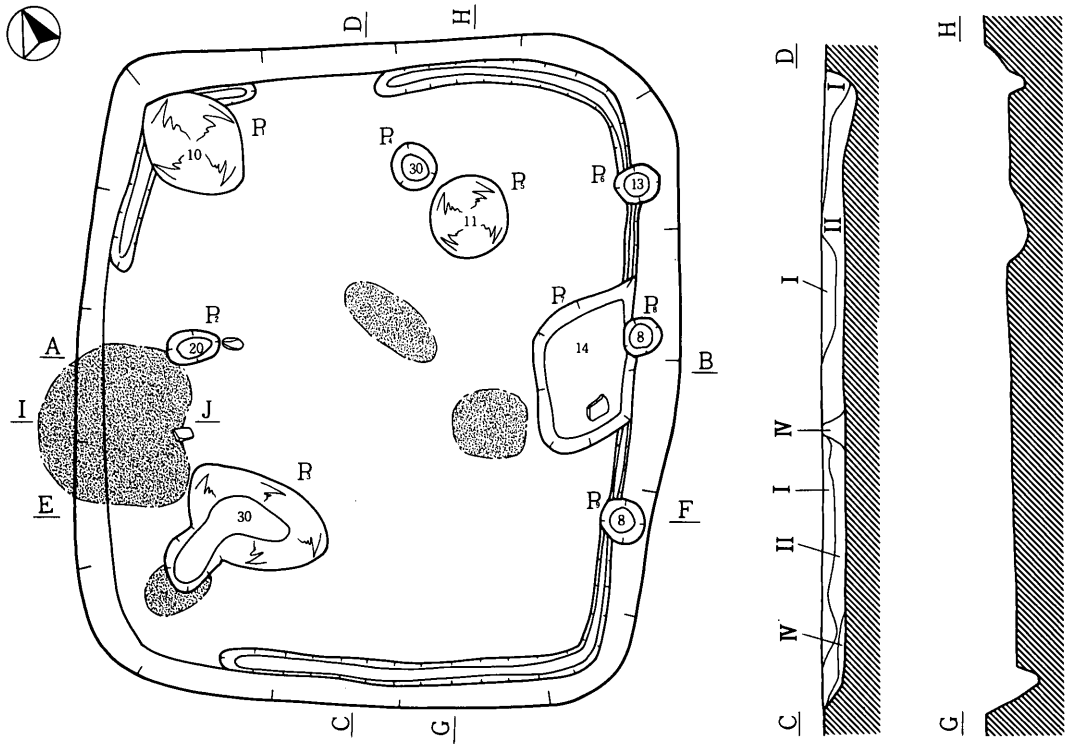
第158図　第33号住居址出土土器(2)

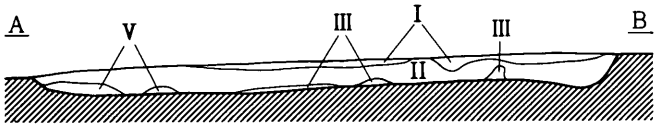
土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	14.0			茶褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ	黒色処理
2	〃	〃		5.6		〃	〃	〃 〃 回転糸切り	〃
3	〃	小型甕	7.2			茶褐	茶褐	ロクロナデ	
4	〃	甕	22.0			〃	赤褐	胴部外面ハケメ 口縁内面カキメ	カマド内出土
5	須恵	蓋	14.0		3.9	灰	灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	
6	〃	〃	14.8			〃	〃	〃	
7	〃	坏	13.2	9.4	6.1	暗灰	暗灰	〃 回転糸切り 回転ヘラケズリ	
8	〃	〃	12.0			灰	灰	〃	
9	〃	〃		8.2		暗灰	暗灰	〃 回転ヘラケズリ	カマド内出土
10	〃	〃		9.0		〃	〃	〃 回転糸切り	
11	〃	〃	13.4	6.0		灰	灰	〃 〃	
12	〃	〃	13.6	4.6	3.6	灰白	灰白	〃 〃	
13	〃	〃	12.8	5.4	3.4	灰	灰	〃 〃	
14	〃	〃	12.8	6.6	3.6	茶灰	茶灰	〃 〃	
15	〃	〃	13.8	7.0	3.4	茶褐	茶褐	〃 〃	カマド内出土
16	〃	〃	13.2	5.2	3.6	茶灰	茶灰	〃 〃	
17	〃	〃	13.0	5.2	3.5	〃	〃	〃 〃	
18	〃	〃	13.0	6.4	3.5	暗灰	暗灰	〃 〃	
19	〃	〃	13.5	5.6	4.0	〃	〃	〃 〃	
20	〃	〃	13.0	5.8	3.7	灰白	灰白	〃 〃	
21	〃	〃	13.7	6.2	3.6	〃	〃	〃 〃	
22	〃	〃		6.0	4.0	〃	〃	〃 〃	
23	〃	四耳壺				〃	〃	タタキ	外面に自然釉
24	〃	甕	24.0			〃	暗灰	ロクロナデ	
25	〃	長頸瓶	10.0			〃	灰白	〃	

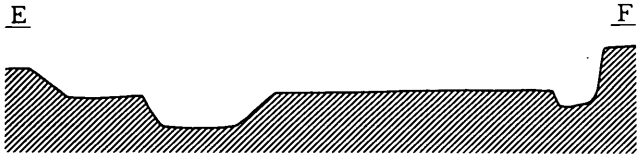


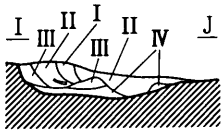
第159図　第33号住居址出土石製品





Ⅰ：黒褐色土（小礫混入）
Ⅱ：暗褐色土（　〃　）
Ⅲ：砂礫質ローム土
Ⅳ：暗褐色土（ローム粒混入）
Ⅴ：淡褐色土（焼土、灰混入）



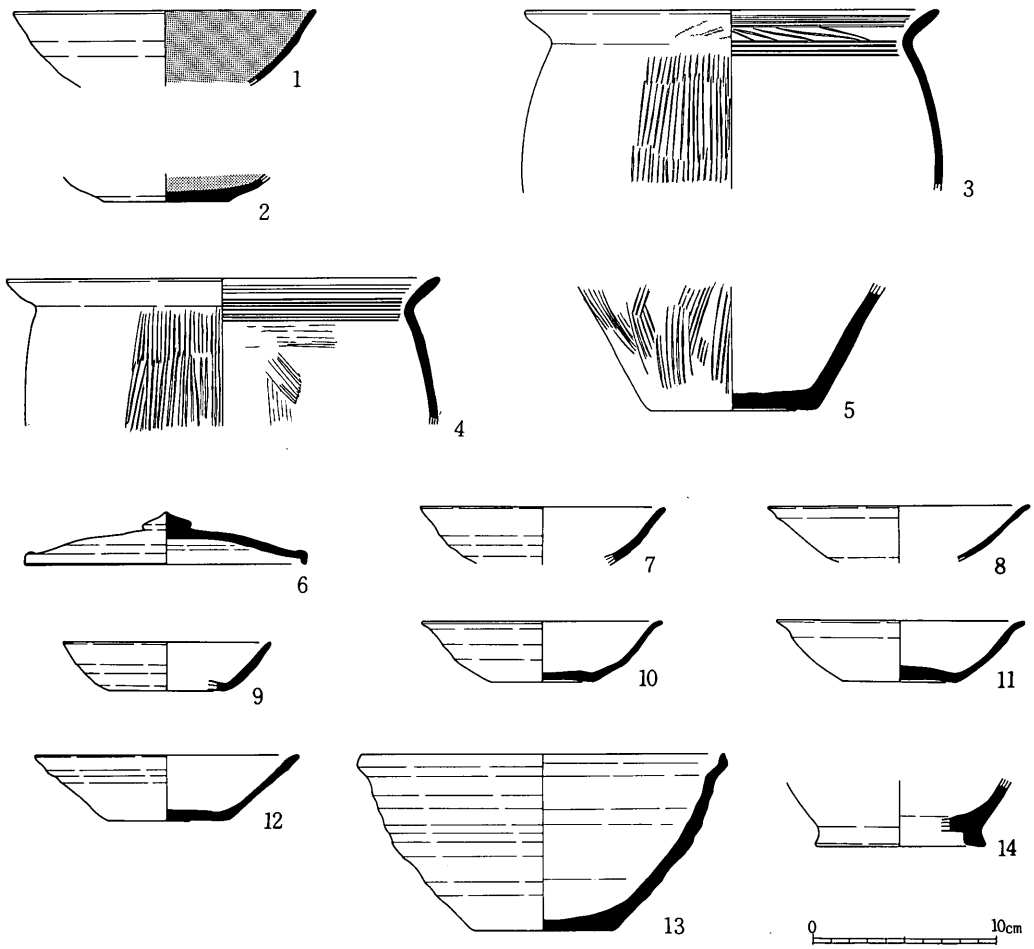


カマド・セクション

Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：灰褐色土（灰炭を含む）
Ⅲ：焼土（炭を含む）
Ⅳ：淡褐色土（灰）

0　1　2m

第160図　第35号住居址



第161図　第35号住居址出土土器

土 器 観 察 表

No.	種別	器形	寸法 (cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏	16.0			暗茶褐	黒	ロクロナデ 体部内面ミガキ	黒色処理
2	〃	〃		6.6		茶褐	〃	〃 〃 底部ヘラケズリ	〃 カマド内出土
3	〃	甕	22.0			明褐	茶褐	体部外面ハケメ カキメ	
4	〃	〃	23.0			黒褐	明褐	〃 〃 体部内面ハケメ	
5	〃	〃		8.6		茶褐	赤褐	〃	
6	須恵	蓋	15.0		2.7	灰	暗灰	ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ	
7	〃	坏	13.0			〃	灰	〃	
8	〃	〃	14.0			灰	灰	〃	
9	〃	〃	11.0	6.0	3.0	〃	〃	〃 回転糸切り	
10	〃	〃	12.6	5.4	3.2	暗灰	暗灰	〃 〃	
11	〃	〃	13.2	6.0	3.2	灰	灰	〃 〃	
12	〃	〃	14.0	6.2	3.5	灰白	灰白	〃 〃	
13	〃	鉢	19.0	7.4	9.3	茶灰	茶灰	〃	
14	〃	壺		9.0		暗灰	暗灰	〃	表面に自然釉

第36号住居址

遺構　D—5区にあり、西壁の一部を37号住居址と重複する。

検出面から床面までの掘り込みが浅く、覆土は小礫混りの暗褐色土の一層である。東西333cm、南北350cmの隅丸方形プランを呈する。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、壁高は、東壁25cm、西壁20cm、南壁21cm、北壁17cmを測る。床は平坦であるが、小礫混りのローム面に構築されたため荒れている。周溝は、東壁と南・北壁の一部にあり、幅12～15cm、深さ6cm、カマドは、東壁中央に設けられている。壁下に焼土が認められるだけの痕跡的なものであるが、おそらく粘土カマドであったと思われる。南東隅の壁際にはP_6（径50cm、深さ14cm）の擂鉢状の掘り込みがあり、カマドに付属する貯蔵穴であったと思われる。柱穴ははっきりしないが、4本のピットが検出されている。P_1（20×20cm、深さ13cm）、P_3（25×25cm、深さ27cm）、P_4（35×35cm、深さ44cm）、P_5（25×25cm、深さ14cm）で、ともに垂直に掘り込まれている。

遺物　本址より土師器の坏、小型甕、甕、須恵器の蓋、坏が検出された。土師器の坏のうち(1)以外は内面に黒色処理が施されている。(3)の底部には墨書が確認できるが、判読はできない。小型甕(5)は薄手のつくりで、胴部外面、口縁部内面はロクロを用いたカキメ調整がなされている。須恵器の蓋(8)は天井部は回転ヘラケズリ、それ以外はロクロナデによって調整されている。

鉄器は鏃が1点、ほぼ完形で出土している。

これらの遺物の様相から、本址は9世紀前半に属するものと考えられる。

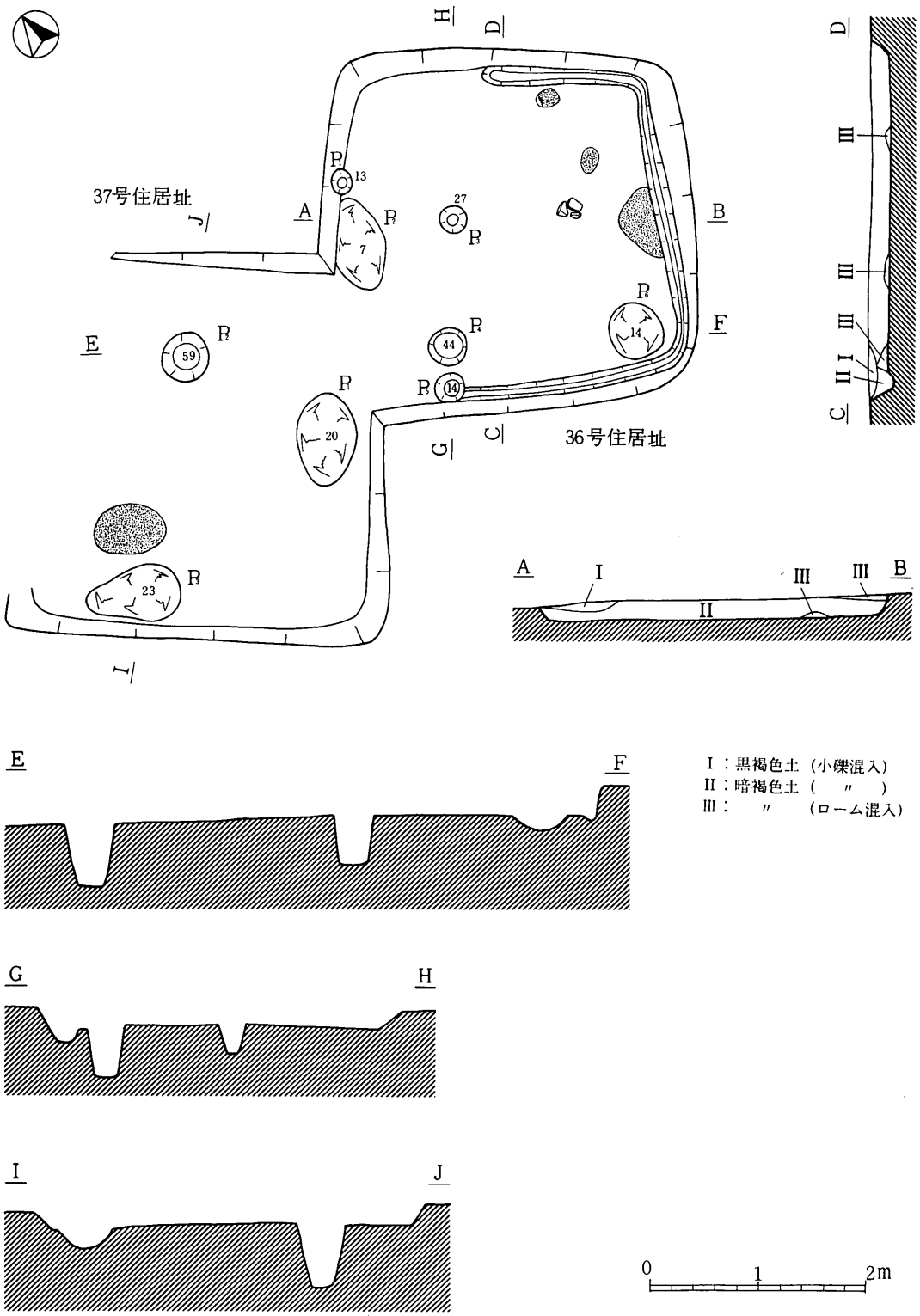
第37号住居址

遺構　C—5区にあり、東側を36号住居址と、西側を38号住居址とそれぞれ重複しており、東壁の一部と西壁は失われている。

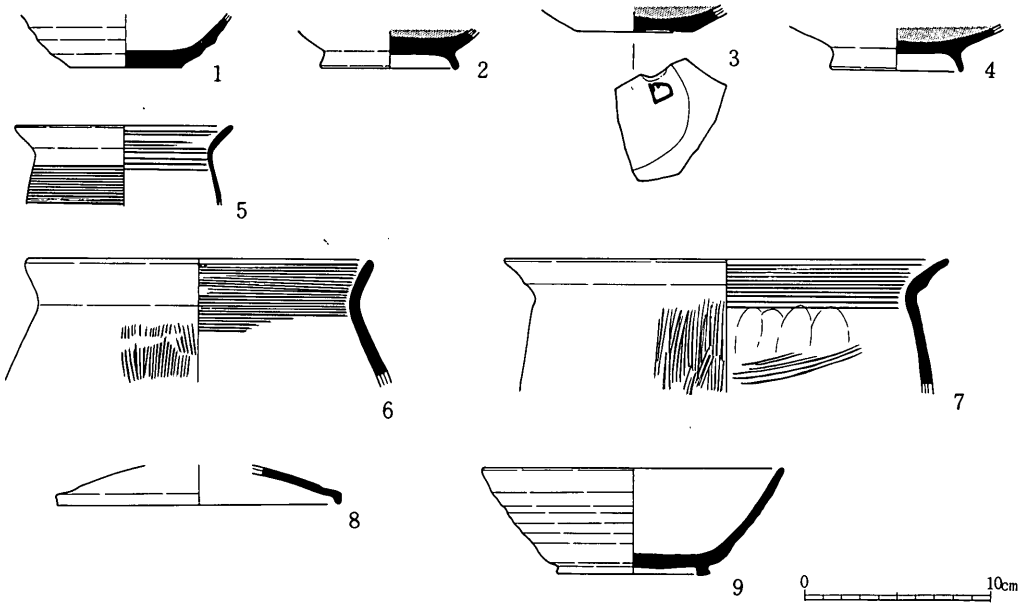
南北360cm、東西の推定349cmの隅丸方形プランを呈する。壁の掘り込みは傾斜を示し、壁高は東壁21cm、南壁11cm、北壁20cmを測る。床は、北壁寄りに低く、南壁に近づくに従い漸高する。中央部は比較的堅緻であるが、壁周辺は起伏が顕著である。カマドは西壁中央に設けられている。38号住居址のため破壊されているが、粘土と焼土の痕跡によってカマドと知ることができる。幅60cm、奥行70cmの大きさを有する。他に南西隅付近にも焼土の堆積が検出されている。柱穴と考えられるピットは、P_2（46×44cm、深さ59cm）の1穴のみである。東壁にはP_1（85×55cm、深さ20cm）の擂鉢状掘り込みがあり、南壁下にはP_3（86×49cm、深さ23cm）のやはり擂鉢状の掘り込みがある。

遺物　本址より土師器および須恵器の坏が出土した。土師器の坏はいずれもロクロ成形により、内面は黒色処理されている。底部は(1)～(3)が回転糸切りによるのに対し、(4)は静止ケズリによって整形されている。また(4)の体部外面には「上」という字の墨書が認められる。

本址の所属時期は出土遺物が少なかったため判然としないが、9世紀前半に属するであろう。



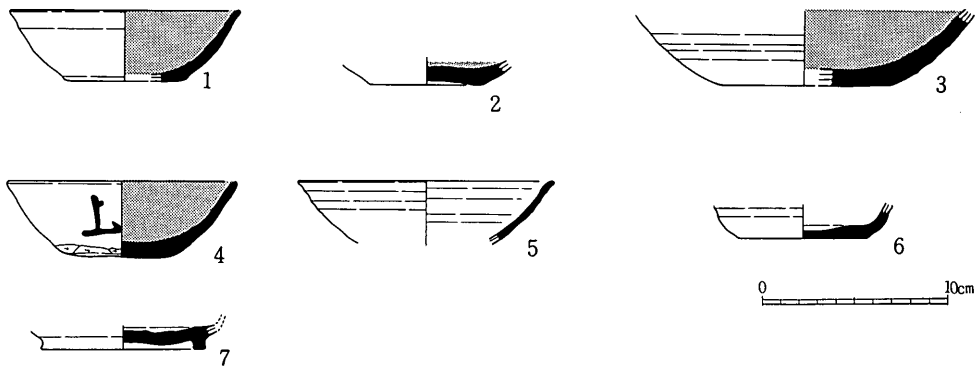
第162図　第36・37号住居址



第163図　第36号住居址出土土器

土　器　観　察　表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	成形・調整の特徴	備考
1	土師	坏		5.8		明褐	明褐	ロクロナデ 回転糸切り	
2	〃	〃		7.0		〃	黒	〃　〃　体部内面ミガキ	黒色処理
3	〃	〃		6.0		暗褐	〃	〃　〃　〃	〃　墨書
4	〃	〃		7.0		明褐	〃	〃　〃　〃	〃
5	〃	小型甕	11.6			暗褐	暗褐	〃　カキメ	
6	〃	甕	11.6			〃	〃	体部外面ハケメ 内面指圧痕 ハケメ カキメ	
7	〃	〃	23.6			〃	〃	〃　カキメ	
8	須恵	蓋	18.0			灰	灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	
9	〃	坏	15.0			暗灰	暗灰	〃　回転糸切り	



第164図　第37号住居址出土土器